

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 15 No. 4

第60号

March 2025

対人援助学会

No.60 M O K U J I

目次		2 - 3
ハチドリの器	見野 大介	4
執筆者@短信	執筆者全員	5 - 16
障害者福祉援助論 (11)	千葉 晃央	17 - 21
臨床社会学の方法 (47)	中村 正	22 - 31
人が育つ会社論	団 遊	32 - 35
カウンセリングのお作法 (42)	中島 弘美	36 - 38
晩年D・A・N通信 (11)	団 士郎	39 - 57
幼稚園の現場から (60)	鶴谷 圭一	58 - 65
福祉系対人援助職養成の現場から (60)	西川 友理	66 - 72
ああ、相談業務 (20)	河岸 由里子	73 - 76
帰ってきた心理学の縦横無尽 (2)	サトウタツヤ	77 - 97
きもちは言葉をさがしている (55)	水野 スウ	98 - 103
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	104 - 106
路上生活者の個人史 (14)	竹中 尚文	107 - 108
スポーツおじいさんになりたい! (4)	國友 万裕	109 - 116
役場の対人援助論 (50)	岡崎 正明	117 - 121
臨床のきれはし (28)	浅田 英輔	122 - 123
発達検査と対人援助学 (19)	大谷 多加志	124 - 126
講演会&ライブな日々 (42)	古川 秀明	127 - 129
療育手帳の向こう側 (2)	坂口 伊都	130 - 134
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (46)	村本 邦子	135 - 146
精神科医の思うこと (36)	松村 奈奈子	147 - 149
蜘蛛の糸 (2)	柳 たかを	150 - 157
心理コーディネーターになるために (17)	山下 桂永子	158 - 161
そうだ、猫に聞いてみよう (35)	小池 英梨子	162 - 168
先人の知恵から (47)	河岸 由里子	169 - 175
うたとかたりの対人援助学 (32)	鶴野 祐介	176 - 180
ああ結婚 (33)	黒田 長宏	181 - 185
PBLの風と土 (32)	山口 洋典	186 - 191
接骨院に心理学を入れてみた (31)	寺田 弘志	192 - 207
現代社会を『関係性』という観点から考える (32)	三浦 恵子	208 - 215
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (27)	迫 共	216 - 218
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (28)	杉江 太朗	219 - 222

原田牧場Note (17)	原田 希	223 - 225
私の頭の中のまだエンピツ (2)	川畑 隆	226 - 230
応援、母ちゃん (20)	玉村 文	231 - 234
HITOKOMART (19)	篠原ユキオ	235 - 238
川下の風景 (17)	米津 達也	239 - 240
スクールソーシャルワーカーの仕事 (リニューアル連載)	高名 祐美	241 - 242
一語一絵 (17)	畑中 美穂	243 - 245
対人援助をリポートするこの一冊(28)	渡辺 修宏	246 - 250
新・島根の中山間地からWork as Life (3)	野中 浩一	251 - 256
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！ (11)	高木 久美子	257 - 265
こかげのにちじょう (11)	鳴海 明敏	266 - 267
私はここにいる ー現象学としての書道-(10)	櫻井 育子	268 - 269
教室の窓から	來須 真紀	270 - 272
社会科の授業を対人援助学の視点から (8)	内田 一樹	273 - 295
ある訪問看護師のアタマの中 (7)	山岸 若菜	296 - 299
人生は対応のバリエーション (8)	宮井 研治	300 - 304
けふばあちゃんからの手紙 (5)	乾 京子	305 - 307
心理臨床における多重関係を考える (新連載2回目)	本林 友梨	308 - 311
森で出会えば (新連載)	田中 千晶	312 - 314
編集後記	編集部	315 - 316

ハチドリの器 43

見野 大介

Mino Daisuke



左上：二人展 in Micche

右上：二人展 in Micche

左下：個展 in 京都高島屋

右下：個展 in 京都高島屋





田中 千晶 新連載

保育現場で働いていた頃、日々なにか文章を書いていました。指導案、その日の覚書、子どものちょっとしたつぶやきのメモ、お帳面のお返事、クラスだより…ここ数年は「ドキュメンテーション」と呼ばれる写真をメインとした保育内容の共有方法が多かったような…。あとは子どもたちのお手紙交換！まあこれは書き物というより、娯楽というか、趣味というか…(笑) 当時は書き物に追われるあまり、タスクを潰すように「なんか書いとけ！」と自暴自棄になっていたことも多かったのですが、毎月末に発行するクラスだよりはていねいに時間をかけて書いていたように思います。子どもの姿を思い出して手が進んだり止まったり、自分の保育を振り返り、気持ちが浮かんだり沈んだり、サクサク進む書類ではなかった分、今まで発行してきたクラスだよりは捨てずに保管してたまに読み返しています。



2024 年からは大学院生になり、やれレポートだ、記録だ、修論だと相変わらず文章を書くことに追われる日々を送っています。しかし、自分が子どもと関わる中で感じたこと、子どもの姿を記録することはめっきりなくなってしまう、なんだかさみしい1年間だった気がします。

この連載を期に書き物を通して子どもと向き合うことを再開したいと思います。初連載、よろしくお願いします。

森で出会えば・・・
P312～

本林 友梨 連載第二回

先日、所属する都道府県の臨床心理士会で、日々の臨床における多重関係の困り事について話題提供させていただきました。それぞれの先生方が持つ背景(養成大学院、臨床領域など)によって、様々な多重関係の捉え方がありました。「自身の境界をちゃんと持っていたら大丈夫」、「そんなに気にしなくても大丈夫」、「長いこと臨床やっていたら気にならなくなる」など、励まし？元気づけてくれている？にもとれなくもない意見もありましたが、「クライアントから発表会を見に来てといわれてしまった」、「プレゼントを持ってくるのがよくある」など、多重関係に関する倫理的なところ(境界)に悩む先生方も確実にいらっしゃいました。

私の印象では、経験が長い先生方からは励まし？のような意見があり、比較的経験が浅い先生方がこの種の問題を切実に抱いているようでした。心理臨床に関する多重関係の影響はどうかはこれからですが、やはりこの問題に向き合う価値を感じました(中には、「心理士になる時点で生活者としての自分を制限する覚悟はできている」という先生もいらっしゃり、自身の覚悟のなさを恥ずかしくも思いましたが…)。

心理臨床における多重関係を考える
P308～

高名 祐美

もうすぐ 65 歳になる。法律でいう「高齢者」の仲間入りだ。もうすぐ介護保険証も届くだろう。母は 61 歳で亡くなったので、

母の年を超えて生きている。娘二人は家庭を持ち、5 人の孫にも恵まれて「ばあば」としての人生も生きている。そんな節目に、これからをどう過ごしていきたいかを考えてみる。

まだまだ現役のソーシャルワーカーとして個別支援にかかわって行きたい気持ちはあるが、そろそろ引退すべきなのかとも思う。なにかに追われている日々はもうおしまいにしたいと思う反面、それはそれで寂しいようにも思う。夫は「いつまで仕事をするのか」と言う。しかし、長女がこう言ってくれた。「お母さんは仕事が生きがいなんだから。仕事をやめたら死んでしまうよ。好きなだけやるのがいいよ」と。そうなのか、自分は仕事を生きがいにしてきたのかと気付かされる。

年のはじめに立てた目標は「楽しむこと」。趣味を楽しむ時間を大切にしたい。来月から、孫と一緒に琴を習い始める。ゆったりとした気持ちで琴の音色を楽しめるように取り組んでいこうと思う。

スクールソーシャルワーカーの
仕事
P241～

水野 スウ

2 月のある土曜日、学童の子どもたちに憲法のお話をしました。私が出かけていく前ではなくて、愛知県からはるばる電車をのりついで、学童の小学5、6年生が親ごさんたちと一緒に石川まで来て、わが家で私の話を聞いてくれたのです。

この 10 年間、憲法のお話の出前にたくさん出かけ、時に子どもや若い人たちに向けて話すこともあったけれど、私のホームグラウンドで憲法を聞いてもらう、なんて機会はほんとにまれ。なので今号は、「子どもたちに、憲法と紅茶の時間の話@紅茶の時間」の誌上実況中継、というスタイルで書いてみました。限られた時間内で小学生に憲法を語ることも、それをできるだけ実況に近い形で文章化することも、ともにチャレンジング。このマガジンだからこその試みかも、と楽しみながら書いてみた！よ。

学童クラブでは、お話会翌日におとなたちも混じってのふりかえりの会をしたそう。後日、その音声を聴かせてくれました。へ

え～、そんな風に感じたんだ、あの言葉、ちゃんと受け取ってくれてる、と何度もほっぺがゆるみ、はっと気づかせられ。ふりかえりタイムの最後は、学童の先輩たちがつくって園に残してくれた学童憲章を、どう自分たちのものにしてどう引き継いでいったらいいのか、子どもたちが真剣に話しあった。やるなあ、子どもたち。

話した私と、聞いた子どもと大人たち。一人ひとりのレスポンスを聴かせてもらい、それに対する私からのレスポンスが今回のマガジン原稿なわけで。ああ、ここでもその日手渡したキーワード、「行ったり来たり」の循環が起きている。

憲法についてはこれまで何度もマガジンに書いてきましたが、実況スタイルははじめて。私にも新鮮な体験でした。読んでいただけたらうれしいです。

きもちは言葉をさがしている P98～

馬渡 徳子

2025 年 元旦の 16 時 10 分。

私は、友人の高名祐美さんの夫様がご住職を務めておられるお寺が、鎮魂と復興を祈る鐘を鳴らされることを伺い、能登に向けて黙祷・合掌した。

とりわけ前日からその時刻を迎えるまでは、胸がざわざわして落ち着かなかった。結婚 41 年目にして、初めておせちもつくらなかった。記念日反応と言うらしい。

ご近所のどなた様とも、「あけましておめでとう」のご挨拶はなく、皆さん一様に「(無言で礼)・・・今年は良い年になりますように」だった。

そういえば、12 月から年賀状欠礼ではなく、今回は年賀状仕舞いの葉書を沢山いただいた。LINE も元旦はゼロ件で、2 日の夕方に集中した。

1 月 6 日 子ども食堂には能登の半壊状態のままの祖父母宅や、仮設住宅に入居となった祖父母の下に帰省したりした子どもたちが来所した。帰省先には、まだ上下水道が完全復旧していない地域もあることから、希望者にペットボトルと簡易トイレをお持ち帰りいただいていた。

「のとのひいばあばに、あいこにいったよ。おはかまいりはできなかった。おみずもつていったよ。」

「おとしだまに『てんごくのひいじいじより』とかいてあった。おてがみかいたよ。」

「やっぱりぼくは、のとへかえりたい。のとのほいくえんがっこうへいきたい。パパとママにいうたらだめやよと、じいじにいわれたけど、パパにいうたんや。」その後、パパは能登の保育園に連絡し、「卒園写真を撮るときに連れてくるので、混せてやって欲しい。」とお願いされていました。「卒園式がかぶったので、改めて連れてくるとのこと。卒園証書と卒園写真をお渡します。実は、パパはこの卒園児です。自分の気持ちをパパに言えて良かった。パパは嬉しかったと思う。」とその保育園からご連絡をいただきました。

勤務先の保育園には、一方の親が職業特性のため被災地を離れられない二次避難継続中の子どもたちもいる。「ばいばいするとき、みんなないとった。ぼくも〇〇も△△も、じいじもばあばも、みんなさみしい。」登園初日に「はばたとりの」折り紙を持ってきた。「これしつとる？ はばたとりっていうげんよ。かなしいことやこわいことがあったら、これをうごかしたら、こころにまほうがかかってふきとばしてくれるげんて。いっこ、あげるね。」



私は、その「はばたとりの御守り」を保育園において、「今日も安全に過ごせますように。おもしろいことがいっぱいありますように。」と声をかけている。

なんと、その子が、ふいに「きょうわすれたし、ちょっと、かして」と言ってきて、その後いきょうだいや友だちに魔法をかけている。そんなわけで、ひとり占めできないでいる。(笑)

今号は、本文をお休みいたします。

馬渡の眼 休載

乾 京子

トランプ大統領になって、一か月余り、(えっ、冗談でなく本気？うそでしょう?)というようなことが次から次に起こっていて、目を耳をふさぎたくなるような事ばかり。テレビや新聞を見るたびにうんざりしています。ドイツも極右政党が議席をのばしているとか。ガザやウクライナに真の平和がやってくるのでしょうか？その間にも氷河が解け、南極から巨大な氷山がオーストラリアに近づいているとか。・・・大きなことは見ないでおこう。近場のちいさなことに喜びを見出そう。・・・腰痛や膝の痛み、身体のアチコチ痛くなって、ついつい引きこもりがち。ますます近視眼的老人になりそうです。困った！困った！

じゃりんこ文庫 P305～

宮井 研治

久方の孫近況をお伝えする(したいだけです)。彼も齢 3 歳を過ぎ、よく笑い、よく食べ、成長曲線は身長体重とも、平均を大きく上回っている。たまに、じいじが調子に乗って抱っこでもしようものなら、ズシリと成長の重みを体感させられる始末である。この間の最大のエピソードとしては、妹の登場であろう。人生最初のライバルの登場である。彼の運命や如何に！であったが、安泰である。彼の内面は推し量れないが、兄妹仲の滑り出しは好調である。兄は鼻水を垂らしながらも、事あるごとに妹に頬をすりすり(親は感染症対策の観点からヤキモキ)。妹も齢 6 ヶ月であるが、兄を目で追いかけて、声にならない喃語を投げかけている。たまにじいじと目が合うと泣く。認知の発達を目の当たりにするじいじであった。

そんな彼の成長譚をひとつ。YouTube などの動画で、話が展開するときに、「ドドン！」という効果音が使われるのは御存じでしょう。孫にウケるので、なにかという孫との会話に「ドドン！」を、多用しておりました。ドドン、ドドンと乱れ太鼓のように。ある日、孫から指摘を受けます。「じいじ、ドドン、ドドン言い過ぎ。ドドンはいつも言わないよ。」といった内容でした。この効果音の使いどころを、齢 3 歳にして理解して

いるということが即座に伝わってきました。そして、その解説力。恐るべし、3 歳児！さすが、わが孫なり！

人生は対応のヴァリエーション P300～

山岸 若菜

今年は京都にも雪がよく降っています。少し積もった日があり、小 6 の子どもと雪合戦をしたり雪だるまをして遊びました。はじめは普通に雪を丸めてぶつけ合うだけだったのが、『水を含ませると硬くなる』と気づき始めると、寒い中公園の水道でわざわざ雪に水をかけ、周りも水やのになぜあえてまた水を・・と思う大人の気持ちなんて知ったこっちゃない感じで必死で硬い雪弾を作ってはぶつけてきました。その硬いほぼ氷弾は当たると痛いわベチャベチャになるわで、思わずこちらのテンションも高くなり思いのほか楽しかったです。



たまにしか雪が降らない土地はこんな悠長なことを言っていますが、雪の多いところは大変だったことでしょう。早く暖かいでも暑くない季節にならないかなと待ち遠しい思いです。

ある訪問看護師のあたまの中 P296～

内田 一樹

先日、足を捻挫しました。捻挫してすぐはあまり痛くなくいつも通り過ごしたのですが、翌日、翌々日と痛みが酷くなり歩けないほどになりました。病院を受診したところ、骨は折れていないそうですが人生で初めてのギブスと松葉杖

生活を 2 週間ほど(予定)送ることとなりました。自分が松葉杖生活をしてみると世の中の見え方が全く変わりました。なぜこんなにも段差が多いのか、駅の改札等で手間取ると申し訳なく感じ、一方で誰かにケアされようとするとなかなか素直に受け取れない。ちょっとした新しい発見でした。当事者になってみて気づくことがあるのかもしれないけれど、一方で当事者にならなければ気づけなかった想像力の欠如があったかもしれません。

さて 2024 年 12 月、「東北と復興」では 3 年目で初めての福島県浜通りスタディツアーを実施しました。今回はその事前学習とスタディツアーの報告、生徒達の学びとそこから生まれた問いについて書いています。

社会科の授業を対人援助学の 視点から P273～

櫻井 育子

いよいよ 2025 年が始まった、というのを感じたのが最近。年を越したんだか開けたんだか分からないうちに 3 月になってしまった。教員を辞めてから 9 年経つというのがちょっとびっくり。なんとかここまで生きてこれたから、これからもなんとかやるのだな、という感覚になって最近はこちらに調子に乗っている。「調子に乗る」という言葉を使うようになって、さらに調子に乗れるようになった。言霊。出会うことも、話すことも、表現することから始まるのだ、と思う最近。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる P268～

鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、15 年目に入っています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトル

は「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

昨年9月の末に、軽い脳梗塞を患って、10月の初めに2週間ばかり入院しました。現在は、退院して職場復帰していて、車の免許の更新も無事に終わりました。

私は現在、施設長と法人の理事長を兼務しているのですが、園長の仕事は、施設開設以来一緒にやってきた「初期メンバー」の一人で、現在支援課長をしている方に引き継ぐことになって、4月からは、理事長に専念することにしました。

園長を引き受けた時から、いつどんなタイミングで、誰に引き継ごうかと思案してききましたが、今回倒れたことで、スムーズに決断が出来ました。

2月の20日、21日は、名古屋市で全国施設長会議が開催されたのですが、この3月で園長を退く方が8名おられました。その方々と一緒に退任のご挨拶も出来て、良かったです。

県職員として38年、施設長として15年でした。その間、仕事優先で、子育てから何もかも、奥さんに支えて貰った53年間でした。今思い返せば、仕事を口実にして、いろいろなことから逃げてきていたんだなあと思いました。これからは、奥さん孝行に励もうと思っています。

施設長だから、ということで引き受けた連載で、タイトルもそのようにしていたので、これからどうするか、少し思案したいと思っています。

児童心理治療施設の園長室から ～こかげのにちじょう～ P266～

高木 久美子

以前 1 週間程度の入院をした時、退院した帰宅時に玄関に出て来た飼い猫は、全身を総毛立ててシャーッと私を威嚇しました。今回はそれより入院期間が長かったので、飼い猫たちは私を忘れてしまっているのではとそれが一番の心配でした。でも、今 4 匹いる猫たちは、こちらが拍子抜けするほど自然体で、大歓迎もない代わりにシャーもなく、まるで昨日もママはいたよね、今日もいるよね、それよりトイレ片づけてと、そんな感じのあまりの何気なさに、

諸々に身構えていた私は肩の力が抜けて、猫のおかげですっと日常生活に復帰できたような気がします。1 回の休載で無事戻れて、しかも 60 号！に書くことができてとても嬉しいです。

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょう！

P257～

畑中 美穂

焼き物の窯の多くある小さな城下町にでかけて器を買いた。大きめの湯呑みといったサイズで、持ち手のついていないティーカップという雰囲気。“出会い”がなければ買うつもりはなかったが、おもしろいものでその器は私を待っていたように“そこ”にあった。棚に並ぶ器はたくさんあるけれど、どうしても“これ”なんだな。

そういえばずいぶん前にインドネシアの小さな店で、シルバーの台に瑠璃色の石のついた指輪を見つけ、悩んだのちに「少しサイズも大きいからな」と買わなかったことがある。でもどうかな、そのことはちょっと後悔している。海よりは濃く、たくさん泳いだプールのタイルと同じ色。でも後悔するくらい、心に残っているのも確か。「そういうのもいいのかもしれない」と思いつつ、両手で持つ器のミルクティーを飲む今日。

一語一絵

P243～

山下 桂永子

二日前から鼻水がフリーフォールです。とめどがないのでこの文章もティッシュを鼻に詰めて書いております。今のところ花粉症は発症していない(はず)なので、風邪かなあ久しぶりだなあと思いつつ、熱を測って見たら、37.2°と微熱があり、どうやら風邪のようです。それにしてもいつからいつのまに毎朝体温を測らなくなったのでしょうか。2020 年の 2 月ごろからは毎日測っていたはずなのに。良いことを続けることは大変なのに、良いことをやめることや悪いことはあつという間に習慣化してしまう恐ろしさがあります。

対人援助マガジン 60 号おめでとうございます。これから末永く続きますように。私も続けられますように。内容とは関係はないのですが読んで頂ければ幸いです。



先月、両親と言った
雪の白川郷が最高でした。

**心理コーディネーターに
なるために**

P158～

渡辺 修宏

ついにきた。これが老眼か……。なるほど、世間が騒ぐわけだ。メガネをはずしたり、つけたり。従来どおりには本を読めない。いろいろ不便だ。

対人援助実践をリポートする

この一冊

P246～

米津 達也

息子の大学受験がようやく終わった。最終的に彼の希望するところにいけるようだ。努力は常に報われるとは限らないが、その努力は必ず何かを変えてくれる。努力できるだけの環境も必要だが、与えられた環境は運に左右される。じゃあ、人生は運任せかと言うとそうでもない。日々、選択できることはあるはずだ。ここ最近、ランニング頻度を増やした。寒さは厳しいが、この瞬間、走るか走らないか、それは私が選べる人生だから。

川下の風景

P239～

玉村 文

育休コミュニティで過ごしてきた時間も、残り 2 ヶ月を切りました。4 月には復職予定

です。先日、このコミュニティで団先生をお招きし、「物語から学ぶ家族力」という 1 時間のオンライン講座を開催しました。中国やフィジーからの参加者もあり、駐在帯同中の方々にもご参加いただきました。講座では、「木陰の物語」の紙芝居 3 作を団先生に読み解いていただき、その後、参加者同士で感じたことを語り合いました。

対人援助職ではない会社勤めの方が多くなか、「家族を学ぶのは初めてだった」という声や、「木陰の物語に触れ、思わず涙がこぼれた」という感想が寄せられました。アンケートにも、多くの気づきや心の湿度を感じる言葉が並び、家族について学ぶことが、人の心に深く響くことを改めて実感しました。

今回の企画を通じて、私は「家族を学ぶことはおもしろい」「自分の家族を振り返る大切さを、対人援助職以外の方にも伝えたい」「コミュニティの枠を超えて価値を届けたい」「働く母親たちを応援したい」という思いを再確認しました。

これからも、越境と共創を大切に、家族について学び、語り合える場をつくっていきたいと思います。そんな今回のマガジンのテーマは「帝王切開」。経験者同士で「帝王切開のお産のふりかえり」をしてみの気づきをまとめました。

応援 母ちゃん！

P231～

川畑 隆

年に3回ほど高知県の四万十市に仕事でお邪魔しています。京都から岡山まで新幹線で1時間、岡山から在来特急の“アンパンマン列車”で高知まで2時間30分、そこから乗り継いで中村まで1時間40分、自宅を出てから6時間弱の長旅です。伊丹から高知まで飛行機も利用できますのですが、竜馬空港からのリムジンバスが数少ない特急電車で間に合うかどうか微妙で、結局JR+くろしお鉄道のお世話になっています。

瀬戸内を渡り、丸亀製麺発祥の地(丸亀のことをこう書いたのですが、編集長から「それは誤解で、丸亀製麺は加古川創業

の焼き鳥屋から展開したうどん屋だ」とご指摘を受けました。浅慮自戒と感謝)を過ぎ、大歩危・小歩危(おおぼけ・こぼけ)を経て、仁淀川、ほんのちょっとの太平洋、そして四万十川を観て終着です。そういった景色が“おいしく”て、車窓を眺める時間が圧倒的に長かったのがだんだん短くなり、読んだり聴いたり以外はウトウトと退屈が大部分をしめるようになって、その次は映画やドラマの録画持ち出し。映画を続けて3本も観るとそれ以外何も見てなかったってことになったりしながら、この没頭からもだんだん解放されてくると、またボンヤリと景色を眺める時間が増えてきています。

出かけたら当然帰らなければならないわけで、考えてみればナント贅沢な往復12時間。ちょうどよい過ごし方のバランスを手に入れてきているんだと思うんです、ええ。

私のあたまの中のケシゴム P226～

杉江 太朗

児童福祉領域で働く杉江と言います。絶賛営業中のカフェ・ドゥ・スギエ(職場にコーヒーマーカー置いてる)ですが、現金一択というこのキャッシュレスの時代に逆らった経営をしております。1杯 60 円(今はタイムセールで 50 円)から飲めるのですが、支払いが現金のみのため、小銭が多く貯まります。今や小銭の入金には手数料がかかるため、その取り扱いに頭を悩ませている経営者は私だけではないはず。そんな中、ついに新札での支払いがあり新鮮な気持ちになりました。今さらと思われる方もいるかもしれませんが、私自身、普段は現金を使わない生活をしています。パーキングにとめるときに、支払い方法が現金のみと気付かず後から ATM まで走ったことがあります。小銭の処理に困りながら、小銭がなくて困るという需要と供給を一人で成り立たせています。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P219～

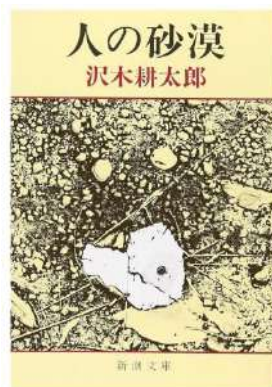
浅田 英輔

「第四半期はないようなものだ」と言わ

れたことがあるが、師走以上に時間が経つのが速く、もう2月が終わる。トシをくうと時間がはやいともいうが、本当にそれを実感している。大学院生に「行政にいる心理職」として話す機会があったが、自分のこれまでの仕事をパワポにして何をしてきたか説明するのは面白い体験だった。プレゼン資料を作ってみるとよいですよ！

臨床のきれはし P122～

三浦 恵子



「人の砂漠」(新潮文庫 沢本耕太郎氏)のなかに収められた「棄てられた女たちのユートピア」で登場する女性自立支援施設「かにた婦人の村」(ベデスタ奉仕女の家)の新居住棟が完成しました。日本で唯一長期入所が可能な婦人保護施設(当時の名称 困難女)として開設したのが1965年、私が「人の砂漠」でその活動を知った時はまだ学生でした。あまりに過酷な人生を送ってきた女性たちや、それを支援する人々の姿勢に圧倒されました衝撃を受けました。

奉職後、別の地域の婦人保護施設と関わる際に「かにた婦人の村」の活動を思い浮かべながらも、直接の接点はありませんでした。しかし、新居住棟の建築資金を募るクラウドファンディングが開始されたという情報に接しました。これは私的なことですが私はある節目の年を迎えていました。お祝いと称した豪華な食事など個人的なモノに費消するのではなく、後々に残ることをしようと考え、少しですが家族でクラウドファンディングを気持ちを寄せました。資材の高騰などで予定より費用が嵩んだ際にもさらに支援をいただく機会がありました。婦人保護施設は、令和4年に

制定された「困難な問題を抱える女性の支援に関する法律」が令和6年4月に施行されることに伴い、女性自立支援施設という名称となり、支援の内容もより充実したものになっています。

自立支援は施設のなかだけではなく、社会の側も変わっていかないと難しいと実感しています。そしてその実現のためには、制度改正・構築というものだけではなく、個々の人間が社会課題を知り、意識を向けていくことが必要だと改めて考えています。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という 観点から考える P208～

迫 共

去年 9 月、広島県福山市の児童養護施設で生活をする子どもたちを対象にした子どもアドボケートの共同研究に参加した。子どもは自分の処遇検討会議に出席し、意見表明を希望するものかどうか。性別と年齢で 4 班に分け、小学生男子組を担当。「自分の意志が最終的に通らなくてもいいから参加したい」という子が多かった。協力してくれた子どもたちに応えるためにも、論文にまとめる作業を進めている。

インタビューなどの様子が、この 2 月に NHK のローカル番組「お好みワイドひろしま」で紹介された。自分たちが参加した研究が、少しずつ形になっていくのは嬉しいことだ。子どもたちの意思表示が尊重される取り組みを、さらに進めたい。

迫メアド: sakotomoya@gmail.com

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P216～

黒田 長宏

心筋梗塞の手術から生還して1年を超えることができた。そして婚活アプリを9つもやっている状況だ。57歳。なんだろうこの人生は。しかし成功事例として婚活を成就することで、その前例は対人援助の前例ともなるはずだ。私が出来たなら誰かも

出来る。だから諦めない、なんとかこの連載で証明したい。

<https://konnankyujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P181~

松村 奈奈子

映画「どうすればよかったのか？」を昨年末にみました。統合失調症の娘の治療を拒む両親との生活を、弟である男性が記録した映像です。精神科にまつわる業界の人がみたら上映が終わってしまうのかなあと公開後あわてて見に行きました。ミニシアターのスケジュール表でも短期間で上映を終了する予定みたいな感じでした。ところが予想に反して、たくさんの人がこの映画をみて、年明けの2月を越えてのロングランとなり、大きな映画館でも上映されるようになりました。精神科に関わる人間としては、多くの人に見て頂きたい思いはあります。と、同時に、いったいみんなはどんな感想をもったのかなあと気になっています。



精神科医の思うこと

P147~

村本 邦子

台湾に来ている。今日はたまたま台湾の「二・二八事件」の記念日にあたり、街中のあちこちで記念イベントが行われていた。人権意識も高く、若者たちの活動に感

銘を受ける一方で、現在の台湾は、与党と野党の勢力が拮抗し、民進党が積極的に推進してきた「転型正義」(独裁時代の人権侵害を清算し、正義を回復するための取り組み)も今後どうなっていくのか不安定な部分がある。日本の植民地主義と皇民化政策はその大きな要因のひとつであるが、台湾ではルーツや世代によって異なる歴史観や価値観があり、それぞれに分断させられている。知れば知るほど対話や和解は難しいと思われ、福島の問題とも重なって見えてくる。世界はこれからどうなっていくのか?!

周辺からの記憶

一東日本大震災家族応援プロジェクト

P135~

國友 万裕

僕は元々せっかちで締め切りを遅れたり、ギリギリに出したりとかはできない性格です。そのため、対人援助学マガジンの原稿もいつも一番だと前に編集の方から言われたことがありました。

ところが、今回はギリギリになると前もって編集部連絡していたのです。というのが、2月20日鼠蹊ヘルニアの手術をする予定になっていて、その手術の様子を原稿の中に含めたいと思っていたからです。

しかし、それが、2月の3日にコロナに罹患してしまったため、外科の先生からヘルニアの手術をしばらく遅らせてくれと言われてしまいました。病院のルールで、すぐにコロナの後手術をするのは好ましくないということらしいんです。

そのため、結局は原稿ギリギリにはなりませんでした。といってもいつもよりは遅めの提出です。

今回の原稿が出る頃には僕は61歳です。原稿にも書いていますが、老いを見つめるという生活になってきました。

まだうちのおじさんは90で生きているし、母もおばさんたちも80代で生きている。しかし、みんな誰かに頼らなくては生きれない状態になってきている。人間は徐々に枯れていくんです。本当に悲しい。

若い頃の方が辛いことは多かったけど、でも、その代わり、若いからこそ夢があった。でも、60代になって、どんな夢をもったらいいの??? 今更ブレイクできるのか

な? こんなことばかり考える毎日です。

しかし、最近、僕の本を読んでくれた関東在住の人から手紙が来ました。「これまで自分が言いたかったことを、言語化してくれてありがとう」という内容でした。知らないところに僕の隠れファンがいるんだなあと嬉しくなりました。

もっとこの輪が大きく広がってくれればいいけれど、もう難しいのかもしれない。僕は単著を4冊出して、それなりに好評ではあったんだけど、いかんせん有名な本とは訳が違うので、読んでいる人は一握り。

これじゃあ、男性学は広がらない。でも、それはそれでいいのかもしれない。僕の書いたものが誰かの心に響いたという思いがあれば、それを支えにこれからも執筆を続けていけるでしょう。

命ある限り。歩み続けたいと思います。

スポーツおじさんになりたい!

P109~

竹中 尚文

12月の中旬に交通事故を起こした。自動車専用道路を走行していて、追突事故の加害者になった。居眠りをしていたのではない。車間距離も保って、順調に走行していた。前方に車が停車したのだけれど、「まさか!」と思った。停車していると認識したときには、遅かった。「自分の車が止まらない」という恐怖の時間だった。◆誰もが交通事故には気を付けている。私も気を付けて運転をしている。しかし、気をつけたから絶対に交通事故を起こさないというものではない。そのことは分かったつもりで、交通事故の確率の少ない選択をしてきたつもりである。確率は低いだけで、やはり事故は起こしてしまった。そうしたことがあると思っていたのだが、実際には恐怖の時間だった。◆相手方の自動車も自車も全損だったが、けが人はなかった。そのことが何よりありがたいことだった。しかし、ちょうど2ヶ月が過ぎた2月中旬になって、私の右手が痛み出した。手、腕、肩と痛みが広がり、歯が浮き、頭痛に悩まされた。咀嚼はできないし、キーボードを打てないし、困った。整形外科に行ったら、やはり骨に異常はないという。義子が整体師をしているので、診てもらった。衝突

の時にハンドルを持つ手で身体を支えたのだが、その方向のために腕や肩の筋肉が少しずつずれた方向に引っ張られているらしい。彼が賢明に治療してくれて、ようやく「執筆者短信」が書けるようになった。

路上生活者の個人史

P107～

坂口 伊都

2月15～16日の日程で、マガジン合宿に参加しました。団先生、千葉さん、大谷さん、杉江さんと私の5人でした。こじんまりした人数だったのが功を奏したのか、時間がある限りこれでもかというぐらい話し、話題が尽きませんでした。周りからは、世間話が弾んでいるグループに見えていたと思いますが、実はなかなか深い話をしていたのです。

話題はいろいろとありましたが、印象に残っているのは、世の中の常識になっていることを自分自身も知らない間に受け入れていて、疑うことを忘れてしまっているということです。被害意識を抱くことに関しては、その傾向が強いようです。強みも弱みも紙一重、どう解釈するかで内容が変わってきます。子どもを出産し、育てながら仕事を続けていくことで葛藤を抱えていましたが、団先生の「普通はできるかできないかの議論になれば、できる方が優位になるものだがなあ」という言葉にハッとしました。自分を弱者に置か置かないか、それは自分で決めていいのだと思います。被害感情で自分を縛るのは、もったいないのだと気づきました。被害感で、自分自身に言い訳を与え、未来を閉ざしてしまっていたのかも知れない。世間の常識は、当てにならないと再認識しました。

療育手帳の向こう側

P130～

河岸 由里子

【巷の小話その3】

若者の言葉の変遷は著しい。ちょっと前には「チョー〇〇」とか「メッチャ〇〇」或いは「とりま(とりあえず)」など省略が流行っていた。今も省略形はある。「了解」が「りょ」になり、「り」へと変化した。「あーなるほど」が「あね」などもある。LINE など SNS

では文字をなるべく少なく打とうということから、省略されていくのは理解できるが、どの言葉がどういう意味か、年寄りには着いていけない。下の表で、皆さんはどれだけわかるだろう？

1. ま?	15. イチキタ
2. り	16. 草、大草原
3. あーね	17. はにゃ?
4. とりま	18. びえん
5. わんちゃん	19. エモい
6. 希ガス	20. チルい
7. タビる	21. マギカ
8. きまZ	22. ちょえ
9. おしゃピク	23. アセアセ
10. KP	24. 大丈夫そ
11. スパタリ	25. 勝たん
12. メンブレ	
13. ガンダ	
14. フロリダ	

そんな中、先日「〇〇界限」という言葉をきいた。その時は「風呂キャンセル界限」であった。朝シャンとか言って、毎朝シャワーを浴びていた若い世代が、風呂に入らなくなったのか? 「界限」とは何ぞ? と思いネットで調べてみた。「界限」は2025年最新のトレンドとある。この言葉は SNS でよく目にされるようになった。2024年の「新語・流行語大賞」にもノミネートされたそうだ。「界限」の意味はもともと「あたり」とか「周辺」と言った意味から「共通の関心や価値観を持つ人々のコミュニティ」を指す言葉で、特に Z 世代が「仲間」「近い存在」「同様の興味や行動パターンを持つ人々」といった意味合いで使われるようになったという。

例として: 「伊能忠敬界限」(伊能忠敬のように長距離を歩くことを好む人、仕事や趣味で長時間歩く人々)、「自然界限」(自然を楽しむ人々や行動を指す)、「風呂キャンセル界限」(何らかの理由でお風呂に入ること自体をキャンセルしたり、入る時間を先延ばしにするとした経験を共有する人々。面倒がる人々)、その他「謎解き界限」「筋トレ界限」「鉄道界限」「教師界限」「スタートアップ界限」「ママ垢界限」「闘病界限」等々沢山ある。(以上 KEEN より)

要は「仲間」に近いのかなと思うが、こうした言葉を共有することで、SNS 上の繋がりが、コミュニティが活性化し、孤立感を防ぐ役割を担っているのかもしれない。「ガングロ」「腐女子」などは化石になって

いる今、年寄りの私には、それこそ「いみふ」が多いので、高校生や大学生に教えてもらいながら、コミュニケーションが取れるよう頑張っている。

＜上記票の言葉の意味＞ 1. まじ?、2. 了解、3. あーなるほどね、4. とりあえず、5. ワンチャンス・もしかしたら、6. ーな気がする、7. タピオカ入りの飲料を飲む、8. 気まずい、9. おしゃれなピクニック、10. 乾杯、11. スーパーダーリン、何でもできる完璧な男性、12. メンタルブレイク・精神崩壊、13. ガンダッシュ・全力疾走、14. 風呂の為メッセージのやり取りから離脱する、15. 一時帰宅、16. 笑いを表すwを連続入力すると草のように見えるから。大草原も大笑いの意味になる。17. 「あれ?」というようなニュアンス。理解できない時やとぼける時などに使う、18. 泣いているさま、19. 心が揺さぶられる、なんとも言えず素敵な気持ちになったときに使う、20. ゆっくりする・くつろぐ・ゆったりする、21. まじか・本当か? 22. ちょっと待って、23. 慌てて汗をかいているさま、24. 大丈夫そう? 大丈夫か?、25. 勝たない、「しか勝たん」は最高の意味。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P73～

先人の知恵から

P169～

大谷 多加志

2025年2月で、以前マガジンでも書かせて頂いたことがある、同志社大学赤ちゃん学研究センターでの調査が完了となりました。2018年から8年ほど通わせて頂いたのですが、赤ちゃん学研究センターが同志社大学の学研都市キャンパスから京田辺キャンパスに移動することになり、それに伴って学外機関との共同研究が終了することになったためです。とても希少な研究機関だったと思うので、移転縮小は残念ではありますが、ここまでお世話になったことには感謝しかありません。一方で、大きな組織の中で、希少な機能を担っているものであっても、ふいに終了を迎えることになることには一抹の無念さがあります。代わりに、自分の研究室で細々とですが赤ちゃん研究を続けることにしました。

長く続けることの難しさを知っているからこそ、できる限り息長く取り組んでいけるように整えていきたいです。

発達検査と対人援助学 P124～

鶴谷 主一

マガジン発行 60 号おめでとうございます！

アソブロックが主催する家族理解ワークショップに参加を始めてしばらく経った頃、「新しいタイプのマガジンを考えている」と団士郎先生から話を伺いました。幼児教育が専門の自分が対人援助の仕事をしているという意識は無く、「鶴谷さんも書いてよ」と言われたとき即答はできなかったと思いますが、「論文じゃなくて、自分の仕事の周りのこと、その人が現場でどんなことをして、どんなことを考えているか、そんな発信ができればいいんだ。」ということをお話し下さって、幅広くとらえてみたら幼児教育も対人援助と言えるのかなあ？福祉系の知識が全く無い自分にも書けるのかなあ？と戸惑いながらスタートした気がします。(15 年も経ってしまったので、記憶は曖昧ですが…)

なんとか今号も〆切に間に合うことができました。

2回お休みしているので、58 回掲載して頂いていますが、マガジンを読んだ保育雑誌の出版社から特集を組みたいと話があったり、焼き芋の焼き方について他の園から問い合わせがあったりと、多くはありませんがなんらかのアクションが生まれたりしてオモシロいなあ、と感じています。

園の仕事を整理して書いたり、職員の研修に使える資料がこれだけ蓄積されたことは、自分の財産を作ってきたようなもので、参加させて頂いたことを心から感謝しています。ボクが引退するまでか、ネタが尽きるまでか…マガジンが続く限りは書かせて頂きたいと思います。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から P58～

中村 正

昨年の今頃は退職準備のために相当な労力を費やした。一年経って、こんどは創業した一般社団法人 UNLEARN の仕事の定着に忙しくなっている。それでも周りからは「楽しそうに退職しましたね。」とよく言われる。やりたいことをやっているからだろう。そう見えるようだ。この 3 月には以前と同じビル内の事務所風の場所に拠点を構えた。カフェスペースでもグループワークを継続している。JR と地下鉄東西線の二条駅至近の場所だ。3 月いっぱいかけてグループワークや個別相談ができるような空間に設えていくつもり。正式なホームページも開設予定である。脱暴力の拠点にしたいと思う。休むことなく連載している「臨床社会学の方法」はそのための考え方の整理のようにして書いている。まだまだ社会の暴力はなくならないどころか拡大している。脱暴力を基礎づけるための男性性ジェンダー研究に関心をもつ若い研究者も育ちつつある。以前からやってきたこととはいえ、体制も整備するので本格稼働が楽しみな日々である。

臨床社会学の方法 P22～

団 士郎

ちょっとしたきっかけで、東京/神田神保町が近く思えることになった。始まりは東京家族理解 WS。今回の会場が前回に引き続いて神田にある日本教育会館会議室だった。神田では以前にも東京堂書店の会議室を会場にしたことがあった。

今回の日程の週初めから大寒波襲来の天気予報がやかましかった。いつもは土曜の朝出発して、午後 13:30 からのプログラムに十分間に合う。ところが週末の予報は大雪の可能性。少人数とはいえ全国各地から来て下さる WS に、講師が新幹線の遅れで来れませんは無責任だろう。そこで金曜に前泊することにした。近くが良いのでトリヴァゴで探して神田にホテルを取った。

金曜日、ゆっくり目の道中は、いつものように audible を楽しもうと、未読の作家のものを選んだ。原田ひ香著「古本食堂」、

知らなかったがこれがドンピシャ、神田神保町の古書店が舞台の話だった。



ホテルはすずらん通りに面した、前が古書店という立地。早めにチェックインして早速出かけた。一軒目で二冊、二軒目で一冊と大形本を購入したところで焦った。キャリーバッグにもう入らない。

古書店巡りはそこまでにして、早めの夕飯をと通りの中華屋に入った。賑わっていたが入口近くの寒い席でも良ければと案内され、美味しい定食を食べた。そしてコーヒーでも飲みながら、先ほど購入した本を読もうと考えた。ホテル前の斜めの筋に個性的な昔ながらの喫茶店があったので、そこにした。

ゆったり楽しんだ後、部屋に戻って風呂で audible の続きを聴いていた。すると今食べた揚子江菜館と喫茶ミロンガヌオーバが登場したではないか。ますますこの辺りをうろちようしたくなった。またゆっくり来よう。

晩年 D・A・N 通信 P39～

中島 弘美

寒い 2025 年 2 月、第 30 回神戸ルミナリエに行ってきた。震災後 30 年の節目は、さらに緻密なデザインになっていていりどりも美しかった！会場で流れている音楽も鎮魂の祈りを感じられて染み入る。会場は、十代二十代の人たちも多く、コインをつかって鐘を鳴らすコーナーは順番待ちをした。鑑賞の仕上げは、神戸市市役所上層階に上がり、高いところから全体像を見渡すことだ。室内は暖かく、遠くに見える光も柔らかく映る。ルミナリエがこれからも長く、多くの人に伝わりますように。

カウンセリングのお作法 P36～

篠原 ユキオ

日本の漫画は相変わらず世界をリードしているが1コマ漫画は盛り上がらない。

私が長年にわたって指導してきた京都精華大学のマンガ学部もついに日本で唯一 1 コマ漫画を教えてきたカートゥーンコースの募集を停止した。カートゥーンをきっちり教えられる教員がいなくなったこともあるがこのままでは日本から 1 コマ漫画の文化が消滅してしまう危機感を感じている。

1 コマ漫画にはコミュニケーションツールとしてのアピール力や人の心を癒す温かさ、心を奮い立たせるエネルギーも持っている。

しかし残念なことにそういう作品を生み出してきたベテランの漫画家たちの多くが高齢化し、鬼籍に入るニュースも相次いでいる。

そんな中で私はこの春から大阪と京都の2つのカルチャーセンターで漫画講座を持つ事になった。カルチャーセンターのマンガ講座はなかなか人が集まらないというのが定説だがなんとか1コマ漫画の奥深さと魅力を伝えて行こうと思っている。大阪はサンケイリビングカルチャー倶楽部、京都は NHK 文化センター。ともに最寄り駅からすぐの便利な場所だ。さてどうなるか。小学生から大学生まで、若い世代の指導はたくさん重ねてきたが今度は社会人が中心となりそうだ。これまでとは異なる人達との出会いを楽しみにしている。



HITOKOMART
P235~

鷗野 祐介

2月21日深夜、TBS系報道番組「ニュース 23」に戦争中の子どもの替え唄についての特集が組まれ、僕も出演しました。これをきっかけに、「自分もこんな唄を歌っ

ていた」という情報が視聴者から寄せられるのを楽しみにしています。

うたとかたりの対人援助学
P176~

松岡 園子

今年の冬、母は一度も体調を崩しませんでした。「しんどい」と電話をかけてくることもゼロ。体は歳とともに不自由になってきた部分もありますが、心は以前よりも強くなっていると思います。二十代から病気でしんどい思いをしてきた母は七十代になってからようやく心の穏やかな時期を迎えられたのかもしれませんが。

三月に入り寒さも和らぎ、落ちついた毎日過ごすことができていることに感謝しつつ春を迎えようとしています。

今号は短信のみで失礼いたしますが、また次号以降よろしく願いいたします。

統合失調症を患う母と
ともに生きる子ども
休載

脇野 千恵

フリーでの仕事が充実している。長く続けてきたことが、色んな人の役に立っていることにちょっと満足している。

出前性教育の外部講師として出向くことが益々多くなり、ここ1年本当に忙しかった。教材の準備、資料作成など、聞いてくれる人達のことを想像しながら、あれもこれもと欲張ってしまう。人のためとはいえ、実は自分が学ぶことになっているのだなと気がつく。それも心地よいプロセスだと思う。

忙しい中でもあれこれ思いつくことがあり、「おうち性教育ははじめませんか？」というテーマで、地域のパブリックなフリースペースで公開講座を開催してみた。事前申し込みなし、無料、子育てに関わる人、テーマに関心のある人を対象にした。誰も来ないかも？と思いながら、教材や絵本の展示の準備をした。普通日にも関わらず7名の参加があった。幼児連れの人、看護師、助産師、育休中の教員など。互いに自己紹介をしながら、今の性教育の現状や子育ての中の性教育についての悩みなど、情報交換に大いに盛り上がっ

た。会はなかなか終わらず、とても有意義な時間を共有できた。やってみるものだなと思った。次回は3月、楽しみだ。

こころ日記「ぼちぼち」
休載

岡崎 正明

ついに私の初の著書にして、我が父との合作自伝小説「なにくそ！ライゾウさん～僕のおヤジの負けな物語～」が2月28日に発売となった。



これは戦後すぐ生まれの広島の子の片田舎で育った男が、持ち前の反発心と情熱で高校中退から借金や離婚、難病や災害を乗り越え、50年以上続く地元の大型和食店を切り盛りしていく、失敗だらけのサクセスストーリーであり、前のめりな家族愛と郷土愛で周囲を無理やり巻き込んで進む、やや迷惑系地方創生ビジネス&ファミリードラマである。

なんだか分かるような分からないような解説だが、内容の方はものすごく読みやすく、気楽に読めることだけは保証する。人生の役に立つかは知らんけど。

中には「それは対人援助と関係ある本なの？」と思われる方もおられるかもだが、これが実は意外と関係があったりするのだ。

もちろんこの本ができた一番の要素は、父が倒れる前に書いていた自伝原稿の存在だが、それだけではこのような形で世に出すことはできなかったと思う。そこには息子である私が家族を学び、様々な家族を通して世の中を見てきた視点と、自分の想いを誰かに伝えるために、このマガジンで長く文章で表現し続けてきた経験が確実に影響している。

中小企業のクセつよ社長の人生と、対人援助職の視点が混ざると、こんな着地点になるのかもしれない。知らんけど。

役場の対人援助論

P117

来須 真紀

先日、児童相談所とその近接領域の研修会 in 徳島に行ってきました。2 日間の研修では、どっぷりと家族療法に浸り、新たな知識を得たり、改めて考えさせられたり、元気をもらったり…。

それに付け加えて、行き帰りの道中の同僚とのあれこれ。懇親会でははじめましての出会いお久しぶりの再会や情報交換。中には ZOOM で話したことはあるけれどはじめましての方も。

近年、学ぼうと思えば、学ぶツールは無限にあるけれど、やはり対面でその場の空気を感じながら、学ぶことは、すてきなと思ったのでした。

教室の窓から

P270

山口 洋典

1995 年をボランティア元年とすると、2025 年はボランティア 31 年です。阪神・淡路大震災がボランティアを大衆化したことに疑いの余地はないでしょうが、一方で 31 年という時の流れは、その反作用としてボランティアに関する過度な制度化を助長させたという指摘もあります。ボランティア 30 年に発生した令和 6 年能登半島地震でのボランティア迷惑論・自粛論はその端緒でしょう。何より「行かないことが支援」という言説には自らの経験や知見を前提にするだけではコミュニケーションが成立しないこともあるということを激しく痛感しました。

そんななか、2 月の末に岩手県大船渡市で山林火災が相次いで発生しました。間もなく東日本大震災から 14 年を迎える中、これまで出会った方々の顔や声、訪れたまちの風景に思いを馳せると、「何かできる!」と「何ができる?」が反復する中、東日本大震災で積極的に活動した認定特定非営利活動法人カタリバが、2 月 28 日に複数の現地団体と連携し、令和 6 年能

登半島地震や奥能登豪雨などで実施してきた災害時子ども支援「sonaeru(ソナエル)」チームにより支援ニーズの収集を始めた、というニュースリリースを目にしました。「あれならできる」あるいは「これをする」、転じて「一緒にいる」、それだけでも支え合いの場が成り立つことを改めて見つめ直すことができました。末筆ながら、被害に遭われた方々には早々に穏やかな暮らしが戻ることを願いつつ、謹んでお見舞い申し上げます。

PBL の風と土

P186~

千葉 晃央



京都市営地下鉄東西線をよく使っている。オーバーツーリズムが話題の京都の交通機関の中で、基本的に空いていることが多い。そのため、赤字路線とか京都市の借金の温床といわれている。それでもユーザーにとっては空いているのがありがたい。私が日常動くことが多い京都市の西の地域(右京区、西京区)の交通手段は脆弱といわれている。京都の中心部に出る路線はあっても、京都市西部で南北をつなぐ電車はなく、バス路線も瀕死といいいい。そんな中、東西線太秦天神川駅からスタートする地下鉄東西線は、嵐電とも接続し、京都の中心部、再開発が進む山科駅、滋賀県大津市まで東に進むことができる。地下鉄東西線から京阪京津線乗り入れ区間は地下鉄から始まり、山を越える山岳列車となり、路面電車となる電車マニアにはたまらない魅力ある路線とさく。大津市の京阪浜大津駅からは北は比叡山口、南は石山寺と移動できる。京都市営地下鉄東西線は山科からは南に向かい六地藏駅で JR 奈良線、京阪宇治線ともつなぐ。京都中心部を迂回して、宇治、奈良まで行くことができる。また、ホ

ームドアも全駅完備で、パンの自販機も多く、平安神宮等のある岡崎地域、市役所のあたり、桜、紅葉で有名な各寺社、醍醐寺、隋心院、勧修寺など、ひっそりと人気スポットにもアクセスでき重宝している。京都駅の混雑緩和のため、山科駅を再開発する計画もスタート。京都の観光に疲れたら、東西線での移動をおすすめします。以上、外国に来たんかというような景色があちこちにある京都からオーバーツーリズム回避術でした。市バスは余裕があるときしか乗らない。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17~

見野 大介

五年ぶりとなる京都高島屋での個展が無事終わり、五年間の成長を感じる一方で、反省点は山積み。もっともっと制作しないと。

ハチドリ器

P4

柳 たかを

「原住民・新住民」

最近、近所のスーパーに買い物に行くと店内ですれ違う人達の話している言葉が多種多様だ。

ここ 2~3 年のうちに大阪市内の我が住まい近くに 30 階建て前後の高層マンションがいくつも建設された。住人が増加するだろうからとコンビニやミニスーパーが増え便利になった。

ただ私の観察では、インバウンド外国人観光客のような短期の滞在者ではなく、定住が目的と思われる「新日本人」だと思う。そして急増していると思う。おそらくそういう政策がとられているということだ。

地下鉄や私鉄の車内放送も数カ国語で放送されている、これも観光客向けだけでなく外国の新住民に向けたサービスだと思わざるをえない。

少し前、ある SNS 記事で我々日本人を「原住民」と呼び、新しく住み始める外国人を「新日本人」と言ってるのを目にした。

まあ…「先住民」と書かれるとさすがにちょっとイラっとくるところだった。

これからどんどん原住民が減少して、彼ら新日本人が新しい日本住民になっていくのだろうか？ 意味を考えだすと異様で複雑な気持ちが沸いてくる。

ちょっと…心を落ち着けるために今年も初詣に行かせていただいた奈良の大神神社にでも行って、神様の神気に満ちた清浄な空気に浸り心静かに瞑想したくなった。

蜘蛛の糸 P150～

荒木 晃子

自宅から徒歩圏内にある障がい者グループホームの調理ボランティアが、週1回のアルバイトに変わった。隣接する自立支援作業所には平日数十名の老若男女が通所していて、ホームに入居する数名の方々もそこで働いているという。

夕食のメニューを考える時間、調理の最中に「いいにおい！」と〇〇さんが調理場をのぞきに来る瞬間、配膳が済みテーブルに着いたみんなと一緒に食事をとる空間、私にとってはどれも楽しい時間となっている。お料理を「美味しい、美味しい」といいながら口に運ぶみんなの笑顔は、これまでに経験したことのない幸せを感じるひと時でもある。入所者は20代から50代までの男女数名。もとは全員赤の他人だったはずの彼らが、私の眼には家族に映る。時折夕食をつくりに来る私は、さしずめ親戚のおばさんというところか。いい距離間のある斜めの関係は嫌いではない。

先日、理事長から「(本業があるのに)荒木さんはどうしてここに来てくれるの？」と尋ねられ、一瞬言葉に詰まり、はて？と考え込んでしまった。しばらくして、「私の本職は、誰にも語るができない話に耳を傾ける『静』の作業。ここでは、日常生活を生きることを援助する『動』の作業。なぜか開放感を感じるというか、皆が可愛く、とにかく楽しい。自分の好きな料理を作って喜んでもらえるのですから。」と正直に答えたが、あれで答えになっていたのか今でもモヤモヤしている。その後、「もっと来てほしい」といわれたので、おそらく及第点はもらったのだろう。

一方、本業の方は、5月に東京で開

催される医療系の学会報告の準備に拍車をかけなければ、と少々焦り気味である。

生殖医療と家族援助 P104～

小池 英梨子

最近、猫は1“匹”なのか1“頭”なのか、という話が出てググった。なんとなく“匹”だという認識はあったが、どういう違いなのかすっかり忘れていた。結果、人間の大人よりも大きい動物は“頭”、小さい動物は“匹”で、境としては、恐怖心なく抱きかかえられるサイズかどうか、らしい。子羊は1匹でデカくなった羊は1頭。寝る前に数える羊はアニメ化されているので“匹”だそう。

そうだ、猫に聞いてみよう P162～

寺田 弘志

2月は逃げると言いますが、もう原稿の締め切り日になってしまいました。

幸い今回は期限内に本文のほうはできました。いつも締め切りすぎでの提出で、編集部の皆様すみません。

ただ、短信がまだで、あれこれ書きたいことはあるのですが、このあとレセプト業務や確定申告が続くので、今回は短信はご挨拶だけにさせていただきます。60号発行おめでとうございます！

すごいですね。

これからも末永く対人援助学マガジンが続きますよう、お祈りしております。本文ではパドキシカルコントラクトについて書きました。

接骨院に心理学を入れてみた P192～

古川 秀明

般若心経とオープンダイアログの融合は自分でも思いつきませんでした。けどやってみるととても親和性が高いと思いました。

般若心経もオープンダイアログも理性の限界内で語れますが、そこから導き出される答えは、どちらも予測不能で、それこそ般若心経に書かれてい

る「摩訶不思議」なものです。

オープンダイアログの「対話理論」と般若心経の「色即是空」。

どちらもAIの対角線上にある考え方だと思います。AIが発達すればするほど、オープンダイアログと般若心経はそれに比例して輝きを増すと思います。

講演&ライブな日々 P127～

原田 希

二年前に叔父が送ってくれた樅の挿し木に初めてのつぼみ！2つ付きました。樅は寒さに強いと言いますが北海道では地植えにはできず、成長に合わせて鉢を変え、培養土を足し、適切な時期に肥料、水は土が乾いてから。多すぎる葉は選んで剪定。つぼみは栄養が回ってこないと付かないようで…2年待ちに待ちながら樅ちゃんに自分自身の北海道での成長を投影するような気持ちでいました。つぼみが出来てもすぐには咲かないそうです。咲かせてみたいですね。



原田牧場Note P223～

サトウ タツヤ

帰って来た__対人援助学縦横無尽、今年も掲載したいと思います。コロナ後の活動が活発になってきたので、年1回は量的に限界かもしれません。なので年2回の投稿を目指します。

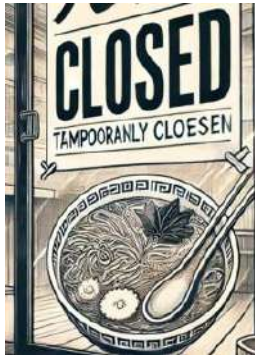
日本質的心理学会の理事長(6年間)、総合心理学部長(4年間)が、ともに2025年3月で終了。それぞれコロナという逆境の中でも皆さんの創意工夫と協力に助けられて無事に仕事を終えられそうです。

2025年4月からは、学校法人立命館副総長(研究・入試・DEI)になります。活動範囲も広がると思うので、そういうこともレポートしていきたいですね。

帰って来た__対人援助学縦横無尽 P77~

野中 浩一

コンビニやスーパーの棚がガラガラになっている光景、2~3年前に初めて目の当たりにしたときはぞっとした。生まれてこの方、食べ物がふんだんにあり、補充され続けている光景しか知らなかったから。



職場の近くのラーメンチェーンに休業の紙が張られ、比較的最近できたお好み焼き屋は張り紙もなくひっそり閉店。昔からある個人ラーメン店のおじちゃんとおばちゃんは今日も忙しく働いているのを見て、少しほっとする。

ひっ迫している人(特に地方の生活者)が急増し、そうでない人(特に為政者や安定職者)との危機意識の乖離が大きくなっているように感じている。地方在住だからだろうか。

島根の中山間地から Work as Life P251~

団 遊

大学時代の後輩がGoogleを退職した。理由を聞くと「会社が急速につまらなくなっただから」と言う。入社当時は「刺激がいっぱいで楽しいと言っていたのに」と問うと「これでも粘って頑張った方なんですよ」と

言いながら、ターニングポイントは、会社のポリシーが「DONT BE EVIL」から「DO THE RIGHT THING」になったことだと断言した。「邪悪になるな」から「正しいことをやろう」に。ビックデータが価値とされる時代において、Googleのような会社は、やろうと思えば悪魔にもなれてしまう。自分たちの力をそのような方向に使ってはいけない、という戒めを胸にそれぞれが可能性を追求できていた時代から、「正しさ」という言葉が出てきたことで、急速に売上・利益の追求集団化が進んだという。正しさはそれほど役に立たないし、正しさに大した力はない——。対人援助の領域で耳にする話を、ここでも聞いたと思った。

人が育つ会社論 P32~

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。

地下鉄の階段を下りている最中に足をくじき、気が付けば2~3段下の踊り場に倒れ込んでいました。「大丈夫ですか？」と何人かの人が周りに来てくださり、大丈夫、大丈夫と言いながら立ち上がろうとするも、あれ、どうも右足が痛くて動かない。というわけで、1月末から松葉杖生活です。このような姿になって、道の整備が不十分なところ、公共機関のバリアフリーの状況、周りの人が随分ケアをしようと動いて下さることなどに気付かされます。行けないところや出来ない事は多いけど、新たな体験は増えたように感じています。あと半月ほど、この立場だから知ることを沢山体験したいと思っています。

そして、誰かに助けを求めた時に、ほんのりと胸の奥から立ち上がってくる「図々しい」という恥ずかしさに似た感覚。「困った時には“助けて”って言っていいんだよ！」などという言葉もあるし、よく学生にも言いますが、助けてと言えないしんどさと、助けてというしんどさと、この2つのあいだで、自分の居心地のいい“求め方”を自分に確かめるという作業を粛々と続ける日々です。弱さって強さだ、と頭で考えていても、こんな立場になってみると、弱さが恥ずかしさにリンクしている私がまだい

るんだなあ、と味わっています。

福祉系対人援助職養成の 現場から P66~

障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第11回

社会福祉制度が時代で変容していく「怖さ」

千葉 晃央

福祉制度が時代で変容する「怖さ」

社会福祉の授業や講義では、その根拠として日本国憲法や法律が用いられることが多い。憲法13条において「すべて国民は、個人として尊重される」と、個人の人權を最大限保障しています（「基本的人權の尊重」）。憲法25条では「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とされています。さらに、様々な「〇〇福祉法」等の福祉関連法があり、福祉活動の根拠となっています。

憲法や法律は、時代によって大きく異なります。変遷があるのは当然です。過去に用いた法律も現状を反映していないとして、いずれ古くなっていきます。そして、次の法律ができていくのです。つまり、現在用いている法律もいずれ古くなるので

す。

とはいえ、人々の暮らしにおいて必要なことはそんなに変わるのでしょうか。人々が暮らす中でお互いに助け合い、相補的に暮らしてきた実態は不変です。法律があるか、ないか以前に人の暮らしがあるのです。つまり、法律を根拠にできるのは暮らしの一部分でしかありません。そんな中で「法律に基づいて福祉を行っていたら、それでいいのか？」「疑いを持たずに、法律がただ正しいとして福祉業務を行っていたらいいのか？」という法律すら、危ういという事例を取り上げます。今回は、憲法も法律も異なる、日本という国を舞台に行われた（過去の）福祉活動を取り上げ、社会福祉制度が時代で変容していく「怖さ」について考えます。

軍事保護院推薦 『聖戦交響楽』

紙芝居で『聖戦交響楽』というのが上演されていたのは戦時中です。発行は1941年4月。真珠湾攻撃の以前です。この物語では、音楽家が戦地にいき、視力を失って帰ってきます。元軍人が主人公です。帰国後に、戦地での経験をもとに壮大な楽曲を作曲し、コンサートを開き、大成功を収める物語です。この中で、師弟愛（軍隊時代の上官が激励に来る）、家族愛（不自由な暮らしを家族が助ける）、傷痍軍人への敬意（まちでも、大切にされる）、その時代が求めていた人間としての成長（男尊女卑的）が描かれています。

こうした紙芝居は「国策紙芝居」といわれています。国策として作成、上演を進めました。戦意高揚、忠誠心の醸成、軍事援護精神の形成等を目的に、厚生省（現厚生労働省）の外局が紙芝居を用いることを決定し、行われました。つまり、国がほぼ直接決めた方針です。

大衆性、教育性、芸術性の心地よさ

紙芝居の優位性は、視覚的にも伝達できることです。多くの人、つまり日本語の読み書きが苦手な人たち、子どもたちを含め、大衆に向けたメッセージを届ける方法として機能しました。

上演の1つの場所は教育機関でした。全国津々浦々に多くの伝える場所があり、さらに演者である大人がいる。さらに多くの聴衆に伝えることができる権威があり、場所もあったからです。こうした「大衆性」と「教育性」をベースにしていました。また、「絵」と「物語」という表現活動を用いるため、応用できる技術や手法がすでにありました。人の心を打ち、心を揺さぶる「芸術性」も3つ目の特徴とされています。こうした特徴は、戦時に人心を掌握し、国家のコントロール下にするに





は便利な手法とされたというのは想像できます。

『聖戦交響楽』では、主人公、つまり盲目となった元傷病兵である音楽家は出かける時に、自分の子どもに手引き（手や肩をもって誘導）をしてもらって外に出かけます。セリフでもこれは障害者家族、傷痍軍人家族の中の「子どもの役目」と断言されています。そして、公共の交通機関では、傷痍軍人ということで国のために奉公をした偉い人として周囲の人々から優しく敬愛され、不自由なく移動している様子が描かれています。



また、戦地でお世話になった上官である元部隊長が訪問に来て、その絆の尊さも強調されます。また、盲目であることの神秘性を描写するような場面もあります。雷に打たれたかのように、作曲のアイデアが舞い降りるのです。さらに野営で経験する自然への畏怖の念もそこに加えられています。そして、これらの根拠となったのは、命を投げ出して未来のために、国のために行動した人のみが経験する「戦地の体験」があったからこそ、芸術的に素晴らしい音楽ができたと思います。体験がいかにも聖なるもので、価値ある体験のように位置づけられています。



福祉職も「国策紙芝居」を上演

こうした国策紙芝居は数百単位の作品があり、各地で使われました。私の手元にある2点は、祖父が残したものです。なんでも私に、いいタイミングがあれば渡すようにと、祖父は父に託したそうです。他にも「支那事変従軍記章」や「ゲートル」とともに紙芝居3点（うち1点は戦後の紙芝居）が残されました。祖父は戦中、傷痍軍人となり、国内で過ごします。地域の役、自治体職員もしていたので、その中で国策紙芝居を用いたと伝えています。戦後はGHQ（連合国軍最高司令官

総司令部) が日本に入ってきました。国策紙芝居を持っていると戦争にたくさん協力した「戦争犯罪者として逮捕される」と噂になり、各所でこうした紙芝居は焼却されたといひます。その中でこっそりと隠していたのが祖父で、なかなかの根性と機転と少しのチャレンジ精神と遊び心です。



この紙芝居を上演したのは、小中学校の教員、自治体職員に加え、「方面委員」もかかわったといわれています。方面委員は今でいう、「民生委員」です。つまり、福祉の担い手の役割です。

本来、方面委員は制度で福祉に関する業務が当てられていました。それは地域の困っている人をサポートする役割です。例えばお金がなくて困っている人に支援をしたり、病気で動けない人に行政サービスを届けたりです。それが戦時中に変容していくのです。軍人遺家族の援護、軍人援護事業、銃後後援事業、軍国化に向けた国民精神総動員運動による教化事業…が方面委員の役割となっていきました。そのきっかけは軍事扶助法(1937)の制定とされています。

1945年にGHQが日本にきて、こうした紙芝居も検閲され淘汰されます。祖父からの紙芝居3つのうち、「国策紙芝居」ではない残りの1つの紙芝居は戦後のもので、ユーモアにあふれています。

「火の用心」をテーマにした内容です。しかもお寺が舞台で坊主と小坊主さんの軽妙なやり取りが

描かれています。戦前、戦後の数年でガラッと様々なものが急激に変わったことがよくわかります。



「あきお、きけ。おじいちゃんの…」

福祉職は法律の言いなりではよくありません。福祉職に限ったことではありません。まずは自身自身の頭で考えることです。法律は変わります。法律名は変わらなくても、微調整で内容がどんどん本来の目的から逸れて変わっていくこともあります。歴史では劇的な変化が一瞬で起こることがあります。でもそれは少ないでしょう。それよりも日夜じわじわ侵食するのは、法律名は変わらず、





拡大したり、運用の仕方を変えたりする緩やかな変化でしょう。福祉職は利用者さんを通して、住民の暮らしを見て、それに対する策である福祉サービスを駆使します。福祉の法制度と住民の生活実態双方に詳しいところにいるのです。だからこそ、自分で考え、時には行動もしていくこと、そういう事態があることをまずは話題にしていくことが大切でしょう。同じく国策紙芝居を上演した教育現場、自治体の職員も同様です。

私たちが根拠に使っている法律も大丈夫でしょうか。立案時の精神は忘れられていませんか？そもそも、法律がなくても、人間なら「目の前にそういう事実があればするでしょ」というのも社会福祉活動であったりもするのです。人々の暮らしの現実に、法律の方があっているのか？を確認しな



ければいけません。

1970年代ぐらいまでの小説や映画には、元特攻隊員や戦争体験を引きずる人々の苦悩が頻繁に登場します。「あきお、きけ。おじいちゃんの若い頃は軍隊でこうやって敬礼して…、お前もやってみろ…、んでね！だらだらしてたら駄目よ。もっとびしっと、そうでないとビンタでバーンって…」祖父がそうして、軍隊時代のことを話していたことを今でも思い出します。軍備も。そもそもは守るため。攻めるため、国民を不幸にするためではない。福祉だって同じです。国民に寄与する社会福祉制度になっているかを、常に観察をしていくことが求められます。

【参考文献・引用文献】

- ・安田常雄 編 (2018)『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版
- ・大串潤児 編著 (2022)『国策紙芝居：地域への視点・植民地の経験』御茶の水書房

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

対人援助学マガジン 43 号～/2020 年 12 月～

「付け加えることができる価値は何か？」

対人援助学マガジン 52～58 号/2023 年 3 月～2024 年 9 月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号/2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号/2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号/2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号/2010 年 6 月～2020 年 3 月

臨床社会学の方法

(47) 隣人のもつ力

ー日常から生成する脱暴力のエコロジー

中村 正

1. 「善き隣人」であることの意味・意義

暴力の被害者は誰に相談しているのか。公的なところは敷居が高く、相談にいかないことが多いことが調査で指摘されてきた。しかし相談先はある。その第1選択肢は、知人・友人、家族、同僚である。この時、適切な知識や情報をもっている隣人であるかどうか極めて重要となる。そうしないと二次加害となることもあるからだ。「あなたも我慢したら」などと言ってしまう事例も存在している。市民の保持すべき冷静かつ正確な知識や行動は、善き隣人の役割となる。善き隣人は、被害者と加害者の二つあいだにある。しかも、冷淡な傍観者、沈黙する多数派の群れ、行動する隣人、善き隣人、伴奏する仲間の群を成し、グラデーションを成している。

いじめ問題でもこのことは指摘されてきた。森田洋司さんのいじめの四層構造がそれだ(下図参照)。「被害者、加害者、観衆、傍観者」からなるいじめの把握である。「無関心」が「傍観」、「傍観者」を生んでしまうということを強調する。ただそばで見ているという意味だけではなく、その物事に

関係のないような立場で眺めている人を「傍観者」として把握した。

観衆・傍観者は、「次は自分がいじめられる」などの不安と恐怖と葛藤がある存在である。観衆はいじめを強化する存在ともなる。子どもたちは報復が怖いとも思っている。仲間はずれにされるのも怖い。逆に、いじめが面白い、被害者への不快感をもつ等の理由でいじめに加担する場合もある。

しかしこの構造のなかには教師と保護者が欠落していると批判する論者もいる。また、森田氏以前からの指摘もあったという(山岸竜治「『いじめの四層構造』を描いたのは誰かーいじめにおける教師の位置に関する考察」『社会臨床雑誌』第26巻第3号、2019年3月)。いずれにしても被害と加害の二元論を超え、そのあいだにある関係者を抽出してきたことは共通している。これはあらゆる暴力に通じる。いかなる意味での傍観者なのというグラデーションを把握し、その役割を考察してきた。

暴力と男性性の見地からこの点を考えてみる。暴力を肯定する男性文化の存在が指摘されてきた。ホモソーシャルな力学をもつ男性文化である。そのなかで社会化されて

いくのだから、ジェンダー公正に向かう男性にとっては努力がいる。ジェンダー秩序はあまりにも非対称な日常をつくりだし、不断にホモソーシャルな男性文化が主流となり、男性性ジェンダーを形成する。ジェンダー公正の実現を願う男性諸個人は、そうした男性文化を、単に馴染めないから回避して遠ざけているだけではない立ち位置や態度表明を求められる機会が数多くある。もちろん遠ざけておくことが必要なこともあるが、それはせいぜい個人としてやり過ぎるだけである。

図 Ⅲ-3 いじめ集団の構造

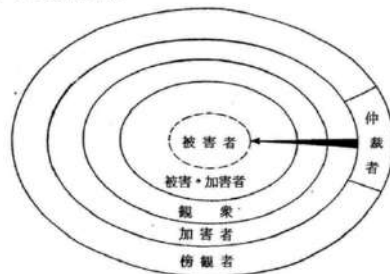


図 1. いじめ集団の構造 (森田、1985、p40)

森田洋司編著 (1985 年)『「いじめ」集団の構造に関する社会学的研究』(科研費報告書、大阪市立大学社会学研究室)

男性の生活には、ホモソーシャルな男性文化にさらされて生きることを強いられる面がある。男性性ジェンダーが降り注ぐような人生の諸相がある。それを乗り越えるべきことがジェンダー公正の実現であることはこの「臨床社会学の方法」の連載で扱ってきた事柄である。DV、虐待、性暴力、ジェンダー暴力に共通して、多数派の男性に有利にできあがっている関係性の構造があり、多数派のなかを生きるなかで不断に遭遇し、意思決定を求められ、行動を迫られるとい

う格闘を何らかのかたちで強いられる男性の人生である。被害と加害のあいだを可視化するために四層構造やさらに関係者を配置していく作業は、男性文化の圧力への応答を言葉にしていくことにとても意味がある。

別言すると、暴力の連続体があるということも導きだせる。たとえば軽微ないじりのように機能し、男性同盟を強めることになる「下ネタトーク」がそうだ。セクシャル・ジョークのような段階から男性文化が機能する。そこに無理に参加させられる男性たちである。類似の例として、トイレで新入社員男性に上司が「勢いのないやつだな。そんなことでこの会社でつとまらと思うか？」という性のメタファーを用いたいじりが性的な優劣とともに話される。逆の例も多い。おそらく性暴力があったはずなのに、過小評価する言葉群がある。「いかがわしい行為、女性とのトラブル、性的ないたずら」などである。旭川事件(北海道旭川市の公園で女子中学生が死亡しているのが見つかった事件。いじめが原因の自殺だった。性暴力が含まれていた)もいじめ事件として処理される傾向が強い。

2. 映画「告発の行方」のインパクト

性暴力に関わり観衆や傍観者の存在を指摘した映画がある。「告発のゆくえ」である。1983年にマサチューセッツ州で起きた実際のレイプ事件に基づいた映画だ。レイプの加害者だけでなく、それを周りで見ていて、加害者たちを囃し立てていた人たちの責任を問う構図となっている。彼らを犯罪教唆者として裁けるか。男性であれば求められ無いのに、女性には要求される男性優

位の社会が押し付ける理不尽な価値観（ダブルスタンダード）を背景に成り立つレイプ神話を裁くことになる。そんなアンフェアな価値観の元、女性レイプ被害者が被害を訴えても、ふしだらな女なんだから、酒場で羽目を外すような娘なんだから、襲われるのも当然というレイプ神話がこの映画で扱われている。酒場にいた若い男が、レイプ事件が起きていると警察に通報した。後を追うように出てきた半裸の女性。被害者はサラ・トバイアス。酔ってマリファナを吸っていた彼女を男たちがレイプした。事情を聞いた地方検事補キャサリン・マーフィは、彼女とダンカン保安官を伴って捜査を開始した。犯人側の弁護人が真っ向から戦いを挑む。酒、薬物、誘発するような服装や姿態など根拠に女性側にも問題があったという。被害者に有利なことは少なく、被害彼女は3人の容疑は過失傷害という司法的な取引となる。この事実を知ったサラはキャサリンを責め、傷つく。そしてそんな彼女を、レイプの際犯人達を止めるところか暴行を煽ったクリフがからかい、彼のトラックにサラは何度も自分の車を激しくぶつけてくる。入院するサラを見舞ったキャサリンは、女性として検事として真にあるべき道を教えられ、さらに裁判の場で争うことになる。レイプを煽り、そそのかした男たちを「暴行教唆罪」で告発しようとしたのだ。サラの友人のウェイトレス、サリー・フレイザーに暴行教唆犯を特定してもらうが、その際サラが事件直前、暴行犯の1人、大学生のボブと寝てみたいとサリーに言った事実が明らかになる。さらに窮地に立たされたキャサリンは、事件の夜警察に通報した若い男ケン・ジョイスを探し出すが、

彼はボブとの友情から真実を話そうとしない。裁判の日、サラが証言台に登った後、証人として事実を語るのはケンだ。彼の口から語られ自白のもとにさらされたショッキングな事実が浮かび上がる。一方的な性暴力と集団による辱めだったことが生々しく語られる。陪審員の心が動き、暴行教唆の罪となる。それは同時に、サラに対する暴行の事実まで明らかにする判決となった（アメリカ・1988年）。

これらは刑事事件となった出来事なので、責任が重い傍観者や観衆の話である。観衆や傍観者というより共犯性を把握する概念である。社会的にはよりマイルドに同じような機能をもつ事態が多く、「共犯関係」という言い方が暴力の文化を捉えるにはいい「臨床社会学の方法（6）共犯関係」（第5巻第2号、2014年9月、20号）。囃し立てることの罪は単なる傍観者はない。さらに遠巻きに存在する、別の言葉でいえば「サイレント・マジョリティ」、つまり沈黙する多数派がいる。これは傍観者の別の言葉である。共犯関係にある声なき多数派のことだ。

3.誰が為のボランティア「情けは人の為ならず」ー

この点を別の角度からみしてみる。ボランティアとは何かという点である。阪神淡路大震災後のボランティアの隆盛を受けて、NPO活動が活発になり、法人格制度も整備された。ここで表現している「善き隣人モデル」はボランティア行動からの発想である。1998年、「きょうとNPOセンター」を創設し、現在は理事長となっているが、創設時に感じたことを以下のようにまとめた。

NPO やボランティアを語る言葉にはカタカナが多いですね。それぞれにこれだ！という日本語がないのです。たとえば、ボランティアは、どう考えても「奉仕」ではない。では何がいいのでしょうか。「ただの仕事、無償の仕事、善意の仕事」などいろんな言葉が浮かんできます。そしてボランティアには「志願兵」という意味もあります。だから元来は軍事用語です。日本語に置き換えてみると多様な意味合いがあるので、むしろ翻訳語がないのをいいことに、ボランティアの広がりを感じとりたいと思います。

私も実にいろんなボランティア活動をしてきました。ボランティアが好きです。この中でボランティアをやったことがある方はおられますか？3分の1程度ですね。どんなボランティアでしたか？阪神・淡路大震災の時のボランティア、普段やっている高齢者へのサービスやデイケアセンターでのお手伝い、お話ボランティア、お掃除のボランティア、環境問題。いろんなボランティアがあります。もちろん、体験がない方もいます。ボランティアなんか嫌だという方もいます。

ボランティアは不思議な活動です。ボランティアから社会が見えてきます。社会の窓です。ボランティアをして日頃見えていなかったものが見えてくる。今日は、こうした視点から、ボランティアの多様性と社会性を考えてみたいと思います。ボランティアとは一体どんな社会行動なのかという話です。

アメリカに何度か滞在したことがあります。アメリカではボランティアという言葉は日常用語になっています。たとえば、授業中に、「誰かこの問題をやってよ」という場合、「Any volunteer?」と教師がいいいます。自発的に誰か黒板でやってくれませんかという意味です。自発的にやる活動をボランティアと言うのです。

日本ではボランティアというと身構えて、「いい

ことですが、私にはできませんね」とか、「ご立派ですね」という返事が返ってきます。ずいぶん違和感があるようです。そして、「他人のためによくやりますね」とも言われます。

ボランティアをしている人の実感からすると、本当は違うのです。一言で言えば、「情けは人のためならず」という格言にもあるように、自分のためにやっているのです。自己満足のためといったらいすぎでしょうか。自分にも益があるからやっているのです。ではどんな益でしょうか。もちろんお金をもうけるためではありません。自分のために行うボランティア活動という視点から考えていきましょう(きょうとNPOセンター編集『京都発NPO最前線』京都新聞社、1999年)。

「情けは人のためならず」という格言は、他人に親切にすると、その相手のためになるだけでなく、自分にもよい報いとなって返ってくるという意味で使われている。思いやりを持って助けたりしたことは、最終的に自分に返ってくる。

具体的に考えてみる。所属する組織や団体というコミュニティ規模で考えてみると互助から社会がみえてくる。たとえば、救命のことである。AED(自動体外式除細動器)の例である。ポンプ機能を失った状態になった心臓に対して、電気ショックを与え、正常なリズムに戻すための医療機器だ。2004年7月より医療従事者ではない一般市民でも使用できるようになり、病院や診療所、救急車はもちろんのこと、空港、駅、スポーツクラブ、学校、公共施設、企業等人が多く集まるところを中心に設置されている。心臓の動き(心電図)を自動解析し、電気ショックが必要な方にのみ電気ショックを流す仕組みになっている。2023年中に一般市民の方がAEDを使用した事例は、1,407件と

なっているという。この装置の使い方を知っている隣人でありたいと思う。そうすると自分が仮にそれが必要になった時にも救命される関係性が成り立つ。この装置の使い方を知るということもボランティアである。傍観しているだけではない隣人ということだ。支援する対象が特定されるわけではない献血行動も同じで社会全体へのボランティアといえる。

これを暴力にあてはめると、被害者を支援すること、加害者対応を講じることの暴力対策の両極のあいだに、加害者に加担することになるような傍観者や観衆にならない存在、私たちの存在の有様が問われている。性犯罪あるいは必ずしも性犯罪となるわけではない広義の性暴力、ハラスメントやいじめが社会の耳目を集めれば集めるほど、良識をもって判断し、行動できる「あいだ」にいる人たちの存在の大きさが浮かび上がる。たとえばジャニーズ問題。同時代体験としても男性が被害者になる事態とそこに絡め取られていく社会の側の課題が大きいことが見えた。メディアやエンタメ産業がつくりだす欲望のなかに渦まき性暴力があったということになる。それはうすうす漏れ出ていたことでもある。犯罪的な行為をも含みこんで創作された欲望が一大エンタメ産業を作り出していたことになる。この事実がもたらした失望は大きい、社会が宿す、男性文化という共軛関係も無視できない。

メディアを舞台にした性暴力という出来事は、そうした欲望やまなざしがそこに注がれている視聴者もそれを見させられていることになる。加害者の欲望によってつくられたファンタジーあるいはまなざしを見

させられていたことになる。ジェンダー秩序を強化する欲望の構造である。他にも京都の花街のダークサイドを告発したまんが（『京都花街はこの世の地獄〜元舞妓が語る古都の闇〜』宮本ぐみ、桐貴清羽、竹書房2025年1月）、中居問題（女性とのトラブルとしてしか表現されていないが）、なおくすぶるジャニーズ問題が提起していること、大阪地検検事正の性暴力時件（それは組織防衛、二次加害もあったと被害者は訴えている）など枚挙にいとまのない事態が続く。

こうしたことはそれを見聞きする市民に影響を与えている。どうすればよいのだろうか、何かできることはないのかと波風を立てる事態が数多く可視化されている。傍観者や観衆からの脱皮のために、何かをせねばならぬという心理的な負荷がかかる。

4. パワーハラスメントから脱出することを常識にするために

そこで、加害者を追求するだけではない回路を探るために、脱暴力をいかにして常識とするのかについて、パワーハラスメントを把握する視点を考えてみた。「男性リーダーのパワーの濫用としてのハラスメントについて考える〜教養として身につけるジェンダーの理解をもとにして〜」と題した私へのインタビュー記事が掲載された（マイナビキャリアリサーチ Lab2024.12.03）。それに追記して紹介しておきたい。

社会のなかで頻度高くハラスメントという言葉が流通している。目立つようになってきたが以前から存在していたことが言葉になってきただけだ。職場や学校でのいじめ、ハラスメント、DVや虐待という暴力である。他人事ではなく、いつ自分が加害者

または被害者になるかわからない。そもそも現在の企業や団体のリーダーは、ハラスメントという概念が流通していない頃に新入社員として以前のリーダーの指導を受けてきた。それが現在のリーダーになり、ハラスメント対応を迫られている。つまり、リーダーや管理職は若い頃にはハラスメントを含んだパワーの前に伏していた。

1)「飲みニケーションで絆が深まる」というフィクションが根強くある

オールドボーイズネットワークと言われる、男性同士の結びつきが生まれやすい人間関係が多く企業や団体・組織に今なお残っている。そうした職場では、「大きな仕事は男性に任せたほうがいい」「飲みニケーションで職場の絆が深まる」といった虚構(フィクション)が真実のように語られている。そのような環境を望まない、あるいは嫌う人にとっては非常に入りづらい環境だといえるだろう。実際、このように考える人は、女性に限らず男性の中にもいるはずだ。

大学生を見ていると、最近は個人主義を好む傾向が強い。学生を終え、社会に出ると、自分の主義に合わない企業には馴染めないことが想像できる。しかしそれは、本人が仕事を嫌いなわけでも、できないわけでもないはずだ。若者は仕事そのものの価値を追求したいと考えており、仕事以外の人間関係を「うざい」と感じる。実際、今の学生には「コンパ」といった文化はほとんどなく、飲み会よりも会食がメインとなっている。それも強制ではなく、あくまで自由参加というスタイルが定着している。

パワーを持つ者は、ハラスメントとは何かに無知であると責任を問われる。集団主義

が行き過ぎると、「他のメンバーと同じことをやれ」といった同調圧力がリーダーのコントロール志向を通して暗黙のうちに生まれる。そして、ここからはみ出した者には、業績達成に向かうための士気を高めるための、従来型の問題解決行動が、ハラスメントという形で浮上する。問題解決の仕方をアップデートしなければならない。

私はジェンダーの問題として男性の暴力についても研究しているので、暴力に関する相談をよく受ける。こうした問題を抑止する鍵となるのは、パワーやコントロールについての適切な理解と行動力のある指導者の存在だ。それはハラスメントの加害者にならないというだけではなく、どんなことが被害となるのかについての理解と、さらに自らの組織の構成員が相互にハラスメントに関心を持ち、冷淡な傍観者にならないというコミュニティ形成力も含まれている。

2) 心理的な安全性

心理的に安心できる組織となっているかどうかは、ハラスメント問題に端的に集約される。暴力で問題を解決しようとする傾向は自らの持つパワーの歪みに他ならない。問題解決のレパートリーが少ない。選択肢が少ないことは脆弱さだ。そこで自らの中の資源としての地位に基づく力への依存となる。

地位が上にあることが男性に多いこともあり、男らしさに関わるジェンダー問題といえるだろう。部下が自らの力を開発し、発揮できるようにではなく力で押さえつけることになる。こうしたジェンダーは男性問題だ。

女性へのハラスメントだけではなく男性

にもハラスメントをする指導者はパワーを濫用している。地位にふさわしいパワーは不可欠だが、その使い方が適切ではない。それを判断するには知識がどうしても必要だ。それは管理者の力ともいえるが、どんな場合でも、分野を超えて必要な知識だといえる。現代の組織人の教養ともいえる。

ハラスメントを通して人を動かそうとすることは非合理的で、何が合理的かを適切に思考できることが教養だ。感情や根性論などの非合理的な考えに流されずに、合理的に物事を選択できる能力が求められる。教養は「リベラルアーツ」だと言われてもいる。それが必要だと思う。私はこれを「自由に生きるための知性」と訳してきたが、他者の自由を尊重することによって、相手からも自分の自由を尊重される関係を築くことができるという意味である。教養は、どの分野のリーダーにも必要とされる資質だ。私は大学でも学部を超えて低学年に教養科目を教えているが（「ジェンダーとダイバーシティ」という科目である）、他者への想像力が大事で、それが合わせ鏡のようにして自己を豊かにしていくと話をすると響く。

また職場によるが、管理職としてパワーを持つ地位を男性が占めている場合が多く、マジョリティ＝男性という構造にもなっている。マジョリティは特権を持っている。それはジェンダーバイアスを意識しなくても生きていくことができ、無自覚のままでも、困らないという意味である。

一方で、ジェンダーバイアスなどによってそれ以外のマイノリティの人たちは負荷をかけられ、社会的・経済的な格差に苦しむことになる。だから、パワーを持つ者が無知であることには責任が伴う。こうした

問題を解消するには、マジョリティが他者の苦悩や負荷について無自覚になりがちなこと、つまり「無知であること」を認めることから始める必要がある。いわゆる「無知の知」だ。そして知らないことはつくられていて、意識的に言葉を創出されてこなかったことも問題とされている。これは「認識的不正義」として紹介した（「臨床社会学の方法(26)認知的不正義—加害者更生のために」第10巻第2号(通巻第38号)、2019年9月）。知らないということは責任を伴う。3)従来の経験則を断ち切り、アンラーン（学び直し）の機会を提供

たとえば、ジェンダーの問題をイロハから理解しているリーダー（管理職や経営陣）はどのくらいいるのだろうか。上の世代を模倣しているだけの経験則でしか物事を判断できないリーダーが多いように感じる。これでは職場環境は何も変わらないだろう。この考えを断ち切ることが、今求められている。

それが「アンラーン（unlearn）」の概念である。これまで身に付けてきた考え方をリセットして学び直す必要がある。上の世代から引き継いだことをそのまま実行するだけでは、社会は旧態依然とした構造を再生産するだけだ。これではイノベーションには結びつかない。

私自身、こうした社会に危機感を抱き、大学の退職を機に、暴力やハラスメントをなくすための研修や臨床相談をおこなう一般社団法人 UNLEARN を創業した。学ぶこと（LEARN）は必要だがそれを更新できる力を同時に身につけておく必要があるという意味だ。「連続の中の不連続」が知のイノベーションである。そのためには深く掘り下

げていくと横への展開が見えなくなるので自由に生きるために横に繋がる知が要る。

4) 人格を攻撃する「モラルハラスメント」 —職場に潜む無自覚な(男性の)ハラスメント

職場ではセクシャルハラスメントやパワーハラスメントが典型例として挙げられる。教育現場ではアカデミックハラスメント、家庭内であればドメスティックバイオレンスや子ども虐待などがある。これらすべてに共通しているのが「モラルハラスメント」である。これは人格への攻撃である「人格蔑視」にあたる。「お前はアホだ」「無能だ」というような言葉の暴力で相手を精神的・心理的に追い詰めていく。「モラルハラスメント」はさまざまなタイプのハラスメントに共通するので、非常に大きな暴力性を持っている。中国からの留学生に聞いた。中国語では「冷暴力」というそう。リアリティのある漢字だ。そして、そこにさまざまな変数が絡み合う。私の研究室で訳した本(※1)にマイクロアグレッション(日常生活に埋め込まれた攻撃と善意の無自覚を扱ったもの)も参考にしてほしい。

たとえば、LGBTQ+の人に「彼女できた?」「彼氏いるの?」「結婚まだ?」と聞くことは棘となる。異性愛中心主義だけで物事を考えているからだ。こうした無自覚の意識や言葉の中にも刃(やいば)を見出す。マイクロアグレッションはアンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)とともに、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまう。
*デラルド・ウィン・スー著/マイクロアグレッション研究会翻訳『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』(明石書

店、2020年)

5) 他者を配慮する能力を高める活動に注力する

経営陣や管理職などパワーを持つリーダーやマジョリティの、本来は多様な人からなる世界、つまりダイバーシティの自覚が求められる。多くの組織はすでに多様なはずだ。その人たちの能力を開花してもらうためにも「無知からの脱却」が第一歩だと思う。ダイバーシティな世界を知ingことを阻害しているのは言葉がないことだ。ジェンダーやダイバーシティの考え方は、このための言葉を豊かにしてきたフロンティア分野だといえる。言葉がないことを「認識的不正義」という。リーダーの可能性を広げるためにも自らが自由に生きるための知、すなわち「教養」としてこうしたハラスメントの考え方を身につけておくのが良識となるのだろう。

ダイバーシティについての見識や行動力を身につけるために「第三の領域(サードプレイス)」の開発が有益だ。仕事先でも家族でもない時空間のことだ。私も大学でも家族でもない領域として市民活動領域を多く持っている。これは、管理職に多いとされる男性が「無知から脱却する方法」として有効である。無償の活動だし、兼業的でもいい。単に知識を増やすだけではなく、NPOやNGOそしてボランタリーな領域で他人のために時間を使う。そこで培う力は他者への想像力である。ケア力ともいえる。パワーハラスメントとして例示されている6つの類型(後述する参考)はその真逆だ。

もっと身近にも実践できる。たとえば、結婚している場合、その身近な他者は配偶者です。妊娠している場合、出産前から2人に

よる共同作業を取り入れるのもいい。夫が率先して家事洗濯をおこなったり、マタニティブルーにならないよう配偶者に声をかけたり、愚痴を聞いたりすることだ。最近では、「パパ・ママ育休プラス」により育児休業を推奨する動きが活発化し、育休を取る男性も増えている。しかし、育休を取得してからでは遅く、出産前から男性が自分の時間を割いてケアする領域に積極的に関わることで、男性のセルフケア能力も高めていくことができる。他者への配慮と自らへのケアは相関していく。

参考：労働施策総合推進法ならびに令和 2 年厚生労働省告示が定義する 6 つの類型

- ・身体的な攻撃（暴行・傷害）
- ・精神的な攻撃（脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言）
- ・人間関係からの切り離し（隔離・仲間外し・無視）
- ・過大な要求（業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制・仕事の妨害）
- ・過小な要求（業務上の合理性なく能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じること・仕事を与えないこと）
- ・個の侵害（私的なことに過度に立ち入ること）

6)「レポートトーク」を織り混ぜ、感情を相手に伝えられるコミュニケーションを導入する

「レポートトーク」と「ラポートトーク」を組み合わせたコミュニケーションも効果がある。前者は業務報告です。たとえば、「今日は晴れ、気温は 25℃。9 時に社内で打ち合わせをして、11 時に A 社に行って商談しました……」といった事実を伝えるコミュニケーションである。一方後者は、自分の感情や気持ちを相手に伝え、信頼を築けた

めのコミュニケーションを意味する。「今日の仕事はとてもつらかった」「お客様から感謝されて嬉しかった」など。感情を添えることで、相手との共感や親密さが生まれやすくなり、話も弾む。

こうしたケアを重視するコミュニケーションは、男性が苦手とするケースが多いが、意図的に取れるハラスメントを防ぐ効果がある。企業からは目標必達を求められるため、ノルマを背負わされて、弱音や気持ちを吐露しづらい環境が生まれがちだ。これを打開するためには、上司となる人は、部下の環境を理解してケアしていく姿勢が求められている。

しかし、上司自身が過去にそのような体験をしておらず、むしろ男性的なカルチャーを乗り越えて成功体験を積んできた人が多いため、それを部下にも押し付ける傾向がある。またリーダーの中には、パワーの濫用とリーダーシップを混同している人も多い。だからこそ意識的に「アンラーン」を実践する必要がある。

7) ハラスメントに対して、今自分ができることを考え、行動に移す

一般社団法人 UNLEARN では、企業研修で、「行動する傍観者」という立場から「どのように行動するか」を学ぶトレーニングをおこなう。同僚が上司からハラスメントを受けている現場に遭遇した場合に、周囲の第三者も非常に悪影響を受ける。多くの人が嫌な気持ちになったり、何も言い出せなかった自分に罪悪感を覚えたりしている。また、いつ自分に火の粉が降りかかってくるかわからないという恐怖を感じることもある。こうした状況が職場全体の雰囲気を変化させていく。心理的に安全・安心でな

くなる。

そこで第三者が「行動する傍観者」になるために何ができるのかを考える必要がある。研修ではそのような場面での対処法について、みんなでアイデアを出し合う。実際研修の中では、参加者からはいくつもアイデアが出てくる。すぐに問題が解決できなくても、「僕は見ていたよ」「つらかったよね」と声をかけて、励ますだけでも、大きな違いを生むことができる。

いきなり告発して上司や経営層と闘うことはできなくても、それとは違う形で、自分にできることを工夫しながら実行していくことが大切だ。こうした従業員たちの考えや行動が職場での1つの新しい力になっていく。専門家などが一方的に教えるだけでなく、従業員自身が考えることで自律的な行動に繋げていくことができる。さまざまなハラスメントやバイアスがある職場では、こうした草の根的な取り組みが今後ますます大事になってくると思う。

リーダーは、自分で気づかないうちにパワー(力)を持ってしまう。それは、その役割を担う上では必要不可欠な力だ。しかし、そのパワーを有効に活用するには、教養のあるリーダーの存在が重要だ。ここで紹介してきたようなことを理解できる、知の力を身につけて実装してほしいと思う。そうしたリーダーは実に魅力的だ。リーダーやマジョリティは多くの場合、男性であるが、必ずしも男性から女性という構造だけではない。パワーを持った女性からパワーを持っていない男性という形もあれば、同性同士もある。まずはリーダーのハラスメントについての見識の刷新だ。

「あれをするなこれをするな」という「ベ

からず集」的なハラスメントの知識を集積することは最低限必要だが、マイクロアグレッションや無意識のバイアス、「無知の知」が駆動力となって、すでに自らの組織に存在しているダイバーシティを開花させるための意識改革こそが、身近な環境を築いていく上で大事な一歩になる。

5.隣人のもつカー日常のなかから生成する脱暴力のエコロジーへ

身近な環境のなかに脱暴力の思考と行動を根付かせることで傍観者や観衆であることを防止したい。この連載でも紹介したことがあるが、公衆衛生モデルをもとにした未然防止の体系を提案してきた。内閣府の会議でも紹介したし、いろいろな講演会でも議論をしてきた。日常のなかから生成させる脱暴力の空間やコミュニティ形成である。これを「隣人のもつカー日常から生成する脱暴力のエコロジーへ」として体系化していきたい。

そのためにも暴力を振るってしまった人への対応だけでは事後的であり、暴力の再発防止はできても未然防止には至らない。未然防止が脱暴力の鍵である。それは親しい関係から生成する。1994年に国連が国際家族年とした際のスローガンは、Building the Smallest Democracy at the Heart of Society.だった。家族という言葉はない。二者関係・三者関係の基礎(社会のハート部分)から民主主義が生成するという意味だ。善き隣人とはそういう人だと思う。

なかむら ただし

(立命館大学・臨床社会学、社会病理学)

採用活動のフロントは新人が適任？ ～人が育つ会社論～

2週間前に入社した新人が、採用の一次面接官

先日まで、アソブロックは採用活動を行っていました。

結果、3名を採用。

この採用活動の受付や一次面接の対応をつとめたのは、入社間もない新人の二人でした。

以下は二人が書いたレポート記事です。



<https://www.asoblock.net/contents/hajimete-mendan>

その中に、

そういえば、実は今回の面談を担当することは一度断っていた。
だって、わたしが入社してまだ2週間しか経っていなかったから。

「入社して間もない自分が面談するなんて、失礼じゃないですか？」

そう言ってみただ、返ってきたのはこんな言葉だった。

「アソブロックのことが勉強できるよ」

「充実した時間をつくるのも、勉強だよ」

とあります。

ぼくは、意図して採用活動に社歴の若いメンバーをアサインしています。

これまでの経験的に、その効果は大きいと思うからで、その理由を書いてみたいと思います。

1：新人の会社理解が深まる

これが何よりの果実です。

採用活動というのは、ドライに言えば大半が「お見送り」となる活動です。

一方で、入社済の新人というのは、いちはやく戦力になってもらいたいと期待する人材です。選考を担当する中で、色々と質問を受けたり、説明をしたりしないといけないので、「私はまだ新人なんで」なんて言うてはいられません。

その結果、会社理解が加速します。

2：脱：新人ポジション

「一番の新人だから、分からないことがあっても仕方がない」

これはその通りなのですが、それを口実にされては困ります。

採用活動に参加すると、「いつまでも新人なわけではない」ことを自ずと実感します。また、自らが選考をしている「来るべき新人」に負けるわけにはいかない、という気持ちも膨らみます。

その結果、本人の歩みが加速します。

3：中堅・ベテランだと上げない人材がピックアップされる

「どうしてこの人がうちに合うと思ったのか？」と首をかしげたくなるような人材も二次選考に上がってきますが、実はそれが大切です。

そこには、新人とベテランの会社理解の差や、未来を見通す目の違いがあるからです。そして、必ずしもベテランのそれが正しいとは限りません。

イノベーションの源泉のひとつは「人材」です（あとは「仕組み」と「環境」ではないか）。イノベーションを起こしてくれそうな人をベテランが選ぶよりも、新人の勘に賭けた方が、確率が高いかもしれません。

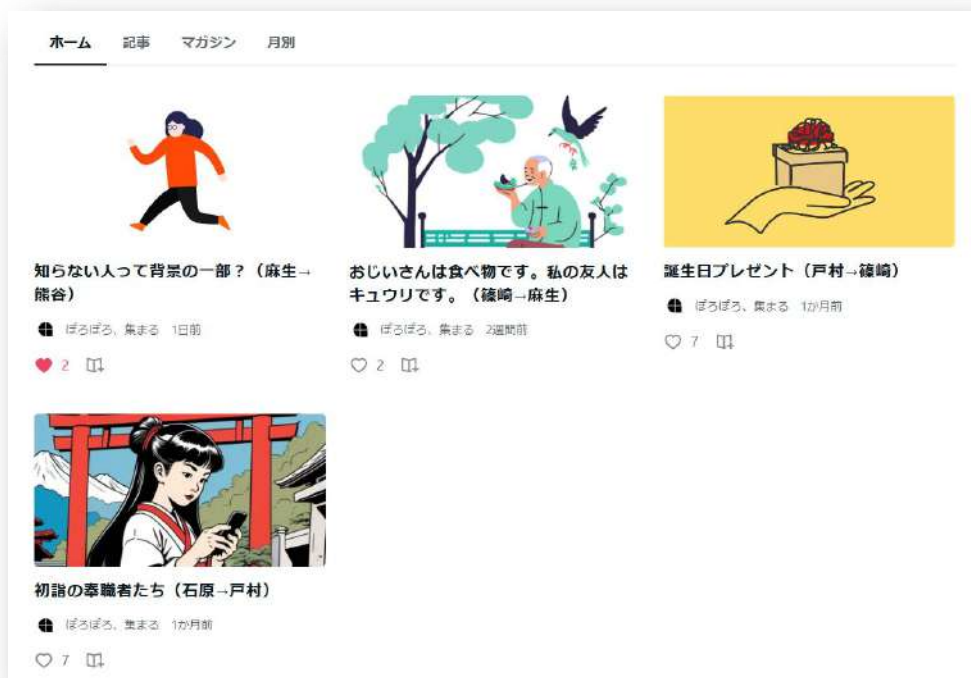
グループの若手たちによる、交換日記

アソブロックには、いくつかのグループ企業があります。

業種も違えば、勤務場所も違います。

そもそも、デザイン会社のメンバーなどは、全員がリモートワークです。顔を合わせる機会は、年に数回というメンバーもいます。

ただ、一方で、特に若手に関しては、人と会うことで学ぶことが多いのも事実。そこで、意図的に若手（20代が中心）に関しては「混ぜる仕掛け」を散りばめています。そのひとつとして最近はじめたのが、この交換日記。バトンパス形式で、指名されたメンバーは2週間以内に書いて、次の人にパスするのが決まりです。



https://note.com/asb_response

お読みいただくと分かるのですが、なんとなく、書き始めのお題を設定して次の人にパスする流れができてきて、仕事以外の彼・彼女らの顔が見えてきます。

ごはん会や、勉強会といったものも開催していますが、そういう場だと、どうしても役割が決まってしまう面があります。チームの中で、振り分けたつもりはないけれど、なんとなくいつもあなたがそれしてくれているね、というような。

交換日記には、それがありません。

100%の自分をさらけ出すことができます。

加えて、デジタルネイティブ世代は、書くことにそれほど抵抗がありません。

この取り組みは、当の若手たちにも好評のようです。

対面場で、「自己紹介を」と振られるよりも、日記で自己表現の方が、より自分らしさを見せやすいのかもしれない。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、アソブロック株式会社、株式会社 ea、有限会社 salvia、株式会社小さな広場ほか、10 社近くの業態様々な会社の経営・運営に携わる。その独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演も行っている。21 年より対人援助学会理事。24 年 4 月より軽井沢にある学校法人風越学園の理事。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めなくなったときに； <https://goo.gl/bFQdpC>

カウンセリングのお作法 第42回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～面接継続時のルールと家族の行動～



今回は、クライアントさんご家族がカウンセリングに来られて、面接継続を希望されたとき、今後の『約束事、注意点、守っていただきたい点』についてカウンセラーがどのように説明をし、対応しているのかについて話します。

来所日時と来所メンバー

大切なのは、二回目以降、面接予約日時を守って、事前に話し合った家族メンバーで来所してもらうことです。ただし、さまざまな事情から面接を変更やキャンセルする必要があることも考えられるので、そのときは、どうするかについて事前に伝えます。

キャンセルのルール

子どもや家族の急病などで、カウンセリングの予約時間に来所することができない場合は、可能な限り前日までに連絡をして予約の取り直しをお願いします。当日のキャンセルの場合は、キャンセル料が発生することも前もって了解をとります。

全員そろって来所することができなくなった場合は、事情をうかがいます。

来所できる人だけで来ることを了承するのではなく、事前に確認をしたメンバーがそろって、来所してもらうことを改めて確認します。基本的にルールの変更はありません。

あいまいさ

ほとんどのご家族が二回目以降の約束内容に基づいて継続面接がすすめられますが、ときにルールに対してあいまいな行動がみられることがあります。

例えば、当日、父親がほかの家族よりも 30 分遅れて面接に来所するなどです。もちろん、いろいろな突発事項はありますので、全員そろわないと面接しませんなどということはありません。が、次回以降は、予約時間に来てもらうことを念押し、全員そろって面接をスタートすることを重視している旨を伝えます。

一方で、大事なこともあります。

それは、カウンセラーにとって、家族のうちの誰かがいないときの家族の様子を把握することです。

父親がいないときの母親の様子、子どもの様子、また、父親が参加する前後の違い、父親の参加後の様子、そして、誰かがいないとき、物事がどのように決まっていくのか、そのプロセスをつかむなど、貴重な場面であるともいえます。

「ちょっとおききたいのですが」の電話

また、面接が終了し、次の面接日までの期間に、「ちょっとおききたいのですが」とか「次の面接までに話しておきたいことがあるのですが」などと、家族のうちのひとりが、突然、連絡をしてくることも珍しくありません。

そのような場合は、「電話では、お話をきくことができないので、もしも気になるようであれば、面接間隔を早めて、取り直してください」と伝えます。

面接室以外のところで、家族のうちのだれかとカウンセラーが情報のやりとりをするような接点は、作りません。

このようにして、家族面接をすすめるための基盤を固めていきます。

ルールを伝えるタイミング

すべてのルールを、初回面接で説明することはできないので、必ず守ってもらいたいことやカウンセラーが引き受けられないこと、できないことは、その都度、伝えます。

面接当日に、交通渋滞のため少し遅れるかもしれないと前もって、連絡をいただく場合もあれば、大幅に遅れて来られたりすることもあります。あらかじめ面接の終了時刻は決まっているため、90分の面接時間を延長することはないことも伝えます。

もちろん、予約時間を守ってご家族がそろって来所されるご家族がほとんどです。

中には、

「予約時刻の何分前に到着すればよいですか、5分前ですか、10分前ですか、それともぴったり来た方がよいですか」

と、家族のうちのどなたかが、厳密に確認されることもあります。この様子から几帳面な行動ととらえることもできます。

カウンセラーとの約束項目に対する行動の様子をみていると、それらが、『日ごろの家族の行動のパターン』として、理解できるのです。そして、それらが現れる場面のひとつが、初回面接と二回目の面接の間にかけての家族の行動と考えています。

家族の行動の特徴

家族のいつもの行動と、いつもとは異なる変化が現れやすい、注目すべきポイントがあります。

まず、家族のうちの誰かが何かの課題を持っていて家族カウンセリングに来られる前、つまりカウンセリングを受ける決心、家族での意思統一などが影響して家族に変化が見られることがあります。予約をして面接に向かうことは、ある意味、一大イベントです。

その次に注目すべきは、初回面接から二回目の面接までに起こるできごとです。

特に二回目の面接までに生活の中で見られる家族の行動は、その後にも影響を及ぼしやすいと考えられています。その理由のひとつが、それまで膠着していた状態から何かが始まる新たなステージへの移行ということになります。

来所日時、来所メンバーに対する家族の対応や取り組みは、二回目面接がスタートするまでに現れていて、家族それぞれの物語がみられます。

晩年

D・A・N 通信

No.11

2024.11.21 (77 歳 6 ヶ月) ～2025.02.20 (77 歳 9 ヶ月)

団 士郎

近年、目にしたモノの中で、ダントツに驚いたのは「校閲」済で返送されてきた自著新刊「**家族理解の教科書・Graphics**」の原稿だ。

一年前、かなり膨大な原稿を複数の身近な人に読んで貰った。そこから出版できるボリュームにスリム化し、とりあえずの初稿が完成した。これを発行元編集者・関係者複数に目を通して貰い、私も気になるところには手を入れた。

そして、前作「**家族の練習問題～終わりのない旅～第9巻**」でも校正・校閲をお世話になった**牟田郁子さん**にお願いをした。二百数十ページの三分の二はマンガ、残りが文章の本のゲラだ。

しばらくして戻されてきたモノを見て驚愕した。ほぼ全ページに書き込みがあった。校正は表記語句や漢字/カナの統一性や誤字脱字等がチェックされている。校閲は記述内容、挿入エピソード、ニュースなどの事実確認、法の文言原文チェックと丁寧な裏取り・確認作業が行われていた。

そして更に漫画のヒトコマヒトコマの絵への目配りがなされていた。「この人は最初ソックスを履いていますが…」、「この女性の胸元のブラウスの線が、後段にはないのですが」、「この人物は最初上着を着ていますが、後半脱いでいます。それでよろしいか？」…。このような指摘が全ページに続くのだ。

私だけではなく、発行元の編集者も、それまで何を見ていたのだらうとガックリ、いやそうではない、ただただ凄い！とため息が出た。この工程を抜きに発行していたら、どうなっていたらうと思った次第。

そこでふと思うのだが、このマガジン。校正/校閲は執筆者お任せの方式をとっている。編集者としては相当な手抜き発行だと言えなくもない。だから十五年も継続できているのだとも言えるのだが、とにかくプロの仕事に脱帽だった。

11/21

自分の失敗じゃないから全然ストレスもないし腹も立たない。仕事場の宅配ボックスに他の人の荷物を間違えて入れてしまったと伝票が入っていた。滅多に見ない伝票だなあと思って電話をしたら平謝りだった。明日受け取りに来て、向こうの私の荷物を受け取って、もう一度届けろという。

(夜遅く、間違ったお相手さんが荷物を手に来訪。こちらに預かっておいたブツと交換して、にこやかに落着。宅配業者には電話しておいた。)



11/23



気に入っている白シャツだが、届いた時から襟元が歪む。「何だこれは？」とシゲシゲ確認したら二番目のボタンの位置がズレている。そこで小学校の家庭科授業以来かと思うほど記憶にないボタンの付け替えをした。裁縫箱など取り出し、針に糸を通そうとして老眼を痛感。サザエさんマンガの古典シーン感到苦笑。ヤレヤレだ。

11/25

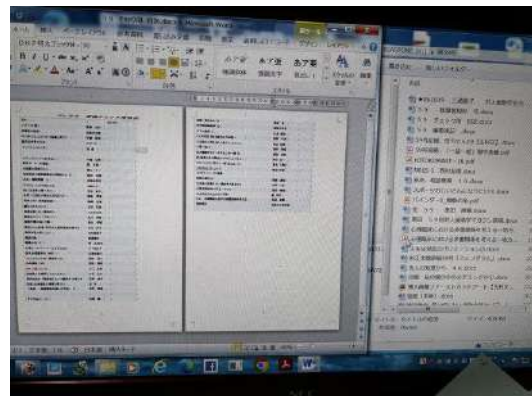
昨日、日曜日は朝から家族心理学会の研修「構造派家族療法」zoom版WSを担当した。五時間があっという間に済んでしまった。

(後日送られてきた多数のアンケートの声に、少々感激した。Zoom実施でも、こんなに受け手に届いているのだ。)

前日の土曜日は次男が訪ねてきたのでいつもの地元うなぎ「ちか定」で安定の満足。食後も馴染みの洋菓子店パレットの新作ケーキ4個を少しずつ賞味。11月の連載連投が無事一息ついた。

11/25

3ヶ月に一度、同じことを書いているが対人援助学マガジン59号の一次締切が今日だった。新規連載が一つ、休載の知らせも複数届く毎度の様子だ。15年も繰り返していると、これが私の暮らしのような気がする。と言っても60歳を過ぎてから始めたことだから、若手を巻き込んだ、バトンタッチ準備十分の高齢者の働き方。



11/29

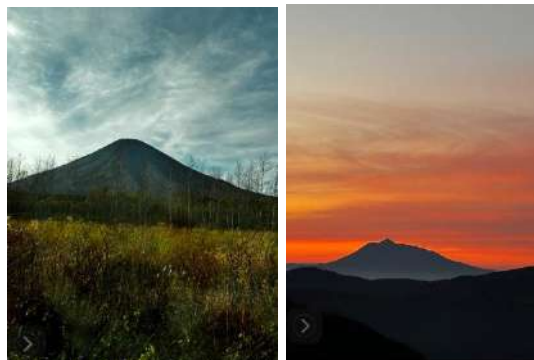
明日の静岡県裾野WSに前乗り。週刊誌のコラムで見た美術館に。信州上田の信濃デッサン館も無言館は共にも訪れたことがある。これらを作った窪島誠一郎の思いを展覧会にしたというので来てみた。前に現地で観た時よりもいろんなものの輪郭がハッキリした。静岡県

立美術館ってロダンのコレクションも凄い。



ここ1ヶ月ほどの間に、羊蹄山、岩木山、富士山のそれぞれ美しい姿をながめる機会があっ

た。どれも仕事のノリシロのような時間でのこと。前後左右、余白時間の使い方も大事だ。



11/30

裾野市で1日WS。こじんまりだが楽しげに、笑いも多めで進行。昨夜泊まったのはホテル・レンブラントという。フロントに「夜警」の絵があったが意味がわからん。富士山はすごい。どう、この秋晴れ。

12/1

どうでもいいようなこと。昨夜、EX 予約直前変更で早目の帰路を選んだら、この切符だった。名古屋駅ホームでは6号車を降りて14号車の乗車位置に移動。

すると目前に「きしめん住吉」が。10分余しかないのでちょっと躊躇ったが玉子牛肉きしめん注文。美味しく完食&列車到着、乗車！



12/3

定例の対人援助学マガジン編集会議。定刻18時ごろに大谷くん、千葉くんが来訪。今回はほぼすべての原稿がこの段階で届いていたので、ゆっくりしたものだった。長く繰り返している作業なので、手違いも少ない。あれこれ世相放談から、子どもの進路選択話へと漂う。

12/4

ご案内告知！12/18 開催の「帰ってきたトークライブ」第11回の準備をしている。第一話は前回に引き続いて、「ヒトコマ漫画の練習」、第二話は多分、旅の話。いつもの講座とは異なる演題です。私の話を聞いてみようと思われる方は、shiro-san.com までどうぞ。

12/4

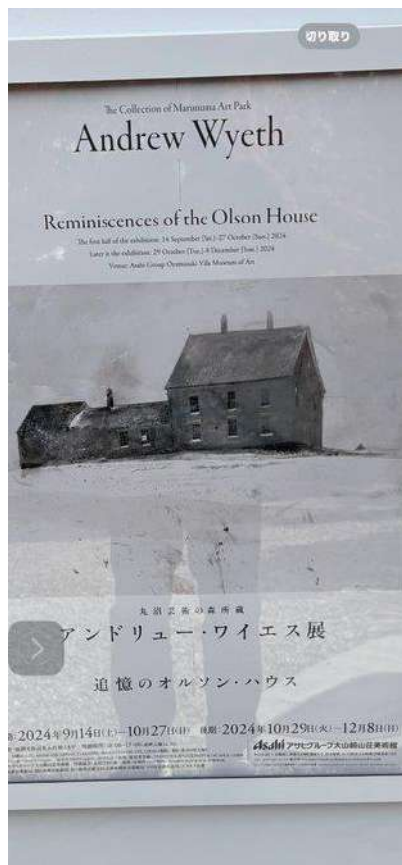
大腸ポリープの切除組織の検査結果を聞きにクリニックに。無事、何事もなく2年に一度くらいは検査をと言われ、寿命があったらと返して笑い合う。バスで河原町丸太町に出てランチと散歩。良い本も見つける。街は美しい風景で溢れている。



12/5

今週末までと最終日が迫っていたので、大山崎山荘美術館で開催中のアンドリュウ・ワイエス展に出かけた。平日昼頃なのに、なかなかのお客さんだった。山全体の紅葉が驚くほど鮮やかで、それも見所、見頃かなと。ここに

足を伸ばすのは 30 年ぶりくらいではないか。
予想以上に良かった。



12/8

マガジン編集などで仕事場に籠っていたが、
本日はこのために立命館茨木キャンパスに。
院生の報告、高校生の報告、中筋さんの話、
いろいろ想起することがあって楽しい。長いこ
と関わってきた割に、私はめるっとしている。

それが良さだと思っているからではあるが。何
もシャカリキにならない。

2011年3月11日の東日本大震災発災から13年余り。
復興の名の下で作られた新しい街の風景が記憶に上書きされ、原
来事故があった地では、復興の終わりの見えない日々が今も続い
ています。また、「さー！11を知らない人たち」への、震災から
学んだ教訓の継承が重要な課題となっています。

本プロジェクトでは、福島とその周辺を中心に災害と人間につい
て考える現地フィールドワークを行い、今年度も多くの力に
「小さな物語」をお聞きするとともに、震災の記憶を後世に伝え
ようと進められた施設を数か所訪れました。シンポジウムでは、そ
の一つ「わたしたちの伝承館」館長で写真家の中筋純氏に「写真が
持つ記録性」の力-13年たった今、災厄をどう伝えるか-と題し
てご講演いただきます。また、現地を訪れた院生の報告、高校生
たちの活動報告、さまざまな立場から「語り継ぐ」ための活動を
展開している方々にもご覧いただきます。

併せて、大槻いばらきキャンパス（OIC）ライブラリー展示室で
は中筋純氏の写真展「コンセントの向こう側-無人化した街々の静
かなメッセージ-」が開催されます（2024年12月8日～2025年1
月5日）。この機会にぜひご覧ください。

※本プログラム、講演者プロフィールなど詳細につきましては裏面をご覧ください。

二〇二四年度 東日本・震災記憶プロジェクト（プラス）シンポジウム

**震災を語り継ぐ
コンセントの向こう側**

【日 時】2024. 12/8【日】
13:00-16:20（予定） 開場12:45

【会 場】立命館大学大槻いばらきキャンパス（OIC）
C棟2階211教室
会場収容人数：30名まで
※発表する院生、講演者は会場より発表します。

・メールから
ojsjp2011@gmail.com
※件名「2024シンポジウム参加」
※本文に以下1～5をご記入願います。
1.お名前
2.メールアドレス
3.属性（学生、院生、社会員等など）
4.参加形式、計画またはキャンセル
5.お住まいの都道府県
6.緊急時の連絡先
締切：12月1日（日）

・QRコードから

中筋 純 写真展
コンセントの向こう側 ～無人化した街々の静かなメッセージ～

【会 期】2024年12月8日（日）～2025年1月5日（日）
【会 場】OICライブラリー展示室
※会期中の図書館閉館日はこちらから⇒

共催：立命館大学大学院人間科学研究科/生存学研究所

12/9

ストレッチに行った後、混雑しているタリーズ
で、新刊の 2 校。200 ページ以上あるけれ
ど、スルッと読める。くどくどした満足ではな
く、これくらい伝わったら十分本意ですなんて
読後感。いつ頃発売になるかなあ、楽しみ
だ。

（2025/5/20 発行 四月末にはご覧いただけ
るようです。）



12/12

横浜日帰りの講演をこじんまりしたいい感じのホールで終了。書籍販売に来てくれていたホンブロックのスタッフと雑談して帰路に。孫と会う予定は彼女が体調を崩したので正月まで延期。新横浜駅で早目の夕飯。目についたここでミニコースを食べたがどれも美味しかった。オーディブルで「不毛地帯3」を。



12/13

1月に平和ミュージアムでやる漫画展のため、新しい掛軸作りをタイトな日程で取り掛かっている。その合間にT君が京都での頼まれごとがあつて来ると連絡してきたので、久々の魚の美味しいスペイン料理店に。ゆっくり腹

一杯食べながらあれこれ歓談。(この翌日、仕事の帰路に交通事故を起こしたとの知らせ。無事だったらしいが驚く。事故は誰も避けられない。詳細が本人の執筆者短針欄にあります) その後、仕事場に戻って夜中、制作の続き。



12/19

昨晚の「帰ってきたトークライヴ」の録画が早速配信されてきた。それを2話とも、二時間半ばかり聞いた。自分が昨日話したことを、今日聞いているなんて、よほどのナルシストだと言われるかもしれない。でも、聞いていて面白かったんだもん。よく知っている話だし。当然だけど。



健康のため、歩いたほうがいいとは思っている。しかし最近鈍り気味だったので、今日、鬼のように歩いているK君のFBを読んで、よし！と出発した。京都御苑を抜けて同志社大学から相国寺、出町柳と良い所が近くにある

なあ。観光の人もたくさん。でも久々の1万歩近くは疲れて、途中でダウン気味のランチ。

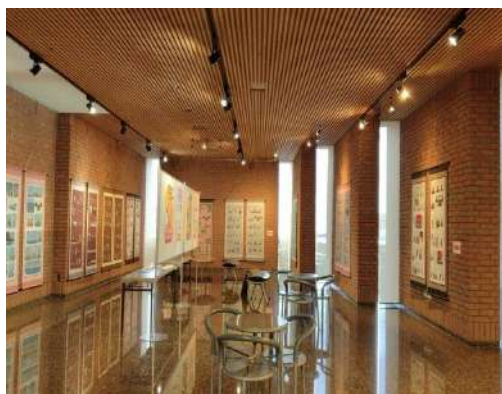


12/21

先月に続いて青森空港に到着。お迎えがあって、今からむつ市まで、ロングドライブに出發。



12/22



むつ市図書館で先日まで開いていた漫画展の写真をもらった。掛軸がここのギャラリー

に映える。講演会は約二時間、好きなことを調子よく喋り倒す。そこそこ笑いありで満足。__

12/24

世間はクリスマス・イヴ。山下達郎の定番曲をちら耳しながら、来年1月の漫画展の準備。世話人のHさんが自宅に来てくれて、選択、発送作業はテキパキ。この間にむつ市開催終了した掛軸宅配便が届く。こちらから発送の段ボールも一つ集荷してもらおう。誰もがきちんと仕事してくれるから成り立つ社会システムだ。

12/26

一年ぶり、恒例で歩き男K君来訪。現役でアレコレ多忙な者同士、話は公私とも多岐にわたる。歳をとると周辺事情の個性が高まることを実感しつつ、面白く話す。しかしドンドン忘れていくのが高齢者同士の会話の残念なところか。彼が新しく購入したPCレッツノート、色も私とお揃いなのではないかな。後半は行きつけの店で美味しい夕食も。(能登被災地で大量パエリアの炊き出しを継続中の店主)

12/27

午後、あれこれ忙しそうなC君が時間を見つけて居座り話に来る。短時間、要件を交換する話し方とは違った、何に展開していくのか、自分でも興味深い対話は面白い。初めて話すなあなんてことも色々出てきて不思議だ。締めは近くにオープンしたいぶり鳥料理店だったかな？そんなところで夕飯。



12/28

木陰の物語第 299 話をひとまず完成。二十五年間、毎月 1 話描き続けた 300 話が間近だ。この間、連載環境はいろいろ変動してきた。にもかかわらず続けられたのは、作品だけではなく、掲載する場所への工夫を意識化してきたことが大きい。いろんなものを続けていることがもたらす大きさを思う。



12/29

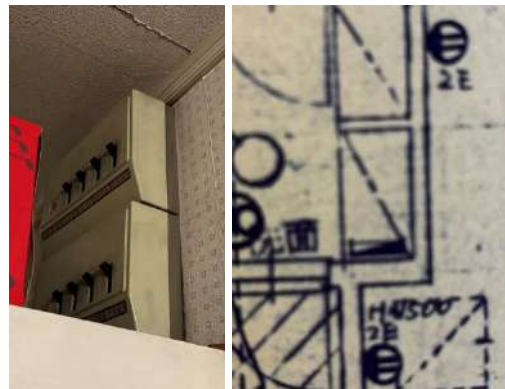
自宅リビングに散乱していた段ボールを解体して箱詰めし、床などに放置してあった多量の本を別室の棚に無理やり運搬。2 年ぶりかなあ、かなりなもんだろうと独り言。だが部屋の見た目はあまり変わらない。私以外の人にはひどく散らかった部屋のままだろう。この報われなさが掃除嫌いの要因だ。

片付け中にこれが目に。安野光雅の後書き風の短文を読み耽る。こんなふうに書いてみたいかなと思って、ノート PC を開く。これではかどるはずのない年末の掃除。誰にも注意されないから余計だ。



12/30

足元暖房と炊飯器を何も思わず同じコンセントで使ったらブレーカーが落ちた。一階台所の配電盤を知っていたのでそれだと思っていたら違った。照明も暗くなった二階をあちこち探しても不明。弱りきって家の図面を出してきて一階のそこと同じ記号をやっと見つけて対応。自宅なのに知らないこと多し。



12/31

今日もダラダラ片付けをしているから、はかどらない。でも誰も文句も言わないので気楽だ。その間に、薦めている人があった映像を二つ。「密輸 1970」は映画館のポスターが印象に残っていた。「ルックバック」は自分では選ぶことのないアニメ。でも少し、私も頑張れ！と思った。絵がすてきだ。



大晦日に自宅にプリンターが届いてセッティング。全く正月を迎えようと言う気配のない作業。新刊「家族理解の教科書 graphics」の卒

田郁子さん校正が届いているのでプリントアウトをして、今から読む。ちょっと見ただけでも書き込み事項がいっぱいで楽しみだ。



1/1

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく。 2025.1.1.



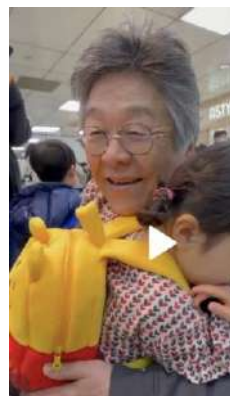
1/2

午後、娘と孫(女兒、まもなく4歳)が横浜からやって来た。正月気分はなかったのだが、里帰りなので少しはそんな空気。アトリエ化してしまっていた二階リビングの大机を、一年以上ぶりに食卓用に片付ける。娘も一階の気になっていた所を掃除する。これじゃ正月でなくて年末だ。夕飯は私の作り置きカレー。

1/5

帰省していた母子を京都駅で見送った。さあ、2025年のあれこれがスタートする。

孫の相手をしていると、大昔、私はあまり子育てに参加していなかったのを思い出す。妻は大変だったろうなあなんて、今頃になって思っても、何いてんのよってどやされそうだな。



1/5

2025年1本目の映画はこれ。「陪審員2番」。クリント・イーストウッドは、長い間映画を作ってきたから、こんな法廷物映画でも分かりやすい結末にはしない。短い間に、善悪のはっきりする物語ばかり見ていると、バカになるとも言っているのかな。誰の人生も都合のいいところで区切れたりしない。



1/7

プリンターが壊れて新しくするのに時間がかかっていた。やっと対人援助学マガジン49号を製本した。web雑誌だし、こんな風にす

るのはコストを考えると不合理だ。でも手に取ってパラパラ拾い読みしたい欲望が抑えられない。



告知、今年最初の漫画展です。1月13日から30日まで。日曜日は閉館ですのでご注意ください。私は1月18日土曜日正午から、会場にいる予定です。立命館大学平和ミュージアムの展示と連動して、私の掛軸マンガも、戦争と家族を意識したものを選びました。ぜひご覧ください。



1/8

勉強会始めは、草津家族理解ws。インフルエンザなどの流行で欠席もある中、14名出席。一時間余の話と事例検討ワイワイ。終了後、王将で夕飯を食べて、京都の仕事場に。途中のコンビニで苺があったので購入。しかし

苺の葉っぱってこんな大きかったか。飛びそうだなあ。



1/9

山崎豊子「不毛地帯」第四巻まで audible で聞いた。(ずっと前、単行本は目にしていたがボリュームに圧倒されて手が出なかった)。最終第五巻のアップは二月というので、つなぎに随分前に読んだコミックス「凍りの掌」を再読した。「不毛地帯」第一巻はシベリア抑留の話が中心だ。数年前、零下24度のハルビンを訪れた時を思い出して、さらなる極寒の地でと震え上がる。



1/11

通訳アリの不得意な設定の会をなんとか無事にやり終えた。ターラの本、日本語版出版の経緯や、私に見える日本の児童福祉実践の歴史、今のありようも話せて良かった。著者パボさんの見た今の日本とフランスの違いも、確かに！とうなづく。基本的に漫画家スタンスで話せて良かった。

【1月10日京都】団士郎 x パボ 対人援助実務者出身漫画家の対談



1/11

午後から三日間、恒例の KISWEC 家族療法 ws。インフルなどある中、33名の参加でスタ

ート。聞いている方はどうだかわからないが、語る側のペースで思いのままストレスなく快調に喋る。そして実習もたっぷりだから、三日間なんてあっという間だろう。参加者の皆さん、楽しんでください。



1/12

既読本をなぜ買うのか。それは文庫版新章が一つ、加わっていたからだ。プロ野球の話なのだが、落合博満がどのように嫌われた監督だったかを、選手との間の驚くべき関係物語で描いていた。単行本発行時、こんな面白いものはなかなかないと思って読んだ本を、追加章だけ読んで、あとは Audible で。やっぱり面白い。



1/13

三日間のワークショップが終わった。次世代スタッフと四人体制(後継者にらみ)で賑やかに、参加者には喜んでもらえたと思う。アンケートにたくさん書いてもらったのを読みながら、30年以上続けることで蓄積されたプロ

グラムの厚みを実感する。さあ、次の仕事の準備だ。



(感激のアンケート群。写メに撮った)

1/15

今から京都駅で新幹線に乗継ぐ。自宅最寄りの在来線膳所駅から京都まで10分。まだ随分、時間的余裕がある。かつては時計替わりになる正確さが常識だったJRが、安全確認のためだと遅延を連発するようになった。その結果、乗り遅れかとヒヤッとする事があったので、用心のための不信が根付いてしまっ

た。もう5分の乗り継ぎなんて曲芸は出来ない。

1/16

帰路、静岡駅で買ってきたのを食べた馴染みがなかった鯛めし、今日お昼のお弁当の一部に入っていて気付いた。幕内より鰻弁当より、コレだなと選択したのだが美味しい。とても美味しい。タイのそばろの味付けが好みだ。先ほど下車した、新幹線京都駅構内で松葉の鯨蕎麦を食べてきたのに食い過ぎだ。



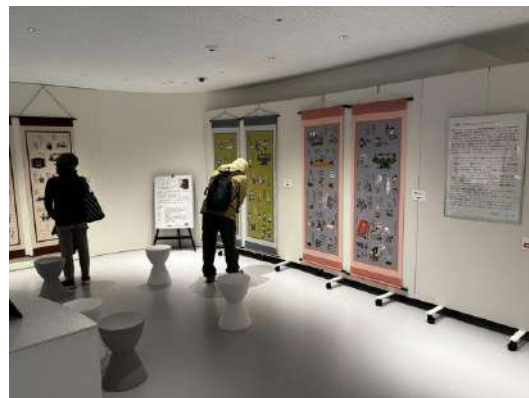
1/17

ずっと気になっている本が、なかなか読めない。280ページほどだから毎日40ページ読めば、一週間で終わる。こう考えてカバーにメモを書いて読み始めた。本日ノルマは終了。もうちょっと読もうかな。

(半分までいったところで、この著者、同じ事を繰り返している粘着質のおじさんな気がして冷めた)



1/18

[illegible]

一日中、確定申告の準備。担当してくれていた税理士(義弟)が亡くなったので、今年どうするかなあと思案中。夕刻、ねこから目線のKが相談にくる。あれこれ話した後、夕飯を食べに出たが、2軒に振られて丸亀製麺に。間もなく78歳のお爺だがよく食べる。



下見の時の話よりまとまった空間展示は、
広さがあるので、ゆっくりマイペースでご覧い
ただけます。鼓のような椅子に座ってじっくり
見ている方も。珍しい方、そんなご縁でと驚く
方にも出会え、嬉しい事でした。次はいつ会場
に行けるかな？



1/22

3月のぼむ漫画展用の掛軸版準備をしている。かなり早目だが、ゆとりのある方がいい。実は随分前から手はつけていたのだが、その作業過程のこんな Photoshop 加工作が残っている。ところがコレをどうやって仕上げたかわからない。古いバージョンのソフト。よくわからず使っていると時が経つと忘却。いまましい老化だ！



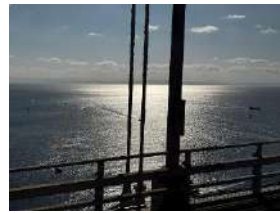
1/23

午後、2月にやる zoom 講演の zoom 打ち合わせ。世話役は院の卒業生で、今や三人の子の母である。その後、約束していた来訪者がお花を持ってきてくれた。仕事場にあったワインの空瓶に、オブジェっぽく生けてみた。いろんな話をしていると、あっという間に時が経つ。



1/25

ちょっ久しぶりに明石海峡大橋を高速バスで渡る。徳島市で開催の集まりに参加するためだ。いいお天気で、1月下旬とは思えない。車中ずっと、向田邦子のこれを聴いている。昔読んだものだが、こんな生々しいことを書いていたのかと驚く。昔は読めていなかったのか、やっとそんな歳になったのか。



1/26

昨日、今日、いろんな若い人たちと歓談する。自分の担当は岡田隆介さんとのなんとやら・・・で、気ままに楽しく発言して過ごす。午後の対応のバリエーションとやらも、フワフワ聞いていた。今思っていることはたくさんあり、それを言葉にすることに躊躇いもないが、結論が言いたい訳ではない。



1/28

夜中に新作第 300 話の下書き完了。ペン入れは明日の夜。明日(正確にはもう今日だけど)は正午から漫画展会場に2度目の出勤。28日午後、立命館平和ミュージアムにおります。おついでがあったら足をお運びください。



1/28

audible はこのところ向田邦子再び。ずっと以前に、新刊が出ると必ず読んでいたのを、朗読で聴いている。中身は覚えていなかったものが多く情けない。しかし、**女性の朗読で聞く短編の数々は、男の私が黙読していたものとは微妙に別物な気がしてならない。**これは向田作品独特だな。



1/29

午前 2 時に**第三百話**が完成した。**月刊連載 25 年**である。この間に周囲の環境はいろいろ変化した。変わらなかったのは、私が月一

度、新作を書くことだった。我ながら 25 年、300 話は凄いと思う。自作なのに覚えていられないのもあるのは残念だが、これからも更に重ねていこう。



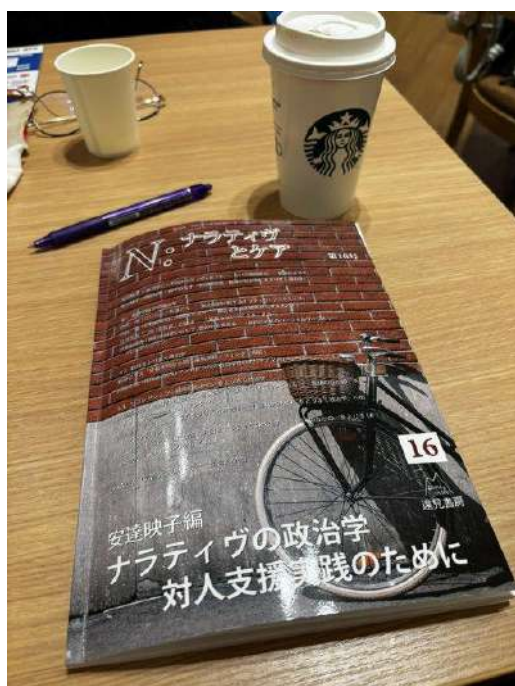
1/30

昨年末、近所の美味しいパン屋さんでクリスマス包装のシュトーレンと書いたものを買ったら、意外に高かった。一人で食べられるかあと思っていたが、美味しく食べた。ネットでフツェルブロートというこの写真を見て注文した。さっき届いたので食べたら似たもので美味しかった。ドイツっぽい。



2/1

高知での WS に向かうため伊丹空港にいる。ランチは銀鱈西京焼き定食。食後のティータイムはスタバのラテ。今朝届いていたこの雑誌。A さんが Facebook で書いていたもの。最初の鼎談、面白い。自分と似たことを言っているからそう思うのかもしれないが。



2/2

南国市の希望ヶ丘学園を会場に WS。十九人の参加でワイワイ。2011 年から訪れている高知、コロナは挟んだが 15 年前からである。約半数が初参加という、とても良いバランス。

新たに関心を持ってきてくれるのは嬉しい。貸し出し DVD で自主勉強会経験の声も多い。



2/5



仕事場の寝床の足元の棚に、家族の練習問題 1-9 巻のストックが 100 冊あまりある。今朝、寝起きにその一冊に手が伸びた。忘れてはなかったが、辻村深月さんがエッセイを寄稿してくれていたのを思い出した。そこから始まって次々読み出したら止まらなくなった。「帯同赴任」なんて忘れていた。いいなあ

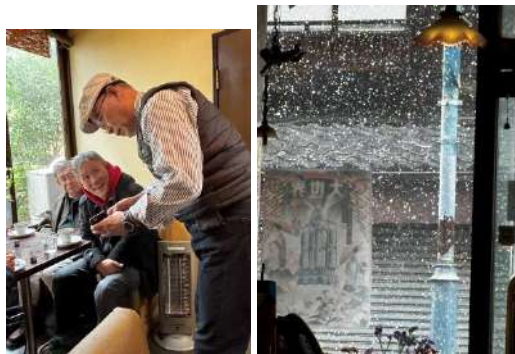


2/6

昨日はマンガ集団ぼむの月例会。毎年ぼむ展をやるギャラリー余暇庵でミャンマー支援マンガ展を篠原が実施しているのに合わせて。

窓の外は一時、大粒の雪景色。和食のランチして近くのカフェで歓談。みんなリラックスの良い顔をしているなあと思った。

(黄色いコートとハンチングの男性は
マガジン連載の漫画家です。)



2/6



「家族の練習問題」第一巻のコラムは作家の沢木耕太郎さん、映画監督の大林宣彦さん、デザイナーのセキユリヲさんがコラムを書いて

くださっている。豪華でしょ！そして巻頭はこの物語から始まる。



2/7

今週ははじめからのニュース、天気予報に煽られて、土曜日開催の東京 WS への新幹線が不安になった。そこで前日出発することにした。それなりの景色の琵琶湖岸から関ヶ原エリア。しかし浜名湖畔、浜松駅、富士山と静岡県に入るとこれだ。豪雪地帯のニュースを静岡の人はどう思って見ているのかなあ。



2/8

audible で今、これを聴いている。舞台は神田神保町の古本屋。今回の WS 会場が神田なので、その近くで見つけたのがずずらん通りのホテルだった。夕方付近を散策したら古書店が楽しくて仕方ない。二軒目までで三冊も

購入。カバンに入らないから打止め。食後のカフェで楽しい読書。



2/10

正午からきっちり一時間、ネットの育休コミュニティの参加者に zoom 講演会。木陰の物語を紙芝居のように三作見てもらって、ブレイクアウトルームで話し合ってもらった。大学院の教え子Tが企画依頼してきたもの。好評だったようで、新たな読者が生まれたかも。



2/9

昨日、東京 WS を完了。今日は帰宅するだけ。せっかくの東京、と思っていたらホテルで新聞の小さな広告が目に入った。このマンガ、最近再読した。何かの縁だと新宿住友ビルに。思いがけず興味深く、あれこれ見入ってしまった。そこそこ来場者もあり、映像も充実。関連書もポチリ。後日の楽しみ。



2/11

さあ、対人援助学マガジン第 60 号の編集作業を開始。連載原稿執筆者の皆さん、お忘れないように 2 月末に原稿をお寄せください。新たに連載してみたいと思われる方は、趣旨を明記して編集長に打診してください。61号は 5 月発行ですので、そこからも可能です。



2/14

昨晚の zoom 講座四回目が終わって、このあと二月は月末までゆったりのスケジュール。今日はランチに近くの気になっていたお店に。美味しくてパクパク食べ終えたら、お勘定の時マスターに200g ペロリでしたねと言われた。旨かったからね。



2/16

昨日から亀岡のここでマガジン関係者合宿。飲んで食べてお風呂も入って、あれこれよく話した。この宿、おしゃれなことを色々発信している。お客も大勢だった。以前マンガ仲間と来た時も、ここ知っているなあと思ったが、そうか昔の亀岡ハイツだ。施設職員との泊まり込み交流会などした場所だ。



2/18

昨日から月末まで、もっぱら仕事場作業の日々になる。輪島 WS、広陵町 WS の準備。マガジンの編集。合間に Netflix や Amazon プライムの面白そうなものを探る。映画「ブルーピリオド」はなんだか楽しめた。絵を上手になりたい芸大受験生の話。こんな風に努力したことがないなあ。



60・お話あそび会動画解説3 《年長組》

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

《マガジン58、59号に続き第3弾。年長組の動画解説です》

以下は、初めてお読みになる方のために再掲しています。前の号をお読みになった方はとばして下さい。

1991年から「生活発表会」に疑問を感じて発表会の形を変え→「劇あそび会」→試行錯誤しつつ1995年から「お話あそび会」という名称を使い始めて今年度で29年。マガジン24（2016年3月号）～26号に取り組みをレポートしてから方針は変わっていませんがやり方はいろいろ進化してきました。保育者のキャリアが延びてノウハウが蓄積されてきた感があり、1年でいちばんタイヘンな活動ながらも、園児の人数が減って職員数は増えてきたお陰でサポート態勢も充実し、以前のようにプレッシャーのかかる活動ではなくなった気がします。

成熟期を迎えたのかもしれませんが。マンネリは後退のはじまりですから気をつけていかねばと思っています。自分たちの未来のためにもこの活動を記録していく必要があると感じ、さらに従来の発表会に何かしらの疑問をお持ちの方、保育を変えていきたいという思いをお持ちの保育者の方にも参考にして頂けたら幸いです。そんなことを考えて動画を紹介します。

「お話あそび会」は、子どもたちが楽しいのはもちろん、指導する保育者は練習練習の呪縛から解放され（違う意味での苦労はありますが）、保護者への視点を変えることで子ども本来の表現力に目を向けてもらえるアピール力もある活動です。

「お話あそび会」の詳しい取り組みについては、以前のレポートを参照していただければ、概要はお分かりいただけると思います。

◆マガジン24号「発表会の意味とは？」

保育施設で年間行事として行われる「発表会」表現活動としての意味は？

発表という舞台に追い込まれる先生、追い込まれる子どもたちの構造について考える。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol24/13.pdf>

◆マガジン25号「お話あそび会実践レポート」

お話あそび会の園内提案（計画書）を紹介し、取り組みへの具体的な内容をレポート。

この内容を頭に入れつつ動画をご覧いただくと良いと思います。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol25/14.pdf>

◆マガジン26号「保護者への伝え方」

新しく行事を改革するときには保護者への説明と共感を引き出すことは必要不可欠になります。具体的なクラス便りなどを紹介して、その方法をレポート。

▶<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol26/12.pdf>

この活動は保護者の理解が要になります。

3学期当初の保護者会ではそのことにエネルギーを費やします。

※保護者会資料から

【1】原町独自の活動 お話あそびとは？

「お話あそび会」は絵本、モーリスセンダック著「かいじゅうたちのいるところ」からインスピレーションを受けて生まれてきました。あのお話をご存じの方は思い浮かべて下さい。

主人公のマックスがお母さんに叱られて部屋に閉じこもったときに、部屋がファンタジーの世界へと次々と変わっていきます。マックスの想像が広がってきたのかもしれませんが、あくまでもマックスの頭の中を我々が絵本で覗いていたのかもしれませんが。お話あそび会は、**会場をマックスの部屋のように「お話の世界で満たして」**その中で子どもたちに**「なりきって遊んでもらおう」**という意図があります。

テレビや映画のような大がかりな設定は不可能ですが、出演する子どもたちはもちろん、観客の皆さんも**自身の想像力を高めて**、限られた空間の中でお話の世界へ誘（いざな）い一緒に楽しめることを目指します。



●具体的には

絵本などの〔お話〕をモチーフにして、

原本の楽しさを尊重しつつ、クラスの子どもたちが活躍できる演劇の台本に仕立て上げます。

担任は昨年から「クラスの子どもたちと、どんなお話で楽しもうか…」と考えてきています。そして、そのイメージを子どもたちが受け取り、それぞれが登場人物の役割を担って、自分たちのアイディアも（少し）出しながらみんなで楽しく表現してあそぼ！というところまでもっていければ活動としてはかなりいいセンいってます。

【2】それで何を育てたい？

子どもたちにとっては、「あ～楽しかったね！」でもじゅうぶんいいんです。

子どもたちは活動を通して「こういうときはこうしたほうがいいんだ！」という気づきを経験し、それぞれ自分の成長の糧にしているはずですし、それは全員一緒になくて良いと思っています。（例えば、協調性が促進された、自分の殻をやぶれた…など）

しかし、我々大人のために教育的目的も押さえておきましょう。

こんなことを身につけてほしいと願っています

①ファンタジーを楽しむから

②じぶんを表現するから

③イメージするから

} これらが表現のベースになると考えます！

【3】お話あそび会を更に解説👉人生を生き抜く力！？

▶楽しくお話をあそぶ中で自信も育つ！

▶ 自信や楽しさは次の一步を踏み出す意欲を生むのです！

似てるようですが、子どもの内面の動きは全然ちがうのです。

◆保育者向けには、「年長組の取組」として以下のような資料が用意されています。

見せることを前提として構成、演出を考え、保育者のイメージを受けて、それを受け入れたり、反発したり、更に子どもからのアイディアをシナリオに盛り込みながらダイナミック*でアイディアがいっぱいの楽しい劇を展開させる。

*ダイナミック＝動きがあり迫力がある、動と静のメリハリがある、テンポがよく引き込まれる

練習段階では保育者が前面に出て子どもたちを引っ張っていくことが求められます。子どもから出てくる表現を待つのではなく、子どもたちに「どんなお話あそびをしたい？」と問いかけたり保育者の「このお話でこんなお話あそびはどう？」という提案を受けて、子どもたちが自分の思いつきや意見を言いながら、たとえ保育者の考えと違っていてもそれが良いものなら積極的に取り入れたり、ここは！というところは保育者の意見や演出に納得してもらったりしながら次第に劇を構成していきます。

子ども自身もまとまっていらない考えや、潜在的な表現力を引き出し、「やりたい！」という楽しさを発生させるパワーが求められます。シナリオの7割は先生、3割は子どもたち、というイメージでシナリオ作りを進めます。そして本番では、先生は伴走や演出にまわり、子どもたちだけでお話あそびを展開できる完成形を発表します。

▶そして、今回紹介する今年度のお話あそび会「となりのトロ」ですが・・・

年長組は、保育者の嗜好もあって近年ディズニーアニメをモチーフにしてきた題材が多かったのですが、今回紹介する「となりのトロ」はこの路線からもとびだして「ついにジブリまできたか！」というインパクトがありました。しかも子ども発信で題材が決まったようです。年中組の音楽会でトロの曲を演奏したことがテーマの選択に影響したのではないかと推測しています。

※お話あそび会特集号表紙



年少組
「おにのおにぎりや」
2025年1月21日(火)
10:10開始

年中組
「赤ずきん」
2025年1月29日(水)
10:10開始

年長組
「となりのトロ」
2025年2月5日(水)
10:10開始

★その日の解説をしますので、開始時には必ず会場にお入り下さい。

★お話あそび会の日には平常保育です。あそびごっこも平常です。

★参観はお子さんのクラスは必須。他クラスも参観可能です。

★撮影は可能ですが、劇中リアクションが必要な場面もありますのでその場合はリアクション優先をお願い致します。動画はビデオライブラリー対象写真は園で撮影します。

☆欠席が多いときは、配役等変更することもありますのでご了承下さい。

はらまちようちえん



ファンタジーへのお誘い

幼稚園からは、毎月「こどものとも」を持って帰ります。保護者の皆さんに「毎月買ってください」とお願いしているのですが、こどものともは基本的にものがたり絵本です。子どもたちが自分の「ものがたり絵本」を手にとって、先生やお母さん、お父さんに読んでもらうという経験をしてほしいのは、ファンタジーを楽しむ心が育って欲しいからです。

ものがたり絵本は、事実を基にしたものもあるし、作家さんの頭の中で生まれた空想をそのまま描いてある場合もありますが、いずれにせよ子どもが絵とことばを自分の頭の中でミックスさせて、登場人物を動かして、絵に描いてあること以外までも想像して話を膨らませて楽しむことが、想像力の発達・・・人の成長や将来にとって、とても大切なことだと思います。

動画やデジタル絵本では作られた刺激が多すぎて、子ども自身が頭の中で作業する時間（脳を働かせる時間）が圧倒的に少ないため、発達途上の子どもには適していません。業務管理や仕事効率化をはじめ、社会を構築する随所にAIが関わり、人がやってきた作業もロボットが担ってくれる社会がすでに始まっています。人間は関きと人間らしい想像&創造力で仕事をしたいかねば仕事は無いと言われていて、そのために絵本を読もうという呼びかけも、ちょっと違う気もしますが、想像力のベースを育てるには絵本やお話はとても有効。そんな側面もあるのです。

そんな時代にどう子どもたちを育てていくのか、というのは今日の課題ですが、約30年前から原町幼稚園ではお話あそびに取り組んできました。自分たちでファンタジーの世界を作り上げ、その中で楽しんじゃおうよ！というのが「お話あそび会」の第一の目的です。子どもたちは、はんぶんホンキ、はんぶんうそっこの気持ちを行ったり来たりしながらお話を遊びます。年齢が低いほどホンキの部分が大きくなります。

ファンタジーを楽しむ前に、ストーリーをつつなぐ台詞や動きだけをなぞって「劇」をやってしまうと、粗筋はわかるけど面白味の無い劇になってしまうがちなのです。粗筋だけでも、バタバタでも、ハズニングがあってもいいです！チームとちいさくまとまり、子どもたちがイメージを共有し、先生と自分たちで考えた「お話」を楽しんで表現してほしい！というのがお話あそび会のキモです。ご覧になる皆さんも、想像力をフルに発揮して！子どもたちのつくるファンタジーの世界へあそびにおいで下さい！

原町幼稚園 園長 鶴谷主一

◆資料（舞台図とシナリオ）

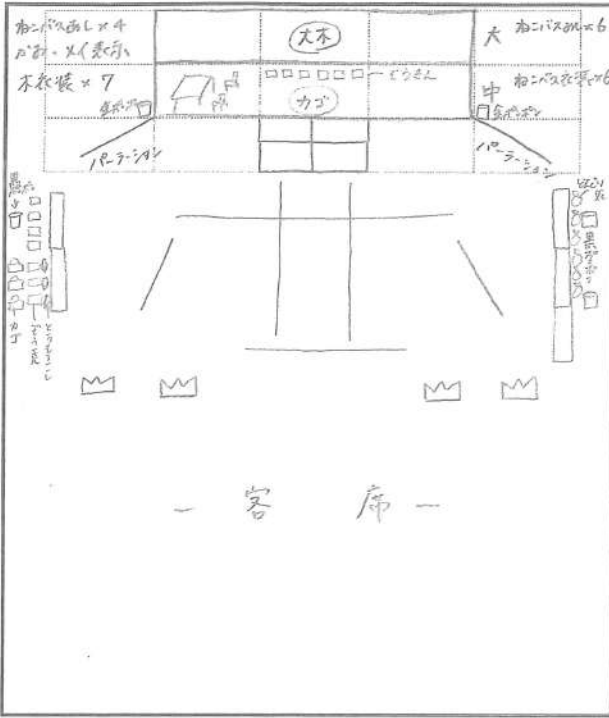
実際にご覧いただく動画の資料です。今回は動画に解説コメントは付けていません。担任は、舞台の構成からシナリオ、演出、衣装に大道具小道具、音楽まで決めていきます。創造的な活動になりますので、いままで行ってきた園の蓄積の中から選んだり、アレンジを加えたりしながら作っていきます。

今回は前例のないテーマなので、一から考えていくことになりましたが、年長2クラスを実質1つにまとめて、2人担任（学年担任制）で運営していくので、2人が核になって仕事を分担し、補助で関わる職員等に相談しながら進めてきました。ミュージカル仕立てになっていたのも、音楽は重要なファクターになりますが、電子ピアノを活用して、データ入りを打ち込んで作ったり、既製品を購入したりして使っています。メジャーなアニメだったので曲が豊富にあったことは助かったと担任が言っていました。

お願いです

2024 年度 お話あそび会舞台図（年長 組） 提案日 2/3 （試案 最終版）

テーマ となりのトロ	実施日時 2/5 10:15～	年長児 25 名	担任 藤原・佐野
	伴奏 藤原	補助 佐野、真野、小宮山、ワタ	



■道具/出す場面ごとに記入

■場面の大まかな流れと道具の出し入れ、補助等について箇条書きにしてください。

- ① ひーじ
 - 父「次は2階をたのびろー！」
 - らサイドライト on, on
 - ステージライト on, out
 - かんた「おーれー！」→きこえ
- ② トロとの出会い
 - 父「おーれーのたのびろー！」→きこえ
 - ステージライト on, off, on
 - 「いっしょにあそび！」→pgo in
 - ゲーム終了後 out
- ③ 夜
 - ステージ、サイドライト on, off
 - 大木曲と笑 in, out
 - かんた、父 木から着る
- ④ まいご
 - かんた、父、小トロ→おこバズ 着る
- ⑤ おこバズ
 - ステージ上ライト on, off
- ⑥ エンドロール
 - かんた、父、小トロ→きこえ
 - 「お・し・ま・い」パネル in

① 机 on, out

② おこバズ入水用 pgo in, out

③ 大木 in, out

④ ~ ⑥ 大道具はなし

No. / お話あそび会シナリオ【テーマ とほりの トトロ】

1 年長

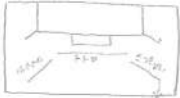
[illegible]

No.

[illegible]

No. 2 お話あそび会シナリオ【テーマ】

1

役	台詞	動き・設定	音楽
2人	「みんな！ 緊急警報が鳴ってる！」	④ 2Fで上りOFF 非常警報が鳴る。緊急	d小の短促なシンセ
トド	「トートロー！」		
小トド	「トド！ トド！」		
2人	「お前も！ お前もどう？」 「はいはい！」	 廊下の両方に通って移動	d小の短促なシンセ
④ サコ	「お：このお前さん！」	④ 2Fで下りOFF 非常警報の音が止まる。2Fに到着	* 短くおの音
お	「お前！ お前！ お前！」		* おの音
サコ	「お前さん！」		
2人	「おしよ、おしよ……」	 トドの音	* トドの音
2人	「お前さん！ お前さん！」		* トド（お前さん）
	♪ 月夜の飛行	④ 2Fで上りOFF 緊急警報の音が止まる。2Fに到着	d 月夜の飛行
トド	「トド！ トド！」		
2人	「お：トド！」		
全員	「トド！ トド！」		
木	「お前さん！」		
全員	「トド！ トド！」		
④ (にこり)	「トド！ トド！」	④ 2Fで上りOFF 緊急警報の音が止まる。2Fに到着	* 短くおの音
父	「お！ トド！ トド！ トド！」	④ 2Fで上りOFF 緊急警報の音が止まる。2Fに到着	* おの音の足音
お	「お前さん！ お前さん！」		* おの音の足音
父	「お前さん！ お前さん！」		
お	「お前さん！ お前さん！」		
サコ	「お前さん！ お前さん！」		
父	「お前さん！ お前さん！」		
お	「お前さん！ お前さん！」		

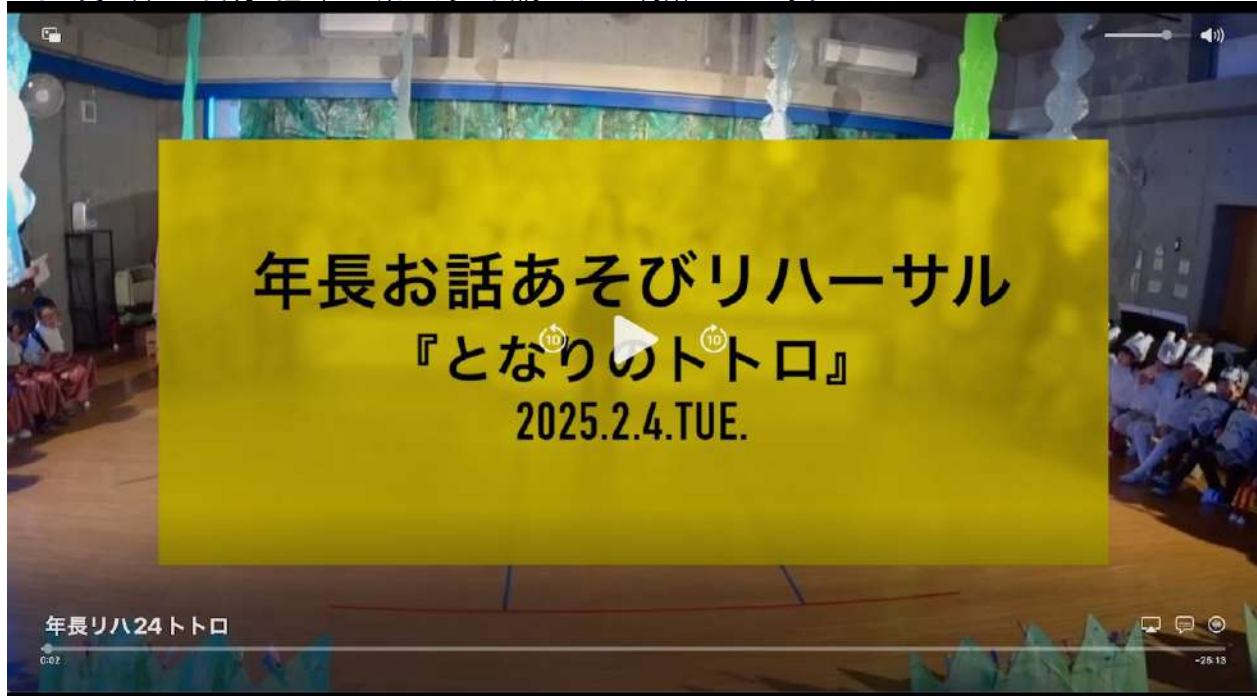
No.

[illegible]

■2024年度年長組 お話あそび会前日リハーサル■

『となりのトトロ』

本番前日に、他クラスの子どもたちにお客さんになってもらってリハーサルを行います。
子どもたちがよく知っているお話だったので、やりたい場面、演技方やセリフなども相談を重ねて「見てもらうこと」をとても楽しみに練習（遊んで）しました。表現の苦手な子どもたちも多い学年でしたが、それぞれの身の丈に合った表現を担当し、楽しそうな表情がそれを物語っています。



YouTubeが再生されないときはこちらのURLをブラウザにコピーして下さい。

<https://youtu.be/LB8eV8N1q1U>

クラスやテーマによってぜんぜんテイストの違う表現活動になるのもお話あそび会ならではの楽しみ。比較してみると興味深いかもしれませんので、昨年度の1話もリンクしておきます。

■2023年度年長ほし組 お話あそび会前日リハーサル■

『アナとゆきのじょう』



「幼稚園の現場から」ラインナップ

1号	エピソード (2010.06)	32号	幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03
2号	園児募集の時期 (2010.10)	33号	〔休載〕
3号	幼保一体化 (2010.12)	34号	働き方改革・一つの指針 (2018.09)
4号	障害児の入園について (2011.03)	35号	働き方改革って難しい (2018.12)
5号	幼稚園の求活 (2011.06)	36号	満3歳児保育について (2019.03)
6号	幼稚園の夏休み (2011.09)	37号	満3歳児保育・その2 (2019.06)
7号	怪我の対応 (2011.12)	38号	プールができなくなる！？ (2019.09)
8号	どうする保護者会？ (2012.03)	39号	跳び箱 (2019.12)
9号	おやこんぼ (2012.06)	40号	幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03)
10号	これは、いじめ？ (2012.09)	41号	コロナ休園 (2020.06)
11号	イブニング保育 (2012.12)	42号	コロナ休園から再開へ (2020.09)
12号	ことばのカリキュラム (2013.03)	43号	ティーチャーチェンジ (2020.12)
13号	日除けの作り方 (2013.06)	44号	除菌あれこれやってみた (2021.03)
14号	避難訓練 (2013.09)	45号	マスクと表情 (2021.06)
15号	子ども子育て支援新制度を考える	46号	感染予防と情報発信 (2021.09)
16号	教育実習について (2014.03)	47号	親子ソーラン節 (2021.12)
17号	自由参観 (2014.06)	48号	親子コンサート (2022.03)
18号	保護者アナログゲーム大会 (2014.09)	49号	うんちでたー！ (2022.06)
19号	こんな誕生会はいかが？ (2014.12)	50号	子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ (2022.09)
20号	I Tと幼児教育 (2015.03)	51号	子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12)
21号	楽しく運動能力アップ (2015.06)	52号	子どもが育つ園庭・その3 スライダーと Tonka (2023.03)
22号	〔休載〕	53号	リスクと安全・園庭編 (2023.06)
23号	大量に焼き芋を焼く (2015.12)	54号	夏の音楽会・動画 (2023.09)
24号	お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03	55号	クリスマス劇・動画 (2023.12)
25号	お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06	56号	こいのぼり製作 (2024.03)
26号	お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09	57号	この頃、気になること (2024.06)
27号	おもちゃのかえっこ (2016.12)	58号	お話あそび会動画解説《年少編》 (2024.09)
28号	月刊園便り「はらっぱ」 (2017.03)	59号	お話あそび会動画解説《年中編》 (2024.12)
29号	石ころギャラリー (2017.06)	60号	お話あそび会動画紹介《年長編》 (2025.03)
30号	幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09		
31号	幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12		

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



こもれびのながのおはなし

はらまち
HARAMACHI Kindergarten
est.1957

福祉系対人援助職養成の現場から

60

西川 友理

保育実習の山場、設定保育。

保育士実習には、訪問指導があります。これは、学生の実習期間中に、養成校の教員が学生の実習先に訪問し、学びがスムーズに進んでいるか、実習先の先生方からどのように指導いただいているのか、最後まで実習が出来そうか等、学生にスーパーバイズするとともに、実習先の職員の方と話し合い、指導のすり合わせを行うことを指します。

この際、タイミングが合えば、設定保育を見学させていただくことがあります。設定保育とは、40分や60分という一定の時間、実習生がそのクラスの保育を任せ、子ども達と何らかの時間を過ごすことです。

小学生や中学生の時に、教育実習生が講義を担当していた日があったと思うのですが、あれの保育所バージョンだと考えていただくとちょうど当てはまるかと思えます。

学生は来たるべき設定保育の時に向けて、指導案を書きます。指導案とは、自

分が担当する保育の進行について書いたものです。何分から何分までの間にどのようなことをして、そのためにはどこにどういう座り方をして、何をいくつ用意しておいて、どのようなことを声掛けするのか等、その保育の進行に関わるありとあらゆるものを細かく書いた計画書です。設定保育の数日前から、担任の先生にチェックしていただき、指導を受け、何度か推敲をしたのちに、本番の日を迎えます。

Aさんの設定保育

というわけで、Aさんにとって、初めての設定保育がスタートしました。

「さー、じゃあ今からみんなで面白いことするよー！」

と、まずは手遊び、それから絵本、色々と用意してきたゲームを行います。

おや、ゲームの段取りがなかなか複雑です。

「はい、クマさんチーム、ここに並んで、パンダさんチームはここね、あ、みっちゃんそっちはパンダさんチームだよ、みっ

ちゃんのリスさんチームはこっちよ！」
「リクくん、今何する時間だっけ？こうじゃないよね？」

「あー！けいちゃんだめだよー、そんなことしたら楽しいこと出来ないのにー！」
なかなか悪戦苦闘しています。

途中、担任の先生のさりげないサポートも入り、なんとか 50 分間の設定保育を終えました。

設定保育後、担任の先生は学生と少し話をする時間をとってくださいました。学生に近づき、様子を伺うと、

「うまくいかなかったです……」といって肩を落としている学生がいました。

「何がうまくいかなかった？」

「うーん、全然指導案どおりにいかなかった…。指導案のとおり出来たら、もうちょっとうまくやれてたと思うんです。でも、子どもの動きが予想外すぎて…。」

「ああ、確かに、何か自分の段取りで必死になってるようでしたねぇ。」

「ほんまに、それです。必死でした。」

「初めての設定保育やから、きちっと段取りどおりしないと！って思ってたのかなぁ……でも、指導案どおりに行かないのは失敗じゃないんですよ。Aさん、設定保育中、指導案チラチラ見てたよね。」

「はい、それこそ段取り忘れたらいけないと思って。」

「うん、だけど、子どもの動きや表情を、もっと見なきゃいけなかったかもしれない。もっと言うとさ、子どもを自分の意

図に沿わせようとしすぎてなかったかなぁ。」
「あー……それは、あるかも。」

…などと、偉そうに言う私ですが。

そんなことを言う私も、15 年程前は、時々こんなことをしてしまっていました。

学期末が近づいてくると、ちょっと焦ることがあります。

「あと数回の講義でこの科目は終了、でも、ホントはもうちょっと時間が欲しい。せめてあと 1 回、講義回数が余分にあれば助かるのに……！」

福祉系対人援助職の資格に関わる科目については、教授内容が国から指定されているのです。養成校として講義を担当し、卒業時に保育士などの国家資格や、社会福祉士などの国家資格試験受験資格を付与するカリキュラムに携わる人間としては、最低限教えなきゃいけないことは教えなければいけない、というプレッシャーがあります。そんな時には、準備ばっちり、スライドたっぷり、がっつりしっかり講義構成をし、チャイムが鳴って出欠をとったらすぐに、

「さあ！今日はどうしても第 11 章まで終わらせちゃいますね、爆速でいくよ！」と宣言、気合フルスロットルで講義をスタート！

テストも近いし、教員の勢いも激しいし、スピードも速いし、その中でメモしなきゃいけないこともあるし、と、わたししながらついてくる学生。言わなきゃ

いけないことを言わねばと焦る私と、メモ取りマシンのようになる学生。と、その中で「あ、もう今日は無理！」と判断したのか、プツッと糸が切れたように寝てしまう学生もちらほら。そうこうしてるうちに1時間半の講義時間は終わり、何とか予定通りの内容を伝えました。

すると…そんな日の講義は、どうなるか。概ね、普段よりも、学生の満足度が低かったのです。

それは単に講義内容が早くてついていけない、という事も大きい要因ですが、それよりも学生個々が、私に、「面白い」という顔を見せる時間が少ないということからわかりました。講義後のミニッツペーパー（その日の講義を受けた雑感を書くもの）にもいきいきしさがありませんでした。

勢いで走り抜けて、私も学生もノルマをこなしただけ。いや、学生の中には寝こけてしまって、講義内容が入っていない学生もいます。こんな講義、意味あるんかいな…と思った私は、次第にこういう講義の仕方をとらないで済む方法を考えるようになりました。

内田樹さんの 初めてのフランス文化論の講義

先日、内田樹さんと西靖さんのポッドキャスト「縁側ラジオ」で釈徹宗さんがゲストの回がありました¹⁾。

全員が大学の教壇経験者ということで、講義について話されており、大先生達に

対しておこがましくも「うわー、やっぱりそうなんだ！そうですよね～！！」と強く共感してしまいました。

いわく、内田樹さんは、初めてフランス文化論の講義を大学で受け持った時に、半年かけて電話帳のような講義ノートを用意して挑んだ、とのこと。ところがいざその講義を始めると、どうもぱたぱた学生が寝ていく。ありゃ、これは、どうしたらいいのかしら、と何年か考えていた。

そんなある朝の通勤時、大学の最寄り駅にヤクザがいた。うわっ！と思ってその話を誰かにしたいと思ったけれど、早朝だったため、通勤中はもちろん、キャンパス内でもなかなか知り合いに会わない。あ～この話したいしたい、と思って、1時間目の講義の冒頭に、学生に思わず、「さっきね、西宮北口の駅にヤクザがいたんだよね。」

というと、ざっと全員がこちらを見た、とのこと。

「その時に分かったのが、用意してきた話をするから寝ちゃうんだ、ライブでやるといいんだ、ということ。話があっちに行ったりこっちに行ったり、絶句したりすると、学生は寝ない。むしろ立て板に水のように、用意してきたものをズラズラ喋っていると寝てしまう。なぜか」と学生は『自分たちが目の前にいてもいなくても同じ話をするんでしょ』と感じて、自分の実存の根拠を崩されてしまうから。つまり、今この場でしか通

しない、この場だから出てきた話題を、君たちに向かって話しているんだよ、お願いだから聞いて、というところもちを向けると皆が起きる。それから、何も準備せず、思いついた言葉の中に、どう学術的コンテンツを持ってくるか、というスタイルを、20年くらいかけて苦労して作ってきた。」
とのことでした。

私はさすがに何も準備せずに学生の前に立つというところまでは、養成カリキュラム科目担当としては出来ませんが、(そしてそこまでの能力も度胸もありませんが)、今この場所だから出てきた話をほかならぬあなたに向かって話をする、という感覚はとても分かります。

毎年同じ科目を担当していたとしても、その年の、その時の、その日の社会情勢や時事の影響を絶対に受けないはずはありません。というよりも、その日の天気や気温ひとつで学生の雰囲気は変わります。なにより今年の学生は去年の学生と違います。相手が違うのに、前年と全く同じ内容で話して、通じるわけがないという感覚はあります。それは例えば 50 年前の出来事の解説といった 1~2 年で変わらない内容であったとしても、去年の説明と今年の説明では、表現やニュアンスが違ってきます。

講義の真っ最中、どうしても教員側が話している量が多くはなりますが、学生は目線や顔つきや表情でとてつもなく反応してきます。それがまた、こちらの話す

内容に…ちょっとおおげさな言い方をすると、脳みその回線の繋がりに…影響して、時には、こんな話するはずじゃなかったのにな、という話までしてしまいます。

「待って、違うな、ええと、今気づいたけど、これ、こういうことじゃないかなあ、どう思う？」

と、その場で突然新しいことに気付いてしまうこともあります。それはもう、歌手や芸人さんがライブで「今日のお客さんはノリがいい」「今日のお客さんは優しかった」「今日はアウェイだったけどウケた」とおっしゃっている事とおそらく同じであると感じています。

教員側が「他にもないあなたに対して、この場で生まれた話をしようと思っているんです」というところもちではなしをすると、学生はそれに反応します。これに呼応して、教員の授業も展開が広がります。

一方的な講義ですらそうですから、対話や議論を取り入れた講義はもう、全然知らないところに学生達が連れて行ってくれます。教員は多少学生よりも情報や知識を持っているだけで、学生一人一人の経験はまったくもって豊かです。その豊かさを皆で出し合いながら、考えを深めていきます。

私が講義で気を付けていること

今私は講義の初めに、出来るだけ、その日その時の学生の顔色や雰囲気を感じ

る時間をとっています。プリントを配布したり、パワーポイントの準備をしつつ、皆がどんな顔をしているのか、どんな雰囲気か、30 秒～1 分程度、皆をよく感じようとしています。

時には、その様子を見て全体に話しかけます。

「うーん今日なんか落ち着かないねえ、いいことあった？ひとつ前の講義何でしたか？あ、体育？盛り上がったの？そおかあ、なるほどねえ…」

「寒いですねー、皆寒い中 1 時間目から頑張って講義に来たんですねえ。」

「なんか皆さん、眠そうですねえ、雨の日って眠くなるよねえ。」

「……………（小テスト前で皆手元のノートに集中しているので、声をかけずにとりあえずニコニコ）」

今まで言語化できませんでしたが、先ほどのラジオの内容を踏まえると、この一連の行動は、

「今からあなたと話をするからね、あなたに伝えようと思っているよ」

という確認のような、お互いのチューニングのようなものになるのだらうと思います。

ただ、このような関わり方をしても、寝てしまう学生、こそこそとお喋りする学生はいます。それはもう、昨夜寝てないとか、体調が悪いとか、その学生にとって講義内容よりも大事な何かがあった(が)、資格に関わる講義だから仕方なく出席し

ている)といった事情があるか、そうでなければ教員側に何らかのメッセージがあるのだと考えられます。

それはもう講義云々ではなく、他のアプローチが必要な人たちです。

この場でしか通じない、 あなたとの話

しかもこれは、何も学生に限った話ではないように思います。相手が社会人であっても、幼児であっても、目の前の人が今どう感じているのかを確認し、「そんなあなたに、今からお話したいなぁと思っているんですよ」というアプローチをかけると、それを無視されることはまずありません。声や言葉や態度や表情で何らかの返答があります。

時々、状況によっては「聴きたくない!」「応じたくない!」という発言や、対応や、反応が出ることはありますが、これは逆に明確なメッセージですし、それこそこの場でしか通じないやり取りにつながるものだと思います。

この場でしか出来ない、 あなたとの設定保育。

そしてこれは、設定保育にも当てはまると感じています。

一生懸命練ってきた指導案をいざ実践に移すとなると、どうしても指導案に書いたプロセスをしっかりと全うしたくなる事には強く共感します。でも、指導案通

りにするよりも大切なのは、今日の前にいる子ども達の様子をしっかりと確認し、感じることです。その上で、「そんな皆さんと、今からこういうことをして楽しみたいと思っているんですよね」とアプローチすることで、お互いに「わたしとあなた」という実存を感じられる場が作られる。そういった場でこそ、保育が展開されていくのだと思います。

子どもは指導案の中ではなく、目の前に実態として居るのです。

思い通りにいかなかったって

この連載の第46号に、以下のような保育系養成校の卒業生を紹介しました。…指導案の計画通り、思い通りの流れにならない保育に対して、どうしたらいいか。そう考える後輩の学生に対して、その卒業生（保育士）はいいました。

「思い通りにいかない、なんて当たり前じゃないですか！ そんな時は、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、子どもに任せてしまいます。子どもが夢中になって、自分のやりたいことをしている時って、本当に生き生きしてて、凄いんですよ！」

まさに、子どもをよく見て、子どもとともにその場にいることを選び、「わたしとあなた」の関係の中で、保育を展開していく人でした。

では、保育の指導案の

意味って何だろう

とはいえ、指導案どおりでなくても、目の前の子どもを感じて、それに応じて…という保育が大切だからといって、指導案に意味がないわけではありません、むしろ指導案をしっかり書いてあるから、思い通りでない展開になったとしても、「そもそも私は、何のために、何を大事にしたいと思ってこの保育をしていたのだったかな」「何を達成したいと思っていたんだっけ」というところに立ち戻り、対応出来るようになります。

実は指導案には、冒頭に「今の子どもの姿」を書く欄があります。これは、今の子ども達の発達状況や子ども達の行動、流行っている遊びなど、その時期の日常的な様子を記入する項目です。この内容に基づいて、どんな設定保育にするかを考えます。指導案のフォーマットは園や養成校によって様々ですが、「今の子どもの姿」を書く欄のない指導案は見たことがありません。

つまり、そもそもの指導案が、まず今の子どもの姿はどんな様子かを見ることから始めるようになっているのです。それを実行に移す際にはなおさら“今、ここ”の子どもの姿をしっかりと見るのが大切です。

その時、その場に生まれるもの

保育も、講義も、関係性の中で、その

場で紡ぎだされていきます。

対人援助職養成教育は国から決められた、「こうすべき」「こうせねば」「最低限ここはクリアしておくこと」という、カリキュラムの中で行われています。だからこそ「その時、その場に生まれるもの」は無視されがちです。

しかし、その時、その場、“今、ここ”に対応することが多い福祉系対人援助職にとって、本当に大切なものは何でしょうか。養成校教員は、どんな姿を伝えることができるでしょうか。

まずは教員が、“今、ここ”に開かれた自分であること、相手が大人でも子どもでも学生でも繋がる相手を見ることが、繋がり、感じようとする事、その姿勢を見せる事が大切だと思うのです。

**ところで、2025年2月現在、
私は松葉杖生活をしています。**

実は今年1月末に足を負傷し、1か月ほど松葉杖生活と診断されてしまいました。その3日後に家から2時間ほど離れた場所で、社会人を対象とした講座を担当していました。一瞬、困ったな、と思いましたが、しかし、こんな時だからこそできる授業をしようじゃないか、と考えました。

机を動かす、プリントを配る、皆の意見を聞きながら、教室内を歩き回る…いつもの私スタイルの授業が出来ないとい

う状況。いまこそ、皆さんに沢山お願いする時です。

「これ、配っていただけますか。」

「話し終わったら、誰かにマイクを回してください。」

「（一番後ろの席の人に）おーい、もーちょっと大きい声で話してくださいーい！」

「自分たちで机を動かして、5人チームでワークしてくださいねー。」

やがて休憩時間等でも、受講生さんが「椅子、ここにおいておきましょうか。」

「黒板消しましょうか。」

「何かできることないですか？」

と聞いてこられます。

私も受講生さんを感じようとし、受講生さんも私を感じようとする。それは講義内容に大きく影響します。まるでグルーヴィーなライブのように、すてきな講義になりました。

松葉杖で講義、こんな機会はそうそう得られるものではありません。まさに「他にもないあなたに対して、この場で生まれた話をしようと思ってるんです」という状況になりました。

私達、関係性の中で生活しているんだねえ、と、改めて感じた一日でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

1)「#31 縁側に初ゲスト。『ここだけの話』はとっても大事、という話で盛り上がり、、、」『内田樹 西靖の縁側ラジオ』2025年2月7日MBSラジオ ポッドキャスト

ああ、相談業務

～ 仁志君の話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

20

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は、とても長く支援を続けている青年の話をしてしようと思う。筆者は小中高校のスクールカウンセラーとして22年近く働いてきた。現在では担当校は少なくなったが、多い時は小学校、中学校合わせて6～7校などということもあった。当時小学校低学年だった子も、今では、30代になろうとしている。長年地域で相談を受けていると、小学校時代に学校で関わっていた子が、大人になって「かかし」に相談に来ることもあるが、今回のケースは、小学校から今に至るまで、ところどころ飛び飛びではあったがずっとかかわってきたケースである。

家族

仁志君の家族は、母親、妹の三人である。仁志君と逢った当初は、本人が小学校3年生、妹は2歳であった。父親は妹が生まれるころ離婚し、その後すぐ亡くなっていた。母方祖父は亡くなったのかおらず、祖母がかなり離れた海辺の町に住んでいた。父方祖父母とは縁がなかったのか情報が無かった。

相談経過

仁志君と逢ったのは、彼が小学校3年生に上がってすぐの4月のことだった。担任の先生から、3年生になってもトイレに一人で行けない子がいるので見てほしいと言われ、関わったのが最初である。教室に見に行くと、仁志君は目がクリクリと大きく、色白で、細身のかわいらしい子だった。ちょうど図工の時間で、工作をしていたが、その様子をみていると、ハサミの使い方などぎこちなく、手の不器用さが目立っていた。先生の指示を聞いていないこともあり、周りから注意されたり、出遅れたり、先生からもう一度指示を貰ったりしながら授業に望んでいた。

勉強はできるほうではないとは聞いていたが、おそらく知的に良くてボーダーかなと思いながら様子をみていた。そしてその時間が終わった昼休みに仁志君は先生に連れられて相談室にきた。

仁志君は人懐こく、初めて会う筆者にも、物おじすることなく話しかけてきた。絵を描きたいというので画用紙とクーピーを渡した。彼は早速オ

レンジのクーピー一色で、除雪車を描いた。その絵はそれなりに上手に描けていて、得意げに、「除雪車が大好きなんだ。冬になると除雪車来るから楽しみ。僕は除雪車の運転手になる」と目をキラキラさせながら説明してくれた。除雪車にも様々な種類があるので、彼はいくつか描いて、それぞれについて説明してくれた。本当にこうした特殊車両が好きなのだなというのがよく分かった。

絵を描き終わって、そろそろ昼休みが終わるころに、彼が突然「トイレについてきて」と言った。一人でトイレに行けないというのは聞いていたので、まずは様子を見ようと付いて行った。男子トイレなので、「私は入らないけど入り口にいるから」というが中々入らない。他の子がいるからかと思ってしばらく待ち、他の子がいなくなったところで、「トイレは一人で出来るんだよね?」と確認すると「うん。でも一人だと怖いから入れない。」という。(私)「何が怖いのかな?」(仁)「目のお化けがいるから」(私)「目のお化け?どんなの?」(仁)「目がね、た〜くさん繋がってるんだよ。すごく怖いよ。」(私)「そうかそれは怖そうだね。いつも先生はどこまでついてくるの?」(仁)「いつも中まで来てくれて、そばに立っててくれる」(私)「じゃあ、トイレの中まで入るけど、すぐ後ろにいるから、それならトイレできるかな?」(仁)「わかった。大丈夫」ということで無事トイレを終えて教室まで送っていった。

その日以来、スクールカウンセリングでその学校に行くたびに、彼が相談室に来るようになった。幸いその学校では他に困っている子が少なかったの、面談の合間に彼と話すことが増えた。その中で、目のお化けについて聞くと、絵にかいてくれて、目が一杯連なって出来たお化けのようなものを描いて、「これがトイレにいるんだよ。先生方のトイレにはいないけど、子どもは先生方のトイレには入れないし」という。そこで、心理療法を行い、本児の不安感を軽減し、トイレに行って一人で入れるようになるまで何回か訓練した。最初はトイレの中まで付き添ったが、その後、ト

イレの入り口で待つことでよくなり、更に、廊下で待っていても大丈夫になり、最後は一人でトイレに行けるようになった。トイレの問題は解決しても、本児は時々相談室に顔を出し、話をしていくようになった。

一年近くたった翌年の2月、母親面談を行った。母親はぽっちゃり系で愛想はよく、まあまあ話してくれる人で、工場で働いていた。本児の発達課題について話をし、いずれ発達検査をした方がよいのではと伝えた。当時余り理解したようではなかったが、その後の発達検査には同意し、学校に設定するように伝えた。筆者はその後、年度替わりに別の小学校に移ったため、その後の様子は次の担当者からたまに聞く程度だったが、結局発達検査は受けず、特に問題なく小学校を終えたようだった。途中、お店で彼と母親に会ったことがあった。彼は元気そうだったし、母親もニコニコと挨拶してくれた。かわいい子だったので「ジャニーズにいるような子だね」と言ったら、うれしそうに笑っていた。

次に仁志君に出会ったのは中学校である。地域の中学校で三つの小学校から生徒が集まっていた。その一つが仁志君のいた小学校で、久しぶりに会った彼は身長は伸びたが相変わらずヒョロヒョロとしていた。

中学校では、相談日に結構相談が入っていたため、それほど彼と話す機会はなかったが、それでも時々顔を出しては、あれこれ友達の文句を言って帰っていくという感じで関りが続いた。友達と喧嘩をするなどの問題行動はなく、学校でも特に問題視されることは無かった。彼自身は、友達から時々いじられるため、イライラしていた。当時相談室にパンチ出来るものを置いていて、彼は相談室でそれをパンチしたり蹴ったりして発散し、また教室に戻るという感じであった。怒りを上手く出すことができていたから学校生活を送れていたと思う。学力は下の方にいた。体育はまるきりだめで、小学校の時も鉄棒も、跳び箱も、縄跳びも、サッカーなどのボール運動も全部だめだったので、こればかりは仕方ないと彼自身もあきら

めていた。中学では運動ができないことでからかわれることが度々あったようだった。そうして何とか中学生生活を終え、高校に進学した。

高校でも本児と逢うことになった。管内の公立高校（人数割りで全員入学）に入学した彼は、此処で問題行動を起こすようになった。今までは人知れず発散していたイライラが、ロッカーを蹴ったり壁を殴ったりするようになり、先生方から注意を受けるようになった。その学校のスクールカウンセラーになったのが、彼が高校2年生の時、着任するなり、数人の問題生徒について知らされ、その中に彼の名前があった。小学校から知っている子であると伝え、面談をしていくこととなった。

その学校にはやんちゃな子も沢山いて、そういう子にとって彼は恰好の標的にされ、いじられた。歯向かうことができない彼は、結局一人イライラして物に当たるということが繰り返されていたのである。いじる子たちへの指導を先生にお願いし、なるべく彼にもその子たちと関わらないようにと伝えて、しんどくなったら先生方と話すようにとイライラ解消の方法を一緒に考えていった。

彼は中学校の担任とも仲が良く、時々中学校に行き話をしたり、高校の先生と話をしたりして、何とか落ち着きを取り戻し、学校生活を送っていた。3年生になって、進路を決める時に彼の特性について担任から進学先に伝えることをお願いし、彼は専門学校に進学した。専門学校は自動車整備の学校で、またまたそこにもやんちゃな子がいっぱいいて、結局そこでも彼はいじられることになった。何しろ運動系がだめなのと、力が無いので、タイヤを持ち上げることもできないのである。訓練の車をぶついたり、運転がぎこちないことなどを他の生徒から揶揄され、その度にイライラについて、物に当たるということが繰り返された。専門学校の担任が何とか話を聴いてくれて、退学などの措置になることは無かったし、整備士の資格試験にも合格したし、運転免許も何回かのトライで受かっていたので、卒業・就職となった。

某自動車会社の整備工場に就職した彼は、そこで先輩整備士から馬鹿にされ、怒鳴られ、ろくに

指導もしてもらえず、ただただ洗車を続けるなどの扱いを受けた。挙句に会社から受診をするように進められた。その時「かかし」に来室し、どこかの精神科が良いかと相談を受け、幾つか精神科を紹介した。

その中の一つの精神科を受診した結果ADHDと軽度知的障害の診断を貰った。それをもって会社に行ったところ、会社は自主退社を勧め、彼はよくわからないまま退職してしまった。

会社から受診しろと言われ、その受診結果を元に退職を求めるのは違法である、違法だから労基署に訴えるかと確認したが、それもしないということでそのままになった。発達障害者支援法が施行された後でもあり、これは明らかに不当な退職誘導なので違法行為になるのだが、本人が望まない以上どうしようもない。

彼はその後、相談に度々来室しながら仕事を探し、障害があることを前面に出してハローワークでも相談していた。一度同じ整備の仕事に就くも、そこでも駄目で一か月ほどで辞め、アルバイトも考えていたところに、幸い正職員として産廃業者に就職が決まった。

ところが、そこでもパートのおばちゃんや、いかついトラック運転手のおじさんたちに馬鹿にされ、怒鳴られ、その度に「かかし」に来て「もうやめたい」というのだが、捨てる神あれば拾う神ありで、彼の味方になってくれる上司のおかげと、中高時代の先生方など、信頼する先生方のところに出かけて行ったらは愚痴をこぼすことなどで何とか踏みとどまり、仕事を続けてきた。

先生方は転勤であちこちに移動し、どうしても関係が切れてしまうが、「かかし」は地元にあることから、時々話に来ることが続いている。給料は多くないので、正規の料金では続かないため半額以下で受けていた。

相談では職場で怒鳴られた話が殆どで、おばちゃんやおじちゃんに対する怒りを吐き出していた。その後部署移動し、彼の好きな重機を扱えるところの担当になった。怒鳴ってくるおばちゃんはおらず、おじいさんが一人いるところで、彼に

とって環境はずっと良くなった。最初はとても喜んでいただが、処理する機械や重機が古くて壊れたり動かないことで処理するものが溜まってしまっ、困るなどトラブルが多く、機械を直そうとしてうまくいかないと切れて、物に当たることもあった。それでも、受診行動は続いており、イライラへの頓服も続けている。憧れの除雪機と同じような重機に乗れていること、怒鳴られながらも7年働き続けたことから、ある程度上の立場になってきたこと、仕事にも慣れてきたことなどから仕事の方は漸く安定してきた。

すると次の問題が出てきた。今の問題は母親との関係である。

妹は専門学校卒業後アパートを借りて自立。母親は体調の問題で無職。結局彼が働いているお金で家が回っている状況である。しかし彼は自分のお金を管理させてもらえず、すべて母親が管理し、お小遣いとして数万円を貰っている。妹は自立したのに、彼については母親が頑として自立を認めない。通帳も全部母親が隠し持ってしまう、どこにあるのかもわからないという。

通帳を失くしたと言って届け出る手もないわけではないが、それをするなら家を出る覚悟が出来ていないと無理だし、引っ越し費用も溜まっていないとできない話である。

通帳を返してもらいたいと話してみたそうだが、拒否されたという。我慢して頑張って仕事して、時には旅行にも行きたいし、買いたいもの(大抵はミニカー)もあるし、友達と飲みにも行きたいが、いちいち誰とどこに行くのか等まるで小学生を扱うように扱われていて、働く意欲にも影響が出るという。そして数少ない休みの日は、アッシーとして、母親の買い物とパチンコの送迎に使われるのだという。「家を出たい」これが彼の最近の訴えである。

まずは現状の整理。大好きな重機を扱えていることを第一にあげ、更に辛い仕事を頑張っていることを認めつつ、一つ一つ課題をクリアーしていくことを一緒に考える。仕事が順調であれば、一人になってもやっていけるであろう。妹は自立

したとはいえ、バイト生活である。正職員として働いている彼が自立させてもらえないのは差別ともいえるだろう。

最近母親の方が彼に依存していることに彼自身気づいた。軽度発達障害とADHDというハンディはあるものの、何とか仕事も頑張っているの、これからも話を聴きながら、彼の自立に向け支援していこうと思っている。

まとめ

本ケースは20年以上という長い年月、飛び飛びながらかかわってきたケースである。小さい時から関わってきて、様々な問題を抱えていることは最初に会ったときに気づいていたが、どうしてもずっと同じ学校にすることができず、途切れることなく関わるのが難しかった。引き継いではいたが、それでも診断が出ていないと学校でも十分に支援をしてもらえないことが多い。本ケースでは高校と専門学校の先生がとても細かくフォローしてくださったが、就職後までは面倒を見られないのが現実である。そうして社会に出た場合、障害者枠の就労でさえ、問題が起こるのに、障害の診断を受けていない者は、健常者として扱われ、今で言うハラスメントを嫌というほど受けることになるのである。

発達障害を持つ大人への支援は不十分である。発達障害者支援法が施行されて20年以上経つが、その間に不利益を被った人がどの位いるのだろうか? 「かかし」には、障害を持ちながら職場で不当な扱いを受けて相談に来る方も結構な数いらっしゃる。労基署に同行したり、会社に対して意見書を書いたり、出来ることはしているが、それでも限界がある。学校現場では漸く発達障害の理解が少しずつだが深まって来た。社会に浸透するにはまだ10年、20年かかるのかもしれない。一日も早く、よりよい社会、様々な障害を持つ人も、健常者と言われている人も、心地よく過ごせる社会になることを祈りたい。

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ

前口上

昨年、久々に『対人援助学マガジン』に寄稿した。コロナ後の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録したものである。そこで、雑誌が年4回刊行であったとしても、こちらは年に1回寄稿して、様子を記録しておけば便利だろうということに気づいた。

まず、春学期にはオールボー大学のカロリンこと Carolin Demuth 教授が立命館大学総合心理学部の客員教授として滞在し、半期15コマの授業を行った(6月中旬からはオンライン形式)。ついで、9月には筆者が立命館大学総合心理学部海外フィールドワークの引率をしてデンマーク・オールボー大学とコペンハーゲン大学などを訪問した。これは復活3回目である。10月にはおなじみのヤーンこと Jaan Valsiner 教授(オールボー大学)が来日して総合心理学部での講義や日本質的心理学会でシンポジウム参加などを果たした。そして12月、筆者はオクラホマ大学・Chie Noyori-Corbett 准教授に招待されて防災に関するシンポジウムで挨拶を行ってきた。その前にフロリダ州に足を伸ばして学生達のインターンシップの見学を行った。年明けの、2025年1月にはブリガムヤング大学のザックこと Zachery Beckstead 准教授に招待されて、アメリカ・ハワイ州の同大学を訪問し、将来の学生・教員交流プログラムを構築する足がかりを作った。文化心理学を中心にした海外交流が再開した年だったと言える。こうした記録を残しておくのはやはり『対人援助学マガジン』だと思い、卒業した身ではあるが、急遽、原稿を準備することにした。

目次

- 1 2024年4~6月 カロリン in 立命館大学
 - 2 2024年5月 国際対話的自己学会@エストニア
 - 3 2024年9月 海外フィールドスタディ in デンマーク
 - 4 2024年10月 ヤーン in 立命館大学+日本質的心理学会@成城大学
 - 5 2023年12月 サトタツ in フロリダ+オクラホマ
 - 6 2024年1月 サトタツ in ハワイ・ブリガムヤング大学
- 付録 その他の活動メモ

1 カロリン in 立命館大学

オールボー大学心理・コミュニケーション学部と立命館大学総合心理学部は相互協力の覚え書きを締結しており、双方の学生や教員が行き来する体制を作りつつある。その流れに乗って、24年度はカロリンこと Carolin Demuth 教授が日本に滞在し半期の間、英語で文化心理学について講義(総合心理学特殊講義Ⅲ)をしてくれた。ちなみにオールボー大学は、PBLを実践する大学として1974年に創設され、世界トップレベルの大学である(世界ランキング201-250位)。オールボー大学のPBLは全学部で実行されていて、オルボーモデルと呼ばれている。

シラバスの「授業の概要と方法」は以下の通りであった。

This course is based on face-to-face classes and be comprised of lecture and group discussions. The course will

give an introduction to Cultural Psychology with a focus on culture and human development and the dialogical interplay of self, culture and meaning-making practices. We will cover various traditions of Cultural Psychology, such as Narrative and Discursive Psychology, Positioning Theory, Language Socialization, Psychological Anthropology, and Dialogicality. We will discuss theoretical as well as empirical work and also present qualitative research approaches used in these traditions. Students will be given the possibility to apply these theoretical and methodological approaches to concrete material and within the context of Japanese society. The overall aim is to gain a better understanding of the cultural nature of the human mind and the role of language and social interaction in this.



2 2024 年 5 月 国際対話的自己学会@エストニア

コロナ禍で様々な国際学会も大きな影響をうけた。今年度は久々に国際対話的自己学会が対面で行われた。実行委員長はカロリンこと Katrin Kullasepp。現在、タリン大学准教授である。



エストニアのお寿司



3 海外フィールドスタディ in デンマーク

2023 年度から 9 月に行うことに海外フィールドスタディ、2024 年度も開催の運びとなった。オールボー大学の第一週の授業にあわせるため、23 年度と同じようなプログラムとなった。

表 2023 年度海外フィールドスタディ（デンマーク）日程表

9/09（月）	オールボー大学 文化心理学セミナー講義
9/10（火）	オールボー大学 文化心理学講義、街アート見学、コンピテンシー講義
9/11（水）	コペンハーゲンに移動。国民学校訪問
9/12（木）	コペンハーゲン大学 講義参加 エクスカーション（人魚姫）

以下、それぞれの日の活動報告である。

9/09（月） オールボー大学

10：15～

立命館大学の客員教授を務めてくれたカロリンによる講義。終了後の昼食は大学で（外だと物価が高い、という理由もある）。



ブレイディこと Brady Wagoner 教授による文化心理学の講義（社会的表象）に参加。RU と AU の学生の交流。自分の好きな物(大事な物)を用意してきて見せあって議論。昼食後街歩き。



9/10（火）

午前中は、サラ先生こと Sarah Awad 准教授のアート系の講義に参加した。午後から見学するウォールアートについての解説もあった（はず）。午後はオールボーの街歩き。サラの案内で街中の様々なアートを体験する。Sense of Wonder（オドロキの感覚）をもたらすのがウォールアート。



午後は丘の上にあるメインキャンパスへ

これもおなじみとなった Thomas Ryberg 教授と Jesper Vestergaard 教授にヤスパー先生の講義内容はアントレプレナー・コンピテンスでした。講義もさることながらブレイク用に用意してくれたお菓子と飲み物が豪華で

した。毎年、ありがとう！



9/11 (水)

オールボーからコペンハーゲンに移動。そして、昨年からお世話になっているデンマーク北端にある国際国民学校 (International Peoples College) を訪問。



9/12 (木)

コペンハーゲン大学の講義に参加。ブレイディが行う講義に参加させてもらった。



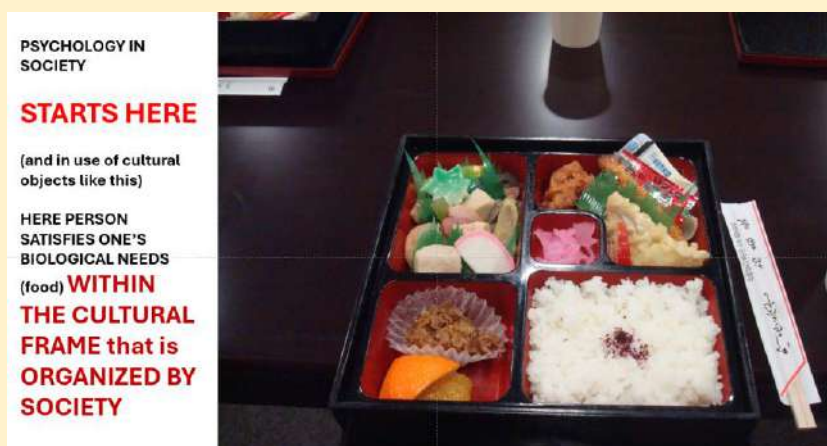
3 2024 年 10 月 ヤーン in 立命館大学+日本質的心理学会@成城大学

今回は珍しく？私自身が JR 茨木駅まで迎えに行った。思い起こせば、2004 年 1 月も、ヤーンを迎えに関西

国際空港までで向いたのあった。



ヤーンはまず、10月18日に訪問教授として総合心理学部の授業を行った。今回のタイトルは「Psychology within Society」というものであり、日本の弁当（Lunch boxあるいはBento box）を題材に、食べることは単に生物学的欲求を満足させるものではなく、社会が差配する文化的な枠組みの中で食という行為が成り立っているという話からスタートした。



次いで、10月19・20日の日本質的心理学会第20回大会に参加した。ヤーンは第1回大会（2004）で講演をして以来たびたび日本に来て日本質的心理学会に参加しているが、今回は、『文化心理学入門（An Invitation to Cultural Psychology）』の翻訳出版記念も兼ねていた。





4 2023 年 12 月 サトタツ in フロリダ+オクラホマ

オクラホマ大学で行われるシンポジウムに参加することになった（ご招待）。二泊三日でアメリカ往復はツライと思っていたので、学生の留学プログラムの視察を行うことにした。これはかねてより考えていたことで、カナダのものかフロリダのものか、候補があったのだが、地理的隣接性を重視してフロリダを経由してからオクラホマ入りすることにした。

2024 年 12 月 4 日 Valencia College バレンシアカレッジ（フロリダ州オーランド）訪問

場所：Disney 寮（Flamingo Crossing Village）

概要。今期のインターンプログラムは日本の各大学から 40 人ほど（うち、12, 3 人が立命館大学）が滞在。ディズニー関連の仕事を 5 日して（インターンシップ）、給料をもらいながら、2 日は授業を受ける。手取りは（円安もあって）雑費を引かれても 20 万円くらいになるそう。仕事は完全にバラバラに配属される（前半後半で 2 つの仕事を経験できる）ため、職場で日本人と一緒にすることはほぼない。授業は日本人 20 名、外国人 5, 6 名で 1 つの組を作っているの、休憩時間は日本語が飛び交う。寮はディズニーインターン用の寮。4 人部屋で、様々なインターンプログラムの人が色々なタイミングで入れ替わる。結果としていろんな国の人や日本の他大学の人もともルームメートになれる。

感想。私が来たのが開始から 4 ヶ月目くらいだったので、皆それなりに安定して生活できていた。このプログラムはかなり良いのではないかな。学生の立場から見たときに、やらない理由がない。

前夜祭(バ先訪問) ゼミ生 RiN が働いていたのはホテル内 Beaches and Creams Soda Shop。彼女は主としてアイスクリームの盛り付けを担当。ギネスフロート（ギネスビールにアイスクリームを盛り付けた飲み物）を作っているので注文してみた。。。まずくはないが、料理の時に飲むものではなかった。。。。



当日 ゼミ生 RiN に寮の案内をしてもらう。このインターンのために400人規模の寮が用意されている。



プログラムを回しているカーラさん、リーダーシップの授業担当のウェス先生とコミュニティセンターという建物の中で懇談。



時給15ドルで週5日働き、残りの2日でマネジメント関係の授業を2つ受けるというのがこのプログラム。最初の1, 2ヶ月はツライ思いをしている人もいるようだが、そのうち慣れる。寮ではいろいろな行事がある。プログラムは春始まりと秋始まりがあるが、後者に参加すると、ハロウィーン、サンクスギビング、クリスマス、を経験できるので、そのほうが楽しいはずだ。

日本の学生、中でも立命館大学の学生は、よく頑張っているし優秀だ

授業を1日にまとめる(3時間・休憩・3時間)ことも可能だが、それも学生にとって大変なので、2日に散らす方がいいという意見もある。コロナ中はこのプログラムを3年間クローズしてたが今は大丈夫。

授業は2組にわかれて受ける。水曜にリーダーシップ、木曜にビジネスマネジメントという組と水、曜にビジネスマネジメント、木曜にリーダーシップという組がある。

リーダーシップの授業参観（クラスの最終日なのでプレゼン）



夜は、（学生が牛角で日本食を食べたいというので）牛角に（日本食はどちらかというと高級で普段は食べられないとのこと）。ゼミ生 RiN が立命館大学生全員に声をかけたらほぼ全員が来た。



せっかくなので、食べながら1人1人の話を聞きました。

聞き取り 匿名化

A. 3回生 めっちゃ楽しい ご飯がおいしいし何も困ってない。インスタント味噌汁を持ってきたけどたべてない！ 苦労したことは、英語に少しとまどったこと。お客さんに聞き直すのが気まずい。

B. 2回生 はじめの書類手続きが面倒だった。日常生活の買い物のやり方に慣れるのが大変だった。いまは友だちもいるし大丈夫。ルームメイトがサウスカロライナの人で、実家につれてってもらって狩りを経験できた。

C. 3回生 楽しい。仕事のときコミュニケーションが大変。3ヶ月くらいたってお客さんの言うことがわかってきた。

D. 3回生 疲れて泣く時がある。インドアタイプなので、接客を毎日精一杯頑張ってるけどうまくいかない。マジックキングダムチケット売り場。毎日泣いていたときもある。

E. 3回生 エブコット（エリアの名前）にいたけど、そのときは仕事のシフトが朝番、夕番と変化して大変だった。いまはリゾートのクイックサービスにいるので仕事が一定してリズムが安定してる。順調です。ルームメイトと仲良くなってきた。家事といろんな課題で就活時間がない。。友だちが支え。日本の友だちとも連絡している。お土産を選んでいて、それを渡した時の友だちの顔を思い描いてる。就活しようと思ってスーツ持ってきた

けど時差の関係で難しい。休学しようかな。

F.3 回生 良い感じ。悪いことが無い。職場が屋外で寒い。出勤時間が遅いので帰りが遅い。特に悩みはない！

G.2 回生 楽しい。 アトラクション（メリーゴーラウンドを回す仕事を任された）は大変だった。同僚は優しくかったけど。。。安全第一だったから気が張っていた。今はおみやげやさん。めちゃ楽。気楽でいい。

H.2 回生 楽しんでます。 毎日。 お土産屋さん→レストラン。 慣れるまでの予定管理は大変だった。

I.2 回生 最高です。困ったことはない。週5仕事、週2授業。休みがほしい。中学校のときにアメリカに来たことがあったのもう一度きたいと思ったので応募した。高校の時はコロナでダメだったから。

J.2 回生 頑張ってる。仕事。お土産→ショーの運営。仕事を英語で覚えるのが大変。ショーの観客7000人をディレクションするのが大変。クレーム処理が大変。大変なことが多いけど学びも多い。

K.2 回生 楽しんでる。楽しいことしか無い。辛いことはない。たまに英語を聞き取れないけど。。。

L.2 回生 まあまあ楽しい 土産屋→車椅子貸し出ししてたときは、皆さんに対してあたりさわりなく料金を説明していた。でも料金のことでクレームがきたりしたし、車椅子の方から駐車場から遠いというクレームもあったので大変だった。アメリカ人の友だちが自我が強くて困る。私は何も言えないでいると、静かな奴に見なされてしまうのが困る。

M.2 回生 フィリピン出身。13才のときに日本にきた。ここは全然楽しい。毎日充実してる。仕事をやりながら遊びにいったり、食事を作ったり。勉強もがんばってる。フード予約とったり（接客）→食べ物つくって運ぶ。

N.3 回生 調子いい。ベッドが柔らかすぎて寝にくいのでリビングのソファで寝てる。マジックキングダム土産店（パークに来るいろんな人）→レストラン（レストランは宿泊客が多いので裕福）でアイスクリームの盛り付け。マジックキングダムの地下通路にウォルトディズニーの格言が並んでるのが凄かった。授業2日、仕事5日、というのがツライので改善してほしい。最初の1ヶ月は時間がたつのが遅かった。私は留学に行きたかったし人と違うことをしたかったので選んだ。時差の関係で就活が難しい（冬の時差14時間）。

2024年12月6日に、在ヒューストン・日本領事館の企画で日米両国の研究者が研究交流を行うシンポジウム「**Innovations and Best Practices in Disaster Prevention and Preparedness: Japan and the United States**」が開催された。これは総合心理学部がMOU（覚え書き）を結び双方の学生が行き来する交歓事業を行っているオクラホマ大学社会福祉学部の Chie Noyori-Corbett 准教授が企画したもので、両大学の交流をさらに展開しようという意図をもって行われたものです。私は来賓として、閉会挨拶を述べる役を仰せつかりました。



イベントの URL

<https://ou.edu/cas/socialwork/news-and-events/events>

在ヒューストン日本国総領事館

https://www.houston.us.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00703.html



5 2024 年 1 月 サトタツ in ハワイ・ブリガムヤング大学

1 月 20 日 日本時間の夜に出発して、アメリカの同日午前中に到着するという不思議。さっそくザックと合流し、さらに『Culture and Psychology』をヤーンから引き継いだケビンも合流してポリネシアンカルチャーセンターを訪問。



1 月 20 日

ブリガムヤング大学ハワイ校 (BYUH) 学部長と懇談 交流企画打ち合わせ

ブリガムヤング大学は末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教として知られる）が運営する私立大学。本部はアメリカ合衆国のユタ州プロボにある。ブリガム・ヤングは創設者の名前。1903 年に大学としての認可を受けた。プロボ校のほかにアイダホ校とハワイ校がある。



ベンことジョーダン教授 (Benjamin R. Jordan ; 科学部・学部長) との会談で、お互いの学生が行き来して交流するようなショートトリップ型の交流事業を立ち上げることが現実的ではないか、ということになった。立命館大学の MOU の雛形を渡して今後のプロセスについての検討を依頼した。

ジョーダン教授は地理学 (火山学) 者であり、桜島や九州の南にある硫黄島を訪問したとのこと。また日本に来たいとのことであった。ただし、彼の任期は 7 月まで。その後はアイダホ校に戻るため、それ以前に来学してもらうことができると交渉がスムーズに進むはずである。

学部生相手に 文化心理学の講演
記号論的文化心理学から見た文化差

主催者ザックのほか、教員 4 名、学生約 20 名が参加。

文化を固定化したものとして捉えて差異を強調する比較文化心理学ではなく、「文化が人に属する」と考える記号論的文化心理学および TEA（複線径路等至性アプローチ）についての講演。来場者の未来展望とその複線径路を描き、他者に説明して交流するワークショップを実施。多様なコミュニケーションを創発した。



★RU 学生の感想

A さん

今回、初めてハワイ、特に BYUH を訪れる機会を得て、実際にその地で様々な経験をすることができました。授業や活動を通じて現地の学生と直接交流し、彼らがそれぞれ明確な目標に向かって努力している姿に触れることができました。この経験を通じて、自分自身も何か新しい挑戦をしてみたいという前向きな気持ちを持つことができました。

現地では思わぬつながりにも驚きました。高校の友達と BYUH の日本人学生がつながっていることを知り、「世間は狭い」という感覚を異国の地でも実感しました。また、そもそも日本人学生との出会いも予想していなかった出来事でした。彼女たちの積極性や挑戦する姿勢に刺激を受け、英語を学ぶ意欲や行動力の大切さを改めて実感しました。

短い滞在期間ではありましたが、ハワイの自然、美しい景色、そして食文化（ロコモコやポキ）や音楽といった日本とは異なる魅力に触れることができました。このような体験を通じて、ハワイの素晴らしさを肌で感じることができ、「来て良かった」と心から思いました。

ハワイを訪れることで得られる学びや刺激は、現地でしか味わえない特別なものだと思います。だからこそ、これからも多くの学生がハワイを訪れ、異文化に触れ、学びを深めてほしいと願っています。そして、ハワイへの憧れを持つ学生が多いからこそ、交換留学プログラムの実現を心から期待しています。

最後に、無事に帰国できたのは、ザックさんやサトウ先生、林先生、春日先生をはじめとするサポートのおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

B さん

今回ハワイに行き、BYUH や文化センターに訪れたことによって、モルモン教やハワイの文化を感じることができました。BYUH に訪れた際、友好的に歓迎してくださり、大学の雰囲気は活発な印象を受けました。授業開始時にはモルモン教のお祈りが始まり、少し驚きました。しかし日本でも授業の号令はあることを考えると、宗教という側面もあるとは思いますが、習慣である側面もあるのだと感じられました。授業で話した学生の印象は、友好的でとても親切な印象でした。授業終わりに日本人の学生の方と夜ご飯を食べた際、ハワイでの暮らしや観光地を教えていただき、帰りは駐車場まで案内してくれました。モルモン教を両親が信仰していることから、学費が安くなることから自分もこの大学に来たという話をしてくださったことが印象に残っています。宗教信仰することを隠す日本と、宗教信仰が当たり前であることからあっけらかんと話すハワイでのギャップがとても興味深かったです。また、BYUH では、文化センターなどで働きながら学費や生活費を稼ぐことができる制度がある話を聞きました。「学費や生活費に困らないお給料をもらえる契約だから、両親に頼らずに学ぶことができます」と教えてもらいました。また、日本人学生だからこそ感じる日本とのギャップでは、日本では高校卒業後、大学に進学することが当たり前の風潮があるが、アメリカでは高校卒業後、自分の進みたい道が決まってから大学に進学する人が多いと聞きました。

今回少ない時間でしたが、BYUH の学生と一緒に過ごすことによって、自然と文化体験ができたと思います。文化は学ぶだけではなく、実際に訪れて体験することで、自分が持っていたその文化に対する先入観が実際とは異なることに気づくことができると考えています。また、観光することで、poki 井などから日本との関わりや、ハワイの歴史を感じることができました。

最後になりましたが、今回プレゼンの機会を与えてくださったサトウ先生、4 日間運転してくださった林先生、春日先生、もてなしてくださったザック先生とケビン先生、BYUH の学生の方々に感謝申し上げます。ザック先生を始めとする BYUH の方々から頂いたおもてなしを、日本に来た際には返せることを楽しみにしております。本当にありがとうございました。

BYUH 学生の感想

C さん

During the presentation, Dr. Sato discussed semiotic cultural psychology, specifically the Japanese culture of mask-wearing. He discussed that wearing a mask in Japan symbolizes cleanliness. Also, showing teeth when smiling is rude in their culture. He also added that hiding your eye means you are bad person and showing teeth is impolite. He taught about the three layers, which are the value, sign, and action. A sign like sneezing in Japan means you are sick, while if you sneeze in America, people around you will say, " Bless you." What I think of his presentation was very fun and engaging. I noticed how he let us rate if Batman and Bane are extremely bad or extremely good. I was surprised to see people who grew up in Japanese culture view Batman as a bad figure because he hides his eyes and shows his teeth, which is very opposite to Americans. They see Bane as a good person because of his round eyes. Learning about different cultures and sign systems and how we use them helps us to understand more of their mind and behavior.

D さん

Dr. Sato's lecture on cultural differences between Japan and the U.S. was really thought-provoking. He used the example of masks to explain how cultural meanings can shift—while in Japan, masks symbolize cleanliness and even

attractiveness, in the U.S., they're primarily associated with medical use. This helped me better understand how symbols and actions can hold different meanings in different cultural contexts. He also introduced the concept of multi-trajectory future planning, which I found fascinating. The idea that we can have a goal with multiple alternative paths each shaped by different forces, really resonated with me. It's a helpful way to think about the future because it acknowledges the uncertainty we face while still offering hope through supporting forces. I think it's a great framework for navigating both personal and professional growth. Overall, his ideas about cultural differences and future planning were eye-opening. They made me reflect on how I approach goals and challenges, and I feel more equipped to navigate multiple possibilities in my life.

E さん

JAPANESE STUDENT: I really enjoyed his thoughts, especially the concept of "semiotic culture," which means culture within people, not people within the culture. I thought this was super unique because most of us think we live in culture, but in reality, all Japanese people are different, and that too is culture. I believe this reflects the weight that we create culture within ourselves, while the majority's thoughts have led us to believe that culture belongs to a country. I also love the way they created a plan for our future. It's helpful to plan the details for our future and focus on what we need in life. They also gave us the opposing perspective, which helps us understand the right way better. I enjoyed these labs; thank you for the opportunity! I also made new friends! :)

同行者

林勇吾教授、春日彩花助教、三日月礼乃、岡本真侑（総合心理学部生）

付録（以下は、文化心理学と関係するようないような活動の記録です。

4 月 24 日 慶應義塾大学・井庭ゼミサトゼミ交流会



5 月 5 日 教え子の結婚式で韓国に！（他の元ゼミ生が迎えにきてくれた）



5月25・26日 第3回 TEA と質的探究学会@武蔵野美術大学

TEA と質的探究学会 <https://jatq.jp/> 会員が 300 人をこえたらしい。。

学会誌もあります。 <https://jatq.jp/journal.html>

準備委員長の荒川くんと久々の白井さん



8/29-31 サトゼミ福島訪問

17期生、ソウル大学で科学社会学の大学院で学んでいるオ・ウンテク君、M2の18期生さきていん、学部3回生22期生のザイとうえさま、が福島に行ってきました。福島県立医科大学ではサトゼミの3期生日高、5期生春日の他の皆さん、楡葉町のならは未来では校友の皆さんにお世話になりました。





9月19日 隠岐高校を訪問



11月6日 APU を訪問



11月10日 福島県・浪江町と双葉町を訪問（教養ゼミナール）



11月14日 北海道訪問 誓報寺・田中学園立命館慶祥小学校



誓報寺では総合心理学部設立にあたり寄付をいただいた佐藤真由美様に感謝の意を伝えました。

12月21日 福島県・浪江町を訪問（教養ゼミナール）

みちの駅なみえで浪江町の観光資源認知度に関するアンケート調査を実施。久々に菅野さん！



2025年1月18日 TraMIHS (The 1st Transnational Meeting on Innovative Human Sciences)

TraMIHS（とらみす）、やって👍

この企画はもともと華ちゃん（国際担当副学部長・鈴木華子准教授）がたてたもので、こういう形になったのは大変うれしい。

企画運営は実行委員会の皆さんがやっただいていて、私は事情で昨日も参加できなかったけど、知の必須通過点（Obligatory Passage point）づくりもうまくいきそう。

海外との協定が有名無実になることが多いなか、協定校の皆さんに声をかけたら沢山きてくれました。

<https://www.ritsumei.ac.jp/gshs/info/detail/?id=147>

フランス・トゥール大学との交流を学生・教員に広げるための MTG も行いました。



2月1日隠岐 第3回メタバース研究会@隠岐島



ハイブリッドの研究かいだからこそ、島でやる、という心意気！今年はメタバースに巻き込まれた元年でした。いろいろと面白いことができるかもしれません。

ラヂオで心理学論の日だったので、隠岐から参加。といっても分からないので、背景を隠岐っぽい写真にしてみました。誰が聞いているの？と思うけど「最近は週末に資格の勉強をしており、なかなかリアルタイムでは視聴できませんが、いつも楽しみにしております。どうか月に一度楽しく続けていただきたいと思います」と書いて書き込みがあったりするので、誰かの楽しみにはなっているようです。

<https://www.youtube.com/watch?v=pqY2ht7zfGU>

2月26-28日 執筆合宿@帯広

帯広畜産大学（総合研究棟2階）において、渡邊芳之教授、尾見康博（山梨大学教授）とともに有斐閣から出版予定の『心理学研究法 入門』の出版会議および執筆を行った。また、日本質的心理学会『20年史』の執筆構想会議を行った。三教授の会合というところっぽいけど、実態は・・・（笑）。



3月3日 いのちのつどい

元ゼミ生社会人一期生の珠郷（みさと）がプレゼンに来ていた。それとは別になるが、面白い出会いがあった。ゴスペラーズの北山さん。このことはまたいずれしっかり書きたい。



まとめにかえて

以上、2025 年度における文化心理学の仲間達との交流を中心に様々な活動を振り返ってみた。私が TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発する途上で出会った当時の大学院生たちが今では大学の教員になって立命館大学の学生たちと交流してくれているということに、大きな喜びを感じている。

参考にこれまで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル <http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス <http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8 月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf>

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

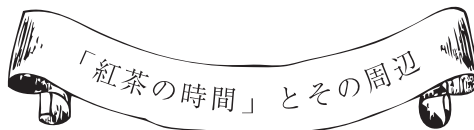
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf>

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (1) ; 2024 年度の文化心理学ネットワーク

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol56/11.pdf>

きもちは、 言葉を さがしている



第 55 話

水野 スウ

2月の臨時紅茶

2024年の暮れのこと、「紅茶の時間」に子どもたちを連れて行きたいんですけど、行ってもいいでしょうか。子どもたちをスウさんに会わせたいんです」とお電話をもらいました。お電話の主は、愛知県豊川市の学童「恵の実っ子クラブ」の職員さん。

はい、もちろん紅茶に来るのはどうぞどうぞ。でもなんで豊川からわざわざ？ 子どもたちと一緒にこんな遠いところまで来るのはきっと大変でしょう？ 「あのお、できたらスウさんにお話をしてほしいんですけど……」と遠慮がちにいう職員さん。——となると、これまでの恵の実さんとのおつきあいからして、思い当たるテーマはもしかして憲法？ 答えはイエス。

恵の実保育園や恵の実っ子クラブを運営している社会福祉法人の恵の実さんには、これまで4回憲法のお話出前で呼んでもらっています。1回目は保護者さん向けに、2回目は職員さん向けに、3回目のときは、大人たちに恵の実っ子クラブの6年生も混じってのお話会でした。恵の実っ子クラブの学童憲章をつくりたい、と言いだした子どもたちがいて、

それならつくる前に憲法のお話を聞いた方がいいよね、と。

でもそれはちょうどコロナでいろいろなことが制限されていた時期。このタイミングでお話会を開いていいのか、スウさんを危険な目にさらしてしまわないかと、とても迷われたそうです。ただどうしても子どもたちにスウさんのお話を聞いてほしい、と園で何度も話しあって対策も考えて、大変な思いをしながら2021年1月、私を恵の実さんに呼んでくださったのでした。

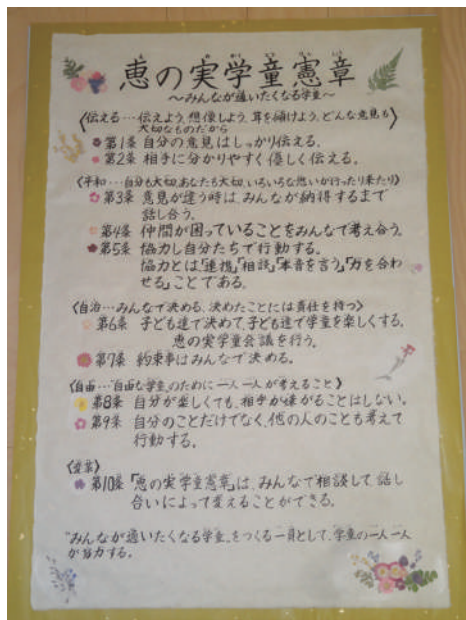
子どもたちが学童憲章をつくりたいと言いだすってなんておもしろい学童クラブ！ 恵の実さんのウェブサイトを見てみると、恵の実っ子クラブの紹介ページにはこんなふうにあります。「“時間・空間・仲間”を大切にすることで学童期の豊かな発達を保障し、且つ関わる大人自身も様々な体験を通し集団の中で育ち合うことを目的としています」。

こんな思いを掲げているクラブなので、大人と子ども一緒に沖縄に行き、読谷村を訪ね、暗いガマに入り、お宿の人から平和と戦争のお話を聞いたりも

したそう。そんな体験をする中で子どもたちが、自分たちの通う場所の学童憲章をつくりたい、と言いつ出したのです。

その時の子どもたちがつくった学童憲章は恵の実保育園のホールの壁に掲げてあって、4回目のお話会に行ったときに私もじかに見ることができました。それを読むと、3回目のお話会で私が話したことのいくつかをこの中に活かしてくれているのがわかります。たぶん、このあたりかな。

〈平和・・・自分も大切、あなたも大切、いろいろな思いが行ったり来たり〉〈自由・・・“自由な学童”のために一人一人が考えること〉



2021年のお話会の時にはまだ小さくて参加できなかった子どもたちを連れて、紅茶の時間に来たいと、恵の実っ子クラブの職員さんにご連絡くださったのでした。話しているうち、紅茶の時間は水曜だけど子どもたちは学校があるよね？と気がついた私。というわけで2月のある土曜日、いつもは水曜午後しか開いてないはずの「紅茶の時間」が臨時でオープンすることになりました。

恵の実っ子たちに

朝6時過ぎに豊川を出発し、JRと新幹線とさらにJRとローカル電車の七尾線を乗り継いでやってきたのは、恵の実っ子クラブの5、6年生の子どもたち

6人と、親御さんと職員さん合わせて8人の大人たち。中には沖縄に行った子もいます。

——ようこそ、ようこそ。長旅おつかれさまでした。まずはお茶をいれるね。誰かが来たらお茶をいれるのが紅茶の時間の伝統なの。お茶を飲んでちょっとゆっくりしてね。

そんな感じに一息ついたところで、今日のメインテーマである憲法のお話。子どもたちに話を聞いてもらう時間は、小学校の授業時間と同じ45分にしました。

——今から私がお話をするけど、何のお話か知ってる？（うん、と女の子がうなずいてくれて、ああよかった、とホッと私）そう、憲法のお話だね。恵の実さんにはこれまで4回お話に行ったけど、それもみんな憲法のお話だったの。私は専門家じゃないけど、ある時から憲法ってとっても大事！と思って、いろんなところにお話に行ったよ。恵の実さんに行く前にも、日本のあちこちで300回くらい話してたと思う。

私がなんで憲法のお話してるかっていうとね。私はずっとこの家で続けてる「紅茶の時間」も、ここにいろんな人が集まって話したり聞いたりすることも、私が本を書いたり、出前に行ってお話したりすることも、私がいろんなことをする自由が、今の憲法によって守られているおかげで、できることなの。それを多くの人に知ってほしいからなんだよ。

ここには沖縄に行ってきた子もいるんだよね、何しに沖縄に行ったのかな？（平和学習、と男の子の声）そっか、沖縄に行く自由もあるし、沖縄でいろんなことを知る自由もあるってことだね。

この国ではそういったいろんな自由が、私だけじゃなくてみんなにある。それって当たり前みたいに思えるかもしれないけど、全然当たり前じゃなかった時代もあったんだ。そんなことも知ってほしくて、私はずっと憲法のお話を続けてるんだと思うな。

紅茶ってね

そんな前置きをしてから、紅茶の時間のことを。——娘が0歳の赤ちゃんだった時、私自身、仲間がとてほしくて、週に一度、誰でもどうぞ来てね、っ

ておうちではじめてのが、紅茶の時間。その頃の紅茶は、赤ちゃん連れのお母さんがいっぱいやって来る、週いち未満児保育園みたいだった。あ、未満児保育園ってわかる？（みんなうなずく。恵の実さんにはちっちゃい赤ちゃんもいるものね）

その紅茶で毎週、お母さんたち、何してたんだろ？（話してた、と女の子の声）そう！ 話して、話して、話してた。1週間分のたまったきもちを紅茶で話して、放してた。言偏の「話す」じゃない方の、解き放す、っていう方の「放す」をみんな夢中でしていたよ。その字、わかる？（空中に「放」ってエアー文字を女の子が書いてくれる）うん、そうやって放さないとね、きもちが詰まって便秘しちゃうから、それはとっても大事なことだと思ったの。

——お母さんと一緒に来てた小さな子たちが大きくなって、紅茶はだんだんはやらなくなったけど、そしたら心に苦しいもの、重いもの持ってる人がなぜだか来るようになって、私はいつのまにか紅茶に来るいろんな人の話をきく、ってことをするようになったんだよ。

「きく」って漢字、いくつかあるよね。（こんな字、とエアー漢字で門構えの「聞く」と書く子）そう、その他にもあるね。（こちらが予想してない字を書く子がいて、その字はどうやら「力」らしい、ん？力がつく「きく」ってなんだっけ？と一瞬考えて）あ！「効果」の“効く”？（うん、とうなずく子）なるほど！ ああ、でも残念。

実はね、ある小学校に行った時、6年生の男の子がもう一つの「きく」を教えてくれたの。耳と、目と、心を、交わらせて「聴く」、んだって。これにはすごい！ってびっくりしちゃったけど、確かにこっこの「聴く」だと、ていねいに、集中して、その人のきもちを聴こう、としての感じがする。

そんなふうに聴かれた時、人は自分の存在が、ていねいにいま受けとめられてるって感じるんじゃないかな、って思ったから、なるべくそんなふうに聴くようにしてる。これは私なりの、一人ひとりを大切にする方法の一つです。

身の丈ってね

——紅茶をして来てね、どんな人も自分のことを身

の丈に認めてほしいと願って生きているんだ、って思うようになったよ。

身の丈、って言葉、むずかしい？（うん、とうなずく頭いくつも）そっか、身の丈って背のたけ、身長のこと。ここでいう身の丈は、その人のそのまんまってこと。大きすぎて見られるのはしんどいと思うし、逆に、実物より小さく見られたり、力がないようにあつかわれるのも悲しいだろうな。

身の丈、その人のまんま、って、英語で言うなら Be、かな。（はてな？が浮かぶ。そこで付け足し）Be は、いる、ある、存在してる、っていう意味の英語だよ。

すごくお勉強ができてしっかりしてる一人の女の子がいてね、その子が中学一年の時、急にご飯がたべられなくなっちゃったんだ。どうしてだか、その子もわかんなかった。だけどその子と友だちになって2年ぐらいしたある日ね、スウさん、私なんでご飯食べれなくなったかわかったよ、って教えてくれたの。「きっと、お父さんお母さんに、成績以外のことでふりむいてほしかったんだと思う」って。

ああ……そうだったか、その子はまわりからいつも、お勉強ができるしっかり者、って身の丈以上に見られて、求められて、その分、そのまんまのその子の Be を見てもらえてない気がして、それはね、きっとすごくしんどいことだったろうと思う。

——成績って目に見えるもの。数字で表せるもの。成績がいいとすごい、できる、ってまわりからほめられる。サッカーの優勝も試験の100点も、目に見える。これって英語でいうと、する、できる、の Do ってことかなと思う。だけど人は Do だけでできてない、生きてないよね。その土台に、いる、ある、の Be があるんだけど、それは数字であらわせないし目にも見えないから、すごく粗末にされてるって気がいつもしてるよ。

私が紅茶で大切にしてることは「聴く」のほかに、「その人のいいところをみつけたら言葉にして伝える」こともなんだけど、そのいいとこって、何ができるかにができるっていう目に見えるいいとこだけじゃない、むしろ外から見えにくい、その人の Be のいいところを見つけて伝えたい、っていつも思ってる。それはそのひとの身の丈まんまのよさを伝えること

だって思うから。そしてそのよさは、その人自身にはたぶん見えてないから。この、いいところ見つけたら言葉で伝える、ってこともまた、私が一人ひとりを大切にする方法の一つです。

そして憲法の話

この辺りからやっとすこし憲法の話。
——今の憲法の13番目に出てくる13条は、「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由、および幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法、その他の国政の上で最大の尊重を必要とする」って書いてある。このままだとむずかしい言葉だね。

でも、私の娘はこの13条をはじめて読んだ時(2009年だったよ)、13条って自分の味方？って思ったんだって。そのころ娘はひきこもっていて、自分のことを社会の役に立ってないと思って責めてた。だけど13条は、どんなひと個人として大切にされる、って言ってる。個の人、ってことは私も、あなたも、ほかの誰ともとりかえることのできない存在だよ、ってことだ。何かができるとか関係なく、その人がその人としてそこに存在することを認めてる、ってことだ。

そして誰もが幸せを追い求めていい、とも言ってる。それって自分だけの特権じゃないから、自分が幸せになろうとする時、ほかの人のそれを横取りしちゃいけない。自分だけよければいいってのは違うよ、それが13条の「公共の福祉に反しない」ってことだと思う、と。

娘はこうも言ってたの。13条は、私が私らしく生きることを許してくれてるだけじゃなくて、私が個の人として、自分の考えを持って生きることを求めてもいるんだと。

今日のお話の最初に、私にはいろんなことする自由がいっぱいある、って話したね。だけど、今から80年以上前、戦争をしていたころの日本は全然そうじゃなかったんだよ。国のしていることに反対したり、そのために集まったり話したりするのはよくないこと。時にはつかまえられちゃうこともあった。戦争に行きたくないっておおっぴらに言えなかった。戦争に行ったら死ぬことが国の役に立つ何よりすばら

しい生き方だ、って子どもたちは学校で教えられていたの。

でも、みんながそんなふうに国の役に立つために生きようとした結果、国が間違った方向に暴走し始めても、誰もそれを止められなくなってしまった。だから、もう二度とそうならないように、私たち一人ひとりが個の人として生きていかなきゃいけないよって、13条は言ってるんだ。

——13条の言葉(条文、っていうよ)、私は前から知ってたんだけど、16年前に娘からこうやって教えてもらうまで、こんなに深い大事な意味があるって知らなかった、気づいてなかった。戦争の時代、一人ひとりのいのちが国にとって都合よくとりかえのきく部品みたいだったことを思うと、今の13条はそれと真反対だね。

娘はこの13条をやさしい日本語に訳してくれたよ。それを一行ずつ読んでくれる？

(子どもと大人がかわりばんこに読む)

「わたしは、ほかの誰ともとりかえがきかない」

「わたしは、しあわせを追い求めていい」

「わたしは、わたしを大切、と思ってるいい」

「あなたも、あなたを大切、と思ってるいい」

「その大切さは 行ったり来たり」

「でないと 平和は成り立たない」

はい、読んでくれてありがとうね。「その大切さは行ったり来たり」。そうだね、一方通行じゃないところがすごく大事、って思ってる。恵の実っ子たちのところに以前お話にいった時も、今みたいなお話をした。そしたら、そのあとつくられた学童憲章の中にその時の言葉や考えが織り込まれていて、それはとてもうれしいことだったよ。

誰が守らないといけないの

——ところでさ、この憲法を守んなきゃいけない人って誰だろう？ 国民かな、国会議員かな、裁判官かな、石破首相かな。(子どもたち、笑う) その答えが憲法99条に書いてあるから、声に出して読んでみってくれる？ じゃ、あなたから。

「この憲法を守る義務は、天皇、国務大臣、国会議員、

裁判官、公務員、といった人たちにあります」

では次に98条、あなたが読んでね。

「この憲法は国の最高法規。これに違反する法律に効力はありません」

今読んでみて、国民の私たちに憲法を守る義務はない、ってちょっと意外に思ったかもしれないね。それはなぜかという、憲法って国の側にいる大きな力を持っている人たちをしばるものだからだよ。私たち国民は政治家たちを国民の代表として選挙で選ぶけど、だからってその人たちが好き勝手な政治しちゃいけない、憲法の範囲内で法律つくらないとだめだよ。だってその法律ができたなら私たちはそれを守らなきゃいけないものね。そう書いてあるのが99条と98条なの。

読谷村の村長室には9条と99条が額にはいつて掲げられてるって聞いたことがあるけど、それは村長さんが、自分は憲法を守らなきゃいけない側の一人だってこと、がっつんと知ってたからだと思うよ。

——憲法に書いてあるのは理想なの。それを本物にするには、国のしてることをちゃんと見ていて、もし政治家が憲法からはみ出したことをしようとしてたら、それにNoって言わなきゃなんない。

憲法12条には、私たちの自由や権利を守るために私たちは不断の努力をしなければならない、って書いてあります。不断の努力ってなんだか大変そうに聞こえるかもしれないけど、自分にできるちいさな努力を日々普段からするってことだと思うな。平和や戦争について知ること、憲法を学ぶこと、おかしいって思ったらそう言うってみること。どんなにちいさくても一人ひとりが12条する、ってことが大事なんだと思う。

あと6、7年たつとあなたたちは選挙権をもつことになるけど、その時、自分で考えて自分の一票を投票しに行くことはとってもおおきな12条する、だよ。

トークのあとの紅茶の時間

話が終わってからは紅茶の時間らしく、お茶とお菓子の時間。おとなたちへの憲

法のお話出前のあと、ふりかえりシェアリングをすることがよくあるけど、この日の放課後紅茶では、子どもたちに感想を聞くことはしませんでした。同じ場に親たちもいるもの、それってちょっと、なんかね、と思って。にもかかわらず、ふっと「憲法って103もあるんだね」ってつぶやく子。「憲法はむずかしいもの、って思って来たけど、簡単だった」ってぼそって言う子。(この言葉、最高にうれしかった!)

今日来た子たちの中には合唱団に入っている子たちもいました。「ぞう列車」や「青い目の人形」や「ピカドンとたけやぶ」って歌を親子で歌ってるそうだけど、「これも12条してることの一つかな」(そうだよ！ ちなみにその歌の指導してるのは、私も知っている名古屋のうたごえのリーダー的存在である、藤村紀一郎さんでした)

お茶の時間のあと、谷川俊太郎さんの詩「生きる」を、恵の実っ子と大人たちと私たち夫婦の計16人で、お手製のぱたぱたブックをめくりながら一人一行ずつ輪読しました。

「生きているということ」

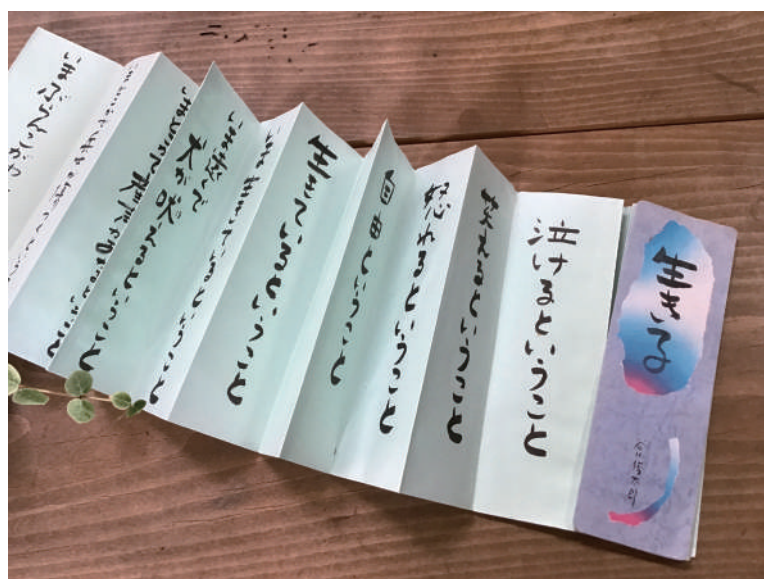
「いま生きているということ」

「それはのどがかわくということ」

「木もれ陽がまぶしいということ」……

なんでもない時間

その後は子どもも大人も、1時間に1本しかやっ



てこない、次の七尾線発車時刻まで、てんでんばらばらに紅茶の空気を吸って、好きに過ごす。

手のひらにのせたチベットのシンギングボウルを鳴らして、え〜〜！って顔する子（金属のボウルのフチを木の棒でスーッとなぞるとだんだん音が響いてきて、手のひらに振動が伝わってくる）、ウクライナ土産のマトリョーシカで遊ぶ子、そして、語りあう親たちに、私の憲法の本を購入する親たち。

このなんでもない時間が私は大好き。そして大切、と思っています。憲法の話聞いて、13条や12条や99条を知って、自由について考えて、「生きる」を一緒に読んで、そんな紅茶の空気全体を13条っばいって感じて帰ってもらえたら、わたし的には最高！です。

北陸の2月にはめずらしく天気の良い夕方。帰り道は中津幡駅まで歩く人がいて、車に分乗する人がいて。駅の駐車場には、先週降った雪の山がまだ残っていました。その山に登ってわざと足をつこんで、電車が来るまでの間、ずぼっ！ずぼっ！を楽しんでいる恵の実っ子たち。このずぼっ！遊びの先頭に立って何度も足をつこんでた男子2人は、午前中に金沢駅についたその足でみんなと別行動、金沢城まで行ってまた金沢駅にもどって合流したそう。ちょっとした冒険旅、だね。

私の住む町の最寄駅から、帰り道は5回乗り換えを繰り返してやっと豊川に戻る日帰りの親子旅。こんな計画たてることからして、子どもたちにさまざま平和の種まきを日々普段から不断に続けてる（12条する、だね）恵の実の大人たち、すてきだな。

ほんとに遠くからよくぞ来てくれましたね。彼らが帰ったあともまだ、なんかいい感じの幸せな余韻がその空間にただよってる、そんな臨時紅茶だったのでした。

後日、恵の実の職員さんが、あるお父さんのこんな感想をメールで送ってくれました。

谷川俊太郎の「生きる」をあのパタパタでみんなで朗読したことがとても印象に残っています。
そこにある一行の言葉、自分が発したその言

葉、隣の子が発したその言葉、向かいの誰かが発したその言葉、それは何気ない一瞬のことだったり、ちょっとした思いだったり、人の名前だったり。生きるということを大きく捉えると難しくなってきたけど、こうやってみんなで言葉を紡いでいくとなんだか安心しちゃう。

自分らしく生きること。全然難しいことじゃないのにうまくいかない。「生きる」の詞のように生きるとは難しいことなんかじゃない。13条が教えてくれている。自分を大切にすること。

紅茶では確か一言も話さなかったけれど、そんなことを感じてらしたんですね。言葉にしてくださってとてもうれしかった。どうもありがとう。



憲法98、99条の紙の上に置いてあるのは、4年前、恵の実さんに行った時もらった“エビフライ”。^{だい}大^{おうしょう}王松の松ぼっくりをリスがかじってこうなりました。その上においたのはわが家から近い森林公園でみつけた、エビフライになる途中の大王松の実です。

(2025年2月26日)

◆ 社会福祉法人恵の実

<https://enomi.ednet.jp/nursery/>

◆ 公益事業 恵の実っ子クラブ

<https://enomi.ednet.jp/utility/>

生殖医療と家族援助

～続 LGBTQ の家族形成対応編～

荒木晃子

医療現場で起きているデジャヴ

『通常、マイノリティといっても、(中略)要因は多岐にわたり、社会的不利益を被る当事者は多数存在しその多くは可視化されている。しかし「性的マイノリティ」に関してはどうだろう。^{注1)}医学的な疾患(中略)は治療が可能か否かを除けば医療の対象となる。一方、性別違和、性的指向、性表現や性行動に困難を抱えるマイノリティ当事者は、性別変更手術やホルモン療法を除き、治療の対象となっていない。つまり、トランスジェンダー当事者以外の性的マイノリティは病や疾患と認められていない(医学的定義はない=病ではない)ため、これまでLGBTQ当事者特有の困りごとに、大半の医療者は対応する「術」を持たない、あるいは治療対象ではないため患者対応のノウハウは必要なかった^{注2)}のではないだろうか。「術」とは、医療技術や医学的知識をいうのではなく、「対人対応スキル」を意味し、患者対応のノウハウとは、不妊患者に通ずる「社会的背景を踏まえ患者心理に配慮した医療者の言動・態度・院内システム」をいう。』

うえの斜体字は前号に記述した文章である。そのなかで、網かけ注1)、注2)に注目していただきたい。注1と2の文章内にある、LGBTQ 関連の記述を「不妊関連の記述」に置き換えると、約20年前、当時はまだ社会で可視化されていなかった不妊当事者のおかれた社会背景と重なり、更に、生殖医療に

特化する専門医療機関が全国各地に広がるに至った要因とも一致する。

かつて生殖医療施設が産科・婦人科から独立し、単科診療となったのは、妊婦が通院する医療機関へ妊娠できずに悩む不妊患者が通院することに多くの課題が山積されていたことにあったという。以前より、不妊患者特有の不妊心理には、視野に入る妊婦や乳幼児の存在に敏感に反応し、耳にする妊娠を喜ぶ患者の声や、医師や看護師から妊娠・出産の際に患者に告げる祝福の言葉が聞こえてくるのがつらい、不妊であることを誰にも知られたくない、といった傾向が顕著にみられた。近年、不妊治療の保険適用が制度化され、以前の高額な治療費と比較すると経済的に、また社会状況においても以前よりは通院しやすい環境に改善されたといえる。しかし、不妊当事者の心理には、通院環境や治療の保険適用だけでは解決しない課題が内在することには変わりはない。現在でも、不妊に悩む大半の当事者は、幼子的心声を聴くのがつらく、例え親しい友人やきょうだいであっても妊娠の報告を素直に喜ばず、そんな自分を肯定することができず苦しんでいる。近年、不妊当事者による支援団体の調査で明らかになった不妊女性の声なき声から、生殖補助医療に患者の精神的サポートの重要性が認められ、現在では多くの生殖医療現

場に生殖医療に精通する心理カウンセラーが位置付けられてきた。

現在では、生殖医療現場で実施する精密検査によって、男性不妊原因、女性不妊原因共に、より正確な結果を得ることが可能となった。不妊原因は多少女性要因の割合が大きいものの、男性・女性共に大差ないことが明らかになっている。検査技術の進化によって、生殖医療は生殖におけるジェンダー平等に大きく貢献してきたといえはしないだろうか。ひと昔前、産まず女（うまずめ）ともいわれ、「不妊は女性の問題」という認識しかない時代、子を産めない女性は離婚されても仕方がないとした社会の在りようは、現代社会に負の遺産として語り継がれている。

性と生殖を補助する医療現場

昨今、生殖補助医療にかかわる研究の進化は目覚ましく、生殖細胞を活用し先端科学研究に大きく貢献していることは言うまでもない。医療現場で専門医は次々と更新される医療技術や新たな知識を日々習得すべく研鑽を積み、同時に、不妊患者が置かれた社会状況への理解と心理サポートの基礎知識を習得した看護スタッフが患者の対応を担っている。国内の医療現場では、健康な体に「子を産むため」の治療を選択する不妊当事者が安心して通院できる治療環境がシステム化されている。かつて、産科・婦人科に在籍していた時期にはかなわなかった「患者の希望を叶えるための医療をこころおきなく行えるようになった」と、ある生殖医療の専門医は語る。このことから、医療施設の院内システムと社会的背景を踏まえ不妊患者の心理に配慮した言動・態度は、新たな医療

システムを構築したといっても過言ではないだろう。

では、新たな「性と生殖に特化した医療システム」とそこに従事する医療者の医療技術や患者対応スキルは、これまで子どもを望む患者に限定して提供されていたのだろうか。答えは否である。

一例をあげると、妊娠を望まない/望めない女性、月経困難症などの苦痛緩和、スポーツ選手の競技日程や旅行等で生理日を調整したい女性、また、子を望む/望まないにかかわらず性交渉に支障を抱える男性や女性など、受診理由は多岐にわたっていたという。産科・婦人科領域で習得した医学知識・技術のうえに積み上げた専門性の高い生殖医療技術は、妊娠を望む患者ばかりではなく、性別にかかわらず、様々な性と生殖にかかわる当事者の困りごとに対応することが可能なのである。

こと、「性」に関する困りごとの多くは、誰にも言えない、知られたくないと考える方が大半である。たとえ家族であっても、家族やパートナーだからこそ言えない、こともあるだろう。性に関する困りごとは、ときにパートナーにも知られたくない、医療従事者にしか言えない/言うしかないセンシティブな内容と考える当事者は多い。当事者自身ができれば語りたくない心身の困りごとへの対応を、日々研鑽をつみ実践しようとする生殖医療従事者は少なくない。性別にかかわらず、性と生殖に関する患者の困りごとに対する医療技術と対応スキルを、生殖医療従事者は、すでに持ち合わせている。しかしながら、その事実を知っているのは、医療者と“実際に困りごとに直面した当事者”に限定されているとしたら残念である。この状況を、もし、自分事とし

て想像することができれば、迷いなく誰もが受診の選択肢のひとつとして、生殖医療現場を訪れることができるように思えてならない。年齢、性別、そして性別違和、性的指向、性自認にかかわらず、あらゆる当事者にとって誰にも言えない困りごとを解決するひとつの選択肢となりうるのではないだろうか。

ここ数年で各地の大学病院等に新たに設けられた「ジェンダー外来」の担当医は、生殖医療の専門性を持つ者が多い。

性と生殖の困りごとを知る

援助者として、性と生殖の困りごとに耳を傾けた経験をお持ちの方はそう多くはないと想像している。対人援助は“知る”ことから始まり、それはやがて“理解する”ことにつながる。当事者の困りごとを知り、当事者自身を“理解する”ことは、対人援助の入り口でもある。何に困っているか、そこにどのような援助が必要かを理解できなければ、“自分に何ができるのか”に至ることは難しい。このことは医療、福祉、教育分野のみならず、自身の住まう地域で活動する援助者にとって最も大切なテーマではないだろうか。なかでも、専門性を活かした援助を提供する立場にあると、更に困難を極める場合がある。性と生殖の困りごとを日常会話で語られることは稀有であり、また、自分事として想像できたとしても実際に知る/学ぶ機会が少ないことがその理由にある。

次号では、性と生殖の困りごとについて、様々なケースを共有し、当事者を理解することにつなげたい。

路上生活者の個人史

第14回

竹中尚文

岡崎 光彦 氏(仮名)

1959年11月生

私は大阪府北部で生まれました。昭和34年生まれですので、64才です。生まれたときの家族構成は、両親と父方の祖母と兄とで5人家族でした。私が小学校に入学して間もなく、祖母が亡くなりました。父親が働きに出て、母親は専業主婦でした。父親は真面目に働く人でしたが、お酒が入ると人が変わるというか、あまりいいお酒ではありませんでした。

私は地元の公立小学校と中学校に通いました。高校は私立の全寮制の学校でした。交通機関のないような山の中の学校でした。毎朝3時に起床して全員で床を磨いて、マラソン

をしてから一日が始まる学校でした。なかなか厳しい高校生活でした。その高校に進学した理由ですか。中学校時代の私は素行が悪くて勉強もしなかったのもので、先生が高校進学を諦めるようにいったのです。両親が「高校は出ておけ」といって探してきた学校だったのです。きびしい学校生活だから逃走をする生徒もいましたよ。けれど、交通機関のない山の中ですからすぐに捕まりますよ。捕まって連れ戻されるのです。私は馴染めましたから、つらいという思いもなく卒業をしました。卒業してから、実家に帰って職探しをしました。

就職は、自衛隊に入りました。4年間、任期満了しました。高校生活と

比べて、それはラクでした。課業、自衛隊では仕事といわずに課業というのですが、課業が終わればテレビを見てもいいし、ラジオを聞いていても自由でした。買い物にも出かけることができます。いい時間を送りました。私の人生で最もいい時代ですし、尊敬する人は自衛隊の時の上司です。私の所属した部隊の班長です。だから、もっと自衛隊にいたかったのですが、当時は試験があったのです。その試験に通っていただらずっと自衛隊にいたと思います。

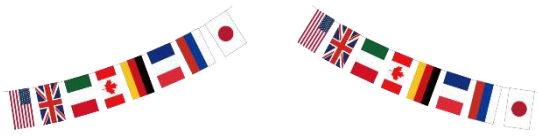
自衛隊を離れたのが 22 才の時でした。それから仕事をさがして、ハツリ屋に行きました。ハツリ屋というのは、コンクリートをハンマードリルとかで削ったり割ったりするのです。解体工事現場とかでする仕事です。そうですね、厳しい仕事です

けど体力はありますから大丈夫でしたよ。ハツリ屋は 46 才か 47 才ぐらいまでしました。不景気で仕事がなくなってきたのです。続けたかったけれど、仕事がなくなったら、住む所もなくなりました。それまでは、親方が借りてくれているアパートとかに住んでいました。

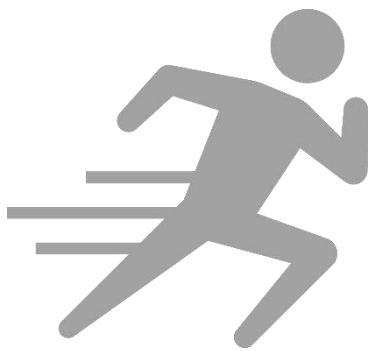
住む所も仕事もなくなったので、友だちの所に転がり込んだりして、日雇いの仕事を探して食いつないでいました。60 才を超えたところで生活保護をもらえるようになって、アパートで暮らせるようになりました。

これからの夢ですか。特に夢はありません。大きな金額のお金も欲しいとも思いません。好きな音楽を聴いて、本を読んでいるのが幸せです

何がいい生活だろう？ 何が自分らしく生きることなのだろう？ どんな人生がいい人生なのだろう？ 岡崎さんの話を聞いていて、そんなことを自分に問いかけた。

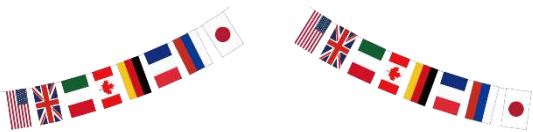


スポーツおじいさんにないたい！④



『リベンジ・マッチ』

國友万裕



1. 真っ暗闇のミーティング

この12月頃だったと思う。

教え子から突然メッセージが来て、「先生、明日イベントするから来てください」というのだ。

俺はできる限り、若さを保つために、学園祭など学生から誘われたイベントにはいつている。しかし、今回のイベントは普通のやつとはちょっと違うみたいで、料金も学生が主催するものとしてはやや高めである。

でも、日曜日で、時間はあるし、行った方がいいかと思った。俺は若々しい、スポーツおじいさんになりたいと思っているからということもあるが、若い子のことを知っておかなくてはならないという気持ちが強いのである。そうしなければ、若い子の感覚についていかれず、授業評価のアンケートでとんでもないことを書かれたりもする。

今はどんどん世の中の意識が変わっている。つい数年前まで許されていたことが、今となっては許されなくなっている。コンプライアンスと多様性、スマホとSNS、今の子達の意識は昔に比べて大きく進化しているのだ。それにある程度はついていく、心の準備をしておかなくてはならないのである。

俺は、いざ、そのイベントへと出かけた。何も知らずに行ったのだが、奇妙なイベントだった。

まず、会場が真っ暗闇で、しかも、スタッフが何も見えない中を、参加者の人を引っ張って行って、座席もバラバラに座らされる。誰が来ているのかも、わからない。真っ暗闇の世界なのである。

俺が一番年上であることは確かみたいだったが、年齢や職業も様々で、おそらく若い

子が多いのだろうけど、お互い知り合いでもない人たちが同じテーブルに座らされる。幾つテーブルがあったのかもよくわからない。参加者の人、1人とも顔を合わせることがない。真っ暗なので、隣の人の顔すら見えない。手元にあるスイーツと飲み物しか見えないのである。

そして、そこで、お互いに与えられたテーマについて話をしていくのである。1テーブルにつき6人くらいである。俺と同じテーブルだった人は、中国からの留学生と思われる人が2人ほどいて、水泳のインストラクターの若い男性、それから日本人で若い社会人の女性もいるみたいだった。1時間少しくらい話しただろうか。

真っ暗闇の中のミーティングである。しかも、外に出る時も、1人ずつ、スタッフに引っ張られて別々に出ていくことになるため、話した人、同じテーブルにいた人の顔はわからないまま、ミーティングは終わっていったのだった。あのテーブルで話した人たちとは、これから先どこかで会ったにしても、誰だかわからないままということになるだろう。

面白いイベントを考えつくものだったものだった。イベント研究会みたいなやつなのだろうか。とはいうものの、これはマッチョの構築とは何ら関係ない。若さの構築。若い子の中に混じれたという経験の1コマであった。

おそらく、今の若い子はこういう匿名性のイベントが好きなのかもしれない。インスタグラムを見ている、まったくの匿名の子が多いのである。Facebook だったら、本名でやっているのが基本だし、プロフィール写真は自分の顔写真を使う人がほとん

どだ。ところが、その後に出てきたInstagramは、名前も誰だかわからない名前、プロフィール写真は後ろ姿というケースが多く、誰のアカウントなのか全然わからない。あんなので、誰の写真なのかわかるの？と訊くと、「わからない時もあるけど、誰かやろなあと思いながら見ている」と言われたことがあった。

今の若い子は裏アカをもっているらしくて、恋人との写真だとか、ごくプライベートな写真は裏アカの方に出すらしい。その一方で、「僕はできる限り、SNSはしたくないんです。だからラインしかやっていません」と言っている子もたくさんいる。今の子は物心着く頃からSNSの時代を生きているので、そういうのはうんざりと思っている子もいるのだそうだ。

みんなインスタでは楽しそうにしているように見えるけれど、「暗いときの写真なんかをSNSに載せるわけじゃないじゃないですか」と言われたこともあった。悩んでいる時の写真は、それこそ裏アカとかにしかださないのである。

今回のイベントは真っ暗闇だからインスタ映えするような写真も撮れない。でも、そこが斬新なところだったのだと思う。とにかく、変わった経験をさせていただいた。楽しい、不思議な思い出ができたのだった。

2. ジムでの忘年会

12月は、ジムでの忘年会もあった。ボクシングジムなので、マッチョな男が大勢集まる。鍋など、いかにも男っぽい豪快な料理を他の男たちと囲んだ。ここでも俺は最年長である。

腕相撲大会も行われた。腕相撲は絶対に一発で負けるという自信があったが、これはお遊びだから、一瞬の恥は仕方がない。

俺が対戦することになったのは、俺より一つ年下の滋賀の高校の先生である。

「先生同士の対決だ!!!」とジムの仲間から声がかかった。

案の定、俺は一瞬にして負けてしまった。

この先生はジムで時々顔を合わせるが、いかにも温厚な良さそうな人。高校の先生にはこういう人いるなあと思わせるような人だ。若い頃はサッカーをやっていて、その後、柔道もやって、そして今はボクシングと言っていた。おそらく、奥さんや子供もいるだろう。最初はサラリーマンだったのが、高校の先生になって、工業高校で国語を教えているとのことである。進学校ではないらしいのだが、生徒は皆いい子ばかりで、就職もいいところに決まっていくと言っていた。

このおじさんのような人生が一番いいんだろうなあ俺は思う。普通に生きて、普通に生活して、スポーツするのを趣味にして、平凡に歳を重ねていく。そういう人生に満足できる人が一番幸せなのだ。

しかし、俺は若い頃のトラウマのせいで、女性とつきあえず、平凡な男になることに対する激しい抵抗があった。高校に3日しかいかれなかったのだ。そんな俺が、普通の人生を歩むことなんてできるわけがないのである。

俺はボクシングのジムでは、目一杯男っぽくいたいと思っているので、すぐに上裸になる。前に俺が教え子相手に上半身裸でフックの練習をしていたら、「先生、裸で(笑)」とこの高校の先生から笑われたことがあった。

「男ばかりだからいいじゃないですか。俺だって、たまには上半身裸になってマッチョな気分を味わいたいですよ笑」

そんなわけで、忘年会では、マッチョな男たちの一員となり、12月も過ぎて行ったのだった。

3. 従弟の死

正月になって、帰省する予定はなかったのに、ふと思いついて2日から2日間だけ家に帰った。年老いた母と弟に会うためである。母はもうすぐ87歳だが、きわめて元気である。この分だと100まで生きる可能性だってある。

それにこの頃弟が50過ぎて、仕事を変えようかと迷っているため、ここで母に死なれたら弟の転職が上手くいなくなるだろう。母の兄もまだ生きているし、妹2人も行きている。つい先日、一番下の妹の息子が死んだ。57歳だった。

思えば、可哀想な人生を歩んだ子だった。彼のお母さん(俺にとってのおばさん)は、できちゃった婚の走りだった。今は授かり婚なんていくらでもあるが、57年前だ。周りは腰を抜かすような状況だったらしい。しかし、叔母は自由奔放な人だったので、世間の常識なんて全く気にしなかった。

叔母はダメ男好きの女性で、結局、2回結婚しているのだが、2回ともヒモみたいな男の人だったのである。叔母さんはそういう男を養ってあげているのが好きなんだろうから、それはそれでいいのだろうけど、息子の彼は可哀想だった。

親戚をたらい回しにされ、2回目のお父さんが義父であり、その後、義理の妹ができ

たため、この叔父さんからも結構いじめられていたらしい。自分の血が繋がっていない子と自分の血のつながりのある子を対等に愛することは難しいのだろうか。

結局、その後、高校を卒業する頃に彼は心を病み、その後はずっと福祉に頼って生活をしていた。

今は福祉はしっかりしているらしくて生活には困らない。食べ物代や住むところは用意してくれるので、それなりの生活はしていたのだが、何せ40年近くも仕事もできない。家族もいない。一人暮らしである。何をするにも生きがいも持てない。そのため、彼は自暴自棄な生活をしていて、死ぬ間際には体重がなんと130キロだったとのことである。

うちの母のところにしょっちゅう電話をかけてきていたみたいなのだが、ある日電話がかかって、その2日後に亡くなったのだそうだ。

亡くなった原因は、お弁当を食べていて、それが喉につまったらしい。夜中に1人で死んでいったのだった。孤独死の87%は男だとある本に書かれていたと記憶している。男は悲しいのだ。なぜ、そのことを女はわかってくれない。俺はまた女性に対する怒りを増幅させるのだった。

おばさんは息子が死んだことで、「寂しい思いをさせてごめんなさいね」と泣いたりもしたみたいだが、いかんせん、もう頭が呆けた状態なので、そういう深刻に悲しむ状況が長くは続かない。また呆けた世界へと戻っていく。

人間って、本当に哀れで、せつなくて、悲しくて、滑稽で、愚かしい生き物なのである。

誰が悪いわけでもない。俺は、今クリスチャンになって、この世で起きることは全て修行期間だと思うようになってきた。この世はあくまでもリハーサル。天に昇った後にこそ、まっとうな世界が待っている。そうでも思わないことには、この世はあまりにも理不尽すぎる。

俺は自殺はしない。前に女優のジャンヌ・モローさんが、「神様はあなたに何かさせたいことがあるから生きさせてくれているのよ。だから苦しいことも含めて人生を愛するのよ」と言っていた。俺はまだ生きている。きっと神様が何か俺にさせたいと思っていることがあるのだろう。

しかし、これからどんどん可能性や残された時間は細っていくのである。その中で何を支えに俺は生きていくのだろうか。。。

4. マッチョな教え子たちとの交流

①二郎系ラーメン

1月、アメフト部の男子学生2人と二郎系ラーメンに行った。

実は2年ほど前にも、男子学生2人と二郎系に行っているのだが、あそこは俺の友人の話だと、二郎系とはいっても、エセ二郎系みたいな雰囲気のところなのだそうで、そのせいか昼時に行ったのに、店はすいていたし、その後その店はいつの間にか潰れてしまっていた。

しかし、今回行ったところは一乗寺の二郎系ラーメンの本家みたいなどころである。しかも、アメフトの子達と一緒に。マッチョ気分を味わおうと楽しみだった。

写真撮影は禁止と店の前に書かれている。お金はすべて自動販売機。そして店の中に

入るとカウンター席が 10 ぐらいしかない。いかにも一乗寺のラーメン屋という風情があった。綺麗な店とは言えないが、そこがいかにも場末の二郎系ラーメンらしかった。

二郎系ラーメンといえば、何よりも量が多いというイメージ。男子学生が大量に食べるお店というイメージがある。

俺はラーメンの量が半分のものを注文した。アメフトの子たちは、並盛り。とは言っても彼らも注文する前に躊躇していたのである。

「俺、半分にした方がいいかなあ」とか言っていた。

彼らは以前来たことはあるみたいなのだが、あまりたくさん食べる自信はないみたいなのだ。アメフトなのに！！

「僕ご飯だったらいっぱい食べるんですけど、ちょっとラーメンは・・・」とか話していた。

二郎系ラーメンは残すと怒られるとかあれこれ厳しいと聞いていたのだが、それはこの頃はないみたいだった。3 人で腰掛けて食べて、俺は量が少なかったからどうにかメンともやしと焼き豚は食べたが、汁は流石に全部は飲めない。

アメフトの 2 人も流石にもう食べるのがしんどいという顔をしていた。

京都は大学が多いからなのだろうが、二郎系ラーメンと限らず、量で勝負という店が非常に多い。普通の人だったら半分も食べれないくらいの量の食べ物が出てきたりする。なんか残飯が多くなるから食材の無駄遣いという気もするんだけど、そこが人気の一つの理由となっているんだと思う。学生からしてみれば、1 回はチャンレンジしたいという気持ちにもなるのだろうか。

二郎系ラーメンは、それほど美味しいと思うものではなかった。馬の餌を食べている気分だった。だけど、他の学生たちに聞いてみると、「その時はそう思うんだけど、また食べたくなるんですよ」とのこと。なるほどねー。

俺が去年教えていた元教え子なんかは週に 1 回は必ず二郎系に行って、インスタグラムにストーリーをあげている。彼に言わせれば、美味しいのだそうである。

人それぞれ味覚は違うなあと思ったりもしたのだった。

ラーメンを食べ終わった後、3 人で近くの和菓子屋さんでお菓子を食べた。二郎系ラーメンの後、和菓子だなんて可愛いものだ。

でも、俺、これでマッチョになったのかな？

今はアメフトの子でも性格的にはマッチョではないのだ。昔は体育会といえど上下関係が厳しくて、大変な世界だったはずだが、今はみんな可愛い。礼儀正しいし、優しいし、おしゃれで、お互いに何かあるごとに「ありがとう」とか言い合っている。

だからアメフトの子と一緒に親しく二郎系ラーメンを食べても、マッチョになった気分にはならないのだ。でも、仲間になれたみたいで楽しかった。俺は子供の頃から男の子集団に入れなかったトラウマが 60 過ぎた続いた今でも続いているのである。

②焼肉

次のマッチョ経験は島津スポーツアリーナだった。今回はボート部の子で、もうすぐ卒業する男子学生が一緒だった。

最初は琵琶湖のボート部の練習場で、2 人

で上裸になってトレーニングしようと言っていたのだが、ちょっと遠いと言うこともあって、近場となった。

中は比較的空いている。お客さんは近所の人らしくて、男の人ばかりだ。ここだったら、別に上裸になっても何も言われなさそうな気配なのだが、やはりやめておいた。

今は男性であってもそれが許されている場所でなければ、裸になるのは厳禁なのである。一緒に行った彼の話だと、他のスポーツジムで、更衣室で上半身裸になっていたら、その部屋の扉が開いていて、怒られたと言っていた。

男の裸が性的なものであるという共通認識は進歩である。素直に喜びたいと思う。

結局、上半身裸になって写真を撮ることはできなかったが、彼の前で上裸になって着替えた。彼の方はすでにジャージ姿で来ていたので着替える必要がなかったのだ。

俺の裸を見ながら、「うちのお父さんに比べれば、ちゃんとした体ですよ。うちはお腹が相当出ているから」と言われた。彼のお父さんは58歳なのだそうで、俺よりちょっとだけ若いけど、もうそういう体になってしまっているのだろう。

終わった後、どこかで昼飯を食べることになった。彼は千本の界限で下宿しているのだが、その近くの焼肉屋に行きたいという。

なぜ、なのか？若い男の子たちと食事に行くと、大抵の子は焼肉を食べたいという。フランス料理やイタリアンなどは誘っても、引いてしまう。彼らからすれば焼肉とかの方が気楽にたくさん食べれて、美味しい。

みんな遠慮もなくパクパク食べるのだった。ただ焼き肉の場合は夜食べると奢るの

が大変である。しかし、この時は昼だったから、大した額にはならなかった。

この時の男の子は、放送局に就職が決まったらしい。やはり体育系のやつは良いところに就職が決まる。羨ましい限りだ。彼は弟は慶応高校に行っていると言っていた。高校からエスカレーター式に大学まで行くらしい。お父さんも地方のマスコミ人とのことだった。

結構エリート系の家庭のお坊ちゃんなのだなあと思った。彼は屈託がないし、意地悪じゃない、いいやつだ。授業中もよく話してくれた。育ちがいいのだろう。

彼の話聞きながら、俺は2年前に東京の大手のテレビ局に就職した野球部の子のことも思い出していた。彼らはまだ20代。まだまだ前途洋々。長い人生、山あり谷あり。辛いことも多いだろうけど、たくさんの出会いや可能性に満ちている。

だけど、俺はもう先がない。人生100年とは言っても、70代の終わりぐらいで死ぬような人が多いような気がする。それに100年元気で現役で生きれる人なんてそうそういるものじゃない。60過ぎてからブレイクする人なんているだろうか。

これからはブレイクするなんてことは考えずに、地道に余生を生きていくしかないのだ。

5. 人生の先輩との食事

焼き肉の翌日だった。俺は2月19日に鼠蹊ヘルニアの手術を受けることになっているので、ちょっとあれこれ入院の準備のために病院に尋ねに行った。

帰り際、体が寒くてどうすることもでき

なくなった。家に帰って、早速眠ったがどうにも調子が悪い。熱を測ってみるとなんと39度を超えている。インフルエンザかもしれないと思った。早速、救急車を呼んだ。近所の市立病院に運んでくれた。

診断結果はコロナである。なんと初感染！！それから1週間くらいは熱が高くて大変な状況が続いた。

熱が冷めた頃、教会でゴ一緒している、先輩の先生（70代後半くらいの男性）から、食事をご馳走したいからと言うメールが来た。

東山のわらじやというお店で、うなぎを食べることになったのだ。名店なのだそうである。

教会の聖歌隊はどんどん高齢化している。これはどこの教会でもそうなのだそうで、俺の通っている同志社教会でも、俺が一番若い部類なのである。

60にもなると、他のところでは最高齢になることが多いのに、教会だけは俺は若い人扱い。不思議なものである。

思えば、若い頃は、60過ぎの人は、70であっても80であっても90であってもみんな一緒くたにして考えていた。

60過ぎた人は皆年寄り。人生終わった人だと言う思いがどこかにあったのである。でも自分がその年になると、そう考えるのはあまりにも悲しい。

60代はまだ大丈夫だ。まだ若い。そう自分に言い聞かせるようになった。とは言うものの、これから何ができるのかなあ。これから待っているものは老いと病である。

この時、ゴ一緒した70代の先生は一回は癌でステージ4までいったのだそうである。しかし、生還なさって今はお元気だ。この先

生、なぜか俺に好感をもってくださっていて、奢ってもらうのは初めてではないのである。

人生の先輩と話をすると、あれこれ勉強にはなる。これからの俺の人生の指針をあててくれる。とは言うものの、やはり年のいった先生と話をしていると病気の話などが多くなるのである。

実際、聖歌隊は存続の危機に陥っていて、癌が見つかった人が2人くらいいる。癌とはいってもこの頃は死ぬとは限らないし、お元気なのだが、70ぐらいになってくるといつだって死を意識して生きていかなくはならなくなるのである。

転生を待つという悟りの境地に達することができればいいが、なかなかそうはいくまい。

死んだら魂はどこへ行くのか？深く考えると怖くなるのである。

この日はこの先生が高価な料理を奢ってくれた。そして、プレゼントまでくれた。これが不思議なプレゼントで、俺が不眠で悩んでいることを話していたので、心を落ち着かせるための、シューマン波発生装置という機械である。これが効果があるかどうかはわからないけれど、こういう贈り物をくれる人がいるというものは嬉しいものだ。

そして、高価な料理。先日は学生に二郎系ラーメンと焼肉を奢っているが、奢ったり、奢られたり。俺は学生に気前よく奢ってあげる方だが、その分、年上の先生からも相当美味しいものを奢ってもらっている。

そう考えてみれば、俺の人生は幸せだ。だけど若い子を見ると眩しい。一方で、お年寄りを見ると人生の最後に向けての終活の覚悟を固めなくてはという気持ちになる。

つくづく、俺もそういう年齢になってきたのだった。

6. 『リベンジ・マッチ』(ピーター・シーガル監督・2013 年)

「俺、M さんにビンタされたくて顔がうずうずしています。今度は俺の顔に手形の跡がくっきり赤く残るくらいビンタしてください」と俺はマッサージの M さんにラインする。

「手が痛いから嫌です」という返事が彼からくる。

とは言いながらも、彼は俺のところにマッサージに来ると、必ず俺のリクエスト通り、痛いビンタを喰らわしてくれる。

もう何回ビンタしてもらったかわからない。

痛い！バシッとビンタが飛んでくると痛いんだけど、「あー、これで俺も男になった」という快感に浸ることができる。

こういうと暴力を肯定しているように聞こえるかもしれないが、そうじゃないのだ。ビンタは男同士の友情の証なのだ。

彼とは友情で結ばれているからこそ、ビンタされても許せる。俺は M だから自分が誰かにビンタしたい、殴りたいとは思わないが、ビンタされるのは好きなのである。

でも、もう少し S にならなきゃいけないのかもしれない。

俺はボクシングジムで、なかなか相手の顔を殴ったりができないのである。

「俺、M だから人の顔を殴ったりはできないんだよ」

「殴り合うのがボクシングじゃないですか (笑)」と教え子から笑われる。

俺は殴られ屋。殴られ専門。そういえば、そういう映画あったなあ。確かチェ・ミンシク主演の韓国映画で『クライングフィスト』という映画。あの映画、大好きだった。もちろん、『ファイト・クラブ』も好きだった。

そして、最近になって、『リベンジ・マッチ』を再見中である。『ロッキー』で有名なシルベスタ・スタローンと『レイジング・ブル』でアカデミー賞主演男優賞受賞のロバート・デ・ニーロ。若い頃にボクサー役を演じた 2 人が、おじいちゃんになって、再びリングで戦うという話である。

やはり、男の心理の中には、歳を取っても、殴ったり殴られたりしたいという思いがどこかにあるらしい。

俺は結構、男なのだ。

そうそう、前に北大路欣也主演の『火まつり』という映画のなかで、「男がうずうずする」という台詞があった。あの映画すごく好きだ。おそらく、「男がうずうずする」という感覚は女にはわからない。

おそらく、「男の生理」みたいなものなんだろう。

上野千鶴子の本で『女という快楽』という本があったが、殴ったり殴られたりするのを楽しむのは『男という快楽』である。この快楽を保てるのはあと 5 年だろうか。10 年だろうか。15 年だろうか。とりあえず、もうそう長くはない。

若い男の子への羨望の思いと歳を取っていくのは仕方がないという諦念。両方に引き裂かれながら俺はこれから生きていくのだ。人間の人生って、何なのだろう？

それは死ぬまでわからないことなのかも。神様がくれた人間への宿題である。

役場の対人援助論

(50)

岡崎 正明

(広島市)

居場所変われば

居場所と役割

居場所一。

対人援助の仕事をしていると、時々この言葉に出会うことがある。「学校に居場所がない」「地域で居場所づくりをしましょう」などなど。児童から障害・高齢者まで、その使いどころは福祉の様々なジャンルで偏りなくある気がする。

辞書で調べると「居場所」は、

- ① 人などがいるところ。いどころ。
 - ② その人が心を休めたり、活躍したりできる環境。
- と書いてある。なるほど。確かに。

私の働く業界では、どちらかというとも②の意味で使うことの方が多いように思う。まあ、まれに DV 逃避なんかでは①の方も重要問題になったりするが。

私の師匠が以前、

「こどもは『家』か『学校』か『自分の中』の、どこかに居場所があれば生きていけるもんだ」

と言っていた。

確かに不登校で学校に居場所が感じられない子でも、家庭に安息の場所があったり、あるいは発達凸凹系で、クラスにはなじめないけど自分の好きなことに没頭している時は充足感に満ち溢れているとか、家が虐待環境で安心できない子にとって、学校が救いの場になっていたりとか、そういうことでサバイブしている例は結構あったりする。まあでも、より健康度というか QOL を高めるには、家も学校も自分の中も、当人にとっての居場所になればそれに越したことはないのだろう。

ちなみに師のこの発言は、どんな場でも適応していないとダメと思っている親や関係

者に、あえて1つあれば大丈夫！と“外す”ことで、膠着したシステムを変化させるためのリフレームスキルである。

「サードプレイス」という言葉がある。家でもなく、学校や職場など、当人にとって社会での主戦場でもない「第三の居場所」。そういう場所があるかないかが、人の幸福度にとって大切だと聞いたことがある。習い事や地域・趣味の集まり、推し活やボランティアなど、3つめの居場所を持つことが、人生の充実感に結構影響するらしい。

確かに自分のことを振り返っても、家庭では親として夫としての責務があり、仕事では中間管理職・SV（スーパーバイザー）としての役割を全うしなければならない立場がある。もちろん家や職場でのやりがいや癒しもあるが、時にはそうした周囲から求められる役割から離れ、いろいろなしがらみや、自らがした武装から解き放たれて、ただの趣味人だったり、一個人として自由に振舞える場があれば…なんて考えると「楽しいだろうな～」と素直に思える。

別に今の仕事や家庭が嫌で降りたいとかではないが、人は誰もが多かれ少なかれ、様々な「役割」を演じ、その場その場で適応しているのだと思う。どんなに好きな仕事でも、幸せな家庭でも、時々人は自らの役割にくだびれたり、ちょっと息苦しさを覚えることがあるのではないか。そんなときサードプレイスは癒しであり、ありのままの自分らしくあれる場、日常の役割を降りられる「休憩所」のような機能を持つのだろう。

小さな居場所づくり

仕事や家庭と全くかけ離れたサードプレイスも確かにいいのだけれど、個人的にはそっちが楽しくなり過ぎると、だんだん仕事への不満が増えたり、主体性が減退するのは？という心配もしてしまう。テレビ番組の「人生の楽園」を見て、思わず心動かされるのは私だけではないはずだ。

そこで最近私が経験してなかなか良かった、新たな居場所づくりについて2つ紹介したい。

1つはいつもの職場ではあるのだけれど、普段とはちょっとだけ「姿勢」や「視点」をズラしてみる。いうなれば普段の「仰向け寝」が窮屈に感じた時の、「寝返りして横向き寝」的な居場所づくりである。

私が統括役をする係は20人弱の規模で、毎年異動や採用などで大抵5～6人は「この職場に来てまだ1年目です」という人が存在する。2年目以内となれば約半数にもなる。当然慣れないことも多いし、児童相談所の仕事というのは、世の中の的にはかなりニッチなお仕事で、法律・発達心理・医療・家族臨床・行政制度など、専門的な知識やスキルが多岐に渡って必要だ。

もちろんそのための研修やOJTにも取り組んではいるが、多忙な業務の中で正直なかなかすべて伝えきれなかったり、メンバーの悩みや不安をしっかりとキャッチできていないのでは？という課題を感じていた。最近徐々に話題になってきているが、児童相談所職員のメンタル不調や病休による離職、定着支援の問題は、何も新しい話題ではなく、ずっと以前からいわれているテーマなのだ。

メンバーとざくばらんに仕事の悩みを共有したり、明日から使えそうなスキルや経験談を伝えたりする場ができないものか…。でも係内で研修をしようとしても、みんな

訪問や面接で毎日多忙で調整がつかないし、がんばって予定を決めても、大抵数人は突発事案が発生して参加できなくなってしまう。それに業務時間内の研修だと、若者たちはどうしても受け身になりがちで、私やベテランが一方向的に話すスタイルになりがちだ。

そんなことを考えていたとき、テレビでニュースを見ていると、欧米のランチミーティングの話題をしていた。日本では昼間の会議室や応接室以外の商談の場といえば、夜の料亭や飲み会の席でお偉いさん同士が何やらヒソヒソとあまり表に出来ないような話をする…なんてイメージがあるが、欧米では夜のパーティーはプライベートな会話を楽しむもので、オフィスでないところでのビジネスの話といえば、ランチタイムが最適なのだという。

言われてみれば確かに政治家同士の外交交渉なんかでも、会談の後にランチセッションをしたとか、よく聞く気がする。書類とパソコンで真正面から向き合う会議や会談と、着飾ったセレブが集いダンスや音楽に興じるディナーパーティーのちょうど中間。欧米のランチミーティングは、昼食を介在させることで雰囲気をやかにし、互いの懸案について忌憚なく語り合うことができる場なのだろう。

これはちょっといいかもと思い、他のベテランの賛同も得て始めたのが、月 1 回の係での「ランチ会」である。普段の会議のように答えを出すべき話し合いではなく、かといって職場の飲み会のようにプライベートな話や懇親だけを指すものでもない。美味しいランチをその日はみんなでとって、同じものを食べながら、仕事に関連した四方山話をする。ちょっとタメになる話を聞きつつ、脱線も大歓迎的なフランクな場。しかもランチ会だから、参加できるときだけの自由参加で OK だ。

そんな感じでこれまで 5 回ほど開催したが、毎回 5~10 名程度は参加者があり、続けられている。仕事で役立つちょっとした面接のコツを私が話したり、連絡の取りにくいケースにどう連絡をつけたか？の体験談をみんなで語ったり、会議とは違って毎回自由で不規則な発言が飛び交って面白い。あるときは「この仕事をするに当たって役に立った本」をテーマに、ユルい感じのビブリオバトルを行い、児童福祉の仕事を目指すきっかけになった小説を紹介してくれた人や、こどもに読んで関係作りにつながった絵本を教えてくれた人など、普段の仕事では聞けないそれぞれの職員の物語や価値観に触れることができ、大変好評だった。

ちなみに食事の方も取りまとめてくれる人がいて、お肉弁当とか、お好み焼きとか、クリスマスシーズンにはチキンとか、アレコレ変化をつけて楽しめており、それもランチ会が継続できている大きな要因だと思われる。

このランチ会の試みは、仕事以外の場であるサードプレイスとはちょっと違うが、仕事場ではありながらもメインの場とは違う「サブプレイス」とでもいうべき居場所のように思う。職場のメインステージが会議室や執務室や面接室とするなら、サブプレイスは喫煙所とか給湯室あたりだろうか。そう考えると最近、喫煙所も給湯室も仕事の現場から減らされている印象で、なんだか働き方改革が皮肉に感じてしまう。

ピアサポートという居場所

もうひとつ私が最近体験した新たな居場所。それが児童福祉司 SV のオンラインピア

サポートグループである。

実はこちらは昨年の 11/30～12/1 に開催された「第 30 回日本こども虐待防止学会かがわ大会」において、東京都練馬児童相談所の足利安武さんたちによるシンポジウム「児童相談所スーパーバイザーの資質向上におけるピアサポートグループの可能性」で報告された、全国各地の児童相談所の SV が少人数のグループを形成し、定期的にオンラインで集まって語り合うピアの集いであり、私も昨年の 4 月から縁あって参加させてもらっている会である。

ピアサポートとは、最近聞く機会が増えたからあまり細かい説明しないが、ようは同じ困難を経験した当事者同士が集まり、情報交換したり体験を語り合うなどして支え合うことを意味する。元々は精神障害者の家族会や、アルコール依存・ギャンブル依存などの患者当事者ら、支援対象者の活動から始まった取り組みだが、最近では「支援者当事者研究」など、対人援助職自身も困難や傷つきに対処し、燃え尽きや離職を防ぐための方法として注目されている形である。

私が参加させてもらっているオンラインピアサポートグループは、東京・埼玉・奈良・京都・広島・大分と、全国各地から私も含め 6 名の参加者が集っており、土地柄や歴史、都市規模などは異なるが、同じ「児童相談所」という機関で SV 業務をしている者同士が集まり、様々な情報交換をしたり、似たような悩みを語り合い、共感的に対話することで、日々の業務に還元していこうとする活動である。

仕事に関する話をする場ではあるが、いつもの職場とはメンバーも関係性も役割も異なる。実際私はこのグループでは新参者で、古参メンバーの懐の深さに甘えて好き放題喋らせてもらっている。他のメンバーも普段の仕事場では言えないことを存分に語ったり、今興味のあることをアレコレ話したり、ときには趣味の手品を披露したりする人もいて、自由で温かな空間が Web 上に作られている。そんな場を提供してくれる京都府福知山児童相談所の吉村さんは、雰囲気の良い小さなバーのマスターのような存在感で、おそらく私より年下だが、その落ち着きと秘めた探求心には感心させられることが度々だ。

このグループはオンラインで月 1 回程度開かれており、今では仕事で悩むことがあると「あのグループでコレ聞いてみようかな？」と考えるほど、なくてはならない存在になっている。そういう意味では私にとって、仕事関係だけど職場でも家でもない、サードプレイスならぬ「2.5プレイス」という位置づけで、とても貴重なありがたい居場所となっている。

このピアサポートグループの良いところはいくつもあるが、中でも良い点を大きく 3 つにまとめると、①情報②共感③つながり、になるように思う。

まず「情報」の面では、業務に関わる法律や制度の改正点や注意点、国の最新施策、心理療法やケースワークの新たな理論や実践、地域で異なる児童相談所の事情など、役に立つ知識から視野を広げてくれる話まで、実に多種多様な情報が得られ、自分の職場だけを見ていると視野狭窄になりがちな頭をアップデートしてくれる効果がある。最近私が注目している TIC（トラウマインフォームドケア）やメンタライジング、ラップアラウンドといったものも、このグループで聞いた話が少なからずきっかになっている。おそらく職場にいても触れる情報なのだが、業務メールや研修案内でオフィシャルに知るよりも、グループの仲間から口コミのように聞く方が、美味しいお店の情報と同じで、不思議とすんなり入ってきて興味を持てたりするのだ。

また「共感」の面では、「違う場所で働く、同じような立場の者同士」として、面倒な説明を抜きにして苦勞を語り合え、普段の職場の立場や関係性を気にすることなく困り事を話せることができ、貴重な癒しと内省の場となっている。対人援助職はその業務内容から、家族や友人にも仕事の悩みを話せないことが多い。もちろん同じ職場の中でも相談したり、共感や助言をし合うことは日々行っているが、同じ職場の関係の中だからこその難しい内容もあり、そういう意味ではこのピアサポートグループは、普段は業務上関わることがない相手であるからこそその利点があると感じる。また助言する際も、わりと気軽に「こんなのもいいのでは？」と伝えられることがあり、ちょっと離れた関係だからこそその良さがあるように思う。

そして「つながり」の面では、全国各地の自分と同じような立場の人間と具体的に顔の見える関係となって結びつくことで、ケース移管などの業務で実際に役立ったり、仕事の苦勞があっても「こんな思いしてるのは自分だけじゃないよな。きっと他の県や町でも、似たような人がいるんだよな…」と思え、閉塞感や孤立感の解消につながると感じている。そんなひそやかな連帯感覚が持てるようになると、以前よりも自らの業務を、より広い視点に立って考えられるようになった気がしている。

また、グループでのつながりは共通の知人などの存在をとおしてさらにネットワークを広げていくこともあり、これまで全国のほかの児童相談所が組織としてほんやりとしか見えていなかったものが、顔のある個人としてイメージでき、連携を図る上での敷居が下がる効果も感じている。

そもそもピアサポートや当事者活動は、「困難やその対応策を一番知っているのは、専門家ではなく当事者自身である」という考えから、患者や障害者という、どちらかといえば普段「受け身的な役割」に偏りがちな人々を、「主体的・能動的に取り組む当事者という役割」に変え、エンパワメントしてきた歴史がある。

居場所変われば、役割も変わる。それは支援者でも同じだろう。「サード」「サブ」「2.5」。多様な居場所の持つ可変性が、課題自体は無くならなくても、人生を柔軟に前向きに楽しむことにつながる気がしている。

臨床のきれはし

SHEET28

浅田 英輔

The Dichotomy of Diagnosis

心理の仕事をしていると、避けてとおれないのが診断名。ICD とか DSM とかあるけど、ひととおり理解しておく必要がある（といってもちゃんと追っていないけど！）。DSM-5 では、自閉症は「自閉症スペクトラム障害」、発達障害は「神経発達障害」という。

診断名とは共通言語であり、分類である。同じ症状で同じ原因のものに名前をつけ、効果のある治療をすることが大きな目的である。「ぜんそく」と診断があれば、程度をみながらこの薬を使うとか、入院しなきゃならないとか決めることができる。ほかの病院にお願いするときでも、「この患者の診断名はぜんそくである」とするだけで、あーはいはい、治療はこれやってるのね、と理解がはやくなる。

精神科関連の診断名も同様で、統合失調症とされれば処方される薬はしぼられ、幻聴や妄想の有無、発症したと思われる時期、生活への障害程度を確認することになる（当然、診断が違っている可能性や、ほかに合併している症状等に注意を向ける必要はあるが）。

DSM が開発されたことで診断がしやすくなり、必要な人に必要な精神科医療が届けられるようになったのは非常に画期的なことだと思う。でも、「診断名が一人歩きする」といった言い方で示されるように、功罪の罪のほうも結構あるように思う。精神病は文字通り病気で、治療が必要だし、適切な治療により回復

することが多いものである。なのに、まるで「心の弱い人」という扱いになったり（心の弱い人というのもなんだかなと思うが）、「何もできない人」とか「扱いに困る人」という意味になったりすることもある。

発達障害なんかも同じだ。キチンと捉えてもらい、理解した上で適切に対応してもらうことが必要だが、「アイツはハツツだから」「なににもできないんでしょ？」とか逆に理解されなくなることも起きている。当人が「オレは発達障害なんだから配慮されて当然だ」となるのも違うと思う。

例えば、3 歳半健診のときに、「どうも発達に偏りのある子だな」とわかったとしても、その子が自閉症なのか AD/HD なのかを明確に診断する必要はないと思っている。診断名がなんであっても、対応方法はその子の状態に合ったものであればよいからだ。そもそも、3 歳くらいだとそのあと変わっていくし、正確な確定診断は難しいだろう。そこで「こういう特徴があるから自閉症だと思う」「いや、ここは学習障害にみられる特徴だろう」「自閉症と AD/HD と運動協調性障害もあるといえるのではないか」とか言ってもしょうがないのである。「言葉によるやりとりが苦手で、集中力が続かず、書字にも支援が必要」でよい。研究となるとまた別だが、3 歳時点で正確に発達障害を診断できる研究が進んだとして、「それがなんなの？」と思わなくもない。

これは医学的な診断名だけでなく、いろんな言葉に言えることだ。

最近でいうと、自己肯定感なんかもそうだ。自己肯定感が高いのは大変結構。低いよりは高いほうがいいだろう。でも、sheet15でも書いているが、世の中「自己肯定感が高いのが重要だ！」「誰も彼もみんな自己肯定感を高めよう！」「自己肯定感を高める5つのステップ！」となると、なんだか様相が違ってくる。もちろん高いことに越したことはないのだが、「自己肯定感が低い＝悪」みたいな感じになってくると、これは分断につながってしまう。「自己肯定感が低い私はダメなやつだ」とどんどん自己肯定感が下がっていくのはよくない。最近ネットでみたのは「自分は自己肯定感が高いけど、仕事がんばりすぎてうつになっています。」といったもの。詳細はわからないけれど、たぶんそれは自己肯定感ではない。まさに「言葉が独り歩きしている」状態といえる。

ひきこもりで本人や家族が困っているパターンで、その当人にもがんばってかわっていくべき特性はあるだろうけど、その人そのものではなく「ひきこもりの人」とされてしまうのも残念なことである。その人がどういう人かよくわからないのに、「ひきこもりへの対応はこうこうこういうものだ」などとするのは、は分断を助長することにつながってしまう。

この辺については、支援者側も「発達障害への対応」「ひきこもりの人を理解する」なんて研修をやったりするが、キチンとわかった上で学ばなければ、「ひきこもりの人はこう考える」「発達障害はみんなこう」などと分断を助長することにもつながってしまうのだ。

行政も、ずっと状態ごとに相談窓口を作ってきた。「発達障害の相談はこちら」「知的障害はこちら」「介護は」「生活困窮は」「ひきこもりは」というふうな。「発達の困りごとはこちら」「就学の相談はこちら」となると、「就学に関係ないならあっちへ」「就学期だからむこ

うへ」と押し付け合いになっていることもあるのではないだろうか。

孤独・孤立対策が掲げられているが、これもまた「孤独とは、孤立とはなんぞや」から始まり、「孤独はだめだ、支援しなければ」となるとまた分断につながっていく。ただ、これは国の方針としても「ひとつの問題から孤独孤立になるのではない」「ただ公的支援を入れればいいわけではないらしい」となっている。

このように「問題はひとつじゃないし、問題ごとにあちこちの窓口に行くのは住民の利便性によくない」として、重層支援体制整備だとか孤独孤立対策だとか、全体的な相談を受けられるようにしようとしている。

診断名や状態像を細分化することで、結果として分断につながってしまっているが、それじゃいかんとなってきているといえるだろう。

いろいろと考えると、診断名とはなんなのか。もともと、支援者も対象者もうまくいくようにと考えられたものだったのではないのか。当然、「診断などいらない！」というのは愚かしい。診断があるからこそその良い面は大いにあるし、なくなられては困る。でも、診断による分類を正確にしようとすればするほど、特に精神疾患領域では、分断を進めてしまうことになるという感覚はある。

診断名を聞いてわかったような気になったり、「〇〇への対応」を学んでできる気になったりしちゃだめだよなあと思いつつ、分断につながってしまうかもしれないという感覚を、我々支援者はちゃんと持っていなければならないと常々思っている。

発達検査と対人援助学

⑨ 単純化、相対化される社会における子育て

大谷多加志

アメリカで2度目のトランプ政権が発足し、その言動が日々世界を揺るがせています。関税や軍事支援などを交渉のカードにして、相手から譲歩を引き出し、自国の経済的利益を最大化していく手法は、掲げられたスローガンである「アメリカファースト」を実現するものであり、ビジネスとしては成功、経営者としては敏腕、ということになるのかもしれませんが、強い方が勝つ、という極めてシンプルな原則を、「これが現実だ!」と恥ずかしげもなく言っているようで、なんだか時代がわからなくなるというか、世の中の反動のものすごさを思い知るというか、やりきれない気分になります。しかしながら、少なくともこの大統領が正当な選挙の手続きを経て選出されたことは事実です。つまり、この現象は世が望んだから生まれてきたことではあるわけです。連載のテーマである発達や子育てから大きく乖離したような話題ではありますが、今日はここを入口に考えてみたいと思います。

N スペに感じた違和感

先日、ちょっとした機会を得て、2016年に放送されたNHKスペシャル「ママたちが非常事態?」のDVDを視聴しました。リアルタイムからはかなりの周回遅れです

が、現在書いている他の原稿と関連するのでは…という学科の同僚の勧めを受け、視聴してみることにしたのです。内容は、前評判通りとても面白かったです。短信に書いた、共同研究でお世話になっていた赤ちゃん学研究センターも登場し、お世話になった先生の少し若い頃の姿を画面の中に見つけたりもしました。同僚の教員が言うには、この番組は学生さんにもとても好評だったそうです。私も基本的には楽しく観たのですが、一方で少しだけ違和感がありました。それが何なのか、少し考えて思い至りました。

この番組では「ママたちが非常事態?」というテーマの通り、産後うつや子どものイヤイヤ期など、お母さんにとっての厳しい状況について、科学的な見地から説明をしていきます。例えば、産後の母親のメンタルの変化については、オキシトシンなどのホルモン分泌が妊娠中から産前、産後でどのように移り変わっていくかのデータの示し、それがお母さんの心理面にどのような影響を与えるのかを説明します。またイヤイヤ期の子どもについては、脳科学的な観点から、子どもの欲求がどのように生じ、そしてなぜ大人や周囲の働きかけに応じて修正することが難しいのかを説明していきます。

また、発達とともに（脳の成熟とともに）、このような行動のコントロールが可能になっていくプロセスについてもさまざまな実験を通して解説していました。

断っておくと、このような説明自体には何の異論ありません。番組のMCや出演者の方も「理由がわかると安心する！」「こう対応したらいいんだあ」と感想を述べておられましたし、視聴者の保護者さんたちも同じように感じた方が多かったのではないかと思います。

合理的説明と正しい対応？

少し気になったのは、これらの説明によって、子育てや子どもの行動のすべてが理屈で説明でき、理由がわかれば何事も正しい対応ができるような印象をもたらしそうだと感じたことです。番組では脳科学や生理学の知見なども多く紹介されていて、これらの説明は一定の説得力がありますが、脳科学にありがちな、若干言いたい放題な感じも否めません。脳ではこんなことが起こってる！という説明に対しては、否定の仕様がなくて、何となく納得させられます。また、理由がわかるとすっきりする感覚があるのもわかります。ですが、正直言って、子どもってそんなわかりやすい存在でしょうか。子どもは大人の「理屈」とはどこか違う軸を持っていて、大人の軸に当てはめて理解しようとする中で、何かズレが生じたり、大事な要素を見落とすことにつながる気もするのです。ある意味、子どものことはよくわからないし、ここからどう育っていくのかも見通せない中で、それでも1日1日続いていくのが、養育者にとっての育児であるように思っています。

最近、時々耳にするようになった言葉に「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉があります。イギリスの詩人であるジョン・キーツが述べた言葉で、「急いで事実や理由を求めず、不確かさや不可解なことがある状態の中に留まることができる力」とされています。ますます先を見通すことが難しくなった時代の中、私たちより先の時代を生きる子どもたちを育てていくために、大人にも簡単に答えを求めず不確かさと付き合っていく力が求められているのではないのでしょうか。

現代社会に漂う閉塞感

ここで最初的话题に戻るのですが、現在の社会が「強いものが正義」というシンプルなところに立ち戻ってしまっている背景には、シンプルな理屈や、それを行使して状況を変えてくれる人を、どこかで人々が求めてしまっているからのように感じます。

それは言い換えれば、社会が全体として閉塞感に包まれていることの反動と言えるかもしれません。思い当たるのは日本において若者から何となく漂ってくる諦念のような雰囲気です。「勝ち組・負け組」や「親ガチャ」という言葉ににじんでいるように、人生には勝者と敗者がいて、そしてそれは“生まれ”によっておおむね決められているのだという感覚が、どこかに根付いているように感じます。自分の人生なのだから他人のせいにするなという言い分もあると思いますが、少なくとも若者は社会に対して不公正感や統制不能感を感じているのだと思いますし、そのような社会を構成している上世代としては、やはり何か申し訳ないような気持ちになります。

自分の人生を生きる

一方で、どのような境遇にあっても、それでも自分の人生を豊かに生きる道はあるのだとも思います。さらに言えば、いわゆる社会的な勝ち組であっても、よくよく見れば勝ち組であるための何か（お金だったり、権力だったり）に囚われて、実はそれほど豊かに生きられていないように見える人もいます（負け惜しみみたいですが）。でも、これからますます先が見えない社会を生きていく次世代に、自分の人生を豊かに生きる力を育んでおきたいとは願っています。しかし、それは結局どのような力なのでしょう。

ひとつ、個人的にこれがポイントなのかなと思うことがあります。今年の夏、京都劇場で開催された「みうらじゅん FES」に夫婦で行ってきました。妻がもともとみうらじゅんさんのファンなのです。みうらじゅんさんは「ゆるキャラ」や「マイブーム」という言葉の産みの親でもあり、フェスでは独特の感性とゆるさが入り混じったトークを楽しみました。そのトークの中に「比較三原則」という言葉がありました。シンプルに言えば、「人と比較しない」ということで、それを信念にしているという話でした。それだったら『非比較三原則じゃないか』『三原則なのに1個じゃないか』と頭に浮かびましたが、一方で、確かに「人と比べない」ことはシンプルながら大事なと思いました。嫉妬や劣等感などは、人との比較の中から生まれてくる感情ですし、勝ち組が感じている優越感だって、自分と誰かを比べる中で感じるものです。そして、優越感を感じている人は、同時にその優越性を失うことを恐れもするわけで、やはり「人との比較」という縛りの中に囚われているように見え

ます。

仕事柄、子育て中の保護者さんとお話することも多いのですが、「習い事って何をしておいたらいいですか？」とか「英語って、何歳くらいからするのがいいですか？」などの質問を受けることがあります。基本的に子どもが好きなものをやればいいし、楽しめるなら何歳でもいいのでは…、とお答えして、それが本心です。一方で、このような質問をしたくなる保護者の心境に思いを巡らせると少し切ない気持ちになります。何かひとつでもいいから役に立つ武器を持たせたい、あるいは、成功体験を積み重ねられるようにしてあげたい、というような、切なる願いを感じます。これは親心としてとても自然なものだと思いますが、その裏には何か悲壮なものにじんできて、先行きが見えない社会に送り出すことになる我が子に、何かせめて持たせてあげるものを探しているようにも感じられました。

ただ、これらの「武器」はどちらかと言えば「勝ち組」になることの助けになるもので、豊かに生きることには直結しないかもしれません。自分の人生を生きる力を育むには、まずは“好き”を育てることが必要であると感じます。大人にできることとしては“好き”を見つけるチャンスを作るくらいしかできないかもしれません。子どもの“好き”には、特に理屈も効率も将来性も関係ありませんので、「そんな、何の役にも立たないことばかり…」と“好き”を大人が否定してしまうこともあります。ここは、少し注意が必要かもしれません。有能だからではなく、わが子だから、特に理由も利益もない「好き」を見つけたことを、心から喜んであげて欲しいです。

講演会 & ライブ な日々 ④②

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ』

ずっと自分の頭の中で、いつか般若心経の講演会をやりたいと思っていました。しかし、なかなか手を出せずにいました。

元薬師寺館長の故・高田好胤さん曰く、「般若心経を語るには、二時間の講義を最低10回から15回はやらなければならない、つまり、20時間から30時間は必要だ」とおっしゃってました。

確かに冒頭の摩訶般若波羅蜜多心経という言葉の「摩訶」のわずか二文字を説明するだけでも、丁寧にやれば10分は必要です。

般若心経は文字数わずか260文字しかない、とても短い経典です。しかし、文字数が少ない分、その一文字一文字に深い意味が込められています。般若とは何か、波羅蜜多とは何か……。深めれば深めるほど時間がかかります。もしもそれらの言葉を簡単に扱ってしまったら、大事なものが伝わらなくなる可能性があります。

講演会で私に許される時間はせいぜい90分から120分です。それ以上になると、聞くみなさんも疲れてしまいます。だからと言って連続講座にしまうと、みなさん大変お忙しいので、来る人が限られてしまいます。その葛藤に悩まされ続け、般若心経を語りたいという構想はありましたが、3年くらいお蔵入りしていました。

そんな中、2024年の夏、京都府の久御山町で、町役場が企画している高齢者対象の市民講座があり、その講師として招いて頂きました。
内容はお任せするという事だったので、随分迷いましたが、ついに般若心経を語ることを決意しました。

久御山町はその昔、巨椋池という巨大な池があり、漁業が盛んでした。
巨椋池は池というよりは湖に匹敵する広さでした。
豊臣秀吉の時代から度重なる土木工事を重ね、昭和8年から昭和16年にかけて行われた干拓事業によって広さ634haの巨大な農地となりました。
必然的に漁業や農業の安全や豊作・大漁を祈る儀式が芽生え、昔から仏教に縁が深く、観音信仰や阿弥陀信仰が盛んでした。

久御山在住の方に般若心経のことをお聞きすると、みなさん子どもの頃から法事や朝のお勤めなどで般若心経を唱えることがよくあるが、何かが書いてあるのかはさっぱりわからないとおっしゃいます。
また、久御山で般若心経の講演会があれば行ってみたいですか？とお聞きすると、みなさんご興味がおありのようで、是非聞いてみたいという方も何人かおられました。

それならとにかく一度語ってみようと思い、準備にかかりました。
主催者さんに講演会の内容は般若心経であることを伝え、広報で告知してもらいました。
私に許された時間は90分です。
まとめる作業をし始めて、すぐに私は後悔しました。
とても90分でまとめられない！
しかし、もう告知していますから、今さら内容を変えるわけにもいかない。
もうやるしかない・・・。

幸い私は大谷大学という仏教系の大学を出ており、私の周りには仏教や般若心経に詳しい人（現役の僧侶も含む）がたくさんいました。
そこで私はそんなみなさんとオープンダイアログ（開かれた対話）を重ねました。

（オープンダイアログは、もともとは統合失調症治療に使う、家族療法の技法です。

詳しい内容はこの対人援助マガジンで何度か書いていますので、知りたい方は対人援助マガジンの私のバックナンバーをご覧ください）

その結果、90分で般若心経の詳しい内容に触れると、どの言葉も中途半端に終わり、聴く人はかえってわかりにくくなる。

そうではなく、「般若心経とは、こんなことが書かれているお経ですよ」という概略を話して、まずは般若心経に興味を持ってもらおう。

つまり、今回は般若心経という種を蒔いて、後の成長は、話を聞いた人の人生の

中で花開くのを祈りながら待つ。
なるほど、これならば90分でまとまりそうです。

このように、新しいアイデアや解決策が対話の中から生まれてくるのがオープンダイアログの魅力であり、パワーです。
オープンダイアログは治療のためだけにあるのではないことを、改めて実感できました。

講演では、まず私の人生における般若心経との出会いから話すことにしました。
自分の体験談なので、とても話しやすいです。
その体験談をまとめているうちに、そもそも何で私が般若心経に強く惹かれたのかが改めて見えてきました。

私は般若心経の持つ、理屈や合理性を超えた不思議な力に強く惹かれたのです。
不思議な力は「スピリチュアル」という言葉に置き換えても良いかもしれませんが。
「スピリチュアル」と聞くと、なにか怪しいイメージを持つ人も多いですが、WHO（世界保健機関）は以下のように正式に定義しています。
「スピリチュアルは具体的な医療ケアではなく、人間を自然環境の一部ととらえ、よりよく生きるために必要な生き方であり、それが健康に大きく影響するという認識によるものである」

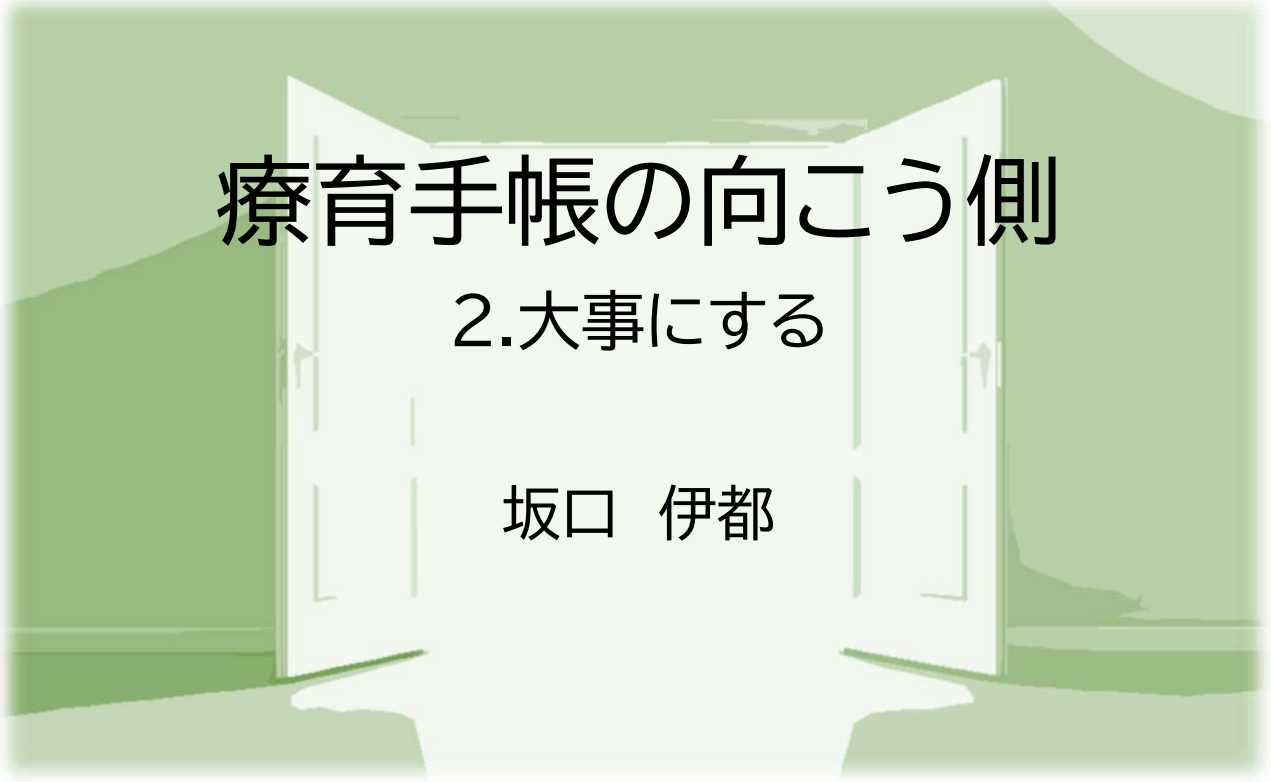
確かに般若心経に書かれていることを理解し、実践すると、自分も自然環境の一部だと理解できますし、それは人間がよりよく生きるための力になります。
この「スピリチュアル」は私が尊敬する鈴木大拙氏（仏教学者・文学博士）の説く「日本的霊性」と同じ意味かもしれません。

とりあえず、私の人生に流れている不思議な力（出来事）を聞いていただき、それをきっかけに般若心経の核心を垣間見てもらえればいいのではないかと思います。

そこで再び、様々な人とオープンダイアログを続けました。
私のアイデアをオープンダイアログの席で聞いてもらい、それについてリフレクティングトークを続けてもらい、参加者全員からGOサインを頂きました。
そこからさらにみなさんと対話を続けながら、その内容を深めることができました。
そしてそれをパワーポイントに資料と共にまとめ、当日を迎えました。

（次号に続きます）

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき



療育手帳の向こう側

2. 大事にする

坂口 伊都

はじめに

子どもがある程度言葉を使えるようになると、自分の正当性を主張してくるようになりますか？例えば、妹とおもちゃの取り合いになり、妹を泣かせてしまった時、「だって妹がおもちゃ取った」「僕、叩いてないもん」と、自分は悪くないと言い張ります。明らかに嘘をついているとわかっている時でも、必死になって嘘をつき通そうとして、頑として譲らない。その時、何て声をかけますか？

- ①「嘘を言わないの、わかっているのだから、正直に言いなさい！」
- ②「また妹が泣いているじゃないの。お兄ちゃんなのに、もうあなたと話したくないわ」
- ③「ふーん、そうなの。妹もこのおもちゃが欲しいって、困ったね」

どれが近いでしょうか。これは家族システムのパワーバランスに関係してきます。親が嘘はいけないことと頑なに思ってしまうと、子どもが嘘をつくことを許せなくなったり、嘘ばかりつくように育つのではないかと不安になり、①のように威圧的に怒ったり、②のように兄から距離を置いて無視したりしてしまいます。これはどちらも、子どもをコントロールしようと親のパワーが強く働いています。③は、事実を伝え、妹の代弁をしています。きょうだい喧嘩は毎日のことですから、いつも冷静に対応できるものではありませんが、嘘ということを考えると大人も日々の中で無意識に嘘をついています。体調が悪くてしんどい時に「大したことないから大丈夫」と平気な振りをしたことはありませんか。これも嘘ですが、別の言葉に置き換えれば、心配をかけたくない、気遣い、思いやりとなるでしょうか。嘘は嘘でも、

相手を傷つけるのではなく、相手との関係を保つための嘘は割と使っているものです。単純に嘘はいけないとだけ伝えると、子どもは大人の嘘に不信感を抱くことがあります。

では、先程の妹を泣かせてしまった僕の嘘はどこからきているのでしょうか。嘘をついていると「しまった、みつかった」という焦りが出て、言葉もしどろもどろになっています。とっさに嘘をついてしまったのでしょうか。「叱られたくない」と防衛反応が出て、さらに親に「嫌われたくない」と必死になっていると考えることができます。

親の方は、まだ小さい妹に手がかかり、お兄ちゃんなのだから妹を可愛がって欲しいと期待しますが、僕自身が妹と同じように手をかけられてきたことを思い出せるわけもなく、親を取り合う強烈なライバルを可愛がる余裕もなく、僕だけを見て欲しいと欲張りなことを願っているかも知れません。

親にしてみれば、子どもの困った行動ですが、小さな子どもは、どうしてもなく親を求め、やり方は下手過ぎますが、親を惹きつけようと頑張っているのです。療育手帳の面接で、親を求めているかどうか分からない、親に反抗ばかりすると耳にしますが、子どもの中心に親が存在していることは子どもが教えてくれます。親が子どもから反抗的な態度を取られ、自信をなくしそうになりますが、どの子どもも世界の中心に親が根ざしています。子どもは大人が世話をしないと生きられません。そして、大人にしてもらったことを他者にしようとしします。大事にされれば、周りを大事にする術を学びます。では、どうしていくことが子どもを大事にすることになるのか、考えていきたいと思います。

他の子と比べて

療育手帳の聞き取りの際、「いつ頃から発達面で気になり始めましたか？」という質問をすると、「周りの子と比べて、うちの子喋らないな、できないなと感じて」と言う方が多くいます。健診で要観察と言われ、相談をして療育につながっていき、同じようなしょうがいを持った親子に出会い、他の親の苦労話を聞き、自分達だけが苦しんでいるわけではないと知り、落ち着いて考えることができるようになり、励まされるようです。療育の場で、子ども同士を比べる話題を聞くことはないのですが、保育園や幼稚園では、自分の子どもだけができていないと辛くなる人が多いようです。



子どもを育てていると、言葉が早い、オムツが取れるのが早いということが称賛され、何故か母親の教育がいいからだと言われることがあります。「〇〇ちゃん、もうオムツ取れたそうよ、偉いわね」と誰かが煽り親を焦らせますが、トイレトレーニングは、子どもの身体の大きさが違うように、それぞれ子どもの膀胱の大きさ、尿意の感じ方に個人差があるのは当たり前で、そこが影響している部分が大きいといえます。

他の子よりも早く、皆に後れをとらないようにしないと、焦る

気持ち膨らむと、できたことよりもできないことに目が向いてしまいます。

子どもは、大人からの評価、特に親からの評価に敏感です。私たち大人は、子どもの前で何を言っているのでしょうか。悪気なく、心配で「また、できないの」「本当にグズで何しても遅いのだから」とできないことを連発しているのかも知れません。

ほとんど話さない、大人しい印象の子が来た時は、幼児から小学校低学年までは、皆の前で面白いことを言ってクラスで目立っていたそうですが、小学校の中学年頃から友達と急に話さなくなったといいます。おどけて見せると周りが笑って、皆が自分を見てくれていると感じていたのでしょうか、同じことをしても思春期に入る年代になると白けた目で見られ、その場の雰囲気が悪くなり、どう対応したらいいのかわからなくなったのかも知れません。年齢が上がると、ますますコミュニケーションが複雑になり、自分一人ではどうしようもできなくなっているのではないかと感じました。

ある子どもさんは発達検査を終えて、「できなかった」と落ち込んだことがありました。発達検査は、通過したところまでを数値にしていくので、通過しないところまで進め、全部できたという形には、なかなかないものです。テストとは違うのですが、それがこの子には理解できません。できないとダメだと思い込んでいます。その子は、

「できなかった」と涙ぐみ、
「最後まで、あきらめずにやり通したことがすごいのだよ」と判定員に言われ、
「でも、できない自分が許せない」と泣が溢れ、
「できたかったのだね。でもね、最後までやり通せたことはすごいし、自分を自分で褒めてもいいことなのだよ、よく頑張ったね、大丈夫だよ」と母を含めた大人達がそれぞれ伝えました。

その子は最初ピンときていないようでしたが、帰り際には笑顔を見せてくれていました。学校と名がつく所にいくと成績で優劣がつけられ、傷つく場面も繰り返し体験してきたのでしょうか。発達の特性というのもベースにあります。できないと言われるのは、誰でも嫌なものです。勉強やスポーツができれば、将来安泰で何も困ることはないのでしょうか。世の中に出れば、勉強の成績の優秀さよりも人柄が問われます。人柄が良いとイメージするのは、おおらかで、言われたことを素直に受け止め、ルールを守ろうとする。他にもいろいろと考えられますが、子どもで捉えるとかわいい印象を与える感じになるでしょうか。

かわいがられる

自分でも知らぬ間に「できない」と言ってしまい、子どもを傷つけてしまうことは誰にでも起こり得ます。子どもを褒めて育てましようと言われますが、いつも褒め続けることはできません。他の人を叩いたり、蹴ったりしたら止めなければならないし、何故それをしてはいけないのか伝え続けなければなりません。この前も言ったのにまたしていると、同じことの繰り返しでため息が出ます。

毎朝、登園や登校に遅れないように子どもを起こすが、なかなか起きない、着替えない、ご飯を食べない、歯磨きしない、うんざりしてきます。親が焦れば焦るほど、子どもが動かなくなるのは気のせいでしょうか。

子どもがオムツをしている頃、この時間の電車に乗らないとならないという時に限って、出る直前に「うんこ出た」と言われ、予定していた電車を諦めたことがありました。家族旅行の前日に熱を出したこともありました。本当に予定通りにいかないのが子育てです。

また、子どもがいう事をきかなくても、怒らないように、怒らないように、冷静を保とうと頑張りましたが、仕事や人間関係のストレスや寝不足、疲れ、体調不良が重なると抱えきれなくなり、噴火してしまいました。噴火すると、「ママ怖い」と言われ、それまで冷静に対応しようとして努力してきたことが一瞬で水の泡です。子どもが成人してから、「ママって、こういう面あるよね、昔から」とか言われ、反撃されますのでお気をつけください。

ただでさえ思い通りにいかない子育ての中、ついつい子どもを攻めてしまいます。

「だから言ったでしょう。何度言ったらわかるの」

「〇〇ちゃん是可以るのに何であなたはできないの」

子どもだけではなく大人もですが、いい事を言われたことよりも悪い事を言われた方が記憶に残ります。いいニュースよりも悪いニュースの方を覚えているのと同じです。そこに発達の課題があると、より深く記憶に刻まれるのではないかと感じます。学校でも家庭でも「できない」と言われることが多いと外での交流を避けようとしていくようです。

逆に交流をためらわない子にも出会います。その子は、できないという怖さを持たず、私のことを受けとめてくれると全く疑っていないようです。その子は楽しそうで笑顔です。何がそうさせているのだろうと見てみると、できなくても、失敗しても周りがちゃんと「ダメではない」と伝えていました。時には、子どもに強く当たってしまうことがあっても、大人側の間違いを子どもに伝え、子どもに謝っていました。

例えば、子どもが叩いてきた時に「叩いたらママ痛いよ、ケガしちゃう。やめて、叩かないよ」と母が言うと「ママが〇〇って言ったから、嫌だった」と拗ね、「ごめん、ごめん、ママが悪かったね」と頭を撫でていました。

別の子が、検査前に照れて机の下に隠れると、

「何？照れているの(笑)」

さあ出てきて、ここに座ってください」

とお母さん。

判定員側も笑いながら



「照れちゃうね、緊張するよね」と言うと、

その子は笑顔で机の下から出てきて、判定員と手をつないで検査をする部屋に向かいました。

「おっ、行けましたね」と驚いて、母に声をかけると

「ちょっと前なら、私が一緒じゃないと絶対に行けなかったんです、すごい!!」

「かわいいですね」

「本当、子どもがかわいくて仕方ないです。親バカなんですけどね」と教えてくれました。

療育教室に通い、いろいろな人と関わるようになってから知らない場所を受け入れられるようになってきたそうです。新しい場面でパニックになることもあったそうです。このままではいけない、この子のために動かないといけないと始めたのが療育教室だそうです。療育手帳の判定をするこの場所も初めて来た場所でした。

外の世界のルールを子どもに教えていくことは、必要です。だからこそ、子どもが思うように行動できないと、漠然と将来に不安を感じてしまいます。さらに、他の子ができてうちの子ができないと不安を煽ってしまうと、子どもとの関係が悪循環に陥っていきます。時には、子どもに強く言い過ぎてしまうことは誰にでも起こります。その時は、自分は他の子とうちの子を比べていないだろうかと考えてみてください。それだけで、少し冷静になれます。少々の失敗を親がしても、それを子どもに謝れば、子どもは親でも失敗して、やり直せることを学びます。親が完璧である必要はありません。

子どもを叱らなければならない時もあります。子どもが成長し、大人になった時どんな人になってもらいたいですか。ちゃんとかわいがられた子は、社会の中に入っても誰かに助けを求めたり、周りから支えられる人になる力を持つようになると感じます。子どもが荒れて大変な時もあるでしょう。でも、かわいがられてきた子は人を受け入れる力を持っています。私たちが、子どもをかわいいと思って子どもに接すると、その子は言葉にしなくても全身でそれを感じ取ります。それが、子どもを大事にすることにつながり、親子のパワーバランスがほどよくなる第一歩でしょう。



周辺からの記憶 46

2022 年 双葉町のこと

村本邦子(立命館大学)

1月末、WIMA（早稲田大学災害復興医療人類学）の定例研究会で、早稲田大学の学部生2人が、卒業研究を報告してくれた。福島原発事故後の原発教育の実態や課題についてである。「大熊町立学び舎ゆめの森」の校長、「ふたば未来学園」で原子力防災・伝承探求ゼミを担当している先生、福島県の小中学校の先生たちにインタビューしたもので、とても興味深い内容だった。おそらく若い学部生だからこそ聞くことのできた内容だろうと思われる。

「学び舎ゆめの森」は、大熊町立のふたつの小学校と中学校を統合させ、2024年4月にできた。認定こども園、預かり保育、学童保育の側面を持ち、0歳から15歳の子どもたち39名が通っている。クラスルームも時間割もなく、子どもたち自身が学習進度を決める。およそ6割が県外からの移住者で、学校の敷地外はまだ線量が高いため、子どもたちはdoor to doorのスクールバスで通学しているという。

「ふたばみらい学園」は、双葉郡の5校が廃校になり、2015年、広野町に新たに設立された。中学6学級（179名）、高校15クラス（450名）で、計21クラス629名が在籍している。6つのゼミがあって、そのうちひとつが原子力伝承ゼミである。子どもたちは自由に活動し、コンピューターゲームでイチエフを作ってみたり、廃炉はできるのかについてさまざまな立場の人を呼んで座談会をしたりする生徒がいるそうだ。

福島県の小学校で教えながら、あちこちで哲学カフェをしている先生によると、原発事故の被災地では他の地域とずいぶん様子が違って「生きるとはどういうことか」が話題に出ると言う。また、復興が進められている裏で被災世代の子どもたちは落ち着きがなく、事故時の大人たちに余裕がない状況で育ち、現在も教員に子どもたちを十分サポートする余裕がなく、「ただ子どもたちの頭を撫でて話を聴いてやりたい」という言葉が印象に残った。

私も先生たちの話を聴かせてもらったなと思い出しながら、今回の記録をまとめた。



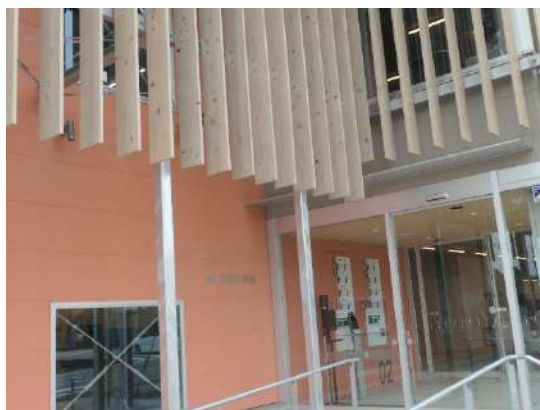
双葉町を訪れて

双葉町では、いよいよ 2022 年 9 月 1 日から帰還が開始された。9 月 5 日、駅前の新築町役場庁舎を訪れたが、100 人の職員が戻って働いているそうだ。帰還所帯数は 2 家族だという。駅前に新しく建てられた住宅ゾーンには、順次住民が戻ってきたり、他県からの新規移住者がある予定らしい。9 月 3 日に交流したみやぎ民話の会会員で、元双葉町民の目黒とみ子さんが、いわきにある双葉小中学校を訪ねて欲しいと提案してくださった。また、双葉町役場いわき事務所秘書広報課の A さんを紹介してくれた。せっかくなので 1 年先まで待つよりはと、9 月 6 日のプロジェクト終了後に足を延ばした。

まずは、双葉町役場いわき事務所へ。A さんは元保育士で、目黒さんの娘さんの担任だった。それ以来のおつきあいだそうだ。A さんによれば、双葉には 70 人ほどが戻っており、リニューアルオープンした双葉町役場には百人の職員がいるという。帰還困難区域（住民しか入れないところ）も案内できると言ってくださり、貴重な資料を頂いた。双葉町が制作した『ありがとうメッセージ』（2020 年）と『双葉町 東日本大震災記録誌 後世に伝える震災・原発事故』（2017 年初版、2021 年第二刷）である。せっかくなので、この 2 冊をもとに双葉町の東日本大震災の状況をまとめてみる。

私たちのプロジェクトでは、立ち入り禁止区域に入ることにはしてこなかったのですが、双葉町について話としては知っていても、

直接訪れて具体的イメージが持てるようになったのは、大震災から 9 年が経過し、双葉町の一部区域で避難指示が解除され、特定復興再生拠点を含む当該区域内に自由に立ち入りできるようになって以降である。初めて行ったのは、2020 年 9 月 20 日に原子力災害復興伝承館がオープンし、9 月 24 日だった。





双葉町の東日本大震災

震災前の双葉町

双葉町は福島県沿岸部のほぼ中央に位置し、東に太平洋、西に阿武隈山系をのぞむ海と山に抱かれた自然豊かな町だった。2011年3月11日時点での人口は7,140人、町の面積は51.42平方キロメートル、比較的温暖で冬でも積雪は少なく恵まれた環境である。地域のつながりが強く、夏に行われる盆踊りは17に分かれた行政区単位で開催され、お囃子は地区によって微妙な違いがあるという。

双葉町のダルマ市は江戸時代から伝わる新春恒例の伝統行事で、毎年1月の第2土曜日と日曜日にダルマ市が開かれた。今年の運勢を占う巨大ダルマ引き合戦も行われた。当時のJAふたば女性部双葉支部ダルマ部会の会員がデザインし、30年ほど前から作り始めた双葉町のダルマもある。このダルマ市では、初発神社境内で奉納神楽大会が開かれていた。また、双葉町の同好の士が集まり、1992年に結成された標葉（しねは）せんだん太鼓保存会は、週2回の練習を欠かさず太鼓を打ち、県内はもちろん全国各地のイベントで演奏してきた。

「相馬野馬追」標葉郷は浪江・双葉・大熊の3町で構成され、妙見小高神社に奉納している。

巨大地震と津波の襲来

3月11日午後2時46分、巨大地震によって震度6強の激しい揺れを観測、多くの家屋が倒壊し、道路はいたるところで寸断されるなど、大きな被害を受けた。さらに、地震発生から1時間後、沿岸部に15メートルを越える津波が押し寄せ、建物や農地を呑み込んだ。注文洋服店を営んでいた（元）消防団長釘野雄一さんは店舗が倒壊し動けなくなったが、周囲の協力で助け出され、治療も受けず無我夢中で消防団活動を行った。地域の基幹病院である双葉厚生病院には怪我人が運び込まれた。病院の建物も被害を受けたが、停電は免れ、残された機能を駆使して医療活動を継続した。夕方から夜にかけ津波に呑み込まれた人が次々に救急搬送されてきた。時間が経つにつれ重傷者が運び込まれた。トリアージを行い、朝までに60人の治療を行った。DMAT（災害派遣医療チーム）の支援で、夜中、陸路で転院搬送し、夜明けを待って防災ヘリコプターと防災ヘリで緊急搬送した。死者20人、不明1人、奇跡の生還を遂げた町民もいた。

学校や公民館に避難所が設けられ、3月11日22時45分現在で、双葉中に600人、双葉北小に700人、ヘルスケアふたばに280人、町役場に118人、各地区の公民館も解放され、避難する町民は約2,500人となった。原発事故までに町民の1/3が避難所に駆け込んでいたことになる。

東京第一原子力発電所の事故と避難勧告

大規模な地震と津波により、双葉町と大熊町にまたがる東京第一原子力発電所では、1号機から4号機の浸水高は11.5メートルから15.5メートルに達し、非常用ディーゼル発電機が水没し、「全電源喪失」という最悪の事態になり、原子炉を冷却する機能を失った。

3月11日19時3分、政府は「原子力緊急事態宣言」を発令し、20時50分、福島第一原発から2キロ圏内の避難、21時23分、3キロ圏内の避難、3~10キロ圏内の屋内避難を指示した。翌日の3月12日5時44分には、1号機の中央制御室で放射線量が上昇し、避難指示は10キロ圏内に拡大した。9時過ぎ、1号機の原子炉格納容器内の圧力が上昇したため、放射性物質含む気体を逃す「ベント」操作が開始された。15時36分、1号機の水素爆発、18時25分にはさらに半径20キロ圏内に拡大して住民に避難指示が出された。

14日には3号機が水素爆発、15日には衝撃と振動が起き、2号機で圧力抑制室の圧力計の数値がゼロを示し、経済産業省原子力安全・保安院は「放射性物質が漏洩する恐れがある」と発表した。15日は4号機で原子力建屋が大きく損傷していることが確認され、その後、出火していることが確認された。一連の事故で、大量の放射性物質が大気中や海に放出された。4月12日、経済産業省原子力安全・保安院は、事故の深刻度をINES（国際原子力事象評価尺度）の暫定評価で、チェルノブイリ原発事故に匹敵する最悪の「レベル7」に相当すると発表した。

井戸川町長と川俣町への避難指示

地震が起こった時、井戸川克隆（元）町長は、富岡町に出張中で、双葉地方会館から出たところで強い揺れに襲われた。町長は過去に福島第一原発2号機の格納容器組み立て現場にいたことがあり、当時、頻繁にトラブルが起き心配していた。国道6号が混み始めた頃、「浜街道」を通り、急いで双葉町に帰った。11日16時27分、災害対策本部を開いた。避難所回りをしていたところに、郡山地区の住民がいて、2キロ避難指示が出ていたことを知った。

12日の朝までに災害対策本部会議を5回ほど開いていたが、朝5時、被害状況の確認、各避難所への職員の割り振りなど協議した後、役場の外に大勢の自衛隊員、警察官と関係車両がたくさんあり、総務課長は「これは何事か」と思ったという。半径3キロ圏内に避難指示、3~10キロ圏内に屋内避難指示が出ていたが、それ以上に重大なのではと感じ、原子力担当の企画課長に問い合わせても、東電などから連絡はないという返事だった。

政府は、その後、朝の5時44分に10キロ圏内の住民に避難指示を出した。この時点で、双葉町には何の連絡もなく、井戸川町長は6時過ぎ、役場にあるテレビのニュースでこれを知った。10キロ圏内は町民全員が該当する。役場は騒然となった。それまでの避難訓練では3キロ圏内避難指示のシナリオしかなかった。

朝から風向きを見ていた町長は、原発から50キロ離れた川俣町への避難を決め、川俣町長の了解を得た。7時30分には災害対策本部会議で最終確認し、7時40分頃から、

町防災無線と役場庁舎内に広報を実施した。川俣町への避難は町民がそれぞれマイカーで行くよう判断し、通行可能な道路や避難ルートを広報した。国が手配したバスのうち 5~6 台が役場にきた。2~3 台をヘルスケアふたばへ、残り 2 台を双葉北小から県警の防護車で町民約 100 人が避難していた浪江町の荊野小学校に向かわせた。しかし、地域によっては防災無線が聞こえないところもあり、情報も錯綜した。正午頃、海から双葉町役場の方に風が吹き、13 時頃には原発からの風が吹き始め、線量計の数値が急上昇し、14 時頃、町長は役場の閉鎖を指示して最終的な退避命令を出した。

3 月 13 日 6 時現在、福島県警災害対策本部によると、原発 10 キロ圏内の施設に約 250 人が残っていた。自衛隊のヘリコプターなどで順次、区域外への搬送を進めたが、病人や高齢者の搬送は当然ながら容易ではなかった。双葉町社会福祉協議会事務局長の井上一芳さんの証言によれば、ヘルスケアふたばの避難者 200 人が避難した後、社協職員とデイサービス利用者約 50 人が残ってしまい、被爆のリスクを考えて、年齢の低い職員を帰らせた。正午過ぎ、双葉高校にヘリが来ていると聞き、50 人のうち介護度の高い 15 人を職員とともに向かわせた。15 時 36 分、水素爆発し、まるで雪が降ってくるように、社協の建物は爆発の社屋片と見られるごみに覆われた。線量計の針は振り切れた。その後は、屋外に出ないようにしたが、南東の風が西風に変わると、わたごみはいつのまにか飛ばされていた。「ここでは駄目だ」ということで、社協と町のバスを使って、16 時過ぎに全員で川俣へ向かった。井上さんは、避難

指示の内容が十分にわからないまま、建物内での待機中に被曝させてしまったことが残念でならないと言っている。

双葉厚生病院でも、緊急事態宣言や避難指示が出された後も、通報はなく、大半の職員は何も知らないまま 12 日の朝を迎えた。重症患者への診療体制を検討していると、防護服を着た警察官がやってきて、詳細な説明はないまま避難勧告が出された。自力移動可能な患者から避難させるが、屋内退避の指示で中断され、正午過ぎに再開されて、ようやく 13 時 20 分すぎにはバスによる避難が完了した。病院内には職員 56 人と重症患者や寝たきり患者 40 人が残った。県の対策本部から連絡が入り、ヘリコプター搬送のため自衛隊車両が重症患者の搬送を始めた。それぞれがバスやヘリでバラバラに移動し、他の人々がどこへ向かったのかわからないまま、職員は安否確認に奔走した。全員の安否が確認されたのは 16 日で、避難先は青森から九州まで全国に広がっていた。入院患者のカルテ程度しか持ち出せなかったため、3 月 24 日、4 月 18 日に双葉町に戻り、重要な書類や使用可能な機器を持ち出した。病院の職員は避難者受入れのあちこちの病院に分散して勤務した。



埼玉県への避難

3月14日、3号機が水素爆発し、川俣町に避難していた井戸川町長の線量計の数値が上がった。川俣町の避難所は7ヶ所あり、待遇が違ふと苦情も出ていた。町民も職員も疲れていた。「ただちに影響はない」と繰り返す国への苛立ちもあり、町長は新しい避難所を複数探すとして独断で決めた。知人の情報網を活用し、町民を放射能から守り、まとまった場所で一緒に避難できる環境を確保することを目的に、埼玉県への再避難を決断した。人口の多い地域の方が、ボランティアや物品などの支援も受けやすいとも考えた。18日に災害対策本部会議で協議した後、町長は自分のパソコンで町民へのメッセージを送った。3月19日、川俣町へ避難していた町民4,000人のうち約1,200人がバス40台でさいたま市にあるスーパーアリーナへ移動した。埼玉県知事、さいたま市長に迎えられ、スーパーアリーナの使用は3月31日までで、その後は加須市の旧騎西高校を準備しているという説明を受けた。スーパーアリーナでは大勢のボランティアの支援を受けつつも、厳しい避難生活が続いた。

3月20日、スーパーアリーナに役場機能を設け、20日から安否確認など24時間体制で相談受付を開始した。22日、町長は次の避難所となる騎西高校を視察し、これを評価、23日の町議会協議会全員で了承した。3月30日、31日にはスーパーアリーナから埼玉県加須市の旧騎西高校に避難した。ここには最大1,400人が暮らし混雑を極めたが、町民自ら共同生活のルールを作った。一方で、県内に留まりたいと県内への避難を希望した町民も多く、双葉町から西に百キロ離れた猪

苗代町にある「ホテルリステル猪苗代」が福島県内の避難場所となり、約800人が避難した。県外に自治体が設けた避難所に身を寄せたり、親族・知人を頼って自力で避難場所を確保した町民もいた。双葉町は7,140人の全町民が避難した。

4月20日、避難指示が出ている半径20キロ圏内について、立ち入りを禁じる警戒区域に指定する方針が決まり、21日、一時帰宅の条件が決まった。一時帰宅は2時間以内、1家族1人だけだった。4月25日、福島県警は第一原発から5キロ圏内となる浜通りの行方不明者の集中捜索を始めた。5月26日、20キロ圏内の初めての町民の一時帰宅が始まった。

町は、広報ふたば「災害版」を6月1日付けで発行した。町民から「見捨てられていないと嬉しかった」と感謝の声が寄せられ、2012年1月号からは従来の情報量となり、2013年5月号からは町民の近況を聞き書きした「ふるさと絆通信」が始まっている。

役場と学校をいわき市へ

2011年6月からは県内9ヵ所に応急仮設住宅の建築が始められ、借り上げ住宅も設けられた。9月30日、第二次避難所として使われていたリステル猪苗代の避難所が閉鎖された。残っていた120人は、白河市内などの仮設住宅や郡山市などの借上住宅町に移動した。町は、役場本体機能がある埼玉支所のほかに、福島県内に町民を支える拠点として、2011年10月28日に郡山市に「双葉町福島支所」を設置した。なお、旧騎西高校の避難所が閉鎖されたのは、最後まで生活していた

町民が借上住宅に移った 2013 年 12 月 27 日だった。

2013 年 2 月 13 日、町は国から避難区域の区域再編についての説明を受け、双葉町の 96%を帰還困難区域、4%を避難指示解除準備区域とする案を示した。前日の 2 月 12 日、井戸川町長が退任し、井上一芳副町長が代理者となり、3 月 10 日伊澤史朗氏が町長となった。その後、役場本体機能を福島県内に移転することが決まり、2013 年 6 月 17 日、いわき市に新築の仮庁舎「双葉町いわき事務所」を開所した。埼玉県加須市の旧騎西高校は、役場本体機能移転後も避難所として利用され、2013 年 12 月 27 日にその役目を終えた。応急仮設住宅等への住居移行は避難の長期化を示唆し、町民に様々な負担がかかった。町も、除染や賠償、学校再開などのほか、双葉町外での町政を進めるための調整や各地に散り散りになった町民への情報伝達など多くの課題に直面した。

2014 年 4 月、いわき市錦町の旧東邦銀行上田支店西木出張所内の仮校舎で町立幼稚園と小中学校が再開されることになり、双葉南小 7 人、双葉北小 3 人、双葉中 8 人、双葉幼稚園 2 人の計 20 人が人事異動で着任した。4 月 7 日の入学・入園式はいわき市勿来市民会館で行われ、園児 1 人、小学生 4 人、中学生 6 人の計 11 人が臨んだ。みな、避難先の学校に通っていたが、3 年ぶりの再開となった。仮校舎は 8 月 25 日に完成した。なお、双葉高校は 2012 年 4 月よりいわき明星大学に仮校舎を置き、2013 年 10 月 12 日創立 90 周年を祝ったが、いていたが、生徒数減少のため 2017 年 3 月で休校となった。

復興に向けて

2015 年、町復興推進委員会が町民の生活再建と町の復興に向けた最終報告をまとめた。3 月 1 日に常磐自動車道常磐富岡-浪江 IC 間 14.3 キロが開通し、埼玉県と宮城県を結ぶ総延長 300.4 キロの前線がつながった。5 月 20 日、環境省による本格除染が始まり、2016 年 11 月 25 日、福島第一原発事故で出た県内の除染廃棄物を保管する中間貯蔵施設の本体工事に着手した。中間貯蔵施設は双葉・大熊両町にまたがる第一原発を囲む訳 1,600 ヘクタールの敷地に建設し、最大で役 2,200 万平方メートルの廃棄物を保管する。中間貯蔵施設の建設については、2013 年 8 月に県が受け入れを容認、12 月に大熊町が、2014 年 1 月に双葉町が受け入れを容認した。2016 年 12 月末現在で、地権者 2,365 人のうち土地の売却や地上権の設定に合意したのは 580 人、契約済みの面積は予定地の 15.6%、環境省は担当職員を増やして交渉に当たっているという。なお、新聞報道によれば、環境省は汚染土の保管に必要な用地の確保にめどがついたとし、地権者との買収交渉を 2021 年 3 月末で原則終了する方針を固めた（読売新聞オンライン 2020/12/11 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20201211-OYT1T50123/>）。

東日本大震災から約 9 年が経過した 2020 年 3 月 4 日午前 0 時、双葉町の一部区域で避難指示が解除され、特定復興再生拠点を含む当該区域内に自由に立ち入りできるようになった。3 月 7 日には、常磐自動車道・常磐双葉インターチェンジが開通、3 月 14 日には J R 常磐線双葉駅が営業再開した。さらに、就労者向けの福祉厚生施設を兼ね備え

た「双葉町産業交流センター」と「東日本大震災・原子力災害伝承館」がオープンし、「復興祈念公園」が整備されつつある。一方で、中間貯蔵施設の整備エリアに該当し帰る家がなくなってしまう町民や、いまだ復興計画が示されておらず帰還の見通しが立たない、拠点外の帰還困難区域の町民もいる。



双葉小中学校を訪れて

子どもたちの暮らし

その後、双葉小中学校を訪問した。中学のX校長は、中学生を連れてちょうど避難解除された双葉に行っておられるとのこと。初めは、双葉町立双葉南・北小学校Y校長がお話してくださった。現在、中学校在籍生徒は9名、小学校在籍児は29名という現状である。いちばん長くスクールバスに乗っている子は片道1時間かけて来る。地元に戻った学校でも、避難先から通学していたりするので、震災後、双葉郡の学校では結構そういうところがあった。ク

ラブ活動などは難しく、双葉中学校ではバトミントン部だけある。

避難暮らしが長引き、多くの子どもたちは双葉町で生活したことがない。自分たちの故郷は双葉町だと頭ではわかっているも、子どもたちにとっては今住んでるところが自分の故郷かもしれない。大人にとっては、どうしても避難しているという意識が強く、感情的には、避難させられているという気持ち強い。そのため、現住所をいわきに転出する人もいないわけではないが、それほど多くない。

子どもたちの交友については、学校の友達はバラバラ、地元の子との関わりも学校以外ではあまりない。中学校を卒業した子どもたちは、この地域で高校進学や進路選択をする。双葉郡に5校くらいあった高校はすべて休校になっている。いわき市の隣が双葉郡で、一番近い広野町にふたば未来学園高校ができたので、そこに行く子どもはいる。双葉郡はどの学校も子どもの人数が減っている。

双葉の現状としては、帰れるのか、帰って生活できるのか、役場だけは立派にできたけれど、そこで生活が成り立つかという問題がある。店もなければ病院もない。学校もない。そういったところにコミュニティが成り立つかというのは厳しいと思う、

子どもたちに双葉のことについても知って欲しいが、やはり年数が経ち、教員の記憶も薄れてきているし、双葉郡出身の教員だけではなく、いわき市の教員もいる。震災で原発事故と避難を経験している人はだんだんと少なくなっている。そういうことを伝えていくには学習しかない。X校長は

双葉出身なので、自分の役割だと思っているとのことだった。

初めての双葉町訪問

そうこうするうちに、双葉から帰って来た中学の Y 校長が合流してくれた。帰還制限が解かれ、今日はオープンしたばかりの双葉町役場や学校に中学生たちを連れて行ってきた。双葉中学出身の教員がいて、本人自身も震災後帰ったのは初めてで、驚いていた。人にもよるが、震災後一度も家に帰っていない人も多い。その教員は家を更地にした。以前は年に回数を決められてしか入れなかったし、防護服が必要だったり、15 歳以下は駄目など年齢制限があったりして、簡単に行って見てみようかというような状況ではなかった。

今日は中学生全員を連れて行き、1 キロぐらい駅周辺をぐるっと足で歩かせた。双葉出身の教員がいろいろ説明すると、子どもたちが一番反応したのはやはり学校だった。「ここに自分たちがいたかもしれないよね」という感覚だろう。学校では、その当時の掲示物がそのままあり、X 先生の娘さんのスケッチブックもあって、写真を撮ってきた。「ああ、ここでガーッときたんだ」「これ音楽が何かやってたのかな」「校庭にここからこう行って逃げたんだね」と子どもたちは想像を膨らませ、興味深々で、はしゃいでいた。

一方で、双葉中出身の教員は「うわー」とか「ここだー」とか「昔、先生に見つからないように、ここに掘ったんだ」など一言一言が重かった。音楽の教員がいきなりピアノで校歌を弾き始めたら、子どもらが歌った。行って良かったなと思った。やはり、映像とは

大違いで、目で見えて、感じて、臭い感がある。カビ臭いとか。「どうなったかな」と教員が何気なく家庭科室の冷蔵庫を開けたら、開けなければよかったと思っても時すでに遅し、もう凄まじい臭いが一瞬で充満した。

11 年経っているので、天井は落ちていたし、地震の影響や建物が風化して、地震で建物にそれほど被害ないようでも、地盤沈下して傾いているなどある。ガラスとかそういったものは多少整理されていた。

これから学校で、こういう行事を定期的に入れるかと教員と喋りながら帰って来た。現状、1 年後どれだけ進んだかという視点で持っていていいし、1 年生の女の子が「働きたい」とか「将来住んでもいいかな」とボロッと言ったが、職場体験をさせてもいいかもしれない。

X 校長は、「将来的には子どもたちと電車で行きたいと思っている。電車の景色も見える。今日中学生が行った中学校の校舎、私は第 1 期生で入っている」とのこと。Y 校長は、外部の出身なので、今回行ってみて、300 人足らずの生徒数でこれだけ教育にお金かけるんだなと圧倒されたという。体育館でバスケット 2 面とれて、ギャラリーもあり、それとは別に 2 階建ての武道館があって、中学校の 50m プールもある。

「まだまだですね。歩いてみて。これは住めない。住むっていう決断をしたの、進むっていう決断した人はすごいと思う。町長さんもやっぱり言ってましたね。本当にスタートラインに立った、スタートしたんじゃない、立ったという感じ」。学校に関してはまだ何も示されていない。町作りの第 3 次計画では、出された時には 2030 年に 2000 人が

戻ってくるのを想定して、帰還者はどういう人だとなると、ファミリーという言葉が初めてそこに出てきている。つまり、そこには子どももいる。2030年、どうなっているのか。町長さんとの話は、やはり将来ここに住んでという話になってしまうところがあって、ふるさと教育総合学習、探究的な学び、何で進めようか、テーマにどれだけ時間かけてやるかなど。地元の方、実際に町に戻って頑張られている方のお話を聞く機会は多くなった。それでも、子どもたちにとっては自分ごとにするのは難しい。だから、今日みたいに、現地に行ってみせて、感じて、「将来住んでもいいかな」という言葉を聞いただけで大成功だと思う。



課題としてあること

小学校の新入学はあるが、今年は3人。一番多い学年で7人。教員は小学校は2つ合わせて20名、中学は11名、移動もあるから、思いもだんだんバラバラで、それも課題になっていくと思う。

案外そういう機会が多く設定されているので大人とはしゃべれるが、中学生同士のコミュニティがない。いわき市の中学生との交流も、塾で何人かと会うというくらい。先日、小名浜にイオンができて、子どもたちが連絡取り合って、「何時にあそこに行こうよ」と言っているのを聞いて嬉しくなった。普通のことなのに、ここに来て2年目になるが、そんな話はこれまで聞いたことがなかった。卒業して高校に行くと、うまく馴染めるのか心配している。去年の卒業生は1人で、たとえば成人式の時、他に誰もいない。そんなことも心配になる。当時中学生とか思春期だった子どもが大人になって、ある程度の年齢になっても苦労している子がいる。環境の変化に馴染めないとか、自分の存在意義は何なのかとか、なんでここにいるんだとか、まだ心の整理がつかないというような方は結構いるように感じる。

放射線に関しては、一時期よりは怖さとかは下火になってきている。毎年中学校では専門の方が来て放射線教育がある。だから、大人の方が不安があるかもしれない。親御さんも心配かもしれないが、県の検査は何回も来る。ここにいる間はここにいる中で何ができるか、戻ったら戻ったで、そういう教育も必要かもしれない。

大変な状況下を生き抜き、いまだに何も解決せず、課題が山積みになってしまっている双葉の子どもたちや家族のことを考えると、起きたことのあまりの酷さに胸が痛む。先生方の子どもたちへの暖かいまなざしには救われる思いがした。しかし、先生たちも人事異動でいつまでいるかわからない状態である。

双葉町役場の HP を見ていると、「広報ふたば」に子どもたちの双葉訪問の記事が出ているのを見つけた。

● 9月6日と7日、町立双葉中学校の生徒9人が町内で校外学習を行いました。6日は、J R 双葉駅東側地区を歩いて見学し、役場新庁舎では伊澤史朗町長と懇談の時間が設けられました。双葉中学校にも訪れ、震災から11年以上が経過した学校の状況を肌で感じていました。7日には、浪江町立請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館及び産業交流センターを見学しました。今回の校外学習は、「双葉町のいま～町に行って知ること、感じること、学ぶこと」をテーマとした総合的な学習の時間の一環で行われ、生徒たちはこれまでの調べ学習と今回の校外学習を基にまとめの学習をし、10月には町立学校で行われる梅檀祭で、12月にはふるさと創造学サミットで学習の成果を発表する予定です。（広報ふたば 2022 年 10 月災害版 N0.137）

● 9月6日、双葉中学校の生徒9人は校長先生はじめ教職員9人の引率により校外学習として双葉町を訪れました。掲げたテーマは「双葉町のいま～町に行って知ること、感じること、学ぶこと」、そして、復興の現状を知り、町に対する思いやこれからの自分の生き方を考える機会とすることを目的として実施されました。生徒の皆さんと先生方が応接室に通され、伊澤町長から歓迎の言葉と双葉町の復興についてお話しをいただきました。何よりも伊澤町長の満面の笑顔が印象に残りました。生徒たちの輝く眼差しを見て、町の将来への興味・関心の高さが伝わってきたからだと思います。役場の業務や、町西側に展開する住宅ゾーンについて質問があり、伊澤町長から丁寧に説明いただきました。その後は、双葉中学校の校舎内も見学。音楽室では、音楽科教諭のピアノ伴奏で校歌を全員で歌い感激したと担当職員より聞きました。2日目は、浪江町立請戸小学校や東日本大震災・原子力災害伝承館、産業交流センターでの学習で、大変有意義な校外学習になりました。ふたばプロジェクトの職員にアテンドいただき、貴重な学びを体験できました。ありがとうございました。

（広報ふたば 2022 年 10 月災害版 N0.137）

その後、小学生たちも双葉町を訪れたようだ。

9月29日、双葉南・北小学校の5、6年生13人が見学学習で町内を訪れました。児童たちは、産業交流センターおよび東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、役場新庁舎では平岩弘副町長から町の状況等について説明を聞きました。その後、職員の案内により新庁舎内とJR双葉駅西側に整備中の駅西住宅を見学し、庁舎の特徴や各課の業務内容、駅西住宅の整備状況等について資料と見比べながら説明に熱心に耳を傾けました。今回の見学学習で学んだ内容は、12月に開催されるふるさと創造学サミットで発表する予定です。（広報ふたば2022年11月災害版N0.138）

井戸川裁判

井戸川克隆（元）町長のその後である。町民を被曝から守るために200キロ以上離れた埼玉県に住民を避難させた2年後の2012年12月町議会によって不信任決議案を可決され、町長を辞職している。放射能汚染をなかったことのように進む福島復興に抗い、避難指示区域の再編、中間指針、中間貯蔵施設といった政府の方針を「受け入れる理由がない」と拒んだためである。さらに漫画『美味しんぼ』誌上で

「鼻血の原因は被曝」と話したため、猛烈なバッシングに遭い、メディアからその名前は消えた。

井戸川は、2015年、「当時町長だった立場からしか訴えられないことがある」と、一人で国と東京電力ホールディングスを相手取り、東京地裁に損害賠償訴訟を提訴した。周囲から人は離れ、2度にわたり弁護士とも離別した。最高裁判所は2022年6月、原発事故被害者の集団訴訟について国の責任を認めない判決を下した。ますます四面楚歌の様相を呈している。（福島原発事故、「現代の田中正造」は何を訴える1審だけで9年、「井戸川裁判」傍聴記 東洋経済 ONLINE 2024.10.24.,25

<https://toyokeizai.net/articles/-/835100>)

とは言え、先に紹介した町の記録集に記録されている井戸川の姿勢には元町長に対する敬意が強く感じられるものであった。



つづ

精神科医の思うこと③⑥

『患者さんからの手紙』

松村 奈奈子

先日、2年程前に治療を終了した患者さんから診療所に海外からの手紙が届いていました。20代の女性で、初めて会った時は自暴自棄な生活でしたが、一緒に未来を考え、彼女が海外に飛び立つ決断をした時に診察を終わりにしました。その後、彼女が悩んだり行き詰ったり、でも前にちゃんと進んでいる経過が便箋4枚にびっしり書かれていました。「何回も先生の事を思い出した。辛い時は私の心の支えになっています」と書かれていて、じーんと心に来るものがあり、ちょっぴり嬉しくなりました。

こんな感じで時々、患者さんやその家族からお手紙をもらう事があります。いろいろ思う事もあるので今回のテーマは「患者さんからの手紙」

初めて手紙をもらったのは研修医の頃、高齢の女性が認知症になりちょっと興奮があったので、薬剤調整のため入院されていて、退院した後に夫である男性から届いた「患者さんの家族」からの手紙でした。病状説明のために夫を病院に来て頂いて二人で話した時の事を「病院に呼ばれたとき、てっきり怒られると思ってビクビクして行ったら、さらっとした若い女の先生で入院前のしんどかった事もわかってくれて、ほっとした」というような内容が書かれており、「入院のおかげで落ち着いた妻と、これからまた一緒に生活していく」と感謝の言葉が丁寧に綴られていました。お薬の調節をただけで、特にそんなお礼を言われる程の事はしていないのに、自分の中では意外でした。「さらっとした」という表現も悪くない感じで、年上の方にそう思っていただけんだーと、初めてのお手紙は、とても嬉しかったのが忘れられません。30年程前の手紙ですが、大事にとってあります。

患者さんからもらう手紙は、診察が終了した時か、私が違う病院に転勤した時かで、実際には会えない関係で届きます。通院している時は直接話せばいいので、そりゃそうですね。たいがい「ちゃんと頑張ってるよー」という報告手紙で「報告ありがとー」という気持

ちで読んでいます。

手紙は勤務先に届き、みんな住所を書いて送ってくれるのですが、私は、お返事を書かないことにしています。治療のゴールは私以外の家族や他人にちゃんと言葉で依存して支えてもらって、幸せに生活してもらう事なので、お返事を書くことは私の思いとは逆の方向になっちゃうからです。でも「お手紙ありがとー」という気持ちで返事を毎回書きたくなるのですが、私がずっと支える事は出来ないで「いろんな人に支えてもらって幸せにねー」という思いで、お返事は我慢しています。

ただ、患者さんからの手紙、やっぱり嬉しいので私は「患者さんからの手紙箱」を作って、大切に持っています。今回、久しぶりに箱を開けてみてニヤニヤしちゃいました。

一番記憶に残っている手紙は、小学 5 年生の女の子からの手紙です。

彼女の父母は数年前に離婚し、普段は母親と生活し、夏休みは遠くに住む父親と過ごすというスケジュールで毎年過ごしていました。ところが夏休み前に急にご飯が食べれなくなって、精神科を受診しました。スケジュールから考えると、父親の所に行きたくないのでは？という推測が立ちますが、母親は「この子は父親の所に行くのを楽しみにしているのです」と言い、本人も横で頷きます。体重がどんどん減って、とうとう本人も納得して夏休み入院となりました。

いざ小児科病棟に入院すると「やっぱ、退院する」と泣き出したり、看護師さんを困らせたりします。母親はしっかりした方で「体重が増えないと退院はダメ」と毅然と対応し、とうとう本人も「治療」に向き合う気になったのか、直後の診察でしんみりと話を始めました。

入院する 1 年前の夏休みに父親と過ごしていた時の事です。父親には新しい恋人がいて、恋人は優しい人で嫌いではなかったと言います。ただ、ある夜に激しい雷雨がやってきました。大きな雷の音が怖くなり、いつもは独りで別の部屋で寝ていたのですが、父親と恋人が寝ている寝室をノックして「怖いから一緒にいて欲しい」と父親に訴えたと言います。ところが「もう子供じゃないので、自分の部屋に戻りなさい」と父親は言い、雷雨の夜を一人泣いて過ごした。父親は好きだけど、もう、夏休みは父親の所に行きたくない…と話します。ああ、これが核心の問題だったのかぁと納得しました。「この事はお母さんには言えない」と言い、それもよくわかります。このエピソードを話して、母親が父親を非難するのも聞きたくないんだろうと思いました。

「食べれない」という症状は、父親も母親も傷つけずに、また雷雨の夜を独りで過ごさなくてははいけないという恐怖から、守ってくれている事になります。この話を聞いて「父親も母親も傷つけずに、これからの夏休みは母親と過ごせるようにはどうしたらいいか」を一緒に考えました。ついでに「もしかしたら、お母さんにも彼氏がいる？」と聞いてみると「そやねん。お母さんにも彼氏ができて、最近帰ってくるのが遅いし」「ゆっくり話できひんねん。おばあちゃんがいてくれるけど、おばあちゃんには、こんな話できひんし」と小学 5 年生の女の子となんだか話が盛り上がりました。お母さんのグチが出るころには、彼女の顔は笑

顔でいっぱいでした。その雷雨の夜のエピソードを話せた後より、食事はとれるようになり、夏休みの終わりを待たずに彼女は退院しました。

とってもシンドイ核心の悩みを話せた事で、症状がみるみる改善するのは、精神科ではよくある事です。悩みを人に話すというのは、なかなか難しいものです。まずは、その人を信用する事が必要で、それには時間がかかることもあると思います。

で、この小学5年生の彼女、治療終了後にお手紙をくれました。「先生は心配しているだろうから報告してあげる」「体重もバッチリだし、秋の体育祭も参加できた」「お母さんに何でも言えるようになったよ」「どうせ先生は返事をくれないだろうし、忙しいだろうから、返事はいいよ」とまるでこちらの気持ちを見透かしたような手紙でした。とても聡明な小学5年生の手紙に、私はとても感動しました。

今回、久しぶりに箱を開けて手紙を読み返してみると「お返事欲しいけど、それじゃダメですよ」「なんとか、がんばりまーす」って書いてある手紙があったりして、医師と患者の関係とはなんぞや的な事を、患者さんなりに考えていて書いたんだなあという思いも改めて気づきました。そして、多くの手紙に「先生は忙しそうだけど、ちゃんと身体に気を付けてね」とこちらを労う言葉が添えてありました。

医師と患者さんは治療関係ではあり、病院や診察室で完結するのが基本だと思います。でも精神科医は家族にも言えない秘密を共有する1人の友人のような立場になる時間があって、お互いを思いやる不思議な関係になってしまう事もあるのかなって思います。

私も友人などに手紙を書きますが、「手書きの手紙」って書くのに結構エネルギーがいるなあと思います。まずは下書きして、相手の事を考えながら便箋や封筒を選んで、書き損じが無いように集中して便箋に向き合ったりと、相手の事をちゃんとと思わないと書けません。

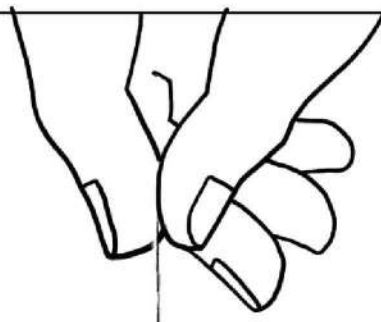
頂いた手紙はみんな「手書き」でした。ありがたい事です。ちょっぴり、フツーの人間対人間関係のような、治療者が一方的に患者さんを思いやるだけでなく、患者さんもまた治療者を思いやっている関係になっているのかなって思います。その思いを受け取ると、いつも嬉しい気持ちになります。精神科医の仕事は、大変な事もあるけど、いい仕事だなあと思います。

蜘蛛の糸

く

も

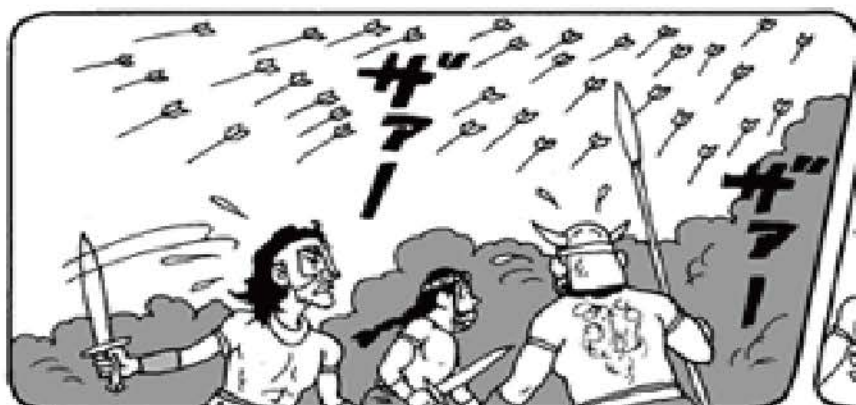
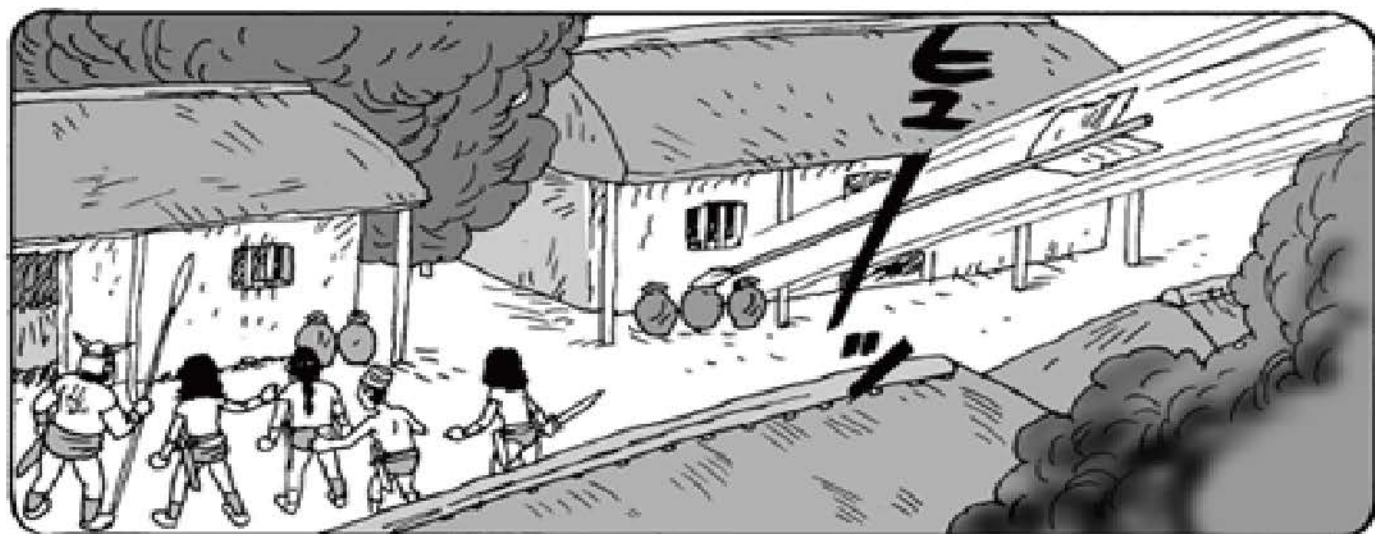
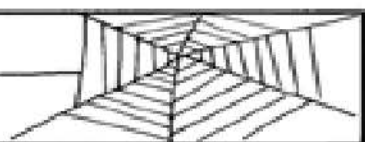
いと



原作 芥川龍之介
漫画 柳 たかを

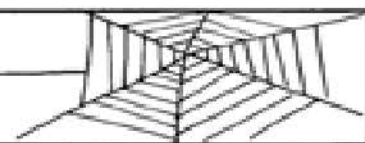


クモの糸





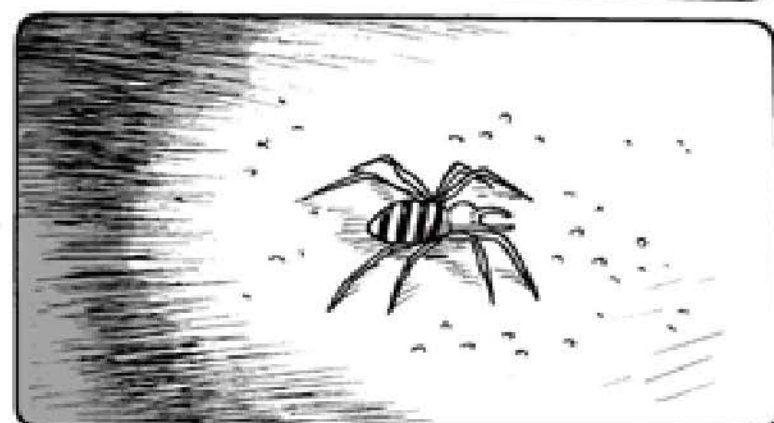
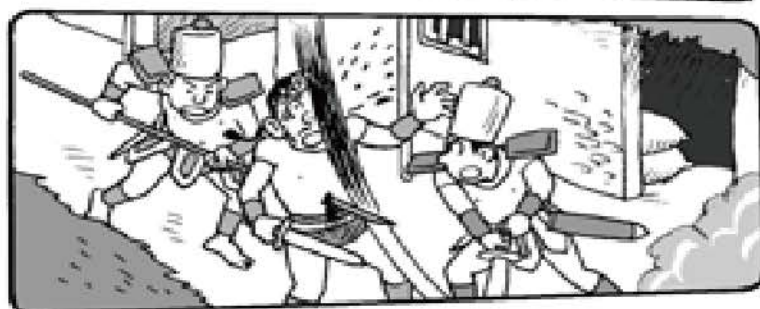
クモの糸



クモの糸



クモの糸



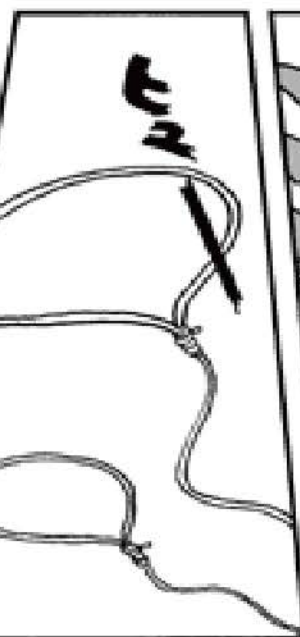
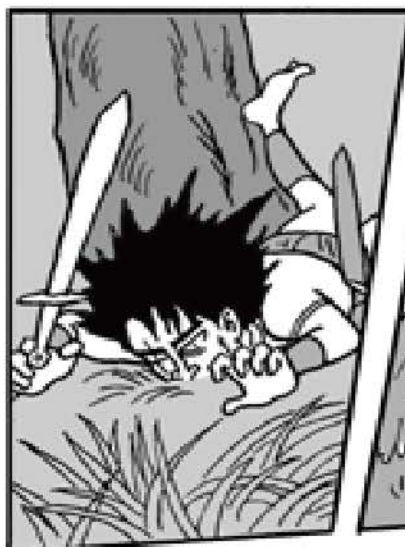
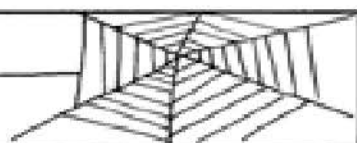
クモか
.....

クモの糸



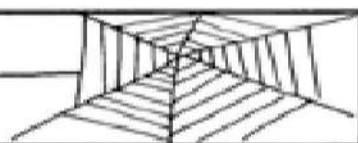


クモの糸





クモの糸



続く

心理コーディネーターになるために Vol.17

山下桂永子

☆教育相談が始まるまで

私が勤める教育センターでは月に1回程度、相談員と教育相談担当の指導主事が集まって、受理会議というものが行われている。そこではその1か月の間に行われた数件の初回面談を行ったケースについて検討する。以前は、初回面談の様子をまとめた受理資料の書面を担当した相談員が丁寧に読み上げた上で、検討事項を整理し、受理するのか、他機関へリファーするのかの検討を行っていたのだが、近年では相談申し込みの数が増え、1つ1つのケースにかける時間がないため、受理資料を読み上げる時間は割愛し、受理会議が始まる15分ほど前から参加者が集まって受理資料に目を通す時間を設けたうえで、1ケースにつき10分～15分程度で検討するようになっている。

また、受理会議と言う名前にはなっているが、受理するかどうかを検討するというよりは、受理することは前提で、教育センターでどのような支援を行っていくのか検討することが主な検討事項になっている。よって不受理になることや、他機関へのリファーとなることは少ない。

受理する前提で話を進めるのは、少し危険な考えではあると思う。しかしながら教育センターで受ける教育相談ケースは、そのほとんどが、学校園での対応がうまくいかなかった、あるいは学校園や、福祉や医療など他機関での検討が行われた上での教育センターにリファーされたケースである。すでに「教育センターで相談をするのがいいのではないか」と他機関と保護者の間で話が交わされていることが多い。

☆教育相談の申込を受ける時に気を付けていること

学校の先生や他の相談機関から教育センターを勧められるということが、保護者にとっては、まるで学校や以前の相談先から見放されたように感じたり、「うちの子は何かの病気なの？」と不安になられることがある。そんな葛藤の中、勇気を出して申し込みをされていることを意識



し、その思いを労いつつ教育相談の申込を受ける。



また、教育相談申込のときに、保護者から主訴を伺うのだが、そこではこれまでに学校園や、他機関への相談歴があったかどうか、スクールカウンセラーの利用状況なども伺い、それぞれの役割の違いを伝えたり、必要に応じて、他の相談機関の利用方法などの情報提供を行う。

他機関からの紹介の場合、保護者の了解を得て、他機関から先に教育センターに連絡がくこともある。紹介理由や他機関での相談状況などを伺い、その後、保護者から教育センターに直接電話で教育相談の申込をして頂くようにしている。というのも、例えば学校からの紹介のケースであったとしても、学校と保護者の問題意識や主訴が必ずしも一致しているとは限らない。それぞれの主訴を聴いたうえで、その違いにも留意して初回面談に臨む必要がある。

☆A くん の ケース

A くんは、小学 5 年生の男児である。活発で明るい性格だが、低学年のころから嘘についてトラブルを起こしたり、同級生の文具を盗むといった行為が見られる。学校は粘り強く指導を行いながら、保護者とも相談を重ね、スクールカウンセラーにもつながなど丁寧な対応を続けていたが、高学年になり、状況はますますひどくなっていった。そこで学校は教育センターに相談してはどうかと保護者にすすめ、母親が教育相談に申し込みをされた。

☆A くん の 初 回 面 談

初回面談では、A ちゃんと母から、それぞれの部屋に別れて話を聴いた。A くんはあまり緊張しない様子で部屋に入り、自己紹介をする。相談員は「ここは困っていることや気になることがあったときにお話をするとお話をした中身は先生やお母さんには内緒なんだけど、A くんは今日どうしてここにきたの？」と聞くと、A くんは初めは「わからん」と言っていたが、徐々に「嘘をつくから。。。とお友達が持っているものがうらやましくて、自分は持っていないのに持っていると言ってしまうことなどぼつりぼつりと話す。相談員は「悔しかったりすると嘘をつきたくないのについて言っちゃうんだね」と A くんの気持ちを受け止めながら話を聴いていく。面接の後半は工作やキャッチボールなどをして過ごした。終了時間になり、相談員は「ここで A くんが嘘をつきたくなっちゃうときやついちゃったときにどうしたらいいか一緒に考えたり、苦しい気持ちを楽にすることを一緒にしていけたらと思うんだけど、また来てくれるかな？」と問

いかけたところ、Aくんは「そうした方がいいかも」と話した。

☆Aくん母の初回面談

母との面談では、成育歴と主訴（相談申込表に書かれた「嘘をつく」こと）について、話を伺った。幼少期は落ち着きがなく、お出かけするとよく迷子になっていた。嘘は幼稚園のころから続いている。最近ではお友達との関係も悪くなり、お母さんも結局怒り続けるしかなく、「私が鬼のようになってしまうんです」と涙された。相談員は母の気持ちに寄り添いながら、今後Aくんへの心理発達の状況を把握し、Aくんへの関わり



方を一緒に考えていきたいことを伝え、継続面談を提案した。また、教育センターが学校と連携をすることで、より多面的にAくんのことを理解し、関わるができると思われたので、学校と連絡を取ってもよいかどうか聞いたところ、母も了承され、その場で継続面談を希望された。相談員から、継続面談に際しては、受理会議を通して担当者と面談の頻度や日時が決定されることなども合わせて伝えた。

☆初回面談で気を付けていること

初回面談は、支援よりも情報収集とアセスメントに重きがおかれる。また、教育センターでの対象児童生徒は3歳半からであるが、例え3歳半であっても、教育センターは何をするところかを説明し、なぜ教育センターに来たのか、保護者からなんと言われてきたのかなどの質問をする。守秘義務などについても保護者には文書を渡して説明し、丁寧なインフォームド Consentを行うことで、今後の取り組みの方向性を保護者や子どもとともに考えていく。

Aくん母の場合は、学校との連携を了承されたが、相談員が連携を提案しても、保護者や本人が連携を望まない場合もちろんある。その場合は、守秘義務についての確認と、保護者や子どもの了解を得ずに情報を他機関に伝えることはないことを確認しておく。

☆Aくんについて受理会議での検討

受理会議によって、Aくんへのプレイセラピーと母への継続面接が行われることになった。また、インテーク面接時の母の話やAくんの様子に、言葉での理解や表現、身体や手先の動きに課題があると推測され、そのことが嘘やトラブルを引き起こすきっかけになってしまうのかもしれないこと、今後心理発達のアセスメントを丁寧にすすめてい

く必要があること、学校との連携の必要性なども話し合われた。



☆受理会議で検討されること

受理会議では最初に述べたように、不受理になることはほとんどなく、今後の支援の方向性が決められていく。面談の頻度、日時、担当者などを淡々と決めて、短時間で終わることもあれば、複雑な事情があり、他の相談員からの質問や、見立てなどが挙げられてケース会議さながらにあれやこれやと意見が交わされることもある。発達検査や心理検査を取るのか、取るならどのタイミングがいいの

か、誰が実施するのがよいのかなどもそこで話し合われる。

また、参加者は心理士だけではなく、不登校担当の教員、言語発音の担当教員、教育相談担当の指導主事も参加しているため、現場の教員の意見や心理士の見立てに対する質問も出るため、とても豊かな議論の場になっている。

多少時間がかかることはあっても、意見が決裂することはない、相談員がそれぞれそのケースについて思いを馳せながら自由に意見が交わされている。誰かがやらなければならないこのケースをどのように理解し、支援していくのか決めなければならない。もしかしたら自分が担当になるかもしれない。もし今担当にならなかったとしても来年度にはなるかもしれない。担当者だけでそのケースを担当しているというよりは、そのケースを教育センター全体で抱えるという感覚に近いのかもしれない。

ベテランも若手も入り乱れ、とにかくいつもわいわいやっている受理会議は、相談員の力が試される場でありながら、研鑽の場にもなっていて、私にとっては楽しくも意義深いものとなっている。





ねこから目線。インパクトレポートを公開！

猫問題を解決するための社会的企業として、「ねこから目線。」を立ち上げて、6回目の決算を終えました。一般的な株式会社の場合は、「利益がどれほど出たのか」が実績として発表され、企業評価をされます。一方で、ねこから目線。のように、社会課題の解決をメインの目的とした社会的企業の場合は、ではなく、「どれくらいの影響を社会に与える事ができたのか」、という実績を発表することで、企業価値を評価してもらいます。その発表方法の一つが、「インパクトレポート」です。

これまでは、1年間のまとめ報告を簡単にHPのブログで実施することで胡麻化してきましたが、今回、はじめてインパクトレポート作成に挑戦しました。決算報告書と違って、テンプレートがあるわけではないので、色んな会社が出しているインパクトレポートを読んで、構成や見せ方を練っていきました。今回のマガジンでは、インパクトレポート作成の裏話と、レポートに載せられなかった心の声を書き綴っていききたいと思います！

表紙：読み物か、見せ物か



まずはインパクトレポートの方向性を決めなければいけません。それに伴って決まってくるのがサイズ感です。伝えたい事を沢山伝える為に、しっかり読み込んでもらう為の物であればA4縦が見やすいでしょう。しかし、文字数が多くなればなるほど、興味関心を持って最後まで読んでくれる

人は限られてきます。少ない人数でも深く理解してくれる応援者を作っていくのか、浅くとも多くの理解者を作っていくべきか。どちらが会社にとって、ひいては猫にとってメ

リットがあるのか、めちゃくちゃ悩みましたが、インパクトレポートを作る目的としては、より多くの人に、活動を知ってほしい、興味を持ってほしい。という思いが強いので、言いたい事、伝えたい事を極限まで減らす必要はありますが、A4 横サイズで写真メインの見せ物スタイルでいくことに決めました！

今回は、スケジュールと予算の関係から、デザイナーさんを入れることは諦め、素人でもそれなりに良いデザインを作れるアプリの Canva を使用して作成しました。Canva を選んだ1 番の理由は、「オシャレに見せたい」でしたが、実際に公開してみて、さらに良いなと思ったポイントがあるので、こちら共々共有します。1 つは、Canva 上で、「公開閲覧リンク」を作成できることです。そのリンクを送れば、添付ファイルなどしなくても Web 上で常に最新版を見てもらう事ができます。さらに2 つ目の良かったポイントとしては、修正箇所があとから出てきてしまっても、しれっと修正すれば以降インパクトレポートを見る人すべてに修正版を見ていただけるという加筆修正の楽さが後から直したいポイントが出て来がちな私には合っていました。

もくじ：構成

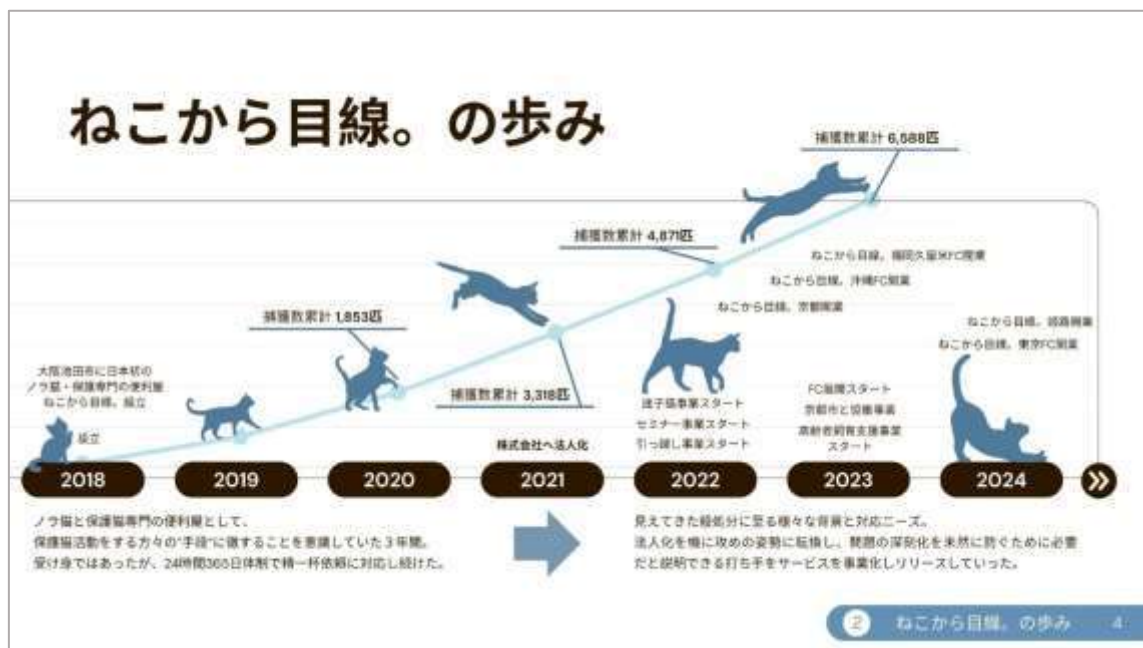


構成内容（何を載せるか、どういう順番で載せるか）も最後まで悩みに悩みましたが、ねこから目線。を知らないどころか、猫問題すら知らないレベルの方に見てもらっても伝わるように、構成を練りました。

ねこから目線。の自己紹介から



自社の PR ですから、まずは「ねこから目線。」について概要説明を入れました。ちなみに、初めは見出しをカッコよく「ABOUT US」にしていたんですが、中途半端な英語は分かりにくいし、むしろダサい。と言われ、「ねこから目線。とは」に落ち着きました。

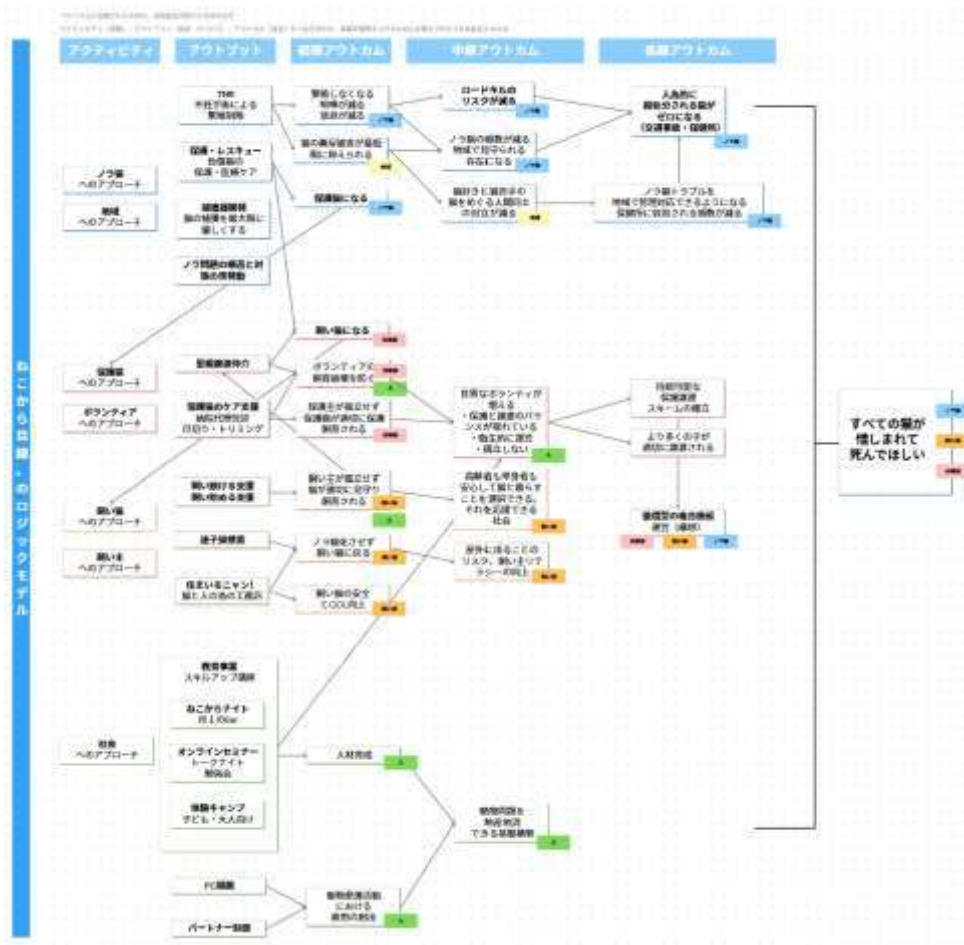


ねこから目線。のサービス



猫にメリットがある事なら何でもする「ねこの便利屋」として始まったねこから目線。ですが、7年目になるとサービスとして確立していくものが増えてきました。沢山乱立しているサービスをカテゴライズすることは結構大変な作業でした

が、自己理解にもつながっていい機会でした。来年こそは、「問題の構造」と、それに対応する「サービス」の2つのロジックモデル（提供するサービスが目的を達成するまでの論理的な繋がりを地図のようにしたもの）を作りたいです！今年は整理まで。



今後に来年に向けて鋭意ロジックモデル作成中です（まだ途中）。

主要サービス報告「虚勢を張る < 活動内容を知ってもらう」

ここからメインの事業報告です。インパクトレポートは毎年発行していくものになるので、来年以降も継続して発表していく数字を決めなければいけません（毎年発表する内容がコロコロ変わるの事業軸（問題意識）ブレブレに見えてしまうので、マイナス印象らしい）。また、インパクトを大きく見せようとするなら、例えば「捕獲数」と括ってしまっ、TNR も室内捕獲も、保護捕獲も迷子猫捕獲を入れた数字にすれば、**年間捕獲対応数 1,800 匹！**と大きな数字で書きたくなってしまいますが、「凄そうに見えること<活動内容が分かること」の方が重要ポイントだと考えられます。

したがって、今のメインサービスと今後伸ばしていく予定のサービスをピックアップしました。来年は、どの数字も今年以上に伸ばしていけるよう頑張りたいです。こうやって数字で発表していくことは、自分にプレッシャーをかける良い機会だと思いました。また、毎年同じ報告をすり替えし、数字の変遷を見ていくことで、時代と共に猫問題のニーズが変化していく様子が可視化されるようになると良いなと思いました。



その他の取組み 今後の布石に

そして、最後に今期の取組で力を入れたポイント、今後の事業の変革のきっかけになりそうなケースなどを紹介しました。例えば、多くのメディアに取り上げられ、社会的インパクトがそれなりにあったと考えられる動物虐待犯の逮捕につながったケース。



次に、大規模商業施設のノラ猫管理業務、これは今までのねこから目線。では基本にご依頼は現場で猫さんにご飯をあげてくださっている方から直接いただくことがほとんどでした。これを一般的にはBtoC（企業が一般消費者に向けたサービス）と言いますが、今回の大規模商業施設のノラ猫さん管理は初めてのBtoB（企業が企業に向けたサービス）でした。今後は、現場の個人の方からの単発依頼対応だけでなく、大きな敷地を持つ企業や神社やお寺、行政と業務委託契約を結んでいけるような事業形態も模索していきたいと思っています。そのため、今後の布石になりえるケースとして紹介しました。



そして、最後にメディア掲載リストを報告して終了です。全 19 ページになりました。

インパクトレポートを作ってみて

私が活動を始めた20年前は、猫の殺処分数は年間20万頭にものぼりました。年を経る毎に殺処分数はぐんぐん減り、環境省が発表した令和4年度の殺処分数は9,472匹にまで減少しました。スローガンとしての「殺処分ゼロ」は広く浸透し、達成できるという空気感も感じます。しかし、この数字はあくまで行政機関において殺処分された猫の頭数でしかなく、人と動物の共生センターが発表した令和6年度のロードキル数（交通事故等で亡くなった猫の遺体回収頭数）は、殺処分数のおよそ24倍になると調査報告を発表し、世間に衝撃を与えました。それ以外にも、少し古い統計になりますが、ペットショップの流通過程で死亡している犬猫が年間2万6千匹（2018年朝日新聞調べ）という調査報告もあります。ねこから目線。としては、当然ですが、行政機関における「殺処分ゼロ」が達成できれば良いと思っているわけではありません。

最終的に目指したい世界としては、

「すべての猫が惜しまれて死んでいける社会」

を目指したい。と強く思っています。この言葉は、ねこから目線。のスタッフと殺処分ゼロは短期的な目標であって、本質ではないという話をしている中で、「じゃあ小池さんは最終的に猫さんがどんな状態になったらいいと思ってるんですか？」と問われて、反射的に出た言葉でした。

「ノラ猫はゼロになるべきなのか、トラブルにならないければ存在は認められるのか」猫さんの在り方、関わり方には同じように動物愛護活動をしている人でも考えは様々です。その猫さんが住んでいる環境もバラバラなので、完全に1つに統一する事は難しいでしょう。それでも、どんなありかたであろうと、人知れず車に轢かれたり、餓死したり、名無しのまま保健所で殺処分されたりするのではなく、全ての猫さんがかけがえのない存在として、惜しまれながら死んでいてほしい。そう心の底から願っています。でも、願うだけでは社会は変わらないので、日々、悩みながらもがむしゃらに活動し続けていきたいと思っています。

社会企業の四苦八苦 インパクトレポート全文はこちら▶



おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

47

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「ナ行～ノ行」から以下の10個。
引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- 習うより慣れよ
- 握れば拳 開けば 掌こぶし てのひら
- 二度教えて一度叱れ
- 人間到る処青山有りせいざん
- 人間万事塞翁が馬ばんじさいおう
- 忍の一字は衆 妙の門しゅうみょう
- 猫に鯉節
- 鼠 壁を忘る壁鼠を忘れずねずみ
- 寝る子は育つ
- 喉元過ぎれば熱さを忘れるのどもと

＜習うより慣れよ＞

あらたまって人から学んで習得するよりも、実際に経験を積んで、体で慣れて会得する方が、しっかりと身につくということ。また、机上の学問だけでは不十分で実地の経験が大切だということ。「亀の甲より年の功」は類語。

これは、今どきのインターネットに頼り気味な子どもたちや保護者に伝えている諺。やってみなければわからないことも多いし、やってみたほうが学びは多い。失敗が怖いから何でもネットで調べる。その結果、やる前から「大変そう」「難しそう」といってやろうとしない子ども、大人がいる。調べることも大事だが、やってみると意外と簡単だったなどということも多々あるので、まず

はやってみようという気持ちを持てるように、この諺を伝える。

一部の子どもは人から教わるのが嫌だというので、それなら猶更自分でやってみようとする。習うのは厭と言いながら、結局はネット情報を習っているということに気づかないから。

英語では・・・

Custom makes all things easy. (慣れれば万事容易になる。)

Practice makes perfect. (経験を積むと完全になる。)

<握れば拳開けば掌>

物事は、気持ちや状況しだいで変わることのたとえ。同じ手でも、握れば人を殴る拳となり、開けば人をなでる掌になるということから。

これはリフレーミングでもある。最近、多角的に物事を捉えるとか俯瞰して物を見るなどということが苦手な子どもや大人に出会うことが増えた。まあ、子どもにとって俯瞰的とか多角的などというのは難しいのかもしれないが、高校生や大学生であればある程度可能なはずである。右といえば右、白と黒の間の灰色の存在を無視するなど、単眼的な見方をしていると、解決策もなかなか見つけれないだろう。そんな子どもや大人にこの諺を伝えている。手だっていろいろな見方、使い方があってのだから、自分の周りの人間関係であっても、同じように見方を変えてみてはどうか、そうすれば人間関係の悩みが少し解消するのではないだろう

うかという思いを込めて。

<二度教えて一度叱れ>

過失に対して頭からしかりつけなくて、繰り返し教えて納得させることが大切であるということ。子どもに対する教育の心得をいったもの。

保護者に伝える諺であるが、保護者達は忙しく、時間に追われている感が否めない。結構イライラしていると思う。その様な中で、子どもが一度教えてわからないと、大抵二度目には叱っている。「さっき教えたでしょ!」「この間教えたよね!?!」「何回いえばわかるの?(一回しか行ってないのに)」などは、よく聞こえてくる。子どもたちは、二度目が無いとなると、訊くことを辞めてしまう。子どもは未熟だし、失敗から学ぶものである。一度や二度の失敗で目くじら立てず、長い目で見てあげてほしい。二度教えることを意識してもらって格段に叱る回数が減る。叱るというより怒っている保護者のエネルギーも省エネになるし、親子共々少しは良い関係になるのではないか、そんなことを思いながら、この諺を伝えている。

<人間到る処青山有り>

大望を成し遂げるためには、どこで死んでもいい覚悟で、故郷を出て大いに活躍すべきだということ。「人間」は「じんかん」とも読む。人間=人の住む世界、世の中の意。

出典 ^{しゃくげっしょう}釈月性作の詩

これは、筆者が大好きな言葉である。小さい世界に自分を閉じ込めず、大きな世界に飛び出して、自分の夢をかなえるために努力してほしいという思いから、いろいろな子どもたちに伝えている。

大谷翔平選手はじめ、多くのアスリートが海外で活躍している。アスリートに限らず、日本国内外で自分の故郷を離れ、活躍している人は沢山いる。

自分の居場所を故郷に決めて悪いということではないが、もっと広い世界をみて、いろいろな経験を積むことで、人間性は豊かになるし、その結果として自分が成し遂げたいこと、夢も変わってくる。初志貫徹もちろん良いが、叶うか叶わないかで小さくまとめてしまうことは、自分の可能性を狭めてしまうことにもなる。子どもたちにはもっと積極的に、目の前の壁にぶつかってほしいと思う。

＜人間万事塞翁が馬＞

人生、幸せがいつ不幸の原因になるかわからないし、わざわいがいつ幸せの原因になるかわからない。わざわいも悲しむに及ばず、幸せも喜びには当たらないということ。単に「塞翁が馬」ともいう。

出典 淮南子

この諺は有名であるが、おそらく年齢の高い方の間でしか知られていないように思う。

淮南子に書かれている話は以下の通り。「昔、古い上手な老人が中国の北の方に住んでいた。その北には胡という異民族が住んでいて、国境に城塞があった。ある時その

老人の馬が胡の方に逃げて行ってしまった。この地では良い馬が多く、高く売れるので近所の人は気の毒がって老人を慰めに行った。すると老人はこのことが幸福にならないとも限らないという。しばらくして、逃げ出した馬が、胡の良い馬を沢山連れて帰って来た。近所の人たちは祝いを言いに行くのだが、老人は首を振って、このことが禍にならないとも限らないと言った。しばらくすると、老人の息子がその馬から落ちて足の骨を折った。近所の人が見舞いに行くと、このことが幸福にならないとも限らないという。一年たったころ胡の異民族たちが城塞に襲撃してきて、何とか戦いには勝ったものの、若者の多くは戦いに行き死んでしまった。しかし老人の息子は足を負傷していたので戦いに行かずに済んだ。だから、何が幸福で何が不幸かは直ぐに決まるものではない。」

幸せや喜びが沢山あったほうがよいのは当然だが、幸せや喜びがずっと続くことはまずない。人生は山あり谷ありで、良い時も悪い時もある。良い時を喜びすぎれば、悪い時が更に悪く感じるし、悪い時が来るのが怖くなる。良い時の後には悪い時も来るからあまり喜びすぎず、悪い時の後には良い時も来るからあまり悲嘆しすぎず、ほどほどに生きていくと人生が少し楽になる。ジェットコースターのような上り下りは平穏とは言い難い。波は出来るだけ小さめがよい。

また、幸せと思っていることも実はその陰に不幸が隠れていることもあるし、不幸と思っている陰に幸せが隠れていることもあるという意味でも使う。特に、不幸ばかりが続くと嘆いている人に、何が不幸で何が

幸せかはわからないという意味でこの諺を伝えることもある。

＜忍の一字は衆妙の門＞

忍耐することこそ、あらゆることを行う上でも出発点であり、成功させる元であるということ。衆妙の門＝すべてのすぐれた道理の入り口の意。「ならぬ堪忍するが堪忍」は類語。 出典 呂本中―東萊集

耐えること、忍耐については、文明が発達する中で、どんどん弱くなっていると感じる。滝に打たれたり、寒中水泳、我慢大会など、イベントとしては我慢する、耐えるものはある。アスリートは厳しい練習に耐えなければ、自分の成長に繋がらないということはあるが、一般の人にとっては余り耐えることが無くなった。寒ければ暖房を入れ、ダウンジャケットを着こみ、ホッカイロを使う。暑ければ冷房をかけ、クーラー機能付きのジャケットを着たり、首にかけ扇風機などと使ったりする。学校に行く子どもたちも、雨や雪が降れば車で送り迎えしてもらう。学校内も教室にクーラーが設置され、温暖化による暑さ対策がなされてきた。

常に電気があり、蛇口をひねれば水が出る生活の中で、貧富の差による違いはあるが、ほとんどの人が文化的生活を営んでいる。筆者も、エスカレーターがあれば使い、北海道にいる関係で車を使うことも多い中、寒さ、暑さに対する耐性は落ちていると思う。地震や災害で電気やガス、水道が止まって初めて、そういうもののありがたさを感じるが、通常の状態に戻ってしまうと忘れてしまう。

そのような中で、何かを達成したいと思う時、忍耐力は必要である。ずっと順調に行くことなどない。上手くいかない時期を乗り越えなければ成功には届かないのだが、上手くいかないとすぐ諦めてしまう。それを繰り返していても、結局成功は得られない。宝くじに当たるように、大したこともせずに成功が降ってくるわけではない。

何かを成し遂げるには、それなりの努力と我慢が必要である。それが面倒だから何も目標を持たない、成し遂げたいと思わない子も多くいるのも事実で悲しい話だが、それでも何か、一つでも、小さくても目標を持っている子がいたら、この諺を引っ張り出して、忍耐の大事さを伝えている。

＜猫に鯉節＞

過ちが起こりやすい状況。危険な状況にあることのたとえ。猫のそばに好物の鯉節を置いたのでは、油断がならないことから。「盗人に蔵の晩」「盗人に鍵を預ける」なども類語。

ある小学生が、母親のお財布からお金を抜いて対戦カードを買った。こんな話はあちこちで聞かれる。中学生でも同様だ。抜き盗られる金額も年々大きくなって、数万から数十万と、よくそんなに盗られるまで気づかなかったものだと感心することもある。

そんな中、ある母親が、子どもが財布からお金を抜き取ることに気づき、叱責した後、わざとお金を盗り易い状況にしたと話してくれた。なぜそんなことをするのかと聞くと、「目の前にお金があっても自分で盗らない様、衝動を抑えられるようになるための

訓練だ」という。しかし、その子はADHDの診断を受けていて、投薬はなく、目の前のお金に対する衝動を自分でコントロールすることはできない。それをわかっているはずなのにである。確かに、自分でそういう衝動を抑えられるようになったら素晴らしい。しかし何度も失敗し、その度に叱責され、自己評価を下げて二次障害になるほうが、その子にとっては問題である。「猫と人間の子どもを一緒に扱う話ではないが、猫の前に鯉節を置けば、いくら叱っても食べるだろう。衝動性をコントロールすることは、大人でも難しい。まして未熟な小学生にそんな高い要求をしても、失敗するだけで、その度に非難や叱責を受けさせるのは、その子にとって良くない」と何度も説明して、お金を盗り易い状況に置くことを辞めてもらった。

子どもたちは、結構家の中のどこに何があるか、見ている。母親のへそくりや、〇〇のためにと避けておいたお金のありかに気づいてしまう。家探しをする子もいる。お金を盗る行為そのものをさせないように、親が気を付けていくこと、お金だけではなく、人の物をたとえ親子であっても、勝手に使わない、もっていかないことは、家庭の中のルールとしてあった方が良さだろうし、その中にお金があるというのが自然ではないかと思う。

猫の前に鯉節を置いたり、犬の前に肉を置いて、食べるなという方が残酷であると同様、目の前に盗れるようにお金を置くのは、しつけや訓練というには遠いように思う。

英語では・・・

He sets the fox to keep the geese.

(狐にガチョウの番をさせる。)

<鼠壁を忘る壁鼠を忘れず>

加害者は害を加えたことを忘れるが、被害者はいつまでも覚えていて恨み続けるといふことのたとえ。鼠は以前にかじった壁のことなど忘れていますが、壁についたかじった跡は消えないことから。

これはいじめの被害・加害の話の時に使っている諺である。いじめた側というのは、からかい程度のこともあるし、そんなに大事にとらえていないことも多く、そのことが余程大事になって加害者として大きな罰を受けていない限り、いじめたことを忘れてしまう。特に何年も経ったら覚えていないのが殆どである。

しかしいじめられた側は、どんな小さな事であっても昨日のここのようにはっきりと覚えているものだ。

ある50歳近い男性が、中学時代に女の子が落としたハンカチを拾ってあげたら、まるで汚いものでも見るような顔で、汚いものを掴むように拾われたハンカチをつまみ、ありがとうと言わなかったといっていた。以来女性恐怖症が何年も続いた。これも今で言えばハラスメントである。

また、ある40代の女性は、小学2年生の時、教室で担任からいわれのない叱責を受け、それをきっかけに、周りの児童から馬鹿にされるようになった。今でもその先生のことは恨んでいると言っていた。

小学校時代のいじめや嫌がらせ、からかい、或いは先生からのひどい扱いなど、今ではハラスメントとして問題になるような対

応なども含め、筆者のところに来る相談者が、被害者として語る話は多い。それらのことについて、加害者となる子どもや先生たちはどれだけ覚えているだろうか？ほとんどの子どもや先生方は覚えていないのだ。

しかし、いじめられた側は、絶対に忘れないのだ。そのことを加害者にあたる人たちにわかってもらわないと、いじめ指導は終わらない。人の恨みというのは根深く、そう簡単にはなくなる。

壁に空いた穴も、たとえ埋めて修理したとしても、そこに穴があったことは記憶に残っている。

この諺は、いじめ加害の指導に使えるが、スクールカウンセラーがいじめ加害者に係ることが少ないので、あえて挙げさせてもらった。

＜寝る子は育つ＞

よく寝る子は健康で丈夫に育つということ。「寝る子は息災」は類語。

これは、昔からよく使われている諺だが、人間いくつになっても睡眠は大事である。大人であっても睡眠は脳のためにも必要である。しかし近代の人たちは睡眠時間が少なめである。それは子どもたちにも言える。

勿論早く寝かせている家はあるが、小学校低学年で夜11時12時まで起きている子も結構いる。特にYouTubeやゲームが寝る時間を減らしている。

子どもの場合は寝ている間に脳が成長するので、その話を保護者にしているし、大人の場合も、寝る事が脳の記憶整理やエネルギー充填に役立っているのだと伝える。子

どもでも大人であっても寝る子は育つのである。

＜喉元過ぎれば熱さを忘れる＞

苦しいことも過ぎてしまえば簡単に忘れてしまうことのたとえ。また、苦しいときに受けた恩を、楽になったときに簡単に忘れることのたとえ。

「喉元通れば熱さを忘れる」ともいう。江戸いろはがるたの一つ。

嫌なこと、苦しいことをいつまでも覚えていられるのも苦しいし辛い話で、なるべく流していきたい。しかし苦しい時に思った大事なことは忘れずにいたいものだ。

例えば、災害に遭ったとき、普通の生活に戻ったら避難バッグを用意しておこう、棚が倒れないようにつっぱり棒をしっかりとつけようなどいろいろ思うものである。しかし、いざ普通の生活に戻ると日々の生活に流され、そんなことは忘れてしまう人も多い。まだ、喉元を通り過ぎないうちに、熱さを忘れないうちに行動すれば良い話である。

或いは、自分が辛い時に支えてくれた人のことを忘れ、その人が辛い時に恩返しをしないというのも冷たい話だろう。自分に大したことができなくても、気持ちだけでも、恩を受けた人には恩返しができること、それが人情だろう。人と人との関係性を良い状態に維持する秘訣にもなる。

これは子どもたちの社会でも言える。いじめられていた子を助けたと思ったら、その助けた子のせいでいじめられることになったとしたらどうだろう。助けられた子がしっかりと恩を返せる子であるなら、たと

えいじている子に齒向かうことができなくても、助けてくれた子に寄り添い、心の支えになることはできるはずである。或いは他の大人や周りの子に助けを求めることもできるはずである。助けるために出来ることをする、それが恩返しになる。

自分さえよければそれでよいという自分勝手な人が恩返しを忘れるわけではないだろう。自分の辛かったことは早く忘れたいから、その時恩を受けた人のことも一緒に忘れようとしてしまうのかもしれないが、受けた恩はきちんと返すようにしたいものである。そんな意味で、子どもたちや大人にこの諺を伝えている。

英語では・・・

The danger past and God forgotten.
(危険が過ぎると人は神を忘れる。)

Vows made in storms are forgotten
in calms. (嵐の時の誓言は凪になると忘れ去られる。)

出典説明

釈月性の詩・・・「^{とうゆう}将に東遊せんとして^{へき}壁に題す」の一節。

月性は幕末の僧で、周防の出身。二十七歳の時、大阪の漢学者篠崎小竹のもとで勉強するため、故郷を出る際に作った詩である。月性は攘夷論者としても活躍し、幕末の志士たちに大きな影響を与えた。そのため明治以降、この漢詩は立身を夢見て故郷を後にする青年の送別の席などでよく吟じられ広く知られるようになった。

淮南子・・・内編二十一卷

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は前漢の高祖劉邦の孫である^{わいなんおう}淮南王劉安。無為自然の道家思想を中心とし、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一卷・外編三十三卷があったとされるが、現存するのは内編二十一卷。

呂 本中・・・

宋代中国の学者・士人。字は居仁。紫微と号し、東萊先生と呼ばれる。呂公著の曾孫。呂希哲の孫。呂好問の子。著作に「春秋集解」三十卷「東萊詩集」二十卷などがある。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。

うたとかたりの対人援助学

第32回「集団疎開学童が歌った替え唄」

鵜野 祐介

はじめに 一外山禎彦さんとの再会—

今年（2025）1月中旬、大阪府河内長野市に外山禎彦さんのご自宅を訪ねた。2021年7月にNHKの企画で「戦争中の子どもの替え唄」を取材して以来、3年半ぶりの再会だった。

2020年8月に『子どもの替え唄と戦争—笠木透のラスト・メッセージ』（子どもの文化研究所）を出版して以来、読者からの感想や情報提供は、皆無ではないが決して多くなかった。そんな中、昨年11月末にTBSの若い報道部記者・榎本康平さんから、「戦後80年」企画として1年間にわたってこのテーマを取材したいとの依頼を受けた。

12月中旬、榎本さんは東京から2名のカメラマンと一緒に立命館大学衣笠キャンパスに来て、子どもの替え唄をテーマとする実習授業を撮影した。さらに、何名かの当事者の証言を聞きたいとのことで、外山さんへの取材を提案すると早速スケジュールを組み、この日も2名のカメラマンと共に来阪した。午後1時30分、私は河内長野駅で合流して、彼らと一緒にタクシーで外山さんのお宅を訪問した。

外山さんの略歴

外山さんは1995年に『学童集団疎開日記』（近代文藝社、以下『日記』と記す）を出版されている。同書の奥付に書かれた「著者略歴」に、2回の取材の中で同った内容を補足して、ここに紹介しておく。

外山禎彦さんは、1934年10月20日、大阪市住吉区^{こはま}粉浜に生まれた。大阪市内の呉服店に勤める父親、母親、祖母、自分、妹、弟の6人家族だった。

自宅近くにあった大阪市立東粉浜国民学校初等科に入学した。1学年に3クラスあった。4年生だった1944年9月、学童集団疎開に参加し、翌年10月まで疎開生活を送った（*当時、米軍の空襲を想定し、大都市の国民学校児童を、縁故を頼って疎開した者を除いて、学校単位で地方に疎開させたが、これを学童集団疎開と呼んでいる）。



大阪市立住吉一中、大阪府立今宮工高より大阪学芸大学（現・大阪教育大学）を卒業。理科（地学）の教員として、私立上宮高校、兵庫県立尼崎工業高校、大阪府立茨木工業高校、大阪府立今宮高校、大阪府立長野高校の各教諭を経て、大阪府立西浦高校特別嘱託。

定年後は、社会人や子ども向けの天文・科学教室を開く一方で、学童疎開体験を語る平和学習活動に精力的に取り組んでいる。

出発の日 1944・9・18頃

『日記』の「はじめに」において、出発の日の様子が次のように綴られている。

出発の日の朝、校庭に集まっていると、誰かが「あつ、バタキンや、すごい。」と叫んだのです。見ると、軍刀を吊り、少将の襟章の輝く校医の村山先生がのっしのっしとやって来られたのです。その頃の子供は襟章を見れば兵隊の位がわかったのです。将官の襟章はその地が全部金色だったので、俗にそれをバタキンと呼んでいました。その村山少将が朝礼台の上で万歳三唱の音頭取りをしてくれたものですから、僕たちは勇躍、学校を後にしたのでした。

疎開先は、大阪府の南部、岸和田から奥に入った葛城山の麓、牛滝村のひなびた旅館でした。第一日目の夜は、今の修学旅行生と同じで、枕合戦をするもの、「王手、王手。」などと、寝言の真似をして笑わせる奴などが居て大騒ぎでした。しかし翌朝、鼻をつままれて目を覚まされ、自宅にいたときのようにのんびりしているわけにはいかない現実を早くも知らされたのでした。

日記は、到着後十日ほどした9月28日から始まっている。

『日記』に記された歌や音楽

『日記』には、どんな歌や音楽が記されているだろうか。日付順に紹介してみたい（漢字の旧字体は鵜野が新字体に変更した。[]内は外山氏による加筆、（）内は鵜野による補足、句読点の一部を改変）。

1944・10・5 今日は村の秋祭なので僕たちもお宮まいりをしました。……僕は軍歌集を持っていた。

10・30 昼からじゅげふ（授業）の一部分の時間がある人が[に] ハーモニカを吹いてもらひました。とても上手でした。

11・11 昼から吹奏楽団のをぢさん（おじさん）が来られました。いろいろな音楽を聞かしてもらって帰へりしなは紅葉橋のちかくまで音楽を奏しながら[行くのを]送りました。

12・22 今日昼食をすんでから火鉢にあたって歌をうたってみると伝令で空襲といひました。

12・27 午前は式歌の練習をしました。

1945・1・8 昼から三年生が歌の練習を紅葉寮でし

たので僕たちは自由時間でした。

1・19 昼から森のおぢさんが音楽を聞かして下さいました。これで二回目です。

2・14 今日も朝会がなかった、たいこがなかったので授業のたいけい（隊形）にすはって（座って）ゐると先生が「大広間へ行け。」といはれた。行くと卒業式の歌を練習した。僕たちは ほたるの光であった。六年生は 仰げば尊し であった。昼から紅葉寮でぼくたちを代表して劇をするものたちがけいこしてゐた。それから卒業式に四年がうたふ歌を大広間で練習した。

3・7 昼から音楽をした。

5・4 昼から歌唱練習をした。

6・8 引き続いて片山先生のしだう[指導]で軍歌の練習（を）した。

6・9 授業の前、ようちえんの時のことを思ひながらようちえんの歌をうたってゐると急に「ドドドドドッ。」と地響がした。

6・15 昼から日本陸軍の歌を練習した。

6・18 昼から自由に遊んだ。僕と中村君とでさくらんぼを取りにゐった。其後、軍歌練習をした。

7・7 昼から七夕祭りのみあんかい（慰安会）があった。うたやげきがあった。

7・24 午前中は授業であった。歌のしけんがあった。

7・26 昼からの自由時間にいろ／＼な歌を書き移[写]した。

9・27 昼からシロホン・ハーモニカ・ピアノを高田君打越君等がひいてゐるのを横で聞いてゐた。

歌っていたのは主に軍歌や式歌だった。また、時折ハーモニカ吹きや吹奏楽団の演奏を聴く機会があった他、村の秋祭や慰安会で歌や音楽に触れていた。

軍歌は、1945年6月以降、頻繁に記録されている。練習も行い、教師（片山先生）による歌唱指導もあったようだが、その頃になってから急に軍歌を歌う機会が増えたのか、それとも日記に書く話題が他に思いつかなかったからなのかは不明。

外山さんは集団疎開に行く時、2冊の軍歌集を持参し、これとは別に1冊、さまざまなジャンルの歌の歌詞を筆記した手帳を携帯していた。1944年10月5日、村の秋祭の宮参りにも軍歌集を持参し

ている。神社への道中、軍歌を口ずさんでいたのだろうか。2025 年 1 月の取材の中で外山さんは、「軍歌を歌うと元気になるから歌っていた」と語った。

式歌は、卒業式に歌われた「蛍の光」や「仰げば尊し」の他、具体的な歌の名前は書かれていないが、明治節（11 月 3 日）、大詔奉戴日（毎月 8 日、1941 年 12 月 8 日の大東亜戦争開戦にちなむ）、四方拝（1 月 1 日）などの式典でも歌われたようだ。

四方拝の式歌は「一月一日」で、その歌詞は「年の始めの例として 終わりになき世のめでたさを 松竹たてて門ごとに 祝う今日こそ楽しけれ」だが、その替え唄も全国各地で歌われた。「トーフの始めは豆である おわり名古屋の大地震 松竹ひっくり返して大さわぎ イモを食うこそ屁が出るぞ」（笠木透『昨日生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』音楽センター・あけび書房 1995：10）。ちなみに、外山さん自身はこの替え唄について、「聞いたことがあります、自分では歌った記憶はありません」とのことだった。

『日記』に記されなかった替え唄

『日記』には替え唄のことはまったく出てこない。それは、教師（岩間先生）に提出され「検閲」を受けていたからである。例えば、1944 年 10 月 14 日の項の最後には、「（よいところに気がつきました。岩間 印）」とある。日を追うにつれて、教師の「検閲」もいよいよ加減になったと、外山さんは今年 1 月の取材の中で話していたが、替え唄を『日記』に書き留めることには躊躇したのだろう。

前回の取材でもいただいた「戦中戦後にうたわれた替え歌」（2021 年 6 月 25 日作成）という元歌と替え唄を併記した資料を今回もいただいたので、ここに紹介する。[]内は外山さんによる解説。

<戦時中>

・「日本陸軍」

天に代りて不義を討つ 忠勇無双のわが兵は...
⇒天井に金槌釘を打つ チュウチュウ鼠の運動会

・「月月火水木金金」

朝だ夜明けた潮の息吹き
うんと吸ひ込むあかがね色の
胸に若さの漲る誇り 海の男の艦隊勤務
月月火水木金金
⇒朝だ夜明けた御飯の支度
それが済んだら紙屑拾い
・・・ るんぺん生活気楽なもんだ
けっけっ痒い痒い蚤、虱

・「皇軍大捷の歌」

国を発つ日の万歳に しびれるほどの感激を
こめて振ったもこの腕ぞ 今その腕に長城を
超えてはためく日章旗
⇒パーマメントに火がついて みるみるうちに禿げ頭
禿げた頭に毛が三本 あゝ恥ずかしや恥ずかしや
パーマメントはやめましょう

・「愛国行進曲」

見よ東海の空明けて 旭日高く輝けば
天地の正気滂瀾と 希望は踊る大八州
⇒見よ東条の禿げ頭 旭日高く輝けば
おでこがぴかりと光ります
蠅が止まれば滑ります
【この替え歌は戦後になってどこかで読んだのであった。】

・「軍艦行進曲」（イントロ）

⇒じゃんじゃんジャガイモ薩摩芋

・「軍人勅諭」

軍人たるの本分は 心は忠に気は勇み
義は山よりもなほ重く 死をば軽しと覚悟せよ
[末尾の部分のみ]⇒砂糖は甘しと覚悟せよ

<戦後>

・「あの町この町」

あの町この町 日が暮れる 日が暮れる
今きたこの道 かえりゃんせ かえりゃんせ
おうちがだんだん 遠くなる 遠くなる
今きたこの道 かえりゃんせ かえりゃんせ

⇒「今きたこの道」を「去年来た」に、「遠くなる」を「近くなる」と言い換えたのであった。集団疎開先からの帰途。

・「ズンドコ節」

青い背広にマドロスくわえ 肩で風切る小粋な男
⇒青い顔してなんば粉食べて 肩で息する哀れな男
[なんば粉＝南蛮黍、すなわち、とうもろこしの粉末。終戦後よく配給された。]

・「子を頌う」

太郎よおまえはよい子供
丈夫で大きく強くなれ
おまえが大きくなる頃は
日本も大きくなっている
(4行目) ⇒「日本は小さくなっちゃった」
[NHK ラジオ「日曜娯楽版」より]

<補遺>

・「元寇の歌」

しひやくよしゅう こぞ 十万余騎の敵
四百四州を挙る
国難ここに見る 弘安四年夏の頃
(2行目) ⇒「おっさん銭おくれ
穴の開いた銭おくれ」

・「めんこい仔馬」

ぬれた仔馬のたて髪を 撫でりゃ両手に朝の露
呼べば答えて めんこいぞオーラ
駈けて行こかよ 丘の道
ハイド ハイドウ 丘の道
⇒越中富山の薬屋さん 鼻くそ丸めて まる薬
白墨削って粉薬オーラ
馬のしょんべん 水薬
それを買うのは あんぽんたん

・「湖畔の宿」

山の寂しい湖に ひとり来たのも悲しい心・・・
⇒「昨日生れた蛸八が 弾に当って名誉の戦死」

・「紀元二千六百年」

きんし
金鶏輝く日本の・・・

⇒「金鶏高くて十五銭・・・」

替え唄はどのように伝わったのか？

替え唄はどのようにして伝わっていったのか。ラジオやレコードや雑誌などのマスメディアに登場することはまず考えられない。学校で教師から教えられることもないだろう。にもかかわらず全国各地の子どもたちが類似する替え唄が歌っていたという事実は驚くばかりで、謎である。今回、外山さんに一番お聞きしたかったのもそのことだった。

「よく分かりませんね」とおっしゃる外山さんに、私の仮説を紹介してみた。伝承経路の一つは、疎開先の地元の子供たちと疎開児童との交流の中で互いの持ちネタを伝える。もう一つは若者が軍隊に入隊して、出身地の違う同期兵たちと交流する中で持ちネタを伝え合い、出征前に一時帰省した際、自分の弟妹や近所の子供たちに「置き土産」として伝える。

すると、外山さんは次のように話した。地元の子供たちと交流する機会はほとんどなかったし、入隊したお兄さんから教えてもらったという経験もなかったが、一つ思い出したことがある。同級生の中に、最初は縁故疎開で愛媛県松山市に行っていた子どもが、何か事情があって途中から集団疎開に参加してきたのだが、彼が松山にある予科練（海軍飛行予科練習生航空隊）のことを歌った歌を聞かせてくれ、予科練に行くことは憧れだったので感銘を受けた。初めて聞いた歌だったという。この場合は替え唄ではなかったが、替え唄が歌われた可能性も考えられ、三つ目の伝承経路だと言える。

今後、これら三つの伝承経路について具体的な証言としてお聞きする一方で、さらなる経路の可能性についても調べていきたい。

敗戦の日 1945・8・15

晴 二十八度五分 今日はぼん（盆）である。午前中たき木運びであった。鍋島先生の投げ落された木に当り石がころんで来てあたり、がんばったがとうとう泣き出してしまった。昼から兵隊ごっこをした。僕は太夫[尉]になった。遊びつかれて寮にいると宇和川先生[女性]が「日本はむじやうけんこうふ

く[無条件降伏]した。だがまだ負けてみない最後までか[が]んばれ。」といはれた。敵のデマセンでん(宣伝)と思へてしかたがない。残念だ……

帰郷の日 1945・10・15

今日は家へ帰るたのしい日だ。四時に起床してふとんを荷作りした。清水君のふとん包へいっしょに入れてもらった。朝食のざふすゐ[雑炊]にきのふ残したご飯を入れて食べた。朝会がすんで土間の前へ整列した。土地の人に別れをつげてなつかしい牛滝を後に出発した。内畑の学校で式をすませて昼御飯をたべた。バスに乗って岸和田の駅で降り電車にのった。数分の後に住吉の駅についた。住吉神社生根神社にお参りをした。三時過ぎになつかしき母校に到着した。学校にはお父さんお母さんが迎へに来てをられた。式をすましてさつまいものおみやげをもらって家へ帰った。うれしくて／＼筆にも鉛筆にも書きあらはせない。

家が馬鹿に小さいやうに感じた。夕食には残してをいて下さった。[ママ]かんづめを開けてごちさうをしていただいた。夜おそくまでいろいろお話した。

8月15日の終戦の日、無条件降伏の詔勅を小学校女性教師や小学5年生の男の子がどう受け止めたのかが分かる。また、さらに2ヵ月も疎開生活を続けなければならなかったこと、そして、「うれしくて／＼筆にも鉛筆にも書きあらはせない」と綴った外山さんの真情に胸を打たれる。

「おうちがだんだん 近くなる 近くなる 去年きたこの道 かえりゃんせ かえりゃんせ」と替え唄を歌いながら、わが家への帰り道を胸はずませて急いだのだった。

おわりに 一子どもからの質問に答えて一

ある時、外山さんが小学生たちに学童疎開体験談をした後に、子どもたちの一人から次のような質問を受けたという。「一年ぶりにわが家へ帰った日の夕食に、缶詰を開けてごちそうしてもらったというのは理解できません」。

今日の日本では、缶詰は災害用常備食であり非常食であるといったイメージがあり、ごちそうとは言

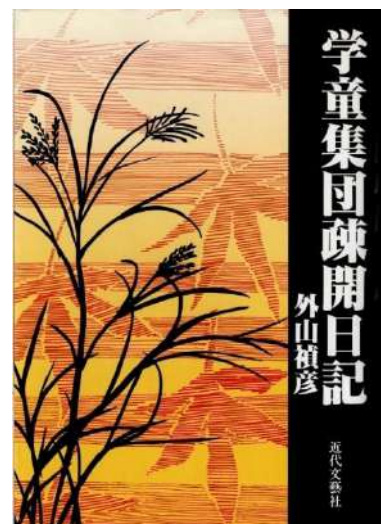
えないものだろう。けれども戦中戦後の日本では、缶詰は一般家庭においてめったに食べられない高級品であり、何よりのごちそうだった。そんな説明をしたらようやく得心してもらえたという。

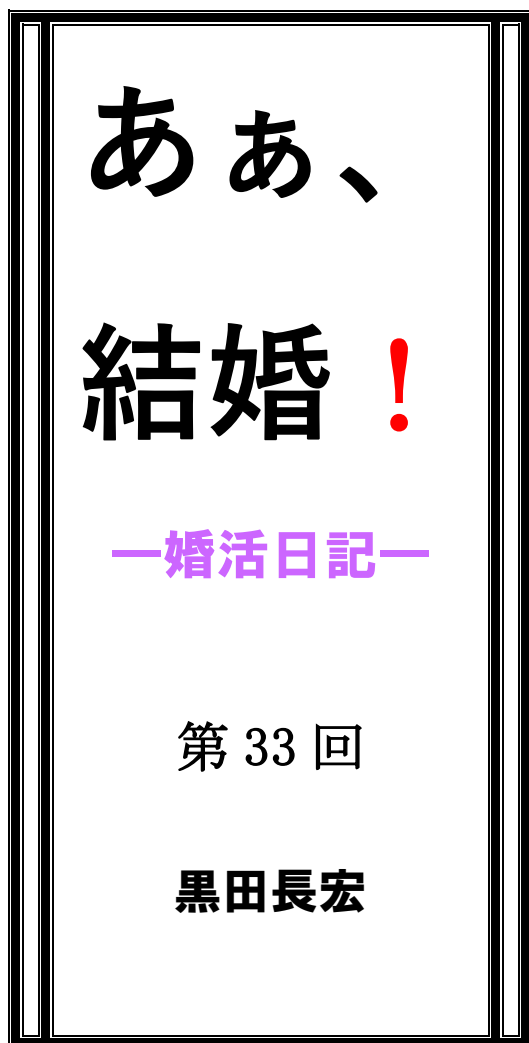
それからもう一つ、「疎開生活がつらかったと言われますが、それならどうして脱走しなかったんですか？」という質問もよく受けるのだそうだ。「脱走しそうとしても、成功することは無理だろうと思っていた」と答えているという。実際に、『日記』の中には、山中へ入っていき、脱走を試みた子ども(たち)の話が一度ならず出てくるが、いずれも教師や他の子どもたちによって発見され、捕まっている。また、現地の住民に見つかっても宿舎へ引き戻されるだろう。それから親の世間体にも傷をつけることになる。そう考えると、我慢するしかなかった――。

外山さんの説明を聞いて、子どもも納得した表情を浮かべたという。「子どもたちの素直な感想や質問を聞けることがうれしい」と話された。

軍歌や替え唄の話もするよう心がけているそうだ。子どもにとって、自分と同じぐらいの年齢だった当時の外山さんがどんなものをどんな気持ちで食べて、どんなことを考え、どんな歌を歌っていたのかを知ること、心の距離が縮まるに違いない。お互いにとって、とても貴重な機会だろう。

取材を終えた私に、「(話ができる機会は)あと何年もありませんよ」と外山さんは笑って話された。現在90歳の彼の言葉を胸に刻んで、ご自宅を後にした。





<2024年11月4日>

今日は59回目の原稿を多分全著者の中で最速だと思うのだが提出した。これは私の性質からである。

<11月14日>

婚活アプリだが、数日前にけっこう積極的な人がマッチングしたが、茨城県在住の私としては、その人が大阪で距離的に負担だった。しかし婚難救助隊の動画を紹介したところブロックされた。

<11月19日>

昨日マッチングアプリでマッチングがあり、動揺しているところ、今日また別の人がマッチしたみたいで、どうなっているのかちょっと怖い。二兎を追う者は一兎をも得ずだが、片方だめな時に、片方逃したら、それも全滅なので、双方様子を見るべきだと判断している。

<11月22日>

なんだかわからないが、10年前よりもマッチングアプリがマッチングまでは成績が良いのでプレッシャーで疲れている。だが、そこからダメならダメなわけだ。どうなっていくかまだわからない。当たり前か。

<11月27日>

なんかマッチングしても相手が消えちゃうよ。

<12月22日>

ここ数日、新たにマッチングがあり、昨夜はLINE電話まで行きついた人が出来たが、電話後LINEでいろいろ書いた最後に、私の真面目すぎるところが出来てしまい、相手が寝てしまった後、朝に来ていた挨拶が無くなっている。それで心配しているが、かなり積極的な人でチャンスだったのに、また終了なのか？忙しいのか？かなり進んだケースだがそれでも難しい。ダメなら次の人達に応募し続けるしかない。ダメならかなり落ち込むケースだ。それでも5、6日だけのことだ。私は職場に自慢？してしまうから、また始まった。でオオカミ少年みたいに思われるだろう。そういう趣味か。

<12月24日>

今度のマッチングアプリの人の返信度合いが極端に減ってしまった。いったいどうなっているのだろう。一人マッチングすればしたで、LINEの既読スルー問題が体験できる。学者のようにフィールドワークを意図してやっているわけではなし。クリスマスイブだからサンタのメッセージを送ったが、さらに悪手だっただろうか。待つしかないし、ダメなら次の人、次の人へとドライに行かねば成就できないのだろうか。

<12月25日>

今回の人は、LINEまで行ったが、既読スルー、未読スルーになってしまい、職場の方々にも相談してしまったが、夜、今、止まってしまったし、楽しいLINEだったが、相手は旅行の趣味やスポーツの趣味で私と合わないし、きっと相手は急に冷めたかも知れないとしても、事情を書いて、エールを送って、丁寧にブロックすると書いて、ブロックした。かなりの年齢差でもあり、残念だ。

こんな奇跡があるのかと思っていたのだが。でも私ではきっと飽きてしまうだろう。なにしろ、アウトドアはしたくない。私の人生はインドアで良いと思っているのだから。

<12月27日>

4つの婚活アプリをしているのに、今日新たに2つ追加した。いつやることなんだよ。と問われたら、今でしょ。と以前流行った言葉通りであろう。ボーナス月だからなんとかするんじゃないか。

<12月27日>

これを人生の一度きりの出来事というのだろうか、新たなマッチングアプリで一人とメッセージ交換できたのだが、私が、「疲れていたら後日また連絡欲しい」と書いたら、止まってしまった。どうも、何を書いたら相手がどう反応するのかがわからない。後日返信が来ると良いのだが。もちろん、その人だけではなくて、複数の人達に応募しないと、そこが生真面目な人だと時間を大きく費やしてしまう原因なのかも知れない。マッチングしても交際前で判断している状況であるから、複数とメッセージ交換するので良いのだろう。ただ、なかなかなかなかマッチングはしないのだ。

<12月29日>

婚活アプリがめまぐるしく、隣県で近い人とチャット風に出来たのだが、また既読スルーになり、さきほどこちらからブロックした。入れ替わって、今度は愛知県なので遠いのだが、いいね！が来ていてマッチングした。応答はまだだが、隣県の方は最初後ろ姿だったが、思い切ってありがとうに応じたら、応答もきてチャット風になり、だが、途中で顔が出してきたが、ちょっと私の顔の好みと違って迷ったが、私が変なことを書いたのか、既読スルーになっていた。具体的な会う約束のメッセージを昨晚書いておいて、既読スルーだった。だが、次々に新たにいいね！が来たので、心理的にダメージが少なくて助かる。今度の方はまだ応答もないが、写真が好みなので気が楽である。どんどんやっていくしかない。一人いればいいのだから。しかし痩せたからか、10年前の婚

活よりもてているようだ。1月に心筋梗塞で死んでいたかと思うと、現存する世界は不思議である。

<12月29日夕方>

それにしても10年ぶりに婚活アプリを復活させてから、数回前の思弁的なわけのわからないことを提出していた頃と大きな違いだ。簡潔に書かないとカットをお願いされてしまうほど動きがある。でも、新たに登録した時だけのような気もする。それはチャンスなのかサクラなのかかわからないが、婚活アプリ企業のほうもサクラには企業努力で排除しているかも知れないし。私なんかできない知的職業の人のほうから、「写真が素敵」とアプローチが来たが、私のルックスの好みと多少違っていて、悩んだがブロックした。もったいない。でも仕方ない。後で燃えないより良いのだ。だけど減多にマッチングしてくれる人はいない。それに今日は2つ増やすはずが、ネットトラブル続出で1つだけ増やしたが、目と肩が壊れそうだ。

<2025年1月2日>

年が変わった。昨日は3人もメッセージ交換になり新記録だったが、2人は途中で終えて、1人がLINE交換まで行った。2人めだが、1人めが既読スルー、未読スルーに突然なるし、普通だと思われる質問で消える人もいるし、私は必死だが、ゲーム感覚でやらないとやっていられない。だが、やらないよりはなんだか無駄でない気がする。成婚のようなことにならない限り、これらの文章は、いったい何になるのか。マッチングアプリはみんながしっかりしていれば成婚率

が高まると思うことと、マッチングしたら他の人達とは距離が空く仕組みのほうが混乱しないと思う。全く来ないかと思っていたら来ることもあり、意外だ。

<1月4日>

もう数人も、人なのかAIかわからないけれど、詐欺のような相手と時間を費やしてしまった。これが日本の現状だ。マッチングアプリ企業側も詐欺を排除する工夫をしているらしいが、入ってしまっているらしい。一方で別の危険性を伴うが、職場の人に間接的なアプローチをしたが、長年一緒に働いてきて動きがなかった関係がそう動くものか。日本という国は人に優しくない。政治家は不倫で叩かれる国だ。当然だ。

<1月13日>

かなりマッチングは少なくて貴重なのに、こちらから遠方などの理由でブロックしたりする。なぜか、マッチングを送ってないと思った人から返信が来てしまい、罪悪感があったがブロックした。どうしたわけか。全くないわけではない。昨日今日と連休で、婚活アプリは精一杯やっている。

<1月19日>

今度こそ詐欺ではないと思われる人が2人マッチングしているところ。ちょっとリアルだが、婚活アプリ9つのために、分割払いのテクニックを含めても、月の支払いが5万円ここのところの通常より増えてしまった。それでも勝負時である。やるしかない。

<1月19日夜>

不毛だな。詐欺では無かったが、話が噛み合わないのか途中でブロックされてしまった。その人は子供がいらないという人で、結婚するなら関係していくことなのに、子供に関する考えなどが「関係ない。余計なお世話」なのだそう。それならマッチングアプリでメッセージ交換する意味もないだろうに。男を変な奴がいたと書かれていたが、その人が変な方向に持って行ってブロックしてしまうのだろう。めげずに、良い女性は日本に現存していることを信じてアプリ続ける。上記のように、相手のほうが悪いと思う時もあるが、もう一人はマッチングしていながら、良く思い続けることが出来るのか、写真1枚ながら不安になり、メッセージを急いでいる人でもなく、年齢も若い人だったので、こちらからブロックした。これは明らかに私の優柔不断が悪い。ただ、悪化させてはいけなく、10年前の離婚で感じたはずだ。またマッチングゼロに戻ってしまった。私も悪い、日本の女性たちも悪い。悪いというよりもマッチングし続けられないだけなのだろうか。なんか何年やっても同じところに陥る気がする。でも続ける。

<1月29日>

自分に婚活市場の需要があるのだろうかと思ったり忘れたりしながら続ける。やめるわけにはいけないと思う。思い出したのが、美醜問題をもっと専門的に考慮して欲しい所だ。地位や金で女性の選択に影響がありそうなのは予想されるメディアなどとも言及される。それに比べて特に女性側の美醜問題はあまり言及されない。隠蔽されているのではないのか。婚活アプリを9つもやっている、ずっと出ていながら、このルックスだ

と男性が選ぶのに厳しいのではないかと心配してしまう女性を何人もみかけてしまう。それでもいくらやり続けてもマッチングできない私自身でさえ、いいねをクリックしようと思えないし、それはいけないことだと思う。性格の美醜というのも男女ともあるだろうし、私も反省すべき点かも知れないが、私のルックスは棚に上げて、高須院長ではないが、整形と婚活という面も隠蔽しないで、または意識してみるべきではないか。整形まで行かないまでも化粧やアンチエイジングの種類と婚活をもっと意識づけるべきだと思うた。

<2月6日>

57歳で婚活アプリをしてみても、全く絶望的ではないような気もする。年齢だけではない要件も左右するのだとしても。今日これを提出する前の時点、今の時点で、マッチングは一応2人残っているのだが、今日は動きが多く、マッチングしたのにブロックされた人もいれば、こちらから、とてもそういう身分ではないだろうに5人ブロックした。そのうち3人はなぜ入っているのかわからないが、詐欺まがいのようなケースだろうと思う。継続していると察知するようだ。詐欺まがいでないとしたら残念だが、きっと詐欺まがい、いずれにせよ、躊躇する時点で相手に失礼だからブロックするに限る。そのほうが悪いようでも実は良心的なのだと思ってきた。

私は通常、提出は早く済ませてしまう。ぎりぎりになると提出し忘れてしまいそうな脅迫観念かも知れないし、心筋梗塞になった身である。何が起きるかわからない。提出を早めにすれば1回分、多く提出出来るかも

知れない。どこで完結させるのかはわからない。私がもし、婚活に成功したとしても、世の中ではまだ結婚難から孤独死する人は出続けると推測されるからである。こうした場や、ネットなどで私がこうするように表現することによって、一人でも気づいて欲しい。だからこの後、提出しようと思う。成就するのは次号以降だ。

婚活アプリというのも、援助のための道具ではあるのだろう。なぜ私は空白期間をこんなに設けてしまったのだろう、過去の時間は取り戻せない。しかし今も何もしなければ、生きていたとしたならば、未来に悔いとしての今になってしまうだろう。婚活アプリ9つというのをやる前は思弁的に空想的に日にちだけを過ごしてしまった。その頃の記述は、いったい何をやってるんだか。そうかやっていなかったからかというような事だろうか。だが出来ないまま過ぎてしまう人もいるのだ。出来る人と出来ない人の違いとはなんなのか。そんな内省的になる事にも意味はあるのかも知れないが、婚活アプリをしてみると事実を記述してだけで、スイスイと文章も埋まる。だが文章を埋めるのが目的ではない。

【PBLの風と土 第32回】

キャンパスを横断しつつ地域に根ざして

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 回数を数えるより年中行事の回復を

「ホームランを数えてるうちは四番にはなれないぞ。」これは1981年から1986年にかけて小学館の『週刊少年サンデー』で連載された『タッチ』の1シーンであり、既に本誌「対人援助学マガジン57号」（2024年6月15日刊行）の「[短針](#)」欄にて筆者が紹介した一節である¹。あだち充先生の漫画で、アニメ化された作品でもあるため知る人も多いだろうが、作品の主題は早世した弟とバトンタッチして幼なじみを高校野球の頂点である甲子園に連れていこうとする物語である²。そして冒頭のフレーズは、県大会の決勝において、主人公の上杉達也（および弟の上杉和也）のライバル、新田明夫が県大会の決勝でチームメイト（2年生の大熊）に向かい、選手としての振る舞いをたしなめるように放つ言葉である。

令和6年能登半島地震から1年が経過した2月8日、筆者は石川県七尾市田鶴浜地区を訪れた際、昼食に訪れた店で出会った大学院生から、田鶴浜への訪問回数が尋ねられた。とっさに回答ができなかったが、5月までに12回だった能登への訪問は2月8日が25回目で、翌週にも訪問したために本稿執筆時点で26回に至っている。ただし、再び冒頭のフレーズに重ねてみれば、筆者にとって訪問回数を数えているうちはよい支援者にはなれない、という構えで臨んでいるつもりである。もちろん、可能な限り頻繁に通い、いわゆるラポール（rapport）と呼ばれるような信頼関係の構築に努めているもの

の、ただ訪問回数が増えれば必ず信用が高まるとは言えないのが支援の本質ではなかろうか。

2024年度は10月23日に新潟県中越地震から20年、そして1月17日には阪神・淡路大震災から30年を迎えることになった。担当授業の関係で、10月23日には長きにわたり訪問を重ねている小千谷市塩谷集落での慰霊祭への参列は叶わなかったが、2025年1月1日は田鶴浜での追悼行事「たつるはまのつどい」に参列させていただいた。また、1月17日には30年前に立命館大学ボランティア情報交流センターで活動した仲間と神戸で時間を共に過ごした。何より、この30年、神戸での活動の後、とりわけ塩谷集落との交わりと関わりを通して、年中行事が滞りなく行われることが復興を成し遂げられた証の1つであるという実感を抱いているため、田鶴浜でも田植えや夏の「田鶴浜あかりまつり」、さらには2月16日に順延となった七尾市（旧田鶴浜町）の無形民俗文化財に指定されている



写真1：追悼企画「たつるはまのつどい」での1場面（筆者撮影、2025年1月1日）

「田鶴浜左義長まつり」などに参加させていただいてきた。

そうして現場に向き合う上での知恵は、災害で被災された地域への支援だけでなく、ボランティア活動を組み込んだ教育プログラムとして展開されるサービス・ラーニング手法による各種の教育実践のフィールドに対しても活かしてきたつもりである。実際、2024年度の本連載では、[前々回](#)は京都の三大祭の1つである時代祭について、[前回](#)は立命館大学衣笠キャンパスに隣接する京都府立堂本印象美術館での取り組みを紹介する中で、授業の設計で工夫した点について論じてきた。そこで今回は、前回の予告のとおり、今回はキャンパス内および近隣をフィールドとした教育実践を取り上げ、この間、焦点を当ててきた大学と地域とのパートナーシップの構築についての議論をより深めていくこととしたい。

2. 学生を被害者にも加害者にもせずに

筆者が立命館大学に専任教員として着任したのは2011年度である。折しも着任直前には東日本大震災が発生したため、阪神・淡路大震災当時の経験を踏まえつつ学園本部での災害復興支援室の設立・運営に携わったこと、加えて一連の支援活動を教育実践に積極的に組み込んだこと、これらについては既に本連載 ([第29回](#)) で延べたとおりである。ただし、筆者が2011年度に着任となった背景には、2012年度から立命館大学における教養教育の体系を抜本的に改革することが決定しており、その具体化を図らねばならない状況があった。そこで、既存科目について「国内外および本学自体の動向を見つつ、サービスラーニングセンター提供の科目群についても不断の検討が進められ」、「学内外の諸機関との効果的な協働を図りつつ、時代の要請する問題解決」を焦点とした「社会で学ぶ自己形成科目」をキャリア教育科目と並んで教養C群として位置づけて開講する準備を重ねていった ([山口ら, 2015, p.131](#))

2012年度のカリキュラム改革では、フィールドでの活動を伴う新たな科目として「ソーシャル・コラボレーション演習」と「シチズンシップ・スタディーズII」、体験学習法を体感

する科目として「現代社会のフィールドワーク」を開発・提供することにした。これらの科目が開講される以前の立命館大学におけるサービスラーニング科目は、本連載[第30回](#)でも紹介したとおり、2005年の文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の採択を経て2006年度から講義系科目の「地域参加活動入門」と実習系科目の「地域活性化ボランティア」、そして後にVCTPの略称が多用されていった5科目10単位のパッケージ型履修による「ボランティアコーディネーター養成プログラム」が提供されてきた。[山口ら \(2015\)](#) でも記したが、これらの既存科目のもと、VCTPにおけるNPO・NGO・ボランティア団体でのインターンシップ部分のみキャリア教育センターとの共通科目「全学インターンシップ」として継承の上でパッケージ科目としては2012年度で閉講し、前掲の3科目を新規に開講、そして「地域参加活動入門」は「地域参加学習入門」に、さらに「地域活性化ボランティア」は「シチズンシップ・スタディーズ」と位置づけて、従来通りの受入団体から活動計画が提示されるものを「シチズンシップ・スタディーズI」に、そして学生らが自ら活動計画を立案して実施するものを「シチズンシップ・スタディーズII」として新規科目との連続・発展的な展開を企図したのである。この2012年度の改革によるカリキュラムでは、これら6科目を図2のとおり「教学上の密度と現場への深度の2軸から科目の性格付け」 ([山口, 2019, p.19](#)) のもと、2020年度に再度のカリキュラム改革がなされるまで、8年間にわたって展開されていった。

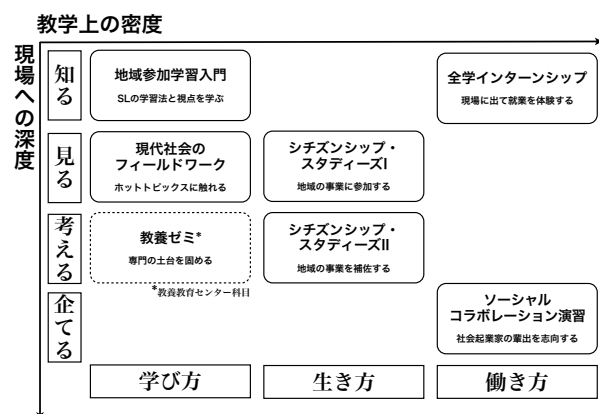


図1：2012年度から2020年度までの立命館大学サービスラーニングセンター正課科目群 ([山口, 2019, p.11](#)、筆者作成)

表1：ソーシャル・コラボレーション演習での取組
(筆者作成、写真も筆者撮影)

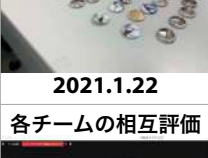
年度	協働	活動	一場面
2013	学生オフィス	学生オフィスに紹介を受け近隣の寺院でインタビュー。地域の方々との交流促進を目的とした企画「縁カフェ」を開催。	地域の方々との交流  2013.11.26
2014	一貫教育課	附属校出身の受講生を中心に「受験のないあなたへ」と題した学習啓発事業を検討。一貫教育部に提案（導入には至らず）。	一貫教育課から総評  2015.1.13
2015	衣笠キャンパス	衣笠キャンパス事務局長より隣接地懇談会の内容を説明。地域の方々の声を聞き取り、ペットボトルタワーで展示し学生と共有。	実施後の成果報告会  2016.1.19
2016	衣笠キャンパス(KIC)事務局	衣笠キャンパス事務局長よりゴミ分別と全面禁煙の不徹底および自転車マナー低下の実績数値を説明。啓発ポスター等を作成・配布。	チラシでの啓発活動  2017.1.10
2018	KIC地域連携課	地域連携課長が大学地域貢献の意義を説明。警備員数が増える中、喫煙・自転車マナー向上や外国人偏見解消の交流企画を提案。	警備員らの声の紹介  2019.1.15
2019	京都府立堂本印象美術館	堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。SNS・旧堂本印象邸・カフェ空間活用その他、紹介映像に英語・中国語字幕付与など実施。	下河邊副館長の挨拶  2020.1.7
2020		堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。アクセス動画提供、大判ポスター製作・バッジ贈呈・Tシャツ試作その他、新企画も提案。	来館記念バッジ制作  2021.1.22
2021		堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。コロナ禍のハイブリッド授業で、アンケート調査、SNS活用、落語研究会の動画制作等。	各チームの相互評価  2022.1.18

表2：シチズンシップ・スタディーズIIでの取組
(筆者作成、写真も筆者撮影)

年度	活動	一場面
2013	山崎有恒先生らを招き、京都の魅力掘り起こす観光コースを検討する講座「夏の京旅ゆめ気分～仲間を見つけて旅行だぼん～」を開催。夏休みに実際に観光。	山崎有恒先生の講話  2013.7.2
2014	七夕の時期に「夢、希望」を短冊に書いて、と呼びかけて、講義棟（敬学館）に許可を得て笹を設置。内容の集計を東北（気仙沼）復興策検討会と併せて実施。	講義棟入口の笹  2014.7.8
2015	<言うまでもないけど、苛立つこと!>をGoogleフォームで募集。「怒(おこ)りっつ」と題して発表し、投票を通じて日々の学生生活を見つめ直す機会を創出。	投票結果の集計作業  2015.7.21
2016	典型的でないキャリアのトーク企画を実施。水道局職員から高校・大学教員、ご当地アイドル、イラストレーター、僧侶&会社経営者&バーテンダーの4名を。	企画当日の集合写真  2016.7.12
2018	大阪いばらきキャンパス(OIC)で夏からでも加入可能なサークルの合同歓迎会を開催。学生オフィスと地域連携課の職員を招き、新規団体設立等の意見交換も。	学生オフィスの説明  2018.7.11
2019	OICの立地特性に鑑み、茨木市の小学生や留学生を対象とした運動会を実施。多世代交流と多様性の尊重のため、使用言語を英語のみに限定して競技を展開。	英語で長縄跳び  2019.7.10
2020	コロナ禍で座学はオンライン実施。企画はZoom交流会、OIC周辺で営業中の飲食店情報のリサーチ、加えて対面で「放課後こども教室」で手芸による交流も。	アート作品の制作  2020.7.3
2021	4/25～6/20の緊急事態宣言で対面からオンラインに切替。解除後にハイブリッドで「真夏の激アツパーティーDX」と題し複数のミニゲーム大会を実施。	ゲームの説明中  2021.7.14

表1は筆者が担当した「ソーシャル・コラボレーション演習」での取組内容である³。既に前回の連載（第31回）で2019年度以降の京都府立堂本印象美術館とのパートナーシップについて紹介する際に簡単に紹介したが、そもそこの科目は、図2での配置のとおり、教学上の密度も濃く、活動時には現場への深度も深い科目であり、いわゆるPBL型での授業展開により社会起業家の輩出を志向した。そのため、具体的な協働のパートナーを定め、現場からの課題を提示いただくことにより、具体的な問題を定め、その解決策を企画・検討し、実施することにした。表1で示した取組は全て衣笠キャンパスで開講されたクラスでの内容だが、この科目で開講当初から学内の諸機関と連携することにしたのは、学生たちにとっての身近な課題を取り扱うことと社会的な課題の認識と具体的な問題解決には当事者意識を持つことが肝要であり、特に通学・修学にあたってのマナーの向上にあたっては学生どうしのあいだでも加害者や被害者になることについての自覚と責任を促すことを踏まえたことによる⁴。

続いて表2は筆者が担当した「シチズンシップ・スタディーズII」の取組内容である⁵。これまで本連載でも、また筆者のその他の原稿等でも「シチズンシップ・スタディーズI」については積極的に紹介してきたが、担当教員による講義と受講生による試行的実感を重ねることで、コミュニケーションとリーダーシップの素養を高めることを目的とした「シチズンシップ・スタディーズII」の取組について紹介するのは本連載が初の機会である。なお、表2に記したのは最終的な企画内容であるが、各年度に共通するカリキュラム設計として、概ね5月の大型連休の直前となる第3回目授業は「5月病への予防注射」というコンセプトで入学間もない1回生を対象とした交流企画を実施するように投げかけていた。それにより、企画立案と実施と評価を1サイクル体験することができるため、その実体験をもとに行う通算で2回目となる企画立案では、受講生どうしが互いの関心・特技・経験を踏まえたチームビルディングを行うものの、むしろ自由にテーマを設定できるということがある種の不自由さに縛られることを痛感す

ることで、科目名に含めた「シチズンシップ」の深い理解へとつながったと授業担当者としては捉えている⁶。

3. 生活環境を学びの場にする

こうして有意義な展開がなされてきた立命館大学のサービスラーニング科目は、2020年に実施されるカリキュラム改革を前に、2018年7月2日に開催された「第2回教養教育改革具体化検討委員会」での議論を踏まえ「近接科目の整理」が求められることになった。その時点で、既に「シチズンシップ・スタディーズ」のIとIIを統合し、サービスラーニング手法に基づいて自主企画の要素を抑えた活動計画のもと1セメスターで完結する科目を新たに「シチズンシップ・スタディーズ」として位置づけ、IIにおいて重視していた学生の選択による自主活動部分は「ソーシャル・コラボレーション演習」においても組み込むことで2科目の合併を想定していた。そして、1科目が閉講となることで、授業時間内に授業サポーター（ES）の学生のコーディネートのもとで行う2回のボランティア体験の言語化を図る新科目「現代社会とボランティア」を開設することになっていた。ところが、新生の「シチズンシップ・スタディーズ」と合併後の「ソーシャル・コラボレーション演習」が、共に両科目ともクラス定員30名の演習系科目であること、カリキュラムの性格づけの上で「自己表現力」以外は同様の特徴であるとして再検討が求められたのである⁷。

結果として2020年度以降のサービスラーニング科目は講義系「地域参加学習入門」、体験

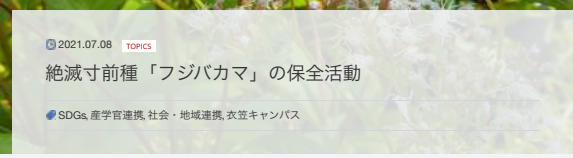


写真2：「現代社会とボランティア」での仁和寺境内清掃（2021年5月21日、筆者撮影／本誌第45号執筆短信の再掲）

の言語化を行う演習系「現代社会とボランティア」、科学的かつ独創的に課題を探究する演習系「現代社会のフィールドワーク」、現場の方々との共創を図る演習系「シチズンシップ・スタディーズ」の4科目での展開となった。そこで、表1のとおり「ソーシャル・コラボレーション演習」において、イコール・パートナーとして協働を図ってきた現場との関係性を4科目の全般にわたり浸透させていくことにこそ、サービスラーニングセンターの存在意義が反映する、と捉えるようにした。ところが、ここに想定外の事態が発生した。コロナ禍である。

新カリキュラムが導入される2020年度にコロナ禍に見舞われることにより、軒並み体験を伴う科目は当初の設計のように展開できなくなった。2021年度もまた、政府による緊急事態宣言が断続的に発出された。そのため、特に新生入生にとっては入学した大学のキャンパスに母校としての愛着が持てなくなるのでは、と危惧を抱いた。そこで、本誌第45号の執筆者短信で紹介したように、新設の「現代社会とボランティア」において、仁和寺境内の清掃活動や御室小学校での下校時の見守り活動などを通じてボランティアの実体験を重ね、その体験をオンラインにて言語化を図ることにした。

教室での授業を前提としない授業だからこそ学びの場を生活世界に広げることができたのは、コロナ禍において新カリキュラムが開講されたからこそと筆者は確信している。加えて「ソーシャル・コラボレーション演習」が閉講となったからこそ、従前に協働していた各機関とのあいだで、さらなる協働の可能性を相談する契機を得ることができた。そして前回（第31回）の結語も触れたとおり、「教室で学ぶことができない」という特殊状況が新たな学習環境を創出する契機となったのである。とりわけ2021年に衣笠キャンパス地域連携課と取り組んだ「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」の継続的な展開は、5月の挿し芽、6月末から7月上旬の移し替え、その後は8月に水やりの継続、10月は嵐電嵐山駅での足湯、そして11月に小学生らに呼びかけて匂い袋づくりと、1年を通じた活動サイクルが確立されるようになった。



2021.07.08 TOPICS

絶滅寸前種「フジバカマ」の保全活動

SDGs 産学官連携、社会・地域連携、衣笠キャンパス

立命館大学衣笠キャンパスでは、京都府の絶滅寸前種に指定されている「フジバカマ（藤袴）」を増やす取り組みを進めています。

秋の七草の一つ「フジバカマ」。夏の終わりと秋の始め頃、藤色の小さな花を扇状に咲かせます。日本書紀や万葉集、源氏物語にも登場し、古くから身近な山野草として日本人に愛されてきましたが、近年では自生に適した環境が少なくなり、絶滅寸前種となるまで数を減らしました。

立命館大学では、2020年7月に、公益財団法人京都市都市緑化協会からフジバカマの原種の苗を衣笠キャンパスで受け入れ、学生や教職員、近隣住民と連携して育ててきました。



2021年には京福電気鉄道およびボランティア団体「嵐電沿線緑化プロジェクト」と連携し、育てたフジバカマを嵐電の駅緑化にもつなげる取り組みをはじめました。

2021年5月22日（土）からは、衣笠キャンパスで育てたフジバカマに加え、活動に賛同いただいた「藤氏藤袴の会」と「深草藤袴の会」から提供を受けたフジバカマで挿し芽を作り、育苗ポットで育ててきました。

2021年7月3日（土）には、商業予定だった消防用ホースを再利用したプランターを活用し、学生・京福電気鉄道・地域住民と育てた挿し芽を71個のプランターに移し替える作業を行いました。

今後、学生団体が水やりなどを行い、開花シーズンの9月～10月頃には、育てたフジバカマを嵐電の駅や衣笠キャンパス内に飾る予定です。もしかすると、海を越えて飛んでくる美しいチョウ「アサギマダラ」とフジバカマの共演が、秋の衣笠キャンパスで見られるかもしれません。



※絶滅寸前種のフジバカマの保全は、SDGsの目標15「生物多様性損失の阻止」達成を目指すとともに、地域連携で取り組むことがSDGsの目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を目指すものであることを認識し、取り組んでいます。

写真3：「絶滅寸前種フジバカマの保全活動」
（立命館大学ホームページ「TOPICS」2021年7月8日）
（<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=2159>）

4. 学びのコミュニティの生滅流転

以上、今回はキャンパス内および近隣をフィールドとした教育実践を取り上げた。とりわけボランティアやインターンシップなど、直接的な体験や実習は学外での実施を前提とされることが多いのではなからうか。しかし、学生たちにとって最も身近なキャンパス内および近隣をフィールドとすることで、学習者であり生活者としての自らの存在を実感することができる。それは学生に止まらず、教職員を含めた協働のパートナーにも及ぶ。実際、「現代社会とボランティア」で受講生を受け入れた立命館大学では「大学キャンパスのなかで活動している特例子会社だからこそできることを考えていきたい」（豊浦, 2023）と捉えられている。

本連載では複数回にわたってSOFARモデル (Bringle, 2009) によりサービス・ラーニングのステイクホルダーについて関心を向けてきているが、2024年度の衣笠キャンパスでの「シチズンシップ・スタディーズ」の4つの活動をSOFARモデルで分析した論考が2025年3月に刊行予定（大場ら、印刷中）である。そこ

で今回をもって本連載での筆者の教育実践の紹介は一区切りをつけることとする。次回以降は筆者が対人援助の領域での教育実践を分析する上で援用可能な新たな理論的・方法論的観点について、文献の解題などにより紹介していく。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 大場茂生・加藤晶洋・久保裕之・櫻井稔也・田中真也・三ツ野直樹・山口洋典. 印刷中. キャンパス隣地・近隣とのパートナーシップの推進を通じた教学の充実：衣笠キャンパスにおける歴史・文化的なプログラムの構築を事例に. [立命館高等教育研究](#) 25. Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- 豊浦美紀. 2023. 大学のキャンパスを拠点に、ごみ分別から建物清掃まで行う：株式会社立命館びらす(京都府). 働く広場, 543, 6-11.
- 山口洋典・河井亨・桑名恵・川中大輔. 2015. 地域参加を促す系統的な履修プログラムの体系化の方途. [立命館高等教育研究](#) 15, 129-144.
- 山口洋典. 2019. 参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即：立命館大学とデンマーク・オールボー大学との比較研究を通じた理論と方法論の検討. [ボランティア学研究](#), 19, 7-22.

【注】

- 1 その際に紹介した折には、手元にあった単行本（少年サンデーコミックスワイド版）をもとに第10巻の第18話を出典としたが、単行本の初出はサンデーコミックス版の第23巻（p.178）である。全258話のうち228話に登場するもので、名言として取り上げられるものの1つである。
- 2 この『タッチ』に対しては野球漫画として主人公が周囲の人間や環境との関わりの中で成長するという「スポ根」（スポーツと根性）と、双子の兄弟と隣家の幼なじみとのあいだでの「ラブコメ」（恋愛と喜劇）の要素が混ざった作品という評価がある。簡便に読めるものとして、島田一志（2020）[「あだち充『タッチ』は極めて80年代的なスポ根漫画だった——上杉達也が見せた"ド根性"」](#)があるので触れておく。
- 3 本科目において2017年度が欠落しているのは、筆者がデンマークのオールボー大学に立命館大学の学外研究制度により滞在したため、科目を担当しなかったためである。なお、2015年度に課題の提示をいただいた相根誠・衣笠キャンパス事務局長（当時）は、激務もあって2016年11月1日付で事務局長の立場を離れられた後、逝去された。本連載の第31回でも触れたとおり、長きにわたり衣笠キャンパスは隣接地とのあいだで緊張関係の高い状態にあった。そうした中であって、相根さんには学生たちによる積極的な挑戦を丁寧に支えていただいた。ここに記して謝意を表したい。
- 4 例えば、自転車通学者が事故や盗難に遭うとき、学生どうしのあいだで加害者・被害者の関係が成立することがある。このような事態を想定したとき、2003年に発表されたMr.Childrenの楽曲「タガタメ」の一節「子供らを被害者に／加害者にもせず／この街で暮らすため／まず何をすべきだろう?」を思い浮かべることがあった。このレトリックを手がかりとして、学生たちには「すべきこと」よりも「できること」を探るよう促しつつ、学生どうしが「したい」というモチベーションが喚起されるよう、授業では対話を重視して授業を進行した。
- 5 本科目においても2017年度が欠落しているのは、筆者がデンマークのオールボー大学に立命館大学の学外研究制度により滞在したため、科目を担当しなかったためである。なお、2013年度に受講生からの協力要請に応じていただいた[山崎有恒](#)・文学部教授は、2024年11月21日に出張先の台湾で逝去された。2013年7月2日の話題提供では「京都水紀行」というテーマのもと、2つのモデルコースを提示いただき、京都で学ぶからこそ日常的に触れることができる歴史的・文化的な魅力について、豊かな語り口によって受講生はもとより一般公募で参加した学生たちの興味を駆り立ててくださった。近年は動画を通じた講座なども多面的に展開される中、折に触れて体調が優れないとお話になられていたものの、急逝に哀悼の意を表したい。
- 6 このような総括を行ったものの、前述のとおり、カリキュラム構築の当初はシチズンシップ・スタディーズIの受講生が継続受講を行い、かつての活動先で新たな企画の実施を行えるようにすることを企図していた。しかし、実際にはシチズンシップ・スタディーズIIのみを履修する受講生が多かったため、独立性を担保した授業運営を図ることとした。
- 7 [2020年度教養教育改革](#)では、知識力、科学的考察力、総合的解釈力、洞察力、指針の確立、創造性、多様性・国際性、自己表現力、共創する力の9つの観点で特徴づけを行うことが求められた。このうち、シチズンシップ・スタディーズに対してソーシャル・コラボレーション演習では自己表現力が1段階高い水準として位置づけた。なお、これら9項目では、サービスラーニング手法において活動先とのパートナーシップ構築の前提として、活動先から具体的な活動計画が提示される科目と、課題のみ提示されて実際に生じている問題の分析を行った上で活動の企画検討と具体化を図る科目と、いわゆる課題探求の手法の違いは顕在化しえない。科目は講義系か演習系かの2分法だけでは区別しえないことを象徴する議論と言えよう。



ポジショニングエフィシエと ガイディングエフィシエ

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。
何年かぶりに来られた患者さんのお話です。

「先生に教えてもらったように、痛いところを痛くない姿勢で痛くない方にさすっていたら、ずっと調子が良かったです」

「それは良かったです。アドバイスした方法を使ってくださってありがとうございます」

痛くない姿勢で痛くない方にさするという方法は、接骨院で日常的に使っていますし、患者さんにもセルフケアとしてお勧めしています。

本誌56号の「接骨院に心理学を入れてみた 27」で次のように書きました。

一見縮めているのかと思える方に伸ばすことで、縮みすぎている筋肉を伸ばすことができる場合があります。

このようなストレッチを私は「パラドキシカルストレッチング」（逆説的伸長）と呼んでいます。

いっぽう、一見伸ばしているのかと思える方に縮めることで、伸びすぎている筋肉を縮めることができる場合があります。

ます。このようなコントラクティングを私は「パラドキシカルコントラクティング」(逆説的短縮)と呼んでいます。なぜこのようなことが起きるのかについては、何種類かの説明ができます。例えば、三平方の定理にはいくつもの証明の仕方があるのと同じです。

今回はこの「痛くない姿勢で痛くない方向にさする」という方法にまつわる話をもとに、パラドキシカルコントラクティングを説明したいと思います。

「先生、何か自分でやっておくといい運動ありますか？」

施術が終わってから、こういう質問を受けることが度々あります。

「体をいためたときは、運動よりも安静が必要です。強いてあげるなら、今日の時点では〇〇〇〇〇というような運動をすると良いかもしれません。でもそればかりやっていると、こんどはそれとは逆の運動をしたほうがよくなることもあります。痛みが出る運動は避けて、痛くない範囲でいろんな動作をするようにしてください」

「わかりました」

「ところで、運動以外に自分でできることとして、当院でお勧めしていることがあります」

「どんなことですか？」

「触って痛いところを、痛くない姿勢をみつけて、痛くない方にさすっていただくという方法です」

「それだけでいいのですか？」

「はい。施術を受けてもらって、痛みが消える姿勢や、さすって痛くない方向があるのはわかっていただけたのではないのでしょうか？」

「たしかにありましたね」

「手の届く範囲ならできますか？」

「それならできそうです」

「この方法なら、めったに裏目に出ることはありません。安全で、非常にリスクが少ないのに、けっこう効果があります」

「いい方法なんですね」

「はい。ぜひやってみてください。ただ、うまくできなかったら無理にやろうとせず、当院にお任せください」

「わかりました」

あまり知られていないことですが、体の痛みが少なくなる姿勢やさする方向があります。

体をねじっていためている場合、さらにねじると痛みが増し、ねじれを戻すと痛みが減ります。

痛くない姿勢をとるということは、ねじれを戻すということになります。

ねじれを戻しながら、もんだりさすったりすると、早くねじれがとれ、とても効率的に痛みがとれます。

私はこれをポジショニングエフィシエと呼んでいます。

エフィシエというのは、技法をハイブリッドした効率的（エフィシエント）な施術という意味で、私の造語です。

体がねじれると、縮みすぎたところと伸びすぎたところができます。

体が伸びすぎたり縮みすぎたりしている場合、伸びすぎたところをさらに伸ばすように、あるいは縮みすぎたところをさらに縮めるようにさすると痛みが増します。

痛みが増す方向がわかったら、そちらへはさすらないようにしましょう。

反対に、伸びすぎているところを縮めるように、あるいは縮みすぎたところを伸ばすようにさすると痛みが減ります。

この方法を私はガイディングエフィシエと呼んでいます。正常な方へ誘導（ガイド）する施術という意味です。

ちなみに、もむという方法は、筋肉を伸ばす作用があります。

縮みすぎているところをもむと楽になりますが、伸びすぎたところをもむとかえって痛みが増す場合もあります。痛くない方にさするのであれば、縮みすぎているところに用いても、伸びすぎているところに用いても問題はほとんど起こりません。

当院でもっとも頻繁に提供しているのが、このポジショニングエフィシエとガイディングエフィシエです。

エフィシエはこれらの他に、次の3つがあります。

ベルトで加圧しながら施術するコンプレッシングエフィシエ

テープを貼って施術するテーピングエフィシエ

ストレッチしながら施術するストレッチングエフィシエ

しかし、これらは自分ではなかなかやりづらいので、患者さんにはあまりお勧めしていません。

さて、何年かぶりに来られた患者さんのお話に戻ります。

「先生に教えてもらったように、痛いところを痛くない姿勢で痛くない方にさすっていたら、ずっと調子が良かったのです」

「それはよかったです。アドバイスした方法を使ってくさってありがとうございます」

「でも、今回の痛みだけは、自分でいくらやっても良くならないのでうかがいました」

「自分ではうまくいかないけれど、人にやってもらうとうまくいくこともあるので、一度施術してみますね」

初回は、患者さんが自分でやっても痛みが残っていたところに施術をしました。

2回目もできうる施術をすべてして、触って痛いところはなくなりました。

それでも、じっとしていても、ずっと痛みが続いているということでした。

このような場合、体の深部で炎症が起きていることが予想されます。

日にち薬で、炎症が収まって痛みが引くのを待つという選択肢もあります。

しかし、深部で炎症が起きているような強い痛みには、ステロイドの点滴などの消炎処置が著効することがよくあります。

痛みが耐え難いものであれば、整形外科などを受診されるようにお勧めしました。

接骨院でできることは限られています。すべての症状に対応できるわけではなく、重篤な症状には太刀打ちできません。

激しい痛みを抱える患者さんは早めに信頼できる医療機関に紹介しています。

重篤でなければ、「痛くない姿勢で痛くない方向にさする」という方法だけで治ってしまう人もたくさんいます。

しばらくさするだけで、驚くほど痛みがとれます。

限界はあるとしても、非常に効果の高い方法であることにかわりはありません。

短時間で変化が起きるので、さすりすぎると、逆効果になることもあります。

縮みすぎたところが伸びすぎてしまったり、伸びすぎたところが縮みすぎたりしますから、気をつけなければいけません。

さてこの「痛くない方にさする」というガイディングエフィシエの長所は、組織がどの方向に縮みすぎたり伸びすぎたりしているのかがわかるということです。

この情報だけでも、どういう施術が必要かを割り出しやすくなります。

逆に短所は、縮みすぎているのか伸びすぎているのかが明確にはわからないということです。

ですから、ポジショニングエフィシエなどと組み合わせて、縮みすぎか伸びすぎかを考えていきます。

ただ、痛くない姿勢がわかったとしても、縮みすぎか伸びすぎかの判断がむずかしいこともあります。

その場合は、コンプレッシングエフィシエなども用いて手がかりを増やし、縮みすぎか伸びすぎかを判断していきます。

ただ、縮みすぎか伸びすぎかの判断はできなくても、痛くない姿勢で痛くない方向にさすれば、かなりの痛みが改善できます。

次に、もう少し詳しくこの方法を説明します。

わかりにくい話になると思いますので、縮みすぎか伸びすぎかわからなくてもいいという方は、この節を飛ばしてください。

どちらを先にするか？

さて、痛くない姿勢をみつけるのと、さすって痛くない方向をみつけるのは、どちらを先にやればいいのでしょうか？

どちらからはじめても結果は同じなので、やりやすい方からやってください。

私はどちらかといえば、さすって痛くない方向からさがし始めることが多いでしょうか。

さすって痛くない方向がわかれば、縮めればいいのか、伸ばせばいいのかを考えていきます。

まず、さすって痛くない方向を軸にして、その軸上で、体の各部位を近づけたり遠ざけたりしてみます。

それで変化がなければ、この軸の通る面上で、体の各部位を動かしてみます。

むやみに動かすより、何かの基準をもって動かす方が私は効率的だと思います。

もし、その軸が縦軸に近いものなら、前後と左右の動きが重要になります。回旋の影響は、少ないでしょう。

その軸が横軸に近いものなら、回旋と左右の動きが重要になります。前後の動きの影響は少ないでしょう。

その軸が矢状軸に近いものなら、前後と回旋の動きが重要になるでしょう。左右の動きの影響は少ないでしょう。

軸をすえて伸ばすとか縮めるとか考えると、効率的な施術をするのに役立つでしょう。

はじめに痛みのない姿勢にするだけで、さわっても痛くなくなるということもあります。

さすって痛くない方向を見つけるためには、いったん痛みのある姿勢にもどさなければなりません。

さすって痛くない方向を、ポジショニングをする前にさがしておけば、一手間減らすことができます。

また、痛くない姿勢をさがすときに、痛くない方向にさすりながらさがした方が、タッチがソフトになり、リラックスできるという利点もあります。

ただ、痛くない方向にさするだけでソフトになりすぎて、痛みのない姿勢がわからなくなるということもあります。その場合には、痛くない方向にさするのはやめて、さわって痛くない姿勢をさがします。

それでもわかりにくければ、あえて痛い方向にさすりながら、痛くない姿勢をさがすこともあります。

痛くない姿勢をさがすときに、一番痛い姿勢が見つかることがあります。

一番痛い姿勢の反対の姿勢をとれば、それが痛みのもっとも少ない姿勢である可能性が高いです。

さわった痛みが強すぎて、さすって痛くない方向が見つからないということもあります。

その場合は、できるだけ痛くない姿勢をさがしてからさすれば、痛くない方向が見つかることもあります。

痛いところが複数の方向から引っ張られているときは、さすって痛くない方向がわかりにくいこともあります。
その場合、他のところにも施術して、引っ張られるのを減らすと、さすって痛くない方向が出てくることがあります。

それもみつからなければ、他のエフィシエを試しますが、長くなるのでここでの説明は省略します。

ガイディングエフィシエ

まず、さすって痛くない方向をさがすには、痛いところや気になるところをさわってみます。

さわって痛ければ、上下、前後、内外（体の中心の場合は、左右）さまざまな方向にさすってみます。

「上」と「内」が痛くないなら、中間をとって斜めに「上内」が痛くない方向とします。

例えば、背中の痛いところの場合、次のように選んでいきます。

「上にさするのと、下にさするの、どちらが痛くないですか？」

「上」

「内か外かでは、どちらが痛くないですか？」

「あまり、変わりません」

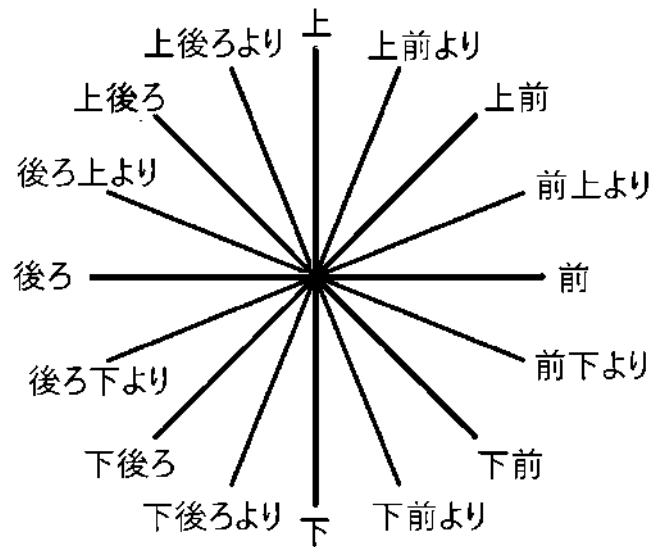
この段階で上と決めてもいいのですが、少し内寄りと外寄りで違いが出ることもあるので、比べてみます。

「じゃあ上で、少し内寄りが痛くないですか、少し外寄りが痛くないですか」

「若干、内寄りの方が痛くないです」

「では、内寄りの上にさすりますね」

正面と背面、側面、水平面で表現は変わりますが、8方向（細かくすれば16方向）の中から痛くない方向を選んでいきます。



右側面のさする方向の名称

左側面・前面・背面・上面・底面で名称は変わるが、
方向は同様に8方向または16方向になる

もし、痛みを感じるところがさわっても痛くなくても、いったんいろんな方向にさすってみましょう。

すると、痛みが出る方向や、不愉快な感じがする方向がみつかることがあります。

この場合は、その方向と反対の方向が、さすって痛くない方向となります。

さすって痛くない方向がみつからないときは、残念ながらガイディングエフィシエは使えません。

では、さすってみて、痛くない方向が見つかったとします。

ポジショニングエフィシエ

次は、痛くない（または痛みが少なくなる）姿勢をさがします。

さわって痛いところを、ここではAとします。

A から痛くない方にさすって、指や手がたどり着いた先を B とします。

A からみて B の先にある部位を B' 、 B'' 、 B''' ・・・、
B からみて A の先にある部位を A' 、 A'' 、 A''' ・・・
とします。

「先にある」というのは、直線的にという意味ではなく、
たどって遠ざかるという意味です。

ですから、体の反対側が先にある部位になることもあります。

① B または B' 、 B'' 、 B''' ・・・のいずれかを A から
線 AB の延長上に遠ざけると、A の痛みが少なくなるとき

② A または A' 、 A'' 、 A''' ・・・のいずれかを B から
線 AB の延長上に遠ざけると、A の痛みが少なくなるとき

①または②あるいは①と②の両方のときは、A が縮みすぎ
ていると考えます。

③ 縮みすぎている場合は、遠ざけるとよかったところを
遠ざける姿勢にして、A を B の方に向けてさすります。

④ AB の延長上ではない方向に B' 、 B'' 、 B''' ・・・、
 A' 、 A'' 、 A''' ・・・のいずれかを動かした方が、痛み
が消えるとき

⑤ B、 B' 、 B'' 、 B''' ・・・、 A' 、 A'' 、 A''' ・・・
のいずれかを A に近づけた方が、痛みが消えるとき

④また⑤のときは、A は伸びすぎていると考えます。

A が伸びすぎているときは、多くの場合どこかに縮みすぎ
ているところがあります。

縮みすぎているところは、固くなっていたり、さわると痛
かったりします。

みつけにくいときは、痛みが消える姿勢と反対の姿勢をす
るとみつけられることもあります。

どんなにさがしてもみつけれないこともあります。たいていは1, 2カ所、多いときは数カ所みつかります。縮みすぎているところがみつかった場合は、まずそこを伸ばしながらほぐします。

縮みすぎたところが伸びたら、痛みの消える姿勢をしてAをBの方に向けてさすります。

縮みすぎているところが見つからない場合は、痛みの消える姿勢をしてAをBの方に向けてさすります。

改善しないときは

施術をしても痛みが改善しない場合は、次の（イ）～（ホ）のような理由が考えられます。

（イ）施術が足りなかった。

施術の量が足りなくて、痛みがとりきれていなかった場合は、もう少し施術すると痛みが改善することもあります。もう一度やり直してみて、同じ操作で痛みが軽くなるなら、もう少し同じ施術を続けます。

（ロ）施術をしすぎた。

締めすぎたり、伸ばしすぎたりすると、症状が逆になることもあります。

例えばBからAにさする方が、痛みが少なくなる（さすって痛くない方向が逆になる）ことがあります。

縮みすぎが伸びすぎになったり、伸びすぎが縮みすぎになったりします。

（ハ）隠れていた問題が出てきた。

一番重要な問題が改善すると、二番手の問題が表面化してくることがあります。

（ニ）見立てが間違っていた。

縮みすぎと考えたけれど、実は伸びすぎだった。あるいは、伸びすぎと考えたけれど、実は縮みすぎだった。

（ホ）伸ばしたり締めたりしても改善しない問題が残った。

この記事の初めに取り上げた患者さんのように、施術をしつくしても痛みが残る場合には、施術では改善しない問題が考えられます。

例えば、椎間板ヘルニアや石灰化などによる炎症があるときには、炎症を抑える処置などが必要になります。

パドキシカルストレッチと パドキシカルコントラクティング (3)

組織が縮みすぎて痛みが出るケースで多いのは、筋肉が縮みすぎるケースです。

他に縮みすぎる組織には、筋膜や腱、靱帯、軟骨、骨などがあります。

筋膜や腱、靱帯、関節包などが縮みすぎると、体の柔軟性が失われたり、関節がゆがんだりします。

関節に圧がかかると、軟骨が圧縮されて、軟骨から水分や保水成分が出てしまいます。

骨に強い圧がかかると、圧迫骨折を起こし、つぶれてしまうこともあります。

これらの縮みすぎた組織を伸ばすようにさすってあげると、痛みがとれたり、ゆがみが少なくなったりします。

継続的に施術を受けていただいたことで、つぶれていた軟骨が、正常な厚みに戻ったケースもあります。

さすがに圧迫骨折を起こしてすぐの痛みはなかなかとれません。

それでも根気よく施術を続けると、痛みが減るだけでなく、つぶれた骨が元の形に戻ったというような事例もあります。

縮みすぎる痛みがもっとも発生しやすいのが筋肉です。

筋肉はそれ自体が収縮する機能を持っており、縮みすぎたまま伸びなくなったり、けいれんしたりすることで縮みすぎになります。

内臓筋や心筋をさすることはないので、ここでいう筋肉とは骨格筋のことです。

骨格筋は両端が腱になっていて、それぞれ別の骨にくっついていきます。(皮膚など骨以外の組織にくっつくこともあります)。腱が骨にくっついている場所を起始または停止と呼びます。

体幹または骨盤に近い側が起始、遠い側が停止となります。筋肉の中には筋繊維が束になって走っていて、両端で腱につながっています。

筋肉が収縮すると、あるいは筋肉のどこかが縮みすぎると、起始と停止が近づきます。

筋肉に縮みすぎたところが増えて痛む場合、起始か停止またはその両方を遠ざけると痛みが減ります。

また縮みすぎたところは、筋繊維に沿って伸ばすようにすると痛みが減ります。

多くの場合、起始に向けてさするか、停止に向けてさするか、より痛みが少ない方があります。

まれにどちらにさすっても痛みが減るということもあります。

縮みすぎているところは、筋繊維を横切るように（はじくように）さすると、痛かったり不愉快な感じがしたりします。

縮みすぎた筋肉を伸ばすときは、痛みが消える姿勢をとることによって筋肉が伸びる方向と、さすって痛みが消える方向が平行になります。

言い換えれば、痛みが消える姿勢をとることによって筋肉が伸びる方向と、さすって痛みが消える方向が平行にならないときは、伸びすぎによる痛みだと考えます。

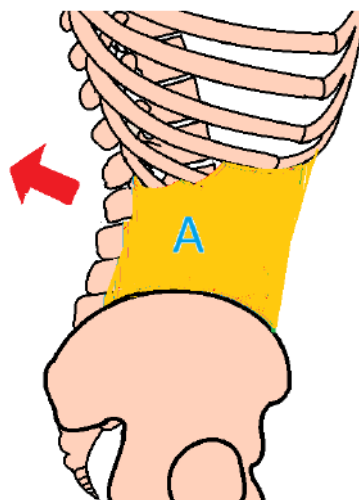
ですから「④ ABの延長上ではない方向にB'、B''、B'''・・・、A'、A''、A'''・・・のいずれかを動かした方が、痛みが消えるとき、Aは伸びすぎと考える」となります。

ガイディングエフィシエとポジショニングエフィシエから パラドキシカルコントラクティングを説明する

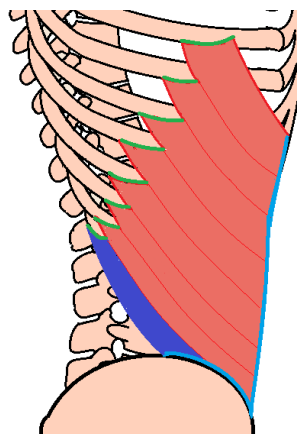
事例をあげましょう。

ある患者さんは、右腰横の A
のポイントに痛みがありました。右図→

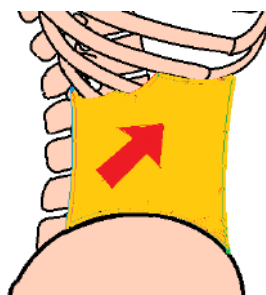
まず、痛みの消える姿勢を
さがしたところ、体を右に
ねじって背骨を後方に反ら
し、胸郭を上げる姿勢で痛
みが消えました。赤い矢印
の上体を動かすと痛みが消
えました。



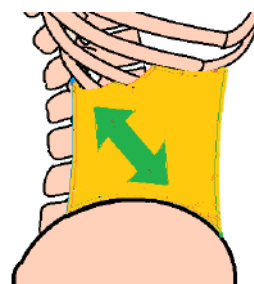
これは外腹斜筋を伸ばす姿勢
でしたので、外腹斜筋が A の
部分で縮みすぎているのでは
ないかと考えられました。
右の図の筋肉が外腹斜筋。
青い部分が、縮みすぎになっ
ていると疑われる繊維。骨盤と第
12肋骨をつないでいます。



しかし、さすってみると、痛
くない方向は上前方でした。
右図、赤い矢印の方向。

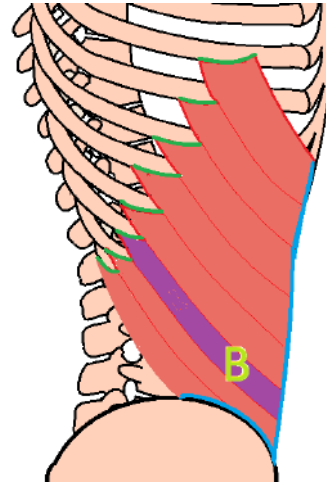


もし、外腹斜筋が縮みすぎて痛
みが出ているのなら、さすって
痛みがないのは上後方か下前
方になるはずです。
右図、緑色の矢印。



痛みの消える姿勢で伸びている筋繊維の方向と、さすって痛くない方向が平行ではないので、組織が伸びすぎていると考えられました。

他に縮んでいるところをさがしてみると、外腹斜筋の A よりも前方の部分 B が固くなっていました。右図→

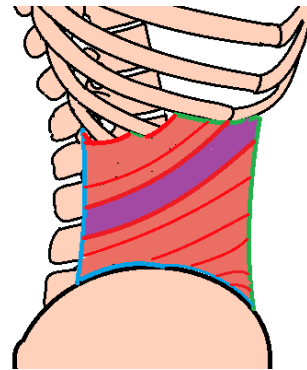


A と B を横からベルトで圧迫してみると、A は痛みが残るものの B は痛みが消えました。

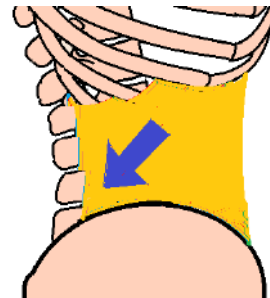
B を圧迫しながらしばらくほぐすと、B の固さや痛みはなくなりました。

B を伸ばしてから A を上前方にさすると A の痛みもなくなりました。

A のポイントで内腹斜筋が伸びすぎていたのでしょう。右図の紫色の部分。腰の筋膜と第 10 肋骨をつないでいる。



右の内腹斜筋は、体を右にねじって背骨を後ろに反らし、胸郭を下げるのが最も縮む姿勢です。右図のように、胸郭を後ろ下方に引くと、内腹斜筋を縮めることができる。



しかし実際には胸郭を上げて、一見伸ばしているのかと思える方に縮めることで、伸びすぎている A を縮めることができました。

A を縮めるためには、B を伸ばす必要があり、B を伸ばすためには胸郭を上げることが必要だったからです。

この事例でも「パラドキシカルコントラクティング」を用いました。

縮みすぎている筋肉 B に引っ張られて、筋肉 A が伸びすぎているとします。

そのとき、筋肉 A の痛みをとるためには、筋肉 A を縮めることよりも、筋肉 B を伸ばすことのほうがたいてい効果的です。

もし、筋肉 A と筋肉 B に共通のはたらきがあるなら、筋肉 B を伸ばして筋肉 A を縮める場合には、筋肉 A を一見伸ばすような姿勢で縮めることになります。

これが、パラドキシカルコントラクティングが必要になる理由です。

次回はまた、違う角度から、パラドキシカルストレッチングやパラドキシカルコントラクティングを説明してみたいと思います。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える

③家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

1 はじめに

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、社会的には容認されないような要求を次々と親族や支援者に行うことで結果的に物理的にも心理的にも「閉じた」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いてしまった高齢者（単身生活者）の事例について考察を行いました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについてはほぼ一貫して考えてきたともいえます。そして今まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。

こうした点について連載 18 では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について私見を述べさせていただきました。

本連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込み、主題そのものはぶれることなく視野をより広くして原稿を記載していきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じてい

る「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただきました。

その後の連載 28（連載 29 と記載していますが 28 に修正します）では「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができると題して、「愛と仕事」（フロイト）及び「居場所と出番」（犯罪対策閣僚会議）に言及しました。それを受けて連載 29 は、家族介護当事者の立場から、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べさせていただきました。これに関連し、直近の連載第 30 回では「改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」として、連載 6「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」を更に深めるかたちで、厚生労働省のデータ等にも言及しつつ、家族アセスメントという観点から更に掘下げて私見を述べました。連載 31 では久々に少年非行をとりあげ「非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」について「関係性」の視点で検討しました。

今回は、令和 6 年 12 月に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」を私が「関係性」の観点から視聴して感じたことを軸に、家族のなかでの「ケア」について考えていきたいと思います。

なお、本稿は、映画「どうすればよかったか」の内容・構成などを言及するものでも、映画評論でもありません。あくまで、家族における「ケア」の在り方を考えるための軸としてこの映画を位置付けていることを申し添えます。

1 「家族がケアを担う」とき

「家族がケアを担うとき」という言葉から、どのようなことが想起されるでしょう。

妊娠から出産に至るまでの準備

育児

高齢となった両親などの介護

これらは、一見すると、当事者やその家族が家庭内で対応すべきこと、つまり。「ケアを担う」べきことのように思われます。

介護に関していえば、平成 12 年の介護保険制度の導入によって介護の社会化が進められたようにも思われます。しかし、介護保険導入前・導入後にわたって家族・親族の介護や介護支援に従事してきた私の実感は

家族介護のただなかにあっても、社会資源の活用にまで思いが至らない
といったことが十分にありえる、というものです。

また、直接的なケアや社会資源を利用するための費用負担、ケアを担う関係機関との調整連絡等を含め家族が担うことが多々あるのも現状です。

「家庭や家族は福祉の含み資産である」といった内容の言葉を、私は学生時代に福祉制度を学びそれを実践していく過程でたびたび耳にしてきました。そして、私自身が当事者として制度利用をする際に、改めてこの言葉の重みを実感しました。

「家族がケアを担う」ときというのは、ライフプランのなかで（一見）既に織り込みずみのようなこともあれば、突然その事態に見舞われるということもあります。

前者、すなわち、個々のライフプランのなかで（一見）既に織り込みずみ、というものの例として

○歳頃に結婚し、子どもは○歳頃までに出生、小学校入学とともに職場復帰
ということが挙げられるかもしれません。

しかし、実際に「家族をつくり、家庭を営む」ということは、いくら緻密にプランを立てても、プランが緻密であるからでこそ、うまくいかないことが多々あるということは、

対人援助職である前に、「家庭」「家族」のメンバーであることについて思いを致せば、それが容易ではないことはわかると思います。

前者でも容易ではないのに、後者、つまり、「突然その事態に見舞われること」の大変さは推して知るべしでしょう。急な事故や病気だけではなく、「予期せぬ妊娠」「家族が犯罪被害に巻き込まれケアを必要とする事態となった」あるいは「家族が突然逮捕された。当該家族メンバーへの対応のみならず、混乱する他の家族メンバーへのケアも行わなければならない」といったより多くのことが想定されます。

一方で、家族の規模（世帯員数）は年々縮小しています。家族機能の変容が指摘されて久しいですが、それ以前に、家族・親族の「数」が減っていることで、「質」を問う以前に「量」（ケアに対応できるインフォーマルな人的資源）が減っていることも、「家族がケアを担う」ときを考える際には、念頭においておくべきだと考えます。

更に、人間は自分がリアルに経験していないことや想定していないことに冷静に対処することは決して容易ではないということも考慮にいれるべきでしょう。

対人援助職として業務に取り組む際には、業務に必要な理念や知識、技能を身に付けるようにし、かつ、組織としての指導やSVにより対人援助職としての訓練を経て現場に立ちます。それと比較すれば、家族メンバーとして家庭のなかで役割を果たす、つまり、「家族がケアを担う」ということが、相応の発達年齢になれば自然に「できるもの」と考えられていることについて、私は疑問なしとしません。

これについて「愛があれば大丈夫」「家族愛や家族の紐帯がある」と考えることは、ロマンチックかもしれませんが、あまりに安直で現実的ではありません。家族だからこそ様々な感情があり、適切な距離感を取ることは難しいことがあります。たとえ愛があったとしても、それは課題の抱え込みにつながることも往々にしてあり、追い詰められたうえでの拡大死（心中事案）が発生していることに思いをいたすべきでしょう。

2 「ケアを担う」家族を考えるときに必要な視点

では、先述した「家族愛」なるものが存在し、あるいは対人援助職の訓練のように理念や知識、技能があれば、家族はケアを担っていけるのでしょうか。「ケアを担う」ときに備えて、結婚・出産などに際しては予め免許取得や訓練を義務付ける、というところまできてしまうと、もはや一種のディストピア小説・映画等での出来事になってしまうでしょう。子どもを持つこと（ケアを担うこと）を免許制とする近未来の日本を描いたフィクション「星屑家族」（幌山あき）では、扶養審査官による審査に合格せず免許を得ることができない人々に対する差別もリアルに描かれています

昨今では、子育てや介護と仕事の両立、教育などに関して、行政の様々なポータルサイトが充実してきました。検索すればまずそれらにヒットし適切な相談窓口の玄関に案内するサービスの一つです。それでもなお、子どもの緊急の病気等の際、匿名掲示板に状況を書き込みさらには「緊急！」と付して回答を求めたり、根拠に乏しいと思われる情報発信を鵜呑みにしてしまうことも散見されます。そうした行動を愚かしいと断罪することは簡単ですが、適切な相手に「相談する」ことは実は難しいということも考慮すべきでしょう。また、こうした行動の背景には、正確な情報を得るということだけではなく、「大変ですね」「私もそうでした」「頑張ってください」といった「共感」を求める気持ちもあるでしょう。ケアという場面に限らず人間は、正解だけではなく情緒的な交流・共感なしでは、生活していくことが難しいのだと考えています。

また、現実世界で「相談する」という行為は、「弱さの自己開示」という側面を持つがゆえ、実行することを躊躇する方もおられます。そのため、匿名性に守られた世界、つまりはインターネット上で誰かに共感してもらいたいといった行動が生まれるのではない

でしょうか。

私は依存症当事者や家族支援を四半世紀以上続けてきましたが、駆け出しの際にある支援団体当事者スタッフの方から「相談はその内容より誰に相談するかで相談の質が決まる」といったことを教えていただきました。いかに適切な相手に相談するかということが重要であり、そのためには、安心感を得られる関係性のなかで「相談する」体験を重ね、あるいは「相談される」経験も蓄積していくことが必要だと考えています。

ゆえに、我々は、今そこで困難に直面している方にとって、援助専門職としてスムーズに支援を行うことはもちろんのこと、文字通りその方を「支える」ような場や時間があるかということにも目配りすることが求められていると考えています。

3 映画「どうすればよかったか」

ただ、知識や技術を持つ専門家であっても、自分の家族が疾病・障害を抱えたとき、適切にケアをする、あるいは、適切なケアを求めて専門機関にケアを求めることができるとはかぎりません。

そうしたことを実感したのは、令和6年12月7日に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」（藤野知明監督）を観たときでした。私は封切翌日にミニシアターの席を予約して鑑賞しましたが、席は満席で、観客のなかには精神保健分野で働く専門職や家族と思われる方も多くおられたようでした。

この映画を製作された藤野監督の実姉は優秀な医学生でしたが、大学時代に統合失調症と思われる症状を発症します。藤野監督の父母は基礎医学の研究者でしたが、監督の実姉を精神科医療や精神保健福祉サービスにつなげることなく、結果的に約四半世紀にわたり実姉を自宅に閉じ込めて生活することとなります。

「適切な医療を受けさせない」「外に出られないように鍵をかける」という言葉から私がまず想像したのは、私宅監置の時代に設置された「座敷牢」でした。しかしこの映画のなかでは、実姉は自宅内では比較的自由に行動することができていました。父は停年退職後に資金を投じて様々な設備が整備した研究所を自宅に開設し、実姉はそこで「研究」を続けているという形をとっています。

つまり実姉にとって、衣食住も社会につながるはずの仕事も、全てが家族や家庭のなか、閉ざされた関係のなかで完結していきます。戦前に医学校を卒業し父と基礎医学の研究を長年行っていた母もまた、自身が老いて病いを得ても受診することなく家からは殆ど出ることはなかったのです。

実姉の最初の発症とみられるとき、まだ高校生だった藤野監督は、優秀だった実姉の変化、実姉に対する父母（監督と母が救急車を要請し受診させるも、父の指示ですぐに帰宅することになったこと）の対応に戸惑います。父母から説明を受けますが、それでも何かを隠しているという懸念を拭えません。監督は大学を職業後は首都圏で就職をしたことを契機にこの実家を離れるものの、その後、家族の同意を経て、帰省等のたびに両親や姉にカメラを向けていきます。

映画の冒頭でも触れられていますが、これは統合失調症の治療の在り方を世に問う作品ではなく、家族メンバーが病い、それも偏見がないとはいえない統合失調症であったとき、本当に「どうすればよかった」という問いかけもあると思いました。

以下、「どうすればよかったか」に登場する家族です。ここでの記載は、藤野監督以外は監督の目線からの記載とします。

家族構成

父：基礎医学の研究者（本文中の記載は「父」）

母：基礎医学の研究者（本文中の記載は「母」）

長女：父母の期待を担う優秀な子ども。医学生時代に精神疾患に痴漢（本文中の記載は「実姉」）

長男：自分の原家族にカメラを向ける藤野監督（本文中の記載は「監督」）

4「ケアを担う」家族への支援を行う際に必要な見立て

「どうすればよかったか」について、私は精神保健福祉的な視点はもちろんのこと、この「家族」がいったいどういう状態におかれ、どのように変化していくのか、頭の中でジェノグラムやエコマップを描きながら見入っていました。

父母と8歳違いの姉弟の4人家族、父母がいずれも高学歴で社会的権威の職業に従事している家庭ということと、実姉と監督である弟の8歳の年齢差ということがやや目を引くものの、介護と育児の両立や経済的困窮といった「目に見える」課題は少なくとも見えません。むしろ、父母双方が研究者として稼働し多忙であるため、お手伝いさんが家事や育児を担う（映画パンフレットに記載）など、家庭における「ケア」が昭和40年代前後において外注化されている点については、経済的な余裕と、ケアのために第三者を雇用して家庭内に入れているという「開かれた」印象を持ちました。

一方、父母が2人の子ども、特に優秀な姉には学習面で大きな期待をしていたことは、映画中のそこここからも窺われます。実姉は4度目の受験で医学部への進学を果たしていますが、女性が大学の理系学部に進学することは今ほど多くはなかったと思われる時代に、3回の浪人を認めるというのは珍しいと感じた一方で、実姉はどのような思いで受験勉強に励んできたのか気になりました。

そして医学部で学んでいた実姉が24歳になったとき、この家庭の状況は一変します。実姉は夜間に突然大声で支離滅裂な内容を叫び続け、まだ高校生だった監督と母は救急車を要請し、実姉は病院に搬送されることとなります。しかし単身赴任中の父の意向によって実姉はすぐに自宅に戻ることとなります。父は監督に対し、実姉の状態は「全く問題ない」と説明するものの、監督は実姉の変化を目の当たりにし、何より「家庭のなかで何かが起きているのに、きちんとした説明がされない」と状態に、不安と不審を覚えることとなります。

実姉、そして実姉の疾病のことを、それが精神科医という専門家に対してですらも漏らさないというこの父母の姿勢は、実姉の弟たる監督に対し秘密をつくり、当然ながら家庭のなかではそれが「秘密」であるがゆえに、家族メンバーがそれを抱え込むということになっていきます。つまり、家族メンバーの突然の不調に対して不安を覚えている10代の子どもに、十分な説明がされないまま家庭の秘密を守る共犯者を担うような役割が科されてしまうのでした。

家族メンバーの不調や不在などを外に漏らさない（話さないなど）よう秘密を抱えて生活することを（暗にはあっても）迫ることは、不調などを抱える当事者にとっても不利益なばかりか、他のメンバー、特にその不調による影響を最も被りやすい立場の者や、若年の者には、ある意味ケアを担うよりも過酷なものということはいうまでもないでしょう。

監督も同様でした。父母よりは姉のことをある程度客観的に見ることができており、長じて父母に対し実姉の症状や受診について意見し、「延々と議論」（映画パンフレットより）しますが、父母の態度は変わりません。父母は秘密を抱えることで、家庭の内外の境界線がより強固になるばかりか、親世代と子ども世代の世代間境界も柔軟性を失っていきます。状況が好転しないまま、大学を卒業した監督は関東に就職するため家を出るのでした。

今であれば、障害・疾病のある同胞がいる「きょうだい児」としての実家との関係性をどうするか、といったことが論じられるかもしれませんが。監督の足が実家から足が遠のくことも十分ありえることでしょう。しかし監督は、大学卒業後に勤務した会社を退職後入学した映画の専門学校の課題のため、父母と実姉にカメラを向けてこの状況を記録に残すことを決意します。カメラ越しに家族に対話する時間は20年以上に及びました。

「撮影するぐらいなら、実姉に対し直接的に働き掛け、医療につなげることはできなかったのか」という声もあるかもしれません。ただ、私は、こうした状況の家庭や家族と向き合うには、カメラのレンズ越しという「距離感」が必要だったのではと考えています。物理的にも心理的にも厳しい状況に介入するとき、専門職でも命綱(戻ってケアされる場所やスーパーバイザーの存在)が必要だといわれていることを考えれば、想像に難くないでしょう。特にこの家族については、スクリーン越しにでも見ている私自身、内側に引き込まれるような求心力を感じました。外界との境界線は人を拒んであれだけ強固になっているにも関わらず、です。スクリーン越しにでも「内側」に入ってしまうと、そのままそこに溶け込んでしまう(同質化を迫られる)ような心地すらしました。それほどまでにこの家族は、実姉の疾病という秘密を核にして、互いに身動きができない関係性に陥っているのだと感じました。

そして「座敷牢」と称するにはあまりに立派な家屋のなかで、父母と実姉の3人が外界との接触を断って長い時を過ごすことになったのです。

家族との在り方について、「家族メンバーとしてとことん付き合う(最後まで支援するか)」「か「全く離れてしまうか(連絡をとらない)」かの二択で考えてしまいがちですが、実はその中間に、ほどよい距離感を求めて立ち位置を模索するということも人にはありえるということを考えなければならぬと改めて思います。

「父母のうちのどちらかが病気等になれば、病気等ではないほうがその配偶者と娘との両方のケアを担うことになるが、それができなくなったときにうことができなくなる、その時に変化があるだろう」と監督が精神科医師に助言されていたとおり、認知症を煩いながら自身もまた医療機関を受診せず家から殆ど出なかった母が亡くなり、家族メンバーの数と関係性が変化する大きな節目を期に監督が介入し、父も同意のうえ、実姉は発症と思しき時期から約四半世紀ぶりに医療につながるようになります。入院と退院後の服薬などで実姉の状態は安定し、3人の家族は停止した時間を巻き戻すかのように新たな家族の営みを再開します。監督は、久々に外の世界に触れてアクティブに活動する実姉、淡々とその場に「いる」父の姿をカメラで記録していきます。

ただ、父は20代で我が子が精神疾患に罹患したという事実を受け入れられたわけではありませんでした。医療機関につながるも病いを経て亡くなった実姉の葬儀の際、父は論文を棺のなかに入れ、それは自分と娘(監督の実姉)との共同研究の成果物であり、姉の人生は「充実したものだった」と会葬者に挨拶をするのでした。

親や同胞世代が、不調に陥った家族メンバーに受診を働き掛けても本人に病識がない場合は受診が難しいこと、家族が受診に向けて社会資源への相談などの一歩を踏み出すまでに長い時間がかかることは、それぞれ往々にあることでしょう。

しかし「どうすればよかったか」では、実姉本人の意思は不明のまま、父母の意向のまま約四半世紀を相談・医療機関につながることなく過ごすことになりました。そこで費された長い時間は実姉の人生であり、その時間は家と隣接した研究所で留まっていました。閉じた家と研究所は、実姉のことが外に漏れないよう、父母がつくった装置であるともいえるでしょう。見送りの際にいたってもなお父は、「充実した人生」という言葉によって実姉の人生を書き換えていると感じました。会葬者への挨拶の言葉でしたが、一方で父が自分自身を納得させるための発言のように感じました。

5 個々の家族メンバーではなくその家族構造をみること

この映画を視聴する際に私が大切だと感じたのは、「個々の家族メンバーではなくその家族構造をみること」でした。「精神疾患(と思われるもの)」「権利侵害」といった言葉にとらわれてしまうと、個々の家族メンバーの病理性などに目が向きがちです。しかし、「家族のうち、誰が悪かったのか」という見方では、この映画の深い内容はくみ取りきれないと私は考えています。

かつて「うちの子に限って」という言葉がありました。子ども世代の問題行動等に接した親世代

が何も知らず発する言葉として、半ば揶揄するような意味合いもあったと私は考えています。

この映画のラストでは、母(父にとっては妻)と姉(父にとっては娘)を見送り、自身は疾病と障害を経て暮らす父が、「どうすればよかったか」という言葉を発しています。

父母はともに基礎医学の研究者であり、家族メンバーの発症に際してもっと冷静かつロジカルな判断ができたのではという批判はあろうかと思えます。ただ、この父母の前に、家族の発達過程半ばで(突然)立ちあらわれたケアという「課題」は、父母の想定を超えたものだったのでしょうか。育児や介護については、まだ时期的な予想がつきやすい面もあります(ただ想定外のことがおこるのが育児でしょう)し、社会資源などを活用して乗り切ることができる場面もあります。父母はこの時は「お手伝いさん」という人的資源を家の中に入れて乗り切っています。

しかし、我が子(実姉)の精神疾患(と思われる状態)については、父母自身受け止めきれないまま、時間が経過していつています。そして

夫婦間連合

子ども世代との境界

社会と家族との境界

の3点が時間の経過とともに厳しい状態となっていきます。

夫婦間連合については、家族形成(結婚)後も基礎医学の研究者として稼働していました。この父母について、夫婦というより研究の同士といった印象を私は持ちました。映画中では特に大きな夫婦間トラブルなども記録されていません。実姉の状態への対応方針等を巡り両者の間に亀裂が入るという場面もなく、一見すると夫婦で協働して「課題の処理」にあたっているようにも見えました。しかし私には、父母が課題に向けて十分話し合いを重ねているようには見えませんでした。「実姉の疾病のことは外には出さない」という点で同士のような連帯感があると感じました。結果的に父母は親世代として子どもの疾病という課題に向き合うのではなく、夫婦あるいは上記のような同士として「家族の秘密」を守るということにエネルギーを割いてしまった結果、解決されない「課題」が積み重なって「問題」となってしまったという印象を受けました。

夫婦として時を重ねれば以心伝心で物事が伝わるというわけではなく、課題を明確化し対応についてぶつかりあってでも協議する場面も必要です。それがないままでは、「どうやって方針を決定したか」「どのような方針か」「いつまでその方針にそって対応するか」が不明となって漫然と時が過ぎ、そこに自分が関与しているとおいう当事者意識も薄くなってしまう。

一方で、子ども世代への事実伝達をしないということについては一致団結して対応しているように見えますが、それは下記にも述べるような秘密の共有という感じです。

世代間境界については、イベントの写真が残されているなど家族の中の良さが窺われる反面で、子ども世代に対し肝心な時には「何も知らなくていい」といった対応があると感じました。夫婦が親世代として協働して問題にあたる、教育方針が一貫しているというよりは、子ども世代にただただ秘匿する姿勢であり、子ども世代との境界線はかなり固いと感じました。

社会との境界線については、非常に硬く、秘密を守るための強固な殻のような様相を呈し、それゆえ社会からの介入が遅れることになってしまいました。

6 閉じた家族、柔軟性を失った外界との境界線

「座敷牢」という言葉を用いましたが、映画を視聴すると、南京錠で家族メンバーが通常行き来するドアなどを施錠するという簡易なものであることがわかります。病いを得ているとはいえ青年期の実姉が壊して脱出することも容易ではないかと感じました。それでありながらなぜ実姉はこの家庭に踏みとどまったのでしょうか。

繰り返しますが、この家族を家族療法的な視点から見ると、家族と外界とを隔てる境界線は堅く、しかも、家族メンバーは秘密を共有することによってかろうじて家族の形を保っています。そして外界との外壁は、年月を隔ててますます強固なものとなっていきます。そして、お互いが

身動きできなくなっている関係性のなか、家族メンバー個々の「外界との境界線」も柔軟性を失っていき、結果的に、この家庭は外界から自らを遮断することになっています。

そうすると、外界からの物理的な介入(人の出入り)や情報の出入りは、この家族にとって驚異でしかなく、外からのアウトリーチがあってもはじかれてしまうでしょう。

家族メンバー相互の関係性も膠着しており、現状から踏み出し変化を促すような動きをすることを互いにけん制し合い、結果的に変化をもたらす動きもなくなってしまう結果となっています。座敷「牢」というよりも、自身の吐き出す糸により形成された繭のなかにいるようなものだと私は感じました。

加えて、実姉を医療に診せることなく隔離することについて、父母自身も100%よしとはしなかったのではないかと私は考えています。「これでいいのか」という疑問は常にあるものの、誰にも相談できなかったというのが現実ではないでしょうか。しかし冒頭でも述べたように、助けを求めことはいわば弱さの自己開示であり、そうしても大丈夫だという社会への信頼感が必要です。

父母は共に高度な知識や専門知識を持ち社会的成功を納めています、だからこそ、自分と同じ専門職である医療従事者に対して自身の家庭のことを相談することはできなかったのではないのでしょうか。精神疾患への偏見があることも知っていたからでしょう。

相談できる力とは必ずしも高らかに救助を求める力ではなく、社会は信頼に値すると信じて小さな声でも発することを諦めないことと考えます。母亡き後父が実姉の受診などを認めるあたりでは、監督の介入に同意したというよりは、父が伴侶である母を喪い、自身も年齢を重ねることで、やむをえず四半世紀にわたった問題を手放したのではないかという印象を受けます。

7 個々の内面を掘下げるのではなく、関係性や構造をみることにについて

父が支配的である、母がプライドが高い、といった個々の内面について言及する感想もあるかもしれませんが、ただ、こうした状況を理解するには、個々の内面を掘下げるだけではなく、関係性や構造に着目してみるのがより必要だと私は考えています。

「まさかあの●●が」という出来事が発生することは決して稀ではありません。そうした出来事に接したとき、個々の内面を掘下げるだけでは解決には結びつきませんし、出来事を「ニュース」として消費するだけに終わってしまうでしょう。

「どうすればよかったか」という映画のタイトルを、父の後悔のことばと捉えるだけではなく、社会に投げかけられた課題であると受け止め、対人援助職として、関係性や構造に留意したアセスメントや介入をしていくことが重要であると考えます。

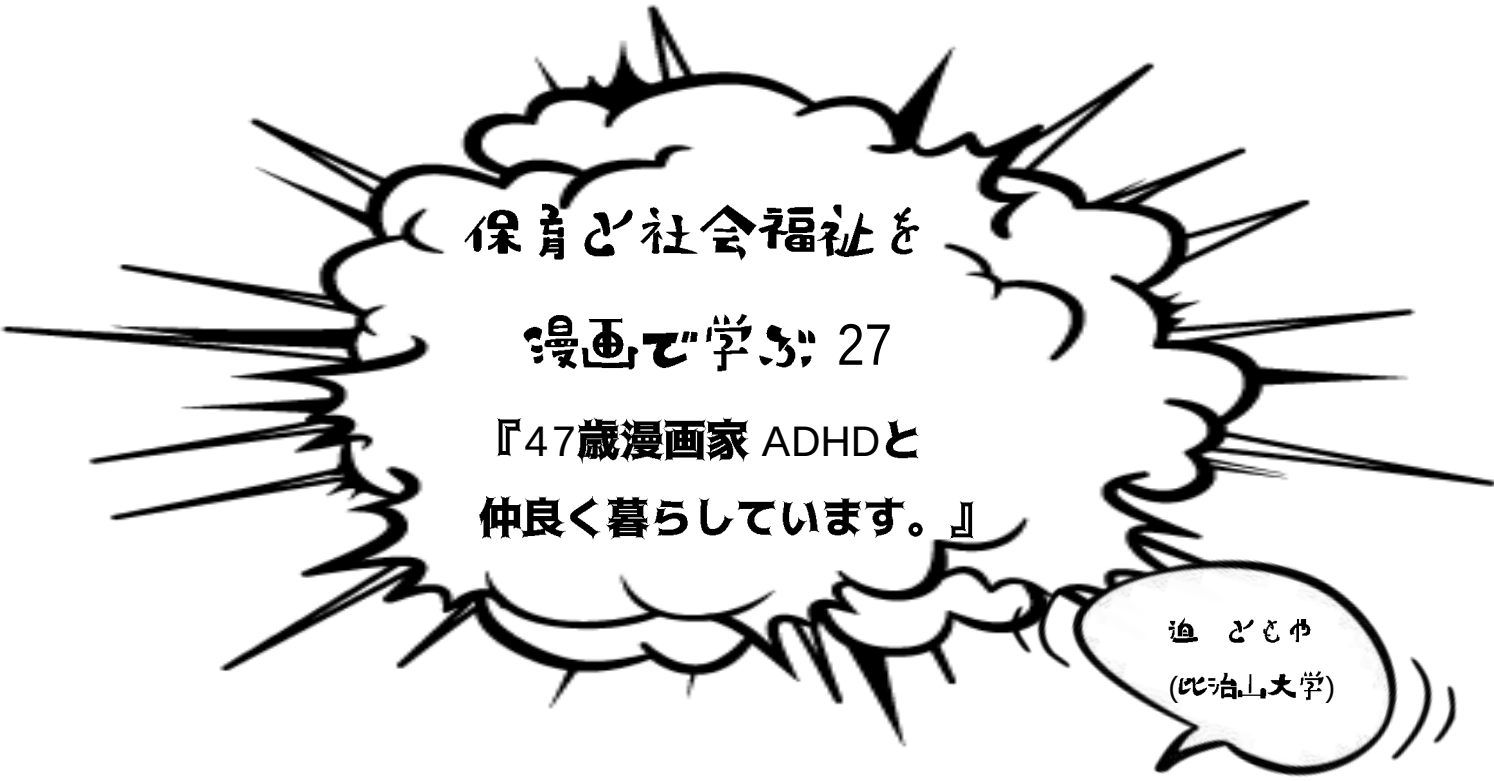
対人援助の場面では、当初アセスメントしていたような展開にならなかつたり、マネジメントがうまくいかなかったりすることも往々にあるでしょう。「どうすればよかったか」という問いをあげられない家族もあるでしょう。

そうした場合に必要なのが、当事者や家族の個々の(内面)だけではなく、家族メンバー相互の関係性や家族の構造、そして当該家族と社会(インフォーマル、フォーマルな要素)との関係性についてアセスメントすることでしょう。また、往々にして出来事に目を奪われてしまいがちですが、そこに至るまでの過程、特にその決定の在り方(誰が、どのタイミングでなど)に注目しておかないと、対処療法的な対応に終始してしまうと考えます。

私は学生時代に児童相談所での実習をさせていただいた時以降、家族療法に関する学びと実践を重ねてきました。

この社会には、適切な支援につなげることができず、無数の、そして声なき「どうすればよかったか」という当事者の、そして家族の声があるのでしょう。それらに我々がどのように応じていくのかで、社会の在り様は変わっていくと考えています。

参考:映画「どうすればよかったか」藤野知明監督



保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 27

『47歳漫画家 ADHDと
仲良く暮らしています。』

迫 ともゆ
(比治山大学)

松田望さんの『47 歳漫画家 ADHD と仲良く暮らしています。』を紹介します。

タイトルの通り、作者の松田さんは ADHD 当事者です。「37 歳のときに医師から ADHD（注意欠陥・多動性障害）と診断を受けました」という松田さん。パートナーの漫画家ミズキさんとのかけあいで、松田さんの日々やライフストーリーが軽快に紹介されていきます。

ADHD には主に、不注意・多動性・衝動性の 3 つの特徴があります。

- ・不注意とは、物事に集中することができず、忘れ物や物をなくすことが多いこと。
- ・多動性とは、落ち着きがなく、じっとしていることが苦手なこと。
- ・衝動性とは、思いついた行動を唐突に行ったり、順番待ちができなかったりすること。

「そんなのは、子どもの特徴と一緒にじゃないか！」と思われる方もいるでしょう。確かに ADHD の当事者と子どもの特徴には共通点がありますが、違いもあります。

集中力が続かないことや衝動的な行動は、ADHD と子どもに共通して見られることですが、一般的な子どもは、成長とともに ADHD 的な特徴は落ち着きます。ADHD の場合は特徴が強く、持続的に現れ、学業や人間関係など日常生活に悪影響が現れる場合が多いです。

携帯電話やカギを頻繁になくすなど、不注意優勢型の松田さんの場合は、以下のようなエピソードがあったそうです。

財布を拾って交番に届けに行ったとき、警察官に住所を書くように求められ、自分の住所を覚えていないことを思い出した。松田さんが困って「あの一、住所わからなくて…」と言うと、警察官から「近所でしょ？ いつ越してきたの？」と聞かれ、「7 年前…」と返答すると、「はあ！？…あなた身分を証明するものは？」。ジョギング中だった松田さんは何も持っていない。他の警察官も事情聴取に加わり、「誰か連絡つく電話番号ありますか？」…親切心で財布を届けたのに。(ADHD あるある① p.23)

ADHD 当事者は「過集中できる」という特技を持っている人が少なくありません。テスト直前などに一夜漬けで乗り切ることができるというようなタイプです。寝食を忘れてひとつのことに集中し、本番が終わった後はエネルギー切れで寝込むというパターンをもつ人もいます。

漫画家は常に仕事に追われる職業。松田さんは「仕事に集中しすぎると没入感は半端なく、風景を描いているとその街角に立っているかのように感じ、人物を描けば行動を追体験する」。その反面、尿意や便意も忘れがちになり、作中にウンコを漏らしてしまうこともある。そして作業後は、「魂の抜け殻」状態が数日続く。(だけど ADHD は楽しい！ pp.16-17)

過集中はジェットコースターのように楽しい反面で、危険性もはらんでいます。特に当事者本人よりも、周りにいる人が迷惑を感じる場合があります。

筆者自身も ADHD 傾向があり、不注意と衝動性が強いタイプですが、自分には残念ながら過集中の特性はあまりありません。ですが以前、仕事上の上司にあたる人が、極端に過集中ができるタイプで物凄く振り回されたことがあります。

普段はあまり仕事の指示をしてこないのに「ずいぶん楽な仕事だなー」と油断していたのですが、年度末になって上司のスイッチが突然入り、「明日までにアレとコレとソレをやれ！」「自分はやり方の説明をする余裕がないから、自分で調べろ！」と丸投げされ、できないでいると「あんた大学院まで行ったんだろう！」と責められました。上司はその後3日ほど徹夜で素晴らしい成果をあげました。

過集中の状態に入っている本人には、自分の言動を他人がどう受け止めるのか、意識できなくなるのかもしれない。その上司の下での仕事は、筆者には長く続けられませんでした。

過集中とは矛盾するようですが、ADHD の人には「選択的集中」が難しい場合もあります。選択的集中とは、様々な刺激の中から、その時々で自分に必要な刺激を選んでそれだけに集中することです。ADHD の人は注意の持続が難しく、様々な刺激に気を取られることがあります。加えて衝動性も注意の持続を妨げます。

例えば、興味があることには集中できるけれども、興味がないことや退屈なことには集中できません。教室で先生の話聞いている時でも、窓の外動くものや他の子どもの動き、雑音などに簡単に気を取られます。ふと窓の外に行ってみたくなり、行動に移してしまいます。先生から「今は何をやる時なの？」と言われても、本人は窓の外に行ってみたくないので、素直に「外に行く時です」と発言して怒られたりします。

散歩中の松田さんは突然、道端に走る。セミの幼虫だと思ったら犬のウンコだった。犬に吠えられてビクつとなり、フェンスに飛び乗ってミズキに怒られる。フェンスから飛び降りて、また道端に腰を下ろす。タンポポだ。「最近、セイヨウタンポポとニホンタンポポの違いが分かるようになってん」…。

「30 分歩いたら疲れてしまうねんな～」という松田さんに、ミズキは「目にしたこと全てに反応するからだよ！」とツツコミを入れる。(衝動が止まらない p.14-15)

選択的集中が難しいということは、周囲に広がるあらゆるものに反応してしまうこと。これは、とて

も疲れることです。

初めにも書いたように、ADHD 傾向のある人の特徴は子どもにとっても似ています。まわりの目につくものすべてに反応し、衝動的に動き回り、エネルギーが切れると倒れるように寝る。その反面で、発想が自由で天真爛漫、自分の感情に正直で創造性豊か…。実際、ADHD 傾向のある保育者は、子ども達の人気者になることが多いようです。子どもと同じように感じ、一緒になって遊んでくれるからです。ある意味では天職かもしれません。

ただし、課題になる点もあります。

保育者には長時間の集中や計画的な指導も求められます。集中力が途切れた時に子どものケガが発生したりすると、適切な説明ができないかもしれません。また子どもの発達や興味関心に応じた保育ではなく、保育者自身がその時にやりたい保育にこだわったりすると、子ども達は混乱してしまい、誰のための保育か分からなくなってしまいます。

ADHD 傾向のある人の中には感情の起伏が激しく、コントロールが難しい場合もあります。ネガティブな気持ちを子どもにぶつけてしまうと、子どもは安心して過ごすことができません。

ADHD 傾向のある人だけではありませんが、自分の特性を自覚して、うまく活かす心がけが必要です。また周囲のサポート体制が整っていれば、エネルギーで楽しい特性が子ども達の人気を集めると思われます。

選択的集中が難しいエピソードは筆者にもあります。電車などの乗り物に乗る際、周りの音声をすべて拾ってしまうので、とても疲れます。その対策として、よく耳栓をしています。光にも過敏なので、帽子をかぶったりサングラスをしたりします。花粉症の時期にはマスクもするのでかなり怪しいはずです。

あるとき、自転車を押して歩きながら友人と話をし、あれやこれやと熱弁をふるいながら、道端に落ちていた10円玉を拾って、驚かれた記憶があります。たしかに周りのものすべてに反応しているのだと思います。

『47 歳漫画家 ADHD と仲良く暮らしています。』の後半では、手帳や付箋、タイマーの活用方法、片付けや買い物の工夫など、ADHD 当事者ならではの Tips がたくさん紹介されています。

松田さんの生々しいエピソードは、ADHD 傾向がある人にも、支援をする側の人にも役に立つと思います。

紹介作品：松田 望 (2019)『47 歳漫画家 ADHD と仲良く暮らしています。』ビジネス社

参考サイト：デイリー新潮「僕は ADHD で良かった…47 歳漫画家が語る発達障害との付き合い方」

<https://www.dailyshincho.jp/article/2020/01281101/?all=1>

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に
改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 29～

<勉強会>

杉江 太郎

～勉強会を始めてみた～

毎週火曜日の朝 30 分、職員を集めて勉強会をしている。参加者は 4 月頃にレギュラーとして固定。勉強会を開始して、今年度で 3 年目になるが、毎年、参加者は私を含めて多くて 5 人。この人数に設定したのは 単純に数えやすいのと場所の問題である。

自由参加にすると誰に参加する気があるのかを気にしなければいけない。(誰も参加しないかもしれないという不安もある。) 朝の忙しい貴重な時間に、誰が参加するのか、誰が参加しないのか確認する手間をかけないようにした。また資料の準備もこの人数だと楽である。毎回、自分の分も含めて 5 枚準備すればそれで事足りる。

場所についても移動がしやすい事務所の横の部屋を利用しているので 5 人くらいが最大である。他の職員からもいるかどうか一目見ればすぐにわかる。

時間もいくつかのパターンを考え、結果、週 1 回 30 分にした。1 ヶ月に 1 度だとその時間を確保するために予定の調整が必要になる。もし参加できなくなる

と、その次に参加するまでに 2 ヶ月空いてしまうことになる。後からも書くが実施する目的に『連続性』があり、『定期的』に『小まめ』に集まるという『連続性』を担保することと、業務からの影響を最小限にするためにこの枠組みにした。

また火曜日に設定したのは、その日は、職場で定例の会議が設定されている日であり、午前中は比較的予定を入れにくいからである。

本来であればこういった勉強会は業務外で行うべきなのかもしれない。実施するに当たって、少なからずそのような意見があるのではないかとも思っていた。ただ業務の流動性を考えたときに、いわゆる 17 時 15 分以降の、業務時間外と呼ばれる時間帯に、確実に集まるのは難しいと判断した。また業務に関することを扱うにも関わらず、業務時間外に時間を費やすことに、ネガティブな印象を持つ参加者もいるかもしれないと思った。無理やりの参加は良くない。

そんな諸々を考慮した結果、毎週火曜日の朝の 30 分という枠組みで実施することに決め、職場内の決裁を経て実施す

ることにした。

～きっかけ～

この仕事は流動的である。どうしても緊急で動かざるを得ないことがあり、予定していた予定が予定通りに進まないことも多々ある。そのことは職員の疲弊に繋がる。そのような中、決まった曜日決まった時間に決まったメンバーで集まることが出来ないかと考えた。

また始めようとした時期は、若手職員、特に新規採用職員が複数いた。さらにその前の年には、新規採用職員が年度途中で退職してしまうということがあった。隣の席にしながら、その変化に気付かなかったことを悔いたときでもあった。

さらに、当時、新しい支店が開所することが決まっており、体制上、今いる人員が2手に分かれることになるだろうと言われていた。もし、そのメンバーに若い職員が選ばれたとしたら、何も知らない状態で異動することになり、組織としての弱体化は避けられない。過去には見て学べば良いと思っていたが、それを待つ間もなく、職員が辞めていくだけかもしれない。それならば自身が知っていることを伝えることで、職員が知識を増やすことに繋がり、組織としての力も高まるのではないかと考えた。

そして、流動的な環境の中に少しでも固定的な時間を確保することは、自身の変化に気付くきっかけになると共に、他

者の変化にも気付くきっかけになるのではないかと考えていた。実際、私自身が、この仕事を始めてすぐの頃、通年の研修を受講し、週に1度決まった場所に通うことがあったが、毎週同じ時間帯に、同じメンバーで集まるのが、自身の体調の変化や感覚の変化に気付く機会になっていた。その研修自体が自己覚知をテーマにしていたから当たり前のことなのかもしれないが、その経験が今、仕事を続けていることに活かされている。

と言いながらも、そこまで大きなことを考えていたかは今となってはわからない。この仕事を続ける上で、連続性を担保することの意味を自身が感じていたことと、少しでも自分の体験したことを職場に還元したいと考えたことは間違い無いと思う。

～その日の流れ～

朝礼が終わりそれぞれに声をかけ、皆がそろそろと部屋に集まる。その流れに慣れてくると、私が立ちあがってフラフラと部屋に向かうだけで皆が立ちあがるようになる。

まずは1人1分自由報告をしてもらう。テーマは決まっておらず、仕事のこと、家庭のこと、自分自身のことなど自由に何でも話してもらう。ときには対応に苦慮している事例などが語られることもある。最後に私も1分間自由に話す。何か話すことを考えていることもあれば、何

も考えておらず、皆の話を聞いて、その場で考えて話すことを決めることもある。この時間で語られることは他愛もない話である。ただ、例え 1 分だとしても、自分が何を話すのか選択できる自由度を確保することや、話したいことを 1 分にまとめる訓練などの目的がある。話を聞くだけという一方的な勉強会では意味がないだろう。

そして私がその日に話そうと思ったテーマに沿って、あらかじめ準備して置いた資料に基づいて 20 分程度話す。基本的には業務に関する内容である。最初の 1 分間で語られた内容を受けて、今すぐ扱う方が良いと感じたときは、扱う内容が変わることもある。また参加者のそれぞれの業務の状況を事前にリサーチして、内容を決定することもある。

最後に 5 分程度、皆で自由に話をする。その日、扱った内容の質問が出ることもあれば、その日のテーマに応じて、気付いたことなど語られる場合もある。

1 分間の自由報告×5 人＝5 分、話す時間（勉強の時間）が 20 分、最後の自由時間が 5 分で、計 30 分という計算である。

～どのような内容を扱うのか～

最初の数回は、国が作成しているマニュアル（運営指針）の読み合わせを行っている。実際のところ、業務に追われていると十分に目を通す機会がないのが現

状である。私自身も、時間を取って読み込むことはしてこなかったので、目を通す機会の確保に繋がっている。

その後は、その日によって扱うテーマが様々である。情報収集、家庭訪問、面接、障害、虐待、トラウマ、関係機関とのやりとり・・・など一見すると専門的な内容に見えるかもしれないが、実際は、専門的な内容を扱えるわけもなく、対人援助をする上でのコツなどを伝えるようにしている。本に書いてあるような専門的な知識は、本を読めば知ることができるが、経験により培われる知見やコツは、本に書いてあるわけではない。個人の経験によるものなので、偏った考え方なのかもしれないが、少なくともその考え方を持った私はこの仕事を続けてこられているのである。知っておいて損はしないと思って続けている。

～勉強会をしてみて～

3 年目になると、徐々にやり方に変化が出てくる。今年は、1 回ずつパワーポイントで資料を作り、次年度に使いまわせるように工夫をした。

私自身、月曜日になれば、明日にどのような内容を扱うのか考えるようになり、どうせなら、それぞれの今に見合った内容を扱う方が良いだろうと考え、それぞれの状況をより観察するようにもなった。

また何か面白いことがあったときに、このネタは 1 分間の自由報告で使えると

考えるようにもなった。

そんなことをしていると、自身にあった変化や体験を少し客観的に整理出来るようになる。

そして、一番面白いのは、それぞれの1分間の自由報告である。それぞれが今考えていることを知ることができたり、自分の知らない分野のことを新しく教えてもらえたりすることもあり、常に勉強をさせてもらっている感覚である。

やはり、連続性を担保することはこの仕事を続ける上で必要である。職場に還元と言いながら、実際に還元を受けているのは自分である。お付き合いしてもらっている同僚に感謝である。

単純に、週1回30分、1ヶ月に4回として2時間、1年が12か月で24時間分の学び……。365日のうちの1日を勉強会に費やしている計算になる。我ながらよく考えたシステムだと思っている。今後も継続をしていく。



原田牧場 Note

page 18

我が家の芝生の庭に5年前に建てた従業員住宅があります。近場で求人を出してもなかなか応募がない、応募があったタイミングで住居が押さえられていないと通勤できない、などの問題解決のために考えました。町の人口もどんどん減っていく中で、道外の人に来てもらう＝移住してもらえれば一番いい、という結論になって、そうなると地域に馴染んでもらうために我々の手伝いも必要だろうし、アパートの一階をコミュニケーションスペースとして住人同士で会を催すのも良いだろうと話も膨らんで希望どおりの住宅が建ちました。昔は、家主は立派な家に住んでいるのに従業員はプレハブに住んでいることが多くて（農家も余裕がない時代だったと思いますが）、私としては、安心できる住環境で仕事後はゆっくり休めて、この地域で働く素晴らしさにも目が行き渡るような生活を送ってほしいという気持ちでした。従業員も無事決まり、誰かの誕生日やクリスマスには集まって会食し楽しくやっています。話題が仕事のことになりがちですが、大家の時はそれ以外の話をしたいなと思っています。

異変があったのは去年の夏、共用スペースの掃除に行った時、従業員の部屋の前から微かな異臭がしました。以前は芳香剤の香りがしていたのに。…考えてみると、何ヶ月もゴミステーションにゴミを出していないかも？以前は細かく分別もして出していたし、仕事場の荷物置き場もきちっと整頓する子だったので、まさかなあ、という気持ちでした。その半年前、高騰した電気代の節約に灯油ストーブを焚いていると聞いていたのが思い浮かんで、大家の想像でしかないけど、まさかが現実だったら…とゾワっとしてきました。大家は阪神大震災経験者、北海道も地震が多いので、火災を案じて住宅はオール電化にしました。

入居時にその経験を従業員にも説明していて、もう夏だけど冬場どんな風に灯油ストーブを焚いていたか確認させてくれ、と話して部屋に入りました。積み上がったゴミを押しながら開けた扉の先は、足の踏み場もなく物が混在して散らばっている状況。玄関には灯油のポリタンク。消火器は部屋の外。火災が起きた時にどうなるか！災害時大家はすぐには助けに来られないかもしれない、自分で身を守る生活ができてないことに怒っているよ、と伝えました。片付けについては向き不向きがあるでしょう。無理にやらなくても良いけれど、以前は出来ていたゴミ出しをしなくなったのはなぜでしょうか？と聞くと、仕事が終わって部屋に帰ると何もやる気がしないんです。と。食べ終えたコンビニ弁当の容器が枕元に置いてある光景が全てを表していました。年の初め、部屋が荒れ始めたころ牧場の父さん母さんの引退の準備、家族の入院もあって大家は多忙を極めていました。もう5年も働いてくれているのでペースはつかめているだろうし自分で成長していく時期だと考えていました。これまでみたいに一緒にいて教えるということは少なくなったけど、しっかり頼むね！なんて言ったのがプレッシャーだったのかもしれませんが。従業員との距離感＝仕事以外は干渉しすぎない、部屋の使い方はその子の自由、と考えていた大家ですが、原因を聞くと放っておくわけにはいかない深刻さを帯びました。

じゃあ、まずゴミ捨てよう！この部屋では休まらない、メンタルやられる。何日かけて従業員一人で仕分けし運び出したあと、掃除はプロ4人がかりで5時間かけてやってもらいました。毎日お仕事頑張ってるんですから掃除ができてなくても全然恥ずかしくないですよ！とプロたちに言ってもらい、ピカピカになった部屋を見てようやく従業員の顔に血色が戻ってきました。稼いだお金を使って不得意なことはプロに言ってもらい快適に暮らす手法もあると学びました。従業員は口数が少なく自分から話しかけられない性格なのでこちらが汲み取って話をしないとイケない関係性です。悩みがあっても言えない、こちらが気づくまで最悪の事態が続いてしまうこともある。今思えば部屋が荒れ出した頃から週に3,4日部屋にいないことが増えました。昼間、牛の分娩があってヘルプを頼みたいと思ってもいない。夜もいない。正確には部屋に居られなかったのでしょうか…

休み明けも疲れが残っている顔をしていたし、ちょっと注意したら目に涙をためることも。全部腑に落ちました。夏の暑い日、掃除に行って良かった。大家の鼻が犬並みの嗅覚で良かった。これからも干渉しすぎない距離感でいるつもりですが、ピンチのサインは見逃さないように。と心に決めました。

その部屋でもうひとつ印象に残っている光景があります。積み上がったゴミ山の頂に登山用ヘルメットの箱が乗っていました。そんな状況でも大阪人は心の中でツッコミを忘れません「ゴミ山登頂、やったー！ちゃうぞ 笑」後で、ヘルメットあったけどあれは？と聞いてみると、（部屋に居られなくなり）新しい趣味を始めたとのこと、大雪山系に登山に行ってるとな！読書だけが趣味だった子が登山！！災い転じての最上級やん。と嬉しくなりました。大雪山の日本一早い紅葉写真を見せてもらったり、近場の山と一緒に登りに行ったりもしました。ただ、山に行く時も一人で黙って行ってしまうので、わざわざ行き先を言わなくてもいいから、万が一用にアパートの自室ドアの内側に行き先をメモして貼って行ってね、というルールを考え出しました。良い距離感で危機管理もできる手法です。

災い転じてはまだまだ続きます。きれいになった部屋をキープするために今年から家事代行を頼み始めました。2ヶ月に一度、2時間5千円で掃除してもらいたい放題のサービスです。これも一緒に始めて我が家までピカピカ、お掃除のプロの技術に感動です。仕事をがんばったあとは、居心地のいい部屋で自身を充電、そしてまた牛さんのお世話に張り切って出かける。流石の大家も啞然とする大事件でしたが、好循環させることができました。

短信にも書きましたが、もの言わぬ椿の挿し木の成長に、私自身、そして従業員の成長を投影するような気持ちでいます。手助けはできても、咲かせるのは椿自身。ここでどんな花を咲かせるのか、待つ時間も楽しみです。

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに

新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会の

お世話係を担当



私の頭の中のまだエンピツ②

そだちと臨床研究会 川畑 隆

感じ方や考え方の小さな変化

「まっとうに」ということ

「まっとうに」とは、最近流行の「コンプライアンス」にあたる言葉になるでしょうか。法令や規則に違反しないだけでなく人道的倫理的にも正しい方向を目指すことだと解釈していますが、対人援助職場は「こんなふうに生きていこうよ」と被援助者や住民に対して直接的には言わないまでも、実質的に前向きで「まっとうな」歩みを提案し後押ししています。それは相手の少しでも厚い幸せをめざして仕事をしているからで、「まっとうで」ないところからは幸せは芽を出さないと考えているからです。だとしたら、「相手に対してそのようにすすめているのに、自分たちは『まっとうに』仕事をしようとしていなくてよいのか」と、あらためて自分や自分の職場に対して問いかけてもよいのではないのでしょうか。

無論、対人援助職場は「まっとうに」仕事をしているわけで、していないと言いたいのではありません。しかし、たとえば行政から施策が現場に降りてきたときにそれが現場にフィットしているか、住民の福祉に役立つ

方向に機能させられるかどうかなどについて、現場として「まっとうに」意見をもちそれを業務に反映させられているかどうか、問われる場合もあるだろうと思うのです。

また、住民にわかりやすい広報のありかたや、目の前の対象者の生活の実際によりそった対応や公平性が保たれているかのチェックも、あらためて必要な場合があるでしょう。さらに時代の流れや世の中の動きにも敏感でいながら、行政・臨床機関としてどう柔軟でバランスのよい思考・判断を行うのかも問われているところがあります。

〇か一〇〇か

「事実か嘘か」「問題か否か」……これらは「〇か一〇〇か」「白か黒か」「二分法」「悉無律」などと呼ばれる思考パターンです。そしてこれがいま社会を覆っていて、「人権侵害かどうか」など、ものごとをわかりやすく整理して革新していくために役立っている側面があります。しかしそれと同時に、「正しいか誤りか」「勝ちか負けか」と人を二者択一の窮屈な状況に追い込み、自由な意見表明などにブレーキをかけてしまうことも起きているように思います。世の中の役に立つ部分については「〇か一〇〇か」を推進すればよいのですが、すべて「〇か一〇〇か」で整理するのではなく、「四〇とか五〇、六〇」ぐらいも認めて受け入れていくようなことも無理がなくてよいのではないのでしょうか。私がここに書くことについても「一〇〇」を主張したいわけではなく、後でも述べるように、そうとはいきれないところもあるよなあと思うわけです。そういった整理されないところも切り捨てずに、つまり曖昧なところは曖昧なままに尊重するよう

なバランス感覚も必要ではないでしょうか。

たとえば、周りに合わせることから解放され、自分がやらなければならないことではなく、やりたいこと、自分らしさを徹底し追求していく価値観は、生きにくさを抱えた人たちの対人援助の場にも適用されています。

もちろん、それは人を支援する時の最初のプロセスとして重要な側面であることは確かだろうとは思いますが、耳にやさしいことばである分、一般論として広がりすぎることには私は懸念をもちます。願わくば、その価値観が個々人の中で自分中心に世界を描き続けることに偏らず、「他者と自分との違い」を十分に受け入れ尊重しそこにも参加していく心情や行動力の育成にもつながってほしいと思います。後者の他者尊重性が「一〇〇」になれば周りに合わせることからの解放にはなりませんが、前者の自分中心性が「一〇〇」になっても他者と一緒に生きる社会での生きにくさを作り出すことになります。そうならないためには、「やりたいことがやれるかやれないか」「自分らしいかそうでないか」という一見わかりやすい枠組みだけで切り取ろうとせず、「やりたいとはどういうことか」「やりたいかやりたくないかではなく…」「自分らしさとは何か…」と惑う機会も与えてくれるような、「五〇、六〇」の体験が可能な場も用意される必要があるだろうと思います。究極の対人援助が「私がつけている素質をすべて開花させたい」という相手の潜在的ニーズに寄り添うことだとしたら、「一〇か一〇〇か」による安易な決めつけには用心したほうがよいでしょう。

…だとはいっても

私が「一〇か一〇〇か」に懸念を示すことになる理由のひとつに、「もの

「ごとはいろんなふうにつながっている」という認識のしかたがあるように思います。それぞれの事象の背後にはいろんな事情やワケがあり、そのような関連づけられたつながりを考慮せず表面的な額面だけで割りきって対応しても、うまくいかないのだというわけです。そしてこの認識は、対人援助業務においても大切な役割を担い、私のものの考え方にも根をおろしている重要なものです。そしてその認識を次世代の人たちにも引き継ぎたいと考えてきたことも事実です。

しかし、その関連づけられたつながりを読むことが深く賢いと思われたり、まさに重要なのでそれに縛られてしまい、言葉や行為を自由に発しにくくなる側面があります。つながりが足かせになってものごとの本質を明確にして前に進んでいくことが妨げられるのです。最近のエピソードなので例にあげますが、自分に投票する議員を確保したいので政党総裁選候補者が“裏金問題”の再調査を言明しないように見えることなどもそうです。「Aという足かせがあるから、Bは不可能だし仕方がない」という現状の限界から「Aという足かせはあっても、Bは重要なことだから実現する」という方向への認識と行動の変化が伴わないと、つながりの関連づけの賢明さはそのデメリットを引きずり続けるのではないでしょうか。Bは「五十か六十」でよいわけではなく「〇か一〇〇」なのです。

そこが動いているんだろうか

あるテレビドラマの一場面をとっても興味深く観ました。母に隠れて投資し失敗した父に対して、母はそれを父の自分への「裏切り」として責め立てました。でも、そこにいた息子は「それは裏切りなんかじゃなくてヘマ

ただけでしょ。それをそんなに責め立てるかなあ」と軽く母に言い返したのです。その「ヘマ」とのいきなりの言い換えは私にとって衝撃的でした。私なら裏切りだとの母の発言を「そう思ってるんだ」と受けとめたうえで対応するかもしれませんが、息子は裏切りと投資の失敗とのつながりを即刻断ち切ったのです。裏切りというバーのネガティブさを少しでもクリアできないかと思案する私の前で、そのバーが端からないかのように難なく軽々と飛び越えて見せた、そのシンプルさが衝撃でした。

また、私が書いた本を読まれたかたの「（著者は）古い人なんだなと思った」というレビューを目にしました。どうも「いじめの始まりにからかいがあるとしても、からかい全体がダメだと言われるのはいかがなものか」という文章への反応かもしれないと勝手に思ったのですが、『からかいはダメ』のようにアレはダメ、これもダメと切り取っていくようなことが、これからの社会にとってよいことなんだろうかという問いは、古いか新しいかではないでしょう」と反発を覚えました。しかし「からかいは人間社会の潤滑油みたいなものだから大目に見ていこうよ」という気分が、いじめをなくす意思よりも実は私の中で勝っていることを見抜かれたのだとしたら、「からかいは潤滑油みたいに機能することもあることは確かだ。でも、いじめに該当することになるからかいはダメだ」とは書かなかった私の古さを指摘されたのかもしれない可能性に思い至りました。

（了）

—宣伝—

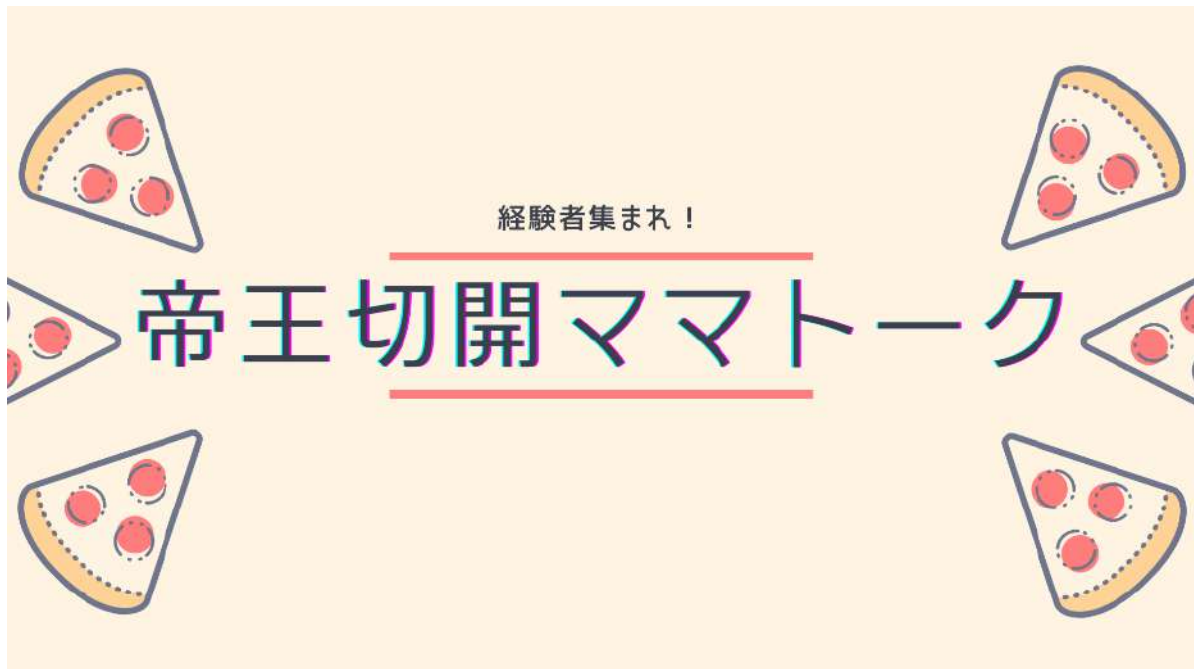
『ターチャンのオリジナルソング』を十月一日からYouTubeにアップしています。昔の私が歌っている自作の歌です。しばらくの間、毎月一日に追加します。よかったら覗いてみてください。

応援、母ちゃん！ 20

「語ることで取り戻す出産の主体性 ―帝王切開の経験を意味づける対話」

たまむら ふみ

玉村 文



「戦友みたいな気持ち」―帝王切開ママたちのリアルな声

「戦場は違うけど戦友みたい」―これは、先日開催した帝王切開トークで出た言葉です。同じくお腹に傷を持つ者同士、あの痛み、恐怖、そして“自然分娩信仰”にざらついた経験。語り合ううちに、共感と理解が広がっていきました。

「2 度目、3 度目の帝王切開の方が怖かった」「VBAC（経膈分娩への挑戦）をしたけれど、また帝王切開になった」など、それぞれの経験は違っても、誰もがその選択の中で葛藤し、工夫し、乗り越えてきたことに変わりはありません。

「お産の進行を伝えてほしいとお願いしたら、『いま頭が出ましたよ』と声をかけてもらえて安心できた」など、自分なりの納得感を得るための工夫をした人もいました。

経験の数だけ、物語がある。けれど、社会の視線はどうでしょうか？

「かわいそう」「ラクでしょ？」—社会のまなざしが生む葛藤

「帝王切開だったんだ」と言うと、返ってくるのは「大変だったね（かわいそうに）」という同情の言葉か、「陣痛を経験してないからラクだったんでしょ？」という決めつけ。

何度もそんな言葉を受けるうちに、自分自身もその視線を内面化してしまうことがあります。

「本当に帝王切開しか選べなかったのか？」「自然分娩できなかった自分はダメなのか？」

そうした疑念に囚われたことが、私自身もありました。

でも、語り合う中で気づいたのは、お産の形は人それぞれであり、どんな選択にもストーリーと挑戦があるということ。誰一人として「ラク」な出産などないのです。

語ることで「出産の主体性」を取り戻す

「帝王切開を語ろう」という企画を主催して、15 人ほどの経験者が集い自身の経験を共有しました。そこで、改めて実感しました。

帝王切開は、可哀想でもラクでもない。

ただ、ひとつの出産のかたち。

語ることで、帝王切開を選んだ人も、そうせざるを得なかった人も、自分自身の出産経験を肯定できるようになる。

そして、「語れる場」があることで、心が軽くなる。

これからも、出産経験を主体的に語れる場をつくっていきたい。

「かわいそう」でもなく「ラクだった」でもなく、ただ、「自分にとってかけがえのない経験だった」と思えるように。

それが、私の目標です。

帝王切開トークが変えた私たちの視点—語ることの力と次なるステップ

語ることで癒える—心が軽くなる瞬間

振り返りの場で、多くの参加者が「しんどいお産体験は何度も話して昇華することが大事」と語っていました。

特に印象に残ったのは、こんな声です：

- ・ 「同情されることなく、自分の言葉で話せて良かった」
- ・ 「保護テープなどのマニアックな情報をすぐ共有し合えた」

こうした場の存在が、単なる情報交換ではなく、深い共感を生む「安全なスペース」になっているのだと実感しました。

また、話し合いを通じて、帝王切開の受け止め方には段階があることにも気づきました。

1. 違和感や怖さを抱える段階
2. 自分の体験として受け入れる段階
3. ネガティブなイメージを払拭したい段階

私は今、最後の「ネガティブなイメージを払拭したい段階」にいます。この視点に気づけたのも、他の参加者と語り合ったからでした。

「帝王切開」という言葉、どう思う？

ミーティングでは「帝王切開」という言葉自体についても、議論が交わされました。

- ・ 「“自然分娩”という言葉があるから、“帝王切開”が“不自然”に感じられてしまうのでは？」
- ・ 「“帝王切開”という名称は医療的な響きが強く、母親としての主体性が見えにくい」

私自身も、1人目の出産で破水、陣痛、緊急帝王切開を経験しましたが、それでも「帝王切開」と一言で片付けられることにモヤモヤを抱えていました。

また、ある参加者が「帝王切開の傷跡を“にこちゃんマーク”と呼んでいる」と話してくれました。それを聞いて、「自分の一部として愛着を持つ」姿勢が素敵だなと感じました。

さらに、「切開分娩」という言葉を使うことで、主体性を持った出産という認識が広がる可能性もあるのではないか、という意見もありました。

次回のテーマは“自分語”の誕生—語ることで生まれるもの

こうした話し合いを経て、次回のトークイベントでは、ただ経験を語るだけでなく、新しい「自分語」を生み出す場にしたいと考えています。

「自分語」とは？

自分の経験を相対化し、他者と共有する中で新たな言葉として紡ぎ出すもの。まるで出産のように、自分一人ではなく仲間と協力しながら形にしていくプロセスです。

この試みが、お産に対する捉え方をポジティブに変え、次のステップへ進むきっかけになればと願っています。「語ることで生まれるもの」をテーマに、新たな視点や希望を皆さんと一緒に見つけていきたいと思います。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

カメレオンは永遠に

GREEN

この作品は1984年の第4回読売国際漫画大賞展で大賞を受賞した私にとっては記念すべき作品である。この前年に私は審査員特別賞を受賞していたが、新宿の伊勢丹の展示会場での授賞式で大賞の受賞者の挨拶を聞きながら、来年は絶対に自分がここで受賞の言葉を述べるのだと強く思ったのを憶えている。



1

BROWN

それまであまり動物マンガを描くことがなかった私だが、自分の中にある動物マンガへのヒラメキの力を気付かされたのもこの作品がきっかけだったように思う。この受賞によって17年勤めた中学校の美術教員の職を辞して、専業漫画家としての道を歩む事にも繋がったのだった。私が39歳の春である。



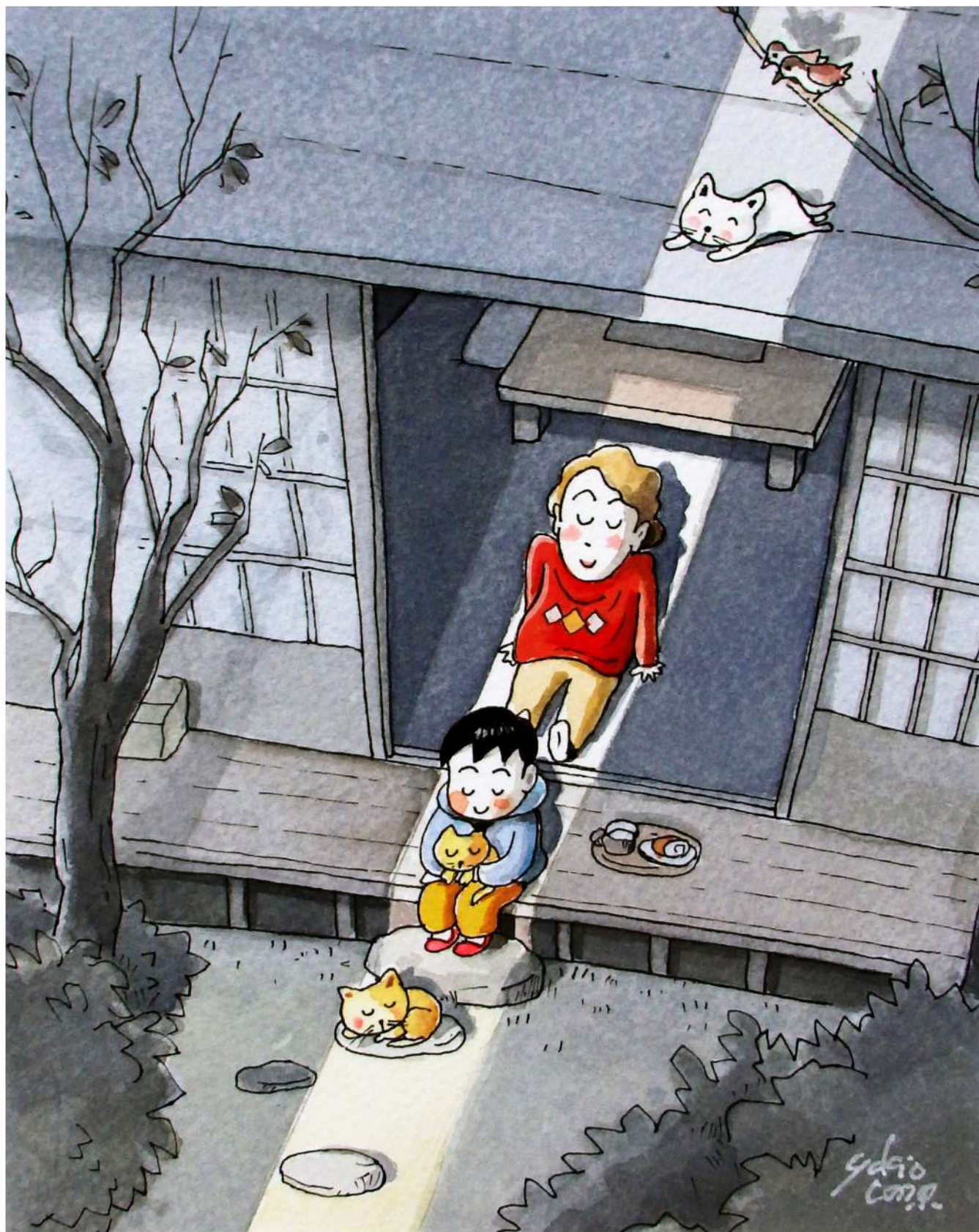
2

RED

当時は世界中から9000点ほどの応募があったが、その後も増え続ける応募作の中に、僕のカメレオンに触発されて描かれたと思われるカメレオン漫画がたくさん現れるようになったのを見るとちよつと誇らしい思いになる。私の54年を超える漫画家生活の中で自分でも完璧と言える数少ない作品の一つなのである。



3



日向ぼっこ

昨年末に知人から一枚の1コマ漫画を依頼された。

自分が座右の銘にしている言葉を絵にして欲しいという事だった。

これまでに家族や友人の似顔絵をその人の趣味や愛着のある物とともに漫画にするという依頼は何度が受けた事があったが、今回のような依頼は初めてだった。

出されたお題は『臨機応変』という四字熟語だった。

早速いくつかのアイデアを出してご本人の希望も聞きながら仕上げることにした。

実は下書きでは一番前に犬を描いていたのだが、依頼主からは全部を猫にして欲しいという希望があったので最終的にこうなった。

このタイプの日向ぼっこマンガは私の敬愛するサンペ氏がニューヨークの摩天楼を描いたシリーズに様々な設定で多く描かれている。

私はこれを日本の昭和の家の風景に描こうと思った訳だ。

自分でも予想以上に良い出来だったので、次にまた何処から注文が来ないかとちょっと楽しみにしている。

トランプの道

左の漫画はトランプが最初に大統領になった2017年の2月に描いた作品だ
ちょうど京都国際マンガミュージアムで開いた私が会長をしているフェコジャパンの漫画展に出品したものである。

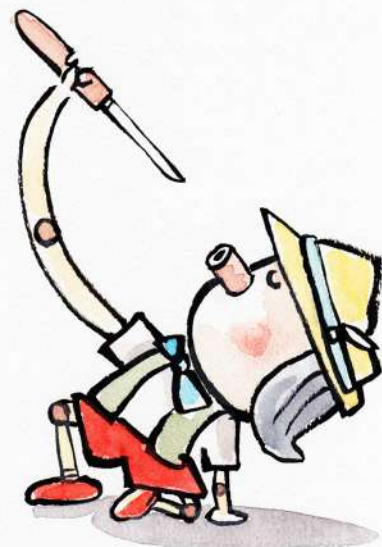
トランプのヘアスタイルと黄色いバナナの皮をダブらせて、世の中を片っ端からひっくり返している姿を描いたのだが、8年経った今でもその姿は変わらない。



それどころか以前には無かった硬軟織り混ぜたたたかさと強権的な政治姿勢は、世界の主脳たちにプレッシャーをかけ続けている。

自分とは相対する意見を受け入れず、脅しをかけ、エビデンスの無いフェイク情報を平気で主張し続ける姿を、多くの漫画家たちは彼をピノキオに見立てて描いていた。

そしてこのピノキオの伸びた鼻が実は単なる木の棒では無いということも人々はよく解っているように思う。





Yoko
2011.10

動物を描く



ちよっと前には大阪のおばちゃん
はヒョウ柄が大好きと言われてテレビ
の情報番組ではオシヤレというより
笑いの対象として扱われることが多
かった。
さすがに現在はその猛獣ファッショ
ンを街で見かける事はほとんど無く
なったが、それらとは違う形で動物
のイラストをプリントしたシャツや
編み込みのセーターなどはワンポイ
ントのブランドキャラクターから大
きな物まで多彩で大阪のヒョウ柄フ
アッションとは違う立ち位置である。
ミッキーマウスやスヌーピーはすで
に動物からは独立したオリジナルキ
ャクターになっているが、犬や猫
のイラストモノはご本人が飼ってい
るペットと同調している事も多い。
私は自分の旅行カバンに昔飼ってい
た愛犬のイラストを描いている。
国内の小旅行ではいつもこのカバン
を愛用しているのだが、今は主流の
車輪のついた樹脂製のスーツケース
ではなく、重さが片手にかかるこの
大きな手さげカバンを使い続けてい
るのは13年前に亡くなったこの愛
犬に対する想いがまだ強く残ってい
ることが大きい。

川下の風景⑰

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【今、ここでしか書けない言葉もある】

“祖母が99歳で亡くなった。年末から調子を崩していた。その際、こんなことを書いた”

まるで石室への階段を下るように、地下1階へと進む。薄曇りの凍える寒さと風が遠ざかり、静寂の中に自身の足音だけが階段を踏みしめる。降りるたびにインクの臭いがきつくなり、それは纏うような懐かしいような臭いに満ちた地下の巨大空間だった。

京都新聞本社地下1階。かつて新聞の印刷場として活用されたこの空間で、「世界報道写真展」が開催された。その日、京都の祖母が危篤であると連絡を受け駆け付けたが、幸い病院に到着する頃には意識を戻し体調は安定していた。こんな機会でもなければ両親含め親戚がそろうこともない。立派な高齢者となった親世代の病気や薬の話題もそこそこに、朝刊で見た写真展を思い出し足を伸ばしたのだった。パレスチナガザ自治区。僅か5歳の女兒をイスラエルの爆撃で失い、白い布で包まれた亡骸をじっと抱きしめる女性の姿。表情は視えない。視えないことが逆に情景や心情を押し付ける。地下空間に染み込んだインクの臭いと同じだ。日本が平和で良かったなどとは思わない。世界各国で起こっているこれらの現実、明日わが身に起こってもおかしくない。平和で良かったね、と笑い合うことの方が現実味を欠いている。同時に私は祈らない。何かを祈って平和に暮らせるのなら、世界はもっと平和であるべきだ。祖母は99歳で年を越した。戦後、10代の娘が新潟を離れ集団就職で京都にやって来た。生きる苦勞の面影が眼前の写真と京都の石室で重なった。

“年が明け、今年の5月で100歳になるだろうと思っていた矢先の出来事だった”

人間の脳は250万年の間に飛躍的に発達し、時間と空間と可能性の観念を獲得した（村上春樹『1Q84』より）

辛い思い出は比重をもって心の奥底に沈み、いくつもの別の時間を積み重ねることで蓋をしていく。しかし、それは必ず底にあって、ふとした折に顔を覗かせ我々の手を引いていく。幸福な思い出は気球が膨れ上がるように、出来事以上の思いを膨らませて我々を大空に導く。生きていくとは、我々の都合の良いように時間と空間をいびつに再構成し、自我と社会の狭間で生きる適応力として身に付く。

ストレス社会と言われる。人間が適切に保てるコミュニティ範囲は知れているのに、今や無限の世界にある。星屑のような情報の中にあっては、“私”の存在意義に疑義を持つ。常に“誰か”が主体にあり、“誰かと私”という比較の中で生きなければならない。私の中に巢食う他者性が、人の失態を必要以上に糾弾し貶め、“弱者”を憐れみ自分は違うと安心感に浸っている。

99歳で祖母は逝去した。100歳までとは思わない。突然だったとも言えない。ただ、雪の降る朝を迎えて、今日だったんだと思う。その表情や頭髮の温もりは99年の彼女の時間よりも、“私と彼女”の中で積

み重ねた思い出となって甦る。人間は脳のこの働きで身体の総エネルギーの 40%を消費する(『1Q84』)。舞う雪で冷えない頭と身体の火照りに気怠さを感じるのも、他者性に侵されない私のいびつな時間の追憶である。

【祖父の遺した手帳】

33 年前に亡くなった祖父は字を書くことが好きだった。毎日、毎日、小さな手帳に日記を一言綴った。その一部を、と言っても 10 冊余りが出てきたが、それを祖母が 33 年大切に取っていた。祖母は、そんな生真面目な祖父を尊敬していた。

33 年の間、その手帳の存在は知らされなかった。祖母の葬儀に際し、棺に入れてやろうと準備されていた。葬儀の前、そっと開くと私の名前ばかりが出て来る。いつ、タツヤが訪ねてきて、どこに連れてやったか。いつ、何を、いくらで買ってやったか。ウチは裕福な家庭ではなかったが、祖父母に与えてもらったものは大きい。それらの手帳は全て祖母の棺に納められた。33 年振りに夫婦は再会を果たすだろう。

そして、そんな祖母も子どもたちに手紙を残した。大抵、遺言書は仏壇から出てくると相場が決まっている。葬儀の後、火葬が終わり、久々に自宅に戻った祖母の初七日を終えた時に、その遺言書の存在を知らされた。残った自宅を誰に継がせるか。これは 3 人の子どもたちの間で確認されていることだったが、わざわざそれを律義に遺言書として残し、誰にも言わずに仏壇の引き出しに仕舞っていた。世の中、高齢社会の進展で空前の「終活ブーム」であり、特に相続問題には事欠かない。それが正式な遺言書となるかどうかは知らない。ただ、祖母が介護が必要になるずっと以前にそう決めて、独りでそれを記して遺したことに十分な意義がある。

【名僧】

祖母の葬儀は、祖母と長年付き合いのある住職が読経をあげてくれた。33 年前に祖父が亡くなり、その後、毎月の月命日で読経をあげて頂いていたようだ。当時は、住職の父親が担当し、その後、子へと代も変わったが、それでも長い付き合いだ。しかし、素人の私でも読経の上手い下手は分る。お世辞にもその読経は褒められたものではなく、その語り口のイマイチさが分かる。声と読経の上手さ。名僧の評価はここでも、と思うが祖母は毎月、月命日でこの住職と世間話を積み重ねてきた。その住職は冬になると手のあかざれがひどくなる。夫婦共働きで、家事の役割分担がしっかりしているらしい。

「今日のおかずは何にしますんや？」その住職のあかざれを見ていると、そんな祖母の京都弁が聴こえてくる。33 年余り。つまり、祖母にとってはこの住職こそが名僧であったわけだ。

祖父は岐阜の生まれ。祖母は新潟の田舎で生まれた。共に就職で京都にやって来た。染めの室町、織の西陣と言われた時代。室町界隈は呉服問屋で賑わっていたが、問屋町はビジネスホテル街に様相を変えてしまった。室町から五条通をずっと西大谷へ。大谷派僧侶の墓が多い墓地一等地の一角に祖父が求めた墓がある。相当お金も掛かったようだが、二人はここに墓を求めた。その斡旋をしてくれたのが、先の住職の父である。私が知らないところで人の恩と縁が積み重なっている。

2025.2.20 米津達也

スクールソーシャルワーカーの仕事①

高名 祐美

私は昨年度から県教育委員会所属でスクールソーシャルワーカー（以後 SSW と表記）として活動している。SSW は、「社会福祉の専門的な知識、技術を活用し、問題を抱えた児童生徒を取り巻く環境に働きかけ、家庭、学校、地域の関係機関をつなぎ、児童生徒の悩みや抱えている問題の解決に向けて支援する専門家」とされている。2008 年度文部科学省により「SSW 活用事業」が開始され、学校という領域で福祉と教育を繋ぐ役割が期待されている。

私は父親、夫が学校の教諭であったことからなんとなく教育現場の学校には関心をもっていた。そんな思いがあって、医療ソーシャルワーカーを退職したあとフリースクールの SW という職についた。フリースクールでは不登校の子どもたちと出会った。不登校にも様々な要因があることを知ることができた。一緒に過ごす時間を持ち、子どもたちの声を聴くことで、学校というフィールドでソーシャルワークを実践できたらと思うようになった。折よく、所属している社会福祉士会こども家庭支援委員会から SSW の募集があり、自ら希望したことで石川県の SSW として活動することとなった。学校の中だけでは対応がむずかしいケースに、SW としてこれまでの経験を活かすことができれば、初めての学校という領域でのソーシャルワークにわくわくしていた。

石川県の SSW は、学校に配置されるのではなく県教育委員会に所属する。学校長から教育委員会に支援依頼があると、その学校へ派遣されるシステムとなっている。私の活動地域では支援依頼がまだ少ない状況だった。活動 1 年目令和 5 年 4 月・5 月・6 月とまったく依頼がなかった。これでいいのか、アウトリーチが必要なのかと焦りも感じていた。7 月に入り、地域の教員対象研修会に出席し、SSW 自己紹介をする機会があった。それがきっかけとなり、

初めての支援依頼が私に入った。SSW としてのデビュー。不登校の事例だった。依頼内容の確認、学校でのこれまでの取り組みを聴くために学校を訪れたが、とても緊張した。その事例には 2 年目の現在も関わっている。私にとっては生涯忘れられない事例になると思う。

そして 2 年目、徐々に依頼が増えてきた。シングルで子育てする家庭のこども、発達障害があるがゆえに学校生活に馴染めず、学校も保護者も悩んでいるこども、無気力で将来に希望を見いだせない中学生、なんとか不登校を解消したいと熱心な教師などに出会った。学校でのケース会議、保護者との面接、こどもとの面接、関係機関との協働・連携をはかりつつ、課題が解決できるよう取り組んでいる。容易には解決にはいたらない事例を抱えて、どのようにアプローチしていけばよいのか、悩むことも多い。課題を抱えるこどもに出会ったからには、SSW としてその子の人生になにかしら働きかけられるよう、責任を果たしていきたいと思っている。

私の SSW 実践はまだ始まったばかり。次回からは、事例を紹介し、自分の SW 援助について振り返る機会としたい。



miho Hatanaka,

初めて性教育の授業を行ったのは小学校5年生の子どもたちに向けてであった。顔見知りの先生からお声がけいただいたのだが、その時にはまさか今日まで続けることになるとは思ってもみなかった。その授業からしばらくして教室を訪れた時、子どもたちは先生のギターにあわせて「たんぽぽ」を歌ってくれた。いまだに温かな気持ちになる。今回は、「いのち」の詩を二編。そして、二枚の写真を。



【第17話 いのちのうた 2 : こどものコトバ】

第16話の冒頭に「性教育は四半世紀ほど行ってきた」と書いたのを読み返して、「正確には何年になるのかな?」と思い記録をひっくり返した。24年であった。「そういえば…」とほかのことも調べ始めると、私がこの間に行ってきたさまざまなことが掘り起こされ、年表のようになったメモの紙に自分がどのように歩んできたかの跡をみるようであった。このようなことを指すのか、「人生の棚卸し」という言葉があるらしい。大学院で臨床心理学を専攻したのも自分の行ってきた性教育を振り返るためであり、ほかの関心事 —例えば yoga なんかも— を含めても、ばらばらのようであり実はつながっていることがみえてくる。私が“私”に“なっていく”感覚。一つのことが終わると丁度よい具合にまた新しいことが始まって、フリーでいる強みかありがたいことに誰彼と声をかけてくださって、思えば性教育もそのように始まったのだ。

元を辿れば、アンケートや発言などから子どもたちの言葉を「預かる」ことは私の行う性教育の原点である。ニーズを掘り上げる目的以上に、本質的であり哲学的な疑問や考えが書かれていて驚いたり唸ったりじーんとしたり。大切なものを受けとっていると感じる。そうして溜まる想いをもって、また別の子どもたちに届けられたら、と思う。

「いのち」

作：S 小学校 5 年生のみなさん

「いのち」。

…それは 特別な大事な物。 すごいもの。

生きるための大切なもの。

一人一つしかない

たいせつな 天からのもらいもの。

どんな物よりも大切にあつかい、
少しでもきずをつけてはいけない物。

楽しくてやさしい物。

かがやいているもの・ピカピカしたもの・ふわふわな物・キラキラしたもの。

力。

新しいいのち、…赤ちゃん。

人そのもの。

こきゅうをしたり、歩いたり、とんだりする事
顔がきらきらしたり、どよーんしたりする事

育てるもの、または育てられるもの。
お母さんからもらった最高のプレゼント、
先祖代々伝わってきた大切なもの

「いのち」って

ひとりにひとつしかないもの。

世界に、

宇宙に、

この世に、

たったひとつの 大事なもの。

一つしかない大切なもの。

一つしかないけどたくさんあるもの。



Frost -1

「いのち」

作：O 小学校 2 年生のみなさん

いのちは、
だいじなもの。
人げんの一番たいせつなもの
だから、
けったりなぐったりしたらだめです。



いのちがないと、いきれない。
いのちがないとからだはとてもつめたいと思いました。
たいせつなことだから みんなの いのちをまもる

Frost -2

にわに花がいっぱいあります。
花は みずやりをしないと しんでしまいます。
おうちにかめがいて、かめもいきているから、いつもたいせつにしています。
おうちの虫もいのちがあるからたいせつにそだててます。

いのちは、
い。 かぞく。 からだ。 しんぞう。 いとこ。 ともだち。
いのちは、
まま。 ぱぱ。 おなか。 のうみそ。

いのちは、
あかちゃん。
あたらしいいのちがたんじょうすること
体のおくにはいつて、ハートみたいな形 おおきさは赤ちゃんゆびぐらい。

いのちは、
みんなのたからもの。
体の中のいちばんたいせつなもの。たいせつで1つしかないもの。
生まれていのちができる。
いきているからいのちがある。

いのちは、
あたたかい光
いちばんだいじなきぼう

The importance things between a father and his children

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

「援助者」ではなく「父」として

対人援助の臨床において、どんなに勉強しても、どんなに経験を積んだとしても、決して「わかったつもり」にはなってはいけない。

自身の対人援助実践、つまり援助技術、視点、価値、捉え方などにおいて、過信、慢心、傲慢になってはいけない。

つまるところ、わからないことはわからない、目に見えないものは目に見えないということ、忘れてはならないということだ。

そのような当たり前のことについて、前回、サン・テグジュペリ作「星の王子様」と志村史夫著の「一流の研究者に求められる資質」をご紹介させていただきながら、述べた。

私たちにできることは、ただ、その時その場で最も大切なことをみつけようと、感じようと、触れようとするだけなのである。

そんな今の考えを整理していたら、ふと、対人援助職者としてではなく、別の自分についての思いが湧いて出てきた。それは、一人の父親としての自分である。

私には今、年頃の子どもがいる。

その子どもはいわゆる、反抗期真っ最中にある。

実は、子どもと話す際に私は、言葉選びにすごく難しさを感じる時がある。

何気なく放った言葉が子どもの感情的な反応を喚起し、予想もしない展開になることがままある。「そんなつもりじゃないのに（なかったのに）」というのは後の祭り、次から次へと「望ましくない方向」に話が転がり、恨まれたり、憎まれたり、嫌われたりする。

そんな小さな出来事がほんの少しだけ生まれると、それが次のなにかの火だねにもなったりする。気づくと、あちこちに地雷が埋まっていて、どこをどう歩けば爆発をさけられるのか、もう、わけがわからなくなっている。

正直なところ、自分がまさかここまで「もつれる」とは、全く予想していなかった。もう少しうまく子どもとかかわれるはずだと思っていた。認めざるを得ない、ずっと、そしてまさに、「過信、慢心、傲慢」になっていたのだ。

もつれた後になって、子どもの心や気持ちはもちろん、親としてどのような文脈でどのようにふるまえば子どもの気づきや成長を促せるのか、「わからないことはわからない、目に見えないものは目に見えない」としみじみ感じているのである。

なんとなくどこかで聞いたことがあるような、そんなありふれた親子の話をしているが、当事者としては本当に思いも寄らない状況で、本当に困った立場に行き詰まっているのである。

「父」と「子」

子どものことをずっと考えていたら、自分が子どもだった頃のことを思い出すようになった。そういえば私は、自分の父親とほとんど一緒に暮らしたことがなかった。諸般の事情で、私が4歳か5歳のころから四半世紀以上、離れて生活してきたのだ。

母がしっかり者であったり、その母に似た姉がいてくれたから、また、母方の祖父もいたし兄弟も多かったことから、父不在の生活で特段困ることはなかった。もちろん、いろいろな不自由さはあったが、父に対してネガティブな思いを持つことはなかった。

ただ、時々会える父に対し、「お父さんは子どもの気持ちがわかってねーなー」と感じていた。子どもの成長過程を目の当たりにしていないのだから仕方ないと、受容する自分がいた。

例えば、幼稚園、小学校、中学校の絵画コンクールで毎回金賞をとる私に、「下手な絵だ」とコメントする父がいた。一般的に賞を得て親にそれ報告する子どもは、親に褒められると思うものである。褒められたいと思うものである。だから私はひどく落胆したのだった。ちなみに私は9年連続金賞を受賞し、私が作成した美術作品のいくつかは教育委員会から「お手本作品」に選ばれて教材になっている。もっとも今ではその才能のかけらも残っていない。多分この手のスキルのピークは10歳ぐらいだった。つまり私は早熟だったのだ笑。

また、例えば、男の子である私に、女の子が喜びそうな白いクマのぬいぐるみをお土産に買ってくる父がいた。あっちこっちで走り回って遊ぶ昭和の男の子は、白いクマのぬいぐるみをどうすればいいのだろうか。完全にピン트가ずれたお土産を受けとった私は絶句して、クローゼットの奥に大切に保管した。家に遊びに来る友達には見せられなかったのだ。

また、例えば、陸上部、サッカー部、空手道場に通う中学生である私に、まるで赤ちゃんをあやすようにプロレスごっこをしかけてくる父がいた。プロレスごっこにつきあってもらっているというより、こっちがつきあってあげているという状態であった。おそらく、父は私が中学生になっていることを理解していなかったのだろう。なぜならば、当時14-15歳になる私に対し、「この間は〇〇だったのに」と言い放ったからだ。父の言う「この間」とは、私が3-4歳の頃にプロレスごっこをした時のことらしい。ただ私には、もうその記憶がなかったのだが。

いくら離れて生活していたからとはいえ、途中で少しずつ気づくのではないだろうか。私は父と会うと、常にそう感じていた。そしてそのうち、「気づかない父が、父である」と認識するようになった。つまり父は、私からするとどこかずれていたのだ。

そしてそれは、今も変わらない。

今私は、自分の両親と、妻と子供と、いわゆる三世帯世帯で生活しているが、そこで父は、(私からみると) まるで一人暮らしをしているような生き方をしている。他人のことなど考慮しない(ようにみえる)。自分のペースを堅守して、周囲を自分のペースにあわせているのだ。たぶん父本人は、自分の配偶者、子ども、孫が父にあわせようとしていることにすら、ほとんど気づいていないだろう。

もっとも(あえて述べるが)、そんな父を批判する気は毛頭ない。父は(ギリギリ)戦前生まれの人間である。その世代の男の大半が「そういうもの」であるということは私も知っているし、もっと「なにもやらない男」を見聞きしてきているから、父は「そう悪いケースではない」と思っているからである。

ただ、「お父さんは子どもの気持ちがわかんねーなー」という感覚は、昔も今も変わらないだけである。

人の話を最後まで聞かない。

自分の非を認めない。

自分に甘く、他人に厳しい。

すぐ怒る。

他人に言っていることと、自分でやっていることに大きな乖離がある。

…などなど、いろいろ思うところがあるのである。

そして、そう感じつつ、ふと冷静になって、「もしかして俺も、自分の子どもに同じように思われているのかもしれない」と考えるのである。

正直、子どもとこんなにももつれることがなかったら、このような考えなど浮かぶことはなかっただろう。迷える今だからこそ、自問自答して、いろいろと自分が試されているような気がするのである。

「父」と「私」

私は(父と違って)、自分の子どもが新生児、乳幼児だった頃に、おむつ交換も、お風呂も、ミルクも、寝かせつけもやった。えらそうにいうつもりはない。妻のほうすごい重責を背負っていたから、私の役割など微々たる範囲である。当たり前のことをできるだけやっただけである。

第2子が誕生してまもなく東日本大震災が起こったから、あの頃はミルクを手に入れるのに大変な思いをした。物流がとまって入手できなくなったからだ。一部破損となった実家に皆で避難して、暖房器具がない中で布団にくるまってみんなで温まったことをよく覚えている。子どもの成長を、生活を、命を守るためにどうすればいいかという気持ちでい

っぱいだった。

私は父に1度も来てもらったことがなかったが、子どもの遠足、授業参観、合唱コンクール、プール、ドッジボールの練習や大会、ピアノの発表会、野球の練習や遠征にできるだけ付き添った。子どものために、父母会等の役員も何回も引き受けた。

自分はやってもらったことはないけど、自分の子供のためにやってあげたことは山ほどある。自分で経験できなかったことを、数えきれないほど自分の子供に与えた。

そう、私は自分の父親と違って、子どもに対して親としての役割を可能な限り担ってきた。授業参観にも、親子体験にも、運動会にも、陸上競技会にも、サッカー選手権にも、空手大会にも、ありとあらゆる親子行事に、父には一度に来てもらったことはないが、私は自分の子どものそれらに、基本的にすべて参加してきた。もちろん、料理も、洗濯も、お風呂掃除も、自宅でやるべき家事の担い手として務めてきた。

だから私は。

だから私は、過信、慢心、傲慢した親となったのだろうか・・・？

親としてうぬぼれてしまったのだろうか。

「父」から「子」へ

そういえば、キングスレイ・ウォードが著した「ビジネスマンの父より息子への30通の手紙」という本があった。日本語版を読んだのか、原著である「**Letters of a businessman to his son**」を読んだのか、あるいは、書評をみて読んだ気になっているのかは定かではない。たぶん、「読みかけ」だと思う。

以前もご紹介した通り、私は1999年から読書記録をつけている。そしてその中に、上で記した日本語版も英語版も記されていない。だから読了していないのだ。しかし、本自体はここあり、適当に読んだ跡があるので、少しだけ読んで放置したままなのだろう。

中途半端にしか読んでいないので正しい理解も記憶もしていないが、ただ、印象として次のように感じている。

つまり、親から子どものメッセージは、だいたいすぐには伝わらないのだ。

そして、だけど、親から子どもに伝えるべきメッセージはたくさんあって、そしてとても大切に、決して欠かすことができないことが、いっぱいあるのだ。

今私は、父親として自身の子どもに、どのようにメッセージを伝えるべきかと、試されている。もしかしたら、自分の父親からそれらをうまくキャッチできなかった過去が、今の事態の難しさを生んでいるのかもしれない。つまり、私が今感じるこの思いの源は、私自身かはるか昔から生み育ててきたことなのかもしれない。もしそうだとしたら、私は、過去の私自身から何かを学ばなきゃいけないような気がする。

否、あるいは、そのようなことは、ただの考えすぎかもしれない。行き詰まった私自身が、どこかで聞きかじったような論理を自分にあてがっているだけかもしれない。

どちらにせよ、自分の子どもに伝えることは簡単ではない。だけど、避けて通れない道で

もある。

前回の記事で述べたように、ここでまた、「星の王子様」に登場するワンフレーズを思い出す。

Only the Children know what they are looking for

「なにを探しているかは子どもたちだけがわかっている」のである。

再び、「星の王子様」に教えられる。

そういえば、その「星の王子様」には続編がある。

映画「リトル・プリンス 星の王子さまと私」がそれにあたる。

ただし、著者が亡くなった後につくられた作品だから、正統な続編とはいえないかもしれない。賛否両論があるが、「星の王子様」に対する愛情やリスペクトあふれる作品ではあると思う。「星の王子様」の後、王子はどうなったのか？知りたい人には一見の価値があるだろう。

そして、この「リトル・プリンス 星の王子さまと私」もまた、親と子の物語である。つまり、親のメッセージが子どもにどう伝わるかを描いている。

The things that are most important cannot be seen with our eyes.

—つづく—

新・島根の中山間地から Work as Life

第3回

「戻らない」

野中 浩一



1. 公会所の桜

島根県雲南市、私が住む里山の地域には、「^{こうかいしょ}公会所」と呼ばれる寄り合いのための家がある。40 畳くらいの部屋が1つ、台所が1つだけの、簡素な建物だ。

毎月1度、うちも含めた30戸の家長が集まって、自治会の話し合いを行う場所でもある。年に何度かの節目の自治会では、会の後に皆で酒盛りをする。神事ときは神道の祈りの場になり、とんど祭(※1)や納涼祭の折りには、大人も子どもも地域の皆が集って、飲み食いする場にもなる。



写真は加工済のもの

そんな寄り合いの家である公会所の外には、地域の人たちが8~10台くらい駐車できる庭がある。そして、その庭の一角に地域の人が作っている花壇と、大きな桜の木があった。

コロナ禍のある日の自治会、私は仕事の都合で帰宅が遅く、妻が代わりに自治会に出た。私が家に帰り、妻から自治会での話を聞いていると、公会所の桜を切るという話が出て、その場で採決したとのことであった。枝が伸びて公会所にかかり危ないということや、地域の高齢化で伸びた枝を切ることが難しくなっていることが理由のようであった。

私は、それまで公会所の桜をそこまで意識したことがなかった。1~2年に1回、春にたまたま通りかかったときに満開の桜を見て、立派な咲きぶりに少し心を躍らせる程度の関わりであった。しかしなぜかその日、妻から桜の木を切ることが急に持ち上がって決定されたことを聞き、「自分が自治会に行って話

し合いに加わりたかった」という、ふつふつとした悔しい思いが湧いてきた。

と同時に、その場にいたとして異論を唱えることができたろうかとも思う自分がいた。

「じゃあ、あなたが伸びる桜の枝を切りなさい」と言われたとき、その問いに「はい」と答えることはあまりに無責任だと承知しているからである。この意味は、都市部で暮らしている人にはイメージしにくいことであろう。里山の夏場、いくら時間をかけて刈っても1週間後には繁茂している雑草の繁殖力や、切っても切っても勢いを増して伸びてくる無数のかずらの生命力を知っている人であれば、仕事の合間に植物を相手にする大変さは身に染みている。

それだけではない。私はつい17年前に移住してきた者であり、地域の人たちの多くは何世代も前から住んでいる人たちである。長年地域を守ってきた人たちがいて、今がある。もちろん今だけを捉えれば、同じ地域の住人であり、言うべきことは言った方がいいと考える人は多いだろう。しかし正論や理屈はそうであっても、地域の人の中に根差している観念や空気感は理屈と異なる。そう思えるのは、それでも17年間住み続けたからであろう。

私の中にそうした理解がある中でもモヤモヤとした思いを禁じ得ないのは、以前であればこのような大事が即決されることはほとんどなく、50～60代の古豪^{こごう}の地域人^{ちいきびと}が異を唱えたり、論点整理をしてくれていた記憶が鮮明だからである。しかしコロナ禍の頃に古豪たちは60代後半～70代となり、その多くは一線を退いていた。また、こうした世代交代に加え、コロナ禍の中で集まって話し合うことが難しいという理由により、多くのものごとが簡単に縮小・中止される中で今回の桜を切る話が降ってわいたことも、私の中のわだかまりとなっていた。

2. 支援者の子育て

あまり語られることはないが、教師や医師やカウンセラーなど、不登校を支援する専門家にとって、自分の子どもがどう育つか、さらに言及するなら不登校になるかどうかは、かなりの関心事ではないかと思われる。

もちろん「不登校ではいけない」という意味ではない。親として、わが子が不登校になったことで不登校支援を始め、その取り組みが地域に根付くというような、「親」から「支援者」に移行した例は多い。また、私が運営するフリースクールでも、わが子が不登校（または不登校ぎみ）のため関心をもって採用面接を受ける人が少なくない。

他方、大学で教育学や心理学を学び、そこから支援者として働くことを選んだ20代・30代の「若手」にとっては、他者の不登校支援をすることと、自分の子どもが育つことが同時進行する場合がある。この状

態はなかなか厄介な面があるように感じている。「支援者」としては、学問的な知識を抛りどころにして思春期の子どもやその保護者さんに支援や助言を行う一方で、「生活者」の自分はといえば、まだ幼いわが子との日々に試行錯誤し、家族との関係や子育ての中で揺れながら、うまくいかないことも多い毎日を過ごすのである。

こうした若手支援者は、親として支援の現場で得た経験を家庭で生かし、家庭で得た感触を支援の現場で役立てる。さて自分の子をどう育てるのか、またはどう育つかといった命題と日々向き合いながら、生活者と支援者とを行き来する（このように考えていたのは私だけであろうか？他の支援者の中にも同じような日々があったのではと想像している）。

この「支援者と生活者の間」という命題について、私の印象に残っている人が2人いる。

1人は、私が20代のときにお世話になった、大学に勤める精神科医の方である。私が支援者としての道を歩み始めたばかりの頃から、事あるごとに私のことを気にかけてくださり、今から17年前、私に子どもが生まれたと伝え、1冊の本をプレゼントしてくださった。原田正文さんの「こころの育児書 思春期に花開く子育て」である。この本は、私が不登校の子どもたちを支援する指針になったばかりでなく、まだ生まれたばかりのわが子を、逆算してどう育てることがいいかを考えさせてくれた始点の書となった。

もう1人は、子育てに関する不朽の名著「子どもへのまなざし」を書かれた佐々木正美氏である。氏が島根県に講演に来ていた際に、上記の本をくださった方のお誘いで講演を聞きに行ったことがある（その後控室でお話させていただいた時間は、今も良い思い出である）。その際、講演の中で、自身の子どもが不登校になっていないことについて力強く語っていた姿が印象に残っている。このわが子についての語りは、心の専門家としての矜持^{きやうじ}であると同時に、これまで氏が支援してきた幾多の人たちへの責任でもあったのではないかと勝手に推察している。

「医者の不養生」という慣用句があるが、何かしらの専門家として人からお金をいただいて「支援」およびその「効果」を提供する立場の人間として、自分の最も身近なところ（わが子の育ちやわが家族関係）で支援の効果が発揮されていなければ説得力がない。そう考えることは自然なことであろう。氏の発言を受けて、育ちに関わる支援者は自分が行ってきた仕事の保証を、自分自身の家庭を通じて長年果たし続ける覚悟（※2）が必要なのだと感じずにはいられなかった。そこで今回は、原田氏と佐々木氏の著書から言葉を抜粋しながら、私が考える子育ての要点を著したい。

3. 乳幼児期の育ち

原田氏は、今から20年前の1995年出版の著書で「現代日本では子どもの心が自然に育つ環境が急速に

失われつつある」と警鐘を鳴らしている。そしてその原因のひとつを、「親や子どもにかかわる大人たちが、乳幼児期から思春期までを視野に入れた『子どもの発達のみちすじ』について知らないことにある」と述べている。

また「身体の発達と同じように、心の発達にも順序があります。心も段階を踏んで育っていくものです」とも述べている。ただし心の発達は目に見えないため「心の発達の歪みや停滞には気がつかないもの」であり「それがはっきりと見えるようになるのは思春期になってからです」と心の発達の気づきにくさに言及している。

令和の現代においても、思春期の不登校が急増しているという話題が飛び交っている。その問題点は不登校になることではなく、子どもの心が自然と育つ環境が失われたことと、大人が子どもの発達のみちすじを理解していないことにあるのかもしれない。しかしながら、この論に対してはいくつかの疑問が頭をよぎる。

①日本で失われつつあるとされる、子どもが自然に育つ環境とは何か？以前の大人たちは果たして発達のみちすじを知っていたのか？

②目に見えない子どもの心の発達について、把握や理解は可能なのか？

この2点は、後に私の意見を間接的に述べたい。

次に佐々木氏の1998年出版の著書の言葉を引用して、育ちについて考えたい。

「基本的なところで、子どもたちがどんな人格の人間になるのかということを、ほぼ決定するのが乳幼児期なのです」「この乳幼児期の育児は、ひとことでいえば、子どもの要求や期待に、できるだけ十分にこたえてあげることです」と述べており、この乳幼児期の子育てを基礎工事に例えている。そして、基礎工事が手抜きされている中で、建物の修復で成果をあげることの困難を訴えている。

以上、私が思春期を過ごした1990年代の著作からいくつかの言葉を紹介した。これら当時林立した子育ての方法論は、多くの共感を生み、様々な解釈を発生させた。それは発達の理解や子育ての見通しなど良い学びも多かった半面、ときに「正しい子育て」という意図せぬ親への圧力を生じさせ、「育児不安」や「産後うつ」など、親をナーバスな状態にしたり、「親の愛情不足」を責める根拠となるなど、負の側面もあったように思う。

こうした子どもの育ちにまつわる変化を、もう少し俯瞰して社会的なものとして見てみたい。

ここまで述べた子どもの「育ち」の変化の背景には、産業革命以降～高度経済成長期の、工業化、経済重視、自営から雇用へ、消費社会、核家族化、移動社会などの社会的・文化的な潮流と、それに伴う家族内での子どもの位置づけの変化がある。むしろこうした社会的・文化的な潮流に、家制度が薄れて地域との連帯が弱まった家族集団が、その時々^{いづ}の制度や規範に翻弄されて、よわよわしく押し流されているのが

近代の子育てであるという見方ができるのかもしれない(もちろん1人1人にその自覚はないであろう)。

つまるところ、思春期までの発達を見通した「乳幼児期の育ち」が大事であると私は考えている。加えて、親が「自前」で育てることも大事である。ただしそうするためには、家族の立場や生活の基盤、ひと昔前で例えるならば、家・家族と農地・山川海と地域集団とが強く結びついて、それで一生やっていけるという確信めいたもの(※3)が盤石であるという保証がなによりも大事なのかもしれない。

こうした議論は過去に数多あったものだが、なにも昔に戻ろうという話ではない(※4)。それは無理であろう。それよりも、乳幼児期から思春期までの発達を体得・感受するための、アウトソーシングではない身近な大人による子育てと、そうした子育てが大人にとっても喜びや利得に繋がるような新たな社会の仕組みを考えることが大事ではないだろうか。大げさに感じられるかもしれないが、そうした生(子どもの出産・発育)と死(身近な家族の看取り)に対する主体的な関与そのものが、不登校や引きこもりだけではなく、人口減少とそれに付随する様々な課題解決の糸口になるように思えてならない。

話は身近に戻るが、私が運営するフリースクールに入学相談で訪れる保護者さんから、「わが子が不登校になって初めてこういう場所があることを知りました」との声を聞くことが少なくない。こうした話を聞くにつけ、不登校の支援者や不登校支援の場というのは、必要とする人以外の目には留まりにくいタコツボ的なものであるのかもしれないと思うことがある。

だからこそ、この思春期における不登校という何かしらの負の循環に変化を起こすために、負の循環と距離がとれている人、自分の家族や子育てのやりくりの荒波に耐えながらなんとかバランスを保っている人が、支援者(※5)となり関わりをもつことの意義があるのではないかと考えている。

4. 続・公会所の桜

かくして公会所の桜の木は切られた。私から見れば、あっさりとした最期であった。

そして春が来て、わが家の前の田んぼ道を歩いて公会所に向かい、桜の木がないことをその目で確認した。桜があった頃にはわざわざ見に行くことなどなかったのだが、なくなってから見に行くというのも、我ながらよく分からない行動である。

さらに夏になり、恒例の自治会での地域清掃のとき、ひとしきり地域の農道の脇の草を刈り集め終えて、地域住民20人近くで、お決まりの公会所の草むしりをしているときであった。公会所での草むしり作業をほぼ終えて、なんとなく2~3人ずつが集い雑談するすき間の時間がある。そのすき間時間、多くの地域の人たちが炎天下に直射日光を浴びながら話している姿があった。それを目の当たりにした私の脳裏に、緑に茂った大きな桜の木が映った。

注釈

※1 とんど祭

1 月中旬の日曜日に、火を焚いて豊作や無病息災を祈願する神事である。切ってきた竹を広場に立て、その周りに藁などを縄で巻き、使い終わった正月の飾りや書初めなども藁と一緒に置く。その後神職が祈祷を行い、その後に藁に火をつけ竹を燃やす。お神酒が振舞われたり、燃やした火でお餅を焼いて食べたりする（地域により違いあり）。

※2 長年果たし続ける覚悟

「子育ては量より質」という言葉を聞いたことがある。これは、専業主婦時代から共働き・ひとり親働きの時代への移行を表す言葉であろう。ただし、この言葉は忙しく働く子育て中の親を慰撫するという意味では機能しているものの、実際問題として、量（時間や経験）なくして質（熟達や上手なやりくり）が高まるとは考えにくい。近年の不登校の急増や若年自殺の増加、（そうした子が成人になってからの）非婚化や晩婚化を見れば、近年の子育てを見直す必要があることは議論の余地がないだろう。覚悟という精神論のように思われがちだが、そうではない。子育ては量があったからといって質が上がるとも限らないが、友だち関係、夫婦関係など、うまくいっているときほど量が増え、うまくいかなると量が減るという側面があり、量と質は相互に連動している。ここで言う覚悟とは、自身の体験から学習を積み重ね、改善し、結果に繋げる日々の営みそのものを指している。

※3 確信めいたもの

近年では、終身雇用制度や名称独占資格による専門職化がこうした基盤の代替として機能している面があるように思うが、その範囲は個々の能力や経済力による格差含みである。また、教育関係者や医療関係者など、資格や子どもの発達の知識があっても、仕事による忙しさから、わが子の育ちとの関りが疎かにならざるを得ない状況は、個人の問題ではなく社会構造の問題と言えるのではないだろうか。子どもにとって、心身と脳機能が著しく発達する乳幼児期は数年単位であり、そこで必要とされる近親者との関わりは育児休暇など短期的な制度だけで補えるものではないと、著者は認識している。

※4 昔に戻る

極論を言えば、人工生命、人工知能など、人間を代替するものが急速に誕生し進化している現代において、人間や人間社会そのものがオールド・ファッションとなりかねない怖さを感じることもある。

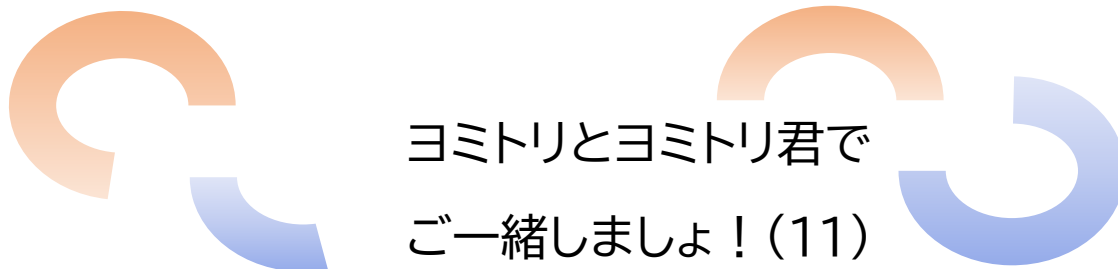
※5 支援者（個人的見解）

支援者とは、その子やその家族の過去を把握し、今を理解し、未来をイメージしながら、その時代やその文化の中で、環境や制度を調整しつつ、一緒に歩む仕事であろうと考えている。そして支援者と親との大きな違いは、より多くの多種多様な子どもたちの過去と今と未来を体感していることである。この体感のライブラリーを生かして、その子1人1人の成長イメージを膨らませ、その子から見える未来の選択肢の筋の中から希望が湧くものを提示したり、今日の前にある困難のトンネルを抜けるイメージを共有したりすることができると考えている。

引用文献

原田正文（1995）「こころの育児書」エイデル研究所

佐々木正美（1998）「子どもへのまなざし」福音館書店



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(11)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「原点に帰る」

対人援助マガジン 58 号への投稿後、昨年 10 月に体調不良で 10 日程寝込み、11 月に過労で再びダウンして緊急入院。治療、療養、静養と重ねて人生で初めての長めのお休み期間となりました。元々いつも走っているような人生でしたが、ロケットインの状態の重度障害の方々の意思疎通支援技能「指筆談ヨミトリ」とそのデバイス化技術「ヨミトリ君」の活動が始まってからは、まさに天職を得た思いでひた走り、激動、全速力の 3 年間で、休むということが思い浮かばなかった。今回思いがけなく休息の期間を得ましたが、でも静養といっても気持ちは常に意思疎通支援のことから離れられませんでした。むしろこれまでの活動の本格的なふりかえりの時間が出来たことをまず一番の収穫と感じました。意思疎通支援に関する論文もじっくり探して読めました。前投稿からのこの半年間は、途中の体調不良はあったものの、本当に心に残るいろいろな活動をできてとても充実していました。指筆談ヨミトリとヨミトリ君の活動について、閉じ込め状態にある障害当事者の方の言葉を交え、ご紹介します。

■2024年9月●日

対人援助学会京都大会に、ヨミトリ君プロジェクトとしてポスター発表に続き企画ワークショップにも応募。遷延性意識障害当事者のAさんを核として、ご家族、支援者一丸のチームとなっていていろいろ発表の構想を温めて来ました。この機会に遷延性意識障害への理解が広がれば。そして情報を必要としているどなたかに繋がれば。審査が通りますように！

■2024年9月●日

8 月に入稿したりハビリ専門誌の原稿校正作業開始。「コミュニケーション支援」の特集ということで、重度の障害があり意思の表出が困難な方の微小な発信を認識する技術「ヨミトリ君」とその基となった介助付きコミュニケーション「指筆談」について、ヨミトリ君開発者の岡田さんと分担して記事を執筆。当事者の方々、ご家族に快くデータ提供にご協力いただき、二人とも今書けるすべてをできるだけわかりやすく記したつもりだったけど、やはりプロの編集者はすごい。校正原稿は当方で提出した内容をほぼ全面的に採用していただきつつ、効果的に重要項目を伝えるための記事構成の大胆な組み換え、レイアウトのメリハリ、見やすさ等々、ただただ唸りました。記事がすごく立派なものに見えて、思わず感激し

てしまう。

■2024年9月●日

難病の進行による全身性の麻痺により意思表示が困難になっておられる B さんを対話支援で訪問。奥様との掛け合い漫才のようなやり取りを介助付きコミュニケーション指筆談でお繋ぎさせていただく。笑いが絶えない心楽しい支援現場です。ひとしきり笑った後、Bさんが言われました。

「私のように高齢になってから病気で身体の不自由を失った者でも、やはりまだやりたいことやいろいろな希望もあります。思いを伝えたい、妻と言葉を交わしたい。人生の晩年になった私でもそうなのだから、若くして病気や事故でロククインの状態になった人たちの辛さはどれほどだろう。これからの人生にたくさん夢や希望があったことでしょう。大切な人と将来を約束していたかもしれないし、これからその出会いがあったかもしれない。その人たちが自分の思いを届けられるように、自分の身体でできることが少しでも増えるように、岡田さんや高木さんにはぜひ頑張ってもらいたいです。」

Bさんのお言葉が心に沁みました。ヨミトリ君プロジェクトがんばります！

■2024年10月●日

学会ワークショップの審査が通りました！嬉しい。早速、当日配布用の資料の作成に。チームメンバーから「遷延性意識障害とは？」という丁寧な説明が先ず必須」との意見が出て、全国遷延性意識障害者・家族の会から許可を得て会の HP・会報から抜粋して資料に掲載させていただくことに。ここで高木大いに反省しました。毎日意思疎通支援のことばかり考えているから、遷延性意識障害という言葉があまりに自分の中に浸透し過ぎて、それを初めて知った 12 年前の自分の驚きをつい忘れがちに。ワークショップでは遷延性意識障害については冒頭で簡単に説明をと思っていましたが、対人援助の分野は広い。チームメンバーの「遷延性意識障害という言葉は初めて聞く方がほとんどだろうから」という意見は貴重でした。みんなで意見を出し合って進めていけるのがいいな。だけど、ちょっと独り言ブチブチ。対人援助学マガジンに「ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！」を 10 回連載してるんだけど。それで少しは遷延性意識障害のこと、ロククインのこと、広まっていないかな…。まだまだ全然足りてません！精進を続けるべし。

■2024年10月●日

出ました！ヨミトリ君と指筆談を用いたコミュニケーション支援の記事が掲載された、株式会社ともあ出版のリハビリ専門誌「訪問リハビリテーション」。献本を受け取り、表紙に執筆者名として自分の名前が載った書籍の実物を見たら泣けてきました。在野でひたすら実践者として歩んで来た道で、このような発信の機会をいただけるとは。ものづくりの展示会等のイベントでも本でわかりやすくヨミトリ君をアピールできそうです。絶好の PR タイミングなので、学会の大会事務局に許可をいただき、ワークショップ配布資料に記事執筆のことも載せることに。

■2024年10月●日

近年にない体調絶不調で久々のダウン。学会発表の準備をしなくちゃいけないのに全く食べられず、起

き上がれず。チームのみんなに迷惑かけてる。ごめんなさい…(泣)。

■2024年10月●日

なんとか元気になり、無事復帰できてホッ。遅れを取り戻さなくちゃ。一方、チームのAさんが体調が芳しくない。調子の良い時でも介護車両での長距離の移動は相当負担が大きい中で、体調不良の時は尚更です。無理をしていただかないようにお伝えする。発表の構成は、Aさんが参加できた場合のものと、参加できなかった場合の2本建てて用意しておくことに。

■2024年11月2日

学会年次大会 in 京都。前年の広島大会がヨミトリ君の対面開催でのデビューだったことを懐かしく感慨深く思い出しながら、張り切って京都に向かう。はずが、大雨の影響で新幹線が運休してしまい、急きよ名古屋から在来線で京都へ。同じように在来線に切り替えた人が多いのか列車内はかなりの混雑で、資料等荷物を持って立っているところへ携帯電話に着信。列車の運休は他の路線でもあったようなので、大会事務局から何か急ぎの連絡かとも思い、周囲を気にしつつ電話に出てみたら、遷延性意識障害ご家族からの新規のお問合せのお電話でした。「すみません、所属している学会の発表で今京都に向かっているところで…」と小さい声にしたけれどそう言った瞬間に、周囲の人が一斉に私を見た。明らかに「え、この人が」というリアクション。そうなんです、今から学会なんですと、高木、悦に入っている場合ではない。

京都駅で降りて急いでタクシー乗り場に向かうと、なぜか「Taxi? Japanese?」と係の人に尋ねられる。世界的な観光都市京都。外国人観光客の人とタクシーの乗り場分けているのかな。会場の京都光華女子大学周辺は、観光客でごった返しているエリアとは趣が違って落ち着きのある都会的な地区でした。とてもきれいなキャンパス。「学会で京都へ」の特別感に心躍らせながら会場へ。交通アクセス変更で実はかなり遅刻です。急いで。

大会初日は、ヨミトリ君はポスター発表で披露中。何事にも前もって、余裕をもって行動するエンジニアの岡田さんは天候不良による列車の遅延を見越してすごく早く名古屋を出発され、すでに大きく水をあけられた感が。会場のお部屋に入室すると、早速昨年の広島大会で知り合った会員の方々と懐かしの再会。去年親しくお話しさせていただいた楽しい雰囲気そのままによみがえってきます。「あれからヨミトリ君はどんなふうですか。」なんとも嬉しいお尋ねに岡田さんが張り切って説明します。

ふと横を見ると、ヨミトリ君のお隣は、共働学舎新得農場のポスター発表でした。10年以上前ですが新得農場の代表の方の講演を聴く機会がありとても感銘を受けたので、発表者の女性に思わず声をかけました。そうか、対人援助ってこういう分野にも活かされるのだなと、学びを新たにしました。対人援助学会、良いなあ。

■2024年11月3日午前

大会2日目。

朝、会場入りすると、すでにお一人ヨミトリ君のポスターの前で熱心に岡田さんの説明を聴いてくださ

っている方がいらっしゃる。お話しが弾んでいるように見えたので並べている配布物の整理などしつつ後ろに控えていました。

その方が去られた後、岡田さんに聞いてみました。

「熱心に聴いてくださっていたようですね。どういう方だったのですか(今後につながる期待感Max)」

「知りません」

「え…。所属とかお聞きにならなかった？」

「聞いてません」

「えーと。お話しが弾んでいたように見えましたが…」

「ヨミトリ君に目を向けられたので私が説明をしました」

「先方の反応は」

「特に何も。私が一方的に話す感じで」

「あの、どういう分野の方とか…」

「全然」

「そうですか。」

岡田さん、天下に名だたる優秀なエンジニアの方なのです。そして心温かい方なのです。だからこそ！思い切って言ってみました。

「聞いてみてもいいと思うのですよね。対人援助職の方なのか、技術系かとか、障害福祉に関わりのお有りの方かとか。もちろん先方が望んでいないのにこちらから詮索したりとかはよくないですけど。何かヒントがあれば、続けて説明するのもその方の興味に沿ってより効果的にアプローチできるのではないかと…」

「なるほど」

「やっぱり人と人だから、これも出会いなので、何ていうか、キャッチボール」

「キャッチボール」

「そうです！心のキャッチボール。いかがでしょう」

「了解です。心のキャッチボール。心がけます。」

「いいですね。ご理解いただけてうれしいです。具体的には？」

「ボカスカ投げるだけじゃだめ」

「その通りです。きっと良い一日になります！」

こうしてチームのメンバー同士も互いへの理解を深めてゆく。そっと涙を拭いた朝でした。

■2024年11月3日午後

そして企画ワークショップ。チームヨミトリ君みんなでがんばりました。残念ながらAさんは参加することができませんでしたが、ご家族が指談で読み取ったメッセージを届けてくださいました。

支援の現場のみんなの思いが、ワークショップに足をお運びくださった皆様に少しでも伝わるように、それぞれの節目でのそれぞれの思いを皆様と一緒にたどり、遷延性意識障害のこと、人としての尊厳のことを一緒に理解していけるようなそんな発表にしたいと願って準備を進めてきましたが、いつもの支援の現場がそうであるように、笑いあり、涙あり、Aさんやご家族への皆様の温かい思いで会場が一つになってくださった気がして、感謝の気持ちで一杯でした。

終了後、たくさんの方がお話をしに来てくださいました。実はご家族が遷延性意識障害という方もいら

っしかったです。また、神経難病の研究や患者さん支援をされている大学関係者の方や障害福祉の分野の対人援助職の方等、まさに願っていた、情報や理解の共有、関心を持ってくださる方とのふれ合いの数々に深く心を打たれました。

昨年の広島大会に続き今年の学会でも、会場となった京都光華女子大学の学生さん達がお忙しい中お手伝いくださり、閉会式での大会の感想やコメントは様々な視点から気づきや思いを述べてくださりとても参考になりました。

そして、そして、大会事務局の先生方、本当に本当にお世話になりました。与えていただいた機会はチームみんなの素晴らしい記念となり、かつこれからの活動の大きな糧と励みになりました。

ありがとうございました！

■2024年11月●日

年次大会の余韻に浸りつつ、また新たな気持ちでの意思疎通支援の活動が始まりました。早速岡田さんからヨミトリ君の新型の試作機の披露が！ヨミトリ君はもう5号になるのです。4号はヨミトリ君の真髓であるひずみゲージを用いた超高感度の圧認識により、本当に力の弱い、というか手からほとんど出力できない寝たきりの方の微小荷重をしっかりと捉えることができる、ある意味ヨミトリ君の完成型であるのですが、その分繊細で、手を載せるパネルを支える雲台とヨミトリ君設置面との高さのギャップをうめるために手首の下の際間にハンドタオル等を差し込む等のセッティング調整の必要がありました。5号はなんとその高さギャップがなくなったのです。機器がものすごく小さく薄くなりました。え、これで読み取れるの…？！なんとも不思議な感じです。そして言われるには、むしろヨミトリ君の原点に回帰していると。ますますわかりません。ヨミトリ君、君は一体どこまで進化を続けるのか！私も負けてはいられない。益々指筆談の技能を高めなければ。

■2024年11月●日

3月の刈谷マイクロメーカーフェアに続き、ものづくりの祭典「メーカーフェア」の大垣開催、「大垣ミニメーカーフェア」に出展しました。ヨミトリ君プロジェクトは小さなボランティア団体ですが、なんと独立したコーナーの一般企業のお隣にブースをいただき、おかげさまで、ブースに来てくださった皆さんにヨミトリ君の操作体験をしていただくのに広いスペースを使うことができました。そして、ダメ元で応募したプレゼンテーション枠もいただくことができ、うーん、奇跡の連続。本当にありがたいことです。ProtoPedia(プロトペディア)という、ものづくりの作品を投稿する老舗サイトがあるのですが、そのProtoPediaの運営をされている方がヨミトリ君を見に来てくださいました！ヨミトリ君を見る温かい眼差し、着目にエンジニア岡田さんは大感激。思わず記念撮影をお願いしてしまいました。

ヨミトリ君のブースにはたくさんの方が来てくださいました。ヨミトリ君のメカニズムのことだけでなく、意識障害のこと、ロクトインのこと、そして意思疎通支援のこと。皆さん本当に熱心に聴いてくださり、思いを話してくださいます。ご家族やご友人がロクトインの状態で意思疎通の方法を探しているという方もいらっしゃいました。その存在と思いが当事者の方々にとってどれだけ大きな救いであり、生き続ける希望となっていることでしょう。指筆談ヨミトリでもヨミトリ君でも、何かお役に立ちたいと思わずにいられません。

ブースにはヨミトリ君の仲間の当事者ご家族も助っ人として駆けつけてくださり、まさに千人力でした！

■2024年11月●日

メーカーフェアは夢のような楽しい場でしたが、10月に続きまたまた痛恨の体調不良でフェア開催2日目は貧血との闘いに。そしてなんとか帰宅したものの、ついにダウン。12月は完全休業となりました…。

■2025年1月●日

体調も徐々に回復し、ヨミトリ君プロジェクトや東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の活動のコーディネーションや原稿書き等オンラインでできることから活動を再開。岡田さんから、ヨミトリ君でロボットアームを操作するアイデアが送られてきて、感心しきり。これまでは重度障害の方々にヨミトリ君でオリジナルのPCゲームをやったり、楽器アプリで演奏を楽しんだりしていただきました。ずっと寝たきりのロケットインの方々が自分で操作するという新たな楽しみとやれる自信を得て、とても好評でした。が、これがヨミトリ君で実際の物を動かせるということになると、臨場感やリアルな操作感はまだ格別なはずです。ヨミトリ君の操作練習のモチベーションアップにも効果がありそうです。

■2025年2月●日

ヨミトリ君を操作してロボットアームでじゃんけんやパンを軽く掴んだりできるというのを聞いて、ふとBさんのお顔が浮かびました。そうだ！じゃんけんもいいけど、ロボットアームでBさんに奥様の手を握っていただいたらどうだろう。まもなくBさんのヨミトリ君支援の日というタイミングだったので、岡田さんに大至急ロボットアームで握手の要領で手を握れるようにしてとお願いしました。果たして上手くいくか？！

結果は、ヨミトリ君とロボットアームで愛の手つなぎ大成功！元々有線で動作する仕様だったロボットアームをワイヤレスで動かせるようにしていただけたので、Bさんの奥様の手元にちょうどロボットアームが来るようにして、そしてBさんがヨミトリ君を操作。操作といっても動作は目には見えません。動いているようには見えないBさんの手ですが、そのほんの数グラムの出力をヨミトリ君は確かに認識して、そしてパネル上で左右に微小の荷重圧を移動させることで、ロボットアームの手が開いたり閉じたり。Bさんが奥様の手を軽く握ったり離したりしました。何度も、何度も。何度も手をつなぎました。まるで本当にBさんが奥様の手を握ったように思えました。ロボットアームに確かにBさんの気持ちが乗っていました。

そして奥様が「はい、もっと気持ちを込めて」と冗談めかしておっしゃると、Bさんはピタッと動きをとめて応酬。これには思わず大笑いしてしまいました。指筆談でBさんに感想をお聞きすると、「とてもうれしい。まるで本当に自分でお母さん(奥様を普段呼ぶ呼び方)の手を握っているような感覚になりました。」とってくださいます。うれしいなあ。Bさんが続けました。「おまえがいつも手を握ってくれるから、俺も手を握りたかった。もう無理だとあきらめていたけど、ヨミトリ君で手をつなぐことができるようになるなんて。岡田さん、すごく良い物を作ってくれて、ありがとうございます」

■2025年2月●日

ヨミトリ君を操作してロボットアームで愛の手つなぎを実現されたBさん。その後、岡田さんが単独のヨミトリ君支援にロボットアームを持参すると、Cさんご家族はじゃんけんで盛り上がり、Dさんは、「今度ステージに上がるので、ロボットアームで皆さんにバイバイをしたいので設定よろしく」と。Cさんはまた「ヨミトリ君+ロボットアームで音楽演奏したいです！」など、次々にいろいろな希望が。夢がどんどん広がります。できることがどんどん増えます。ヨミトリ君の無限の可能性。まるでヨミトリ君が命を持ったような、そんな愛おしい気持ちになります。頼むぞ、ヨミトリ君！

■2025年2月●日

Bさん宅を指筆談の対話支援でお訪ねしました。Bさんと高木をつないでくれた支援者のEさんも一緒です。Bさんご夫婦から全幅の信頼を寄せられているEさん。障害福祉分野の豊富な知識と経験でいつも高木の相談に乗ってくれます。

Bさんは私の体調不良を心配してくださっていて、あらためて無事の復帰をととても喜んでくださいました。

「ブランク、といってもトータルで2か月程ですが、こんなに指筆談から離れたことはなかったので、最初はちゃんと読み取れるかドキドキでした」

「いや、むしろ前よりもスムーズに取れているぐらいですよ。」

Bさんのお優しい気遣いに思わずじーん。

Bさんは照れずに奥様に「おまえが頼りだ」「体に気をつけてくれよ」と話しかけます。

「おまえにずっとたいへんな思いをさせているから、俺はおまえより先に逝って、後、おまえは少しのんびり、なんでも好きなことしてくれ。でも、あまり間が空くと寂しいから後から来てくれよ」

「一緒にいいよ、お父さん」奥様が笑いながら応えます。

あまりに温かい、そして確固たるお二人の絆。私がぐっと来てしまったその時、Bさんがすかさず書かれました。

「高木さん、泣いちゃだめ。人の気持ちがよくわかって寄り添えるのは高木さんの良いところだけど、そういう気持ちを自分の中にあまり入れてしまうと、自分の負担になってしまうよ。あえて外国語の通訳のように割り切って中立の立場で読み取ることも心がけて」

すごく深いお言葉です。伝えるという仕事の本質を言ってくださったような気がします。

私は感動して、感謝したのですが、面白かったのは、こうしてBさんが私に助言をしてくださっている間に、奥様とEさんは二人でおしゃべりを始めてしまっていたので、Bさんが奥様に向かって

「一緒に」と言いかけたのに奥様聞いていらっやしません。

Bさんもう一度「一緒に」と書き、高木が読み上げました。二人聞いていません。

Bさん、あきらめずに3回目の「一緒に」を書いて、ついにBさん、

「おい。おい」と指談で書かれました。

笑ってはいけないのですが、高木思わず笑ってしまいながら、「おい。おい」と読み上げます。

ようやく気付いた奥様とEさん。

「え？」

「おまえ、なんなんだ。俺は『一緒に』と3回も言ってるのに、全然気が付かなくて」

Bさんが続けられました。

「でも、この自分の言いたいタイミングで、一緒に、と3回続けて言い続けられるのは、高木さんがいてくれるからこそなんだ。この自然な感じで話すように書けるのは、本当に嬉しいことなんです」

Bさん、ありがとうございます。

■2025年2月●日

國學院大學たまプラーザキャンパスで行われた「きんこんの会」に参加しました。昨年6月にコミュニケーション研究会に講師としてヨミトリ君の機器と支援事例の紹介で登壇したのですが、岡田さんとお招きを受けて出かけて行ったその際に会った方々と今回再会を喜び合いつつ、きんこんの会の参加としては、2013年9月と翌1月以来の、実に12年ぶりの参加で懐かしさと新鮮さと両方の気持ちに。昨年12月に思いがけなく長く静養することになった時に、心と、意思疎通支援の原点に戻ろうと参加を思い立ったのでした。

きんこんの会は介助付きコミュニケーションの指筆談を通して、意見や日々の思いを語り合う会です。私たちは口から声を出して言葉を言うことがコミュニケーションのデフォルトであると考えがちですが、身体や心の状態や困難さによって、そのデフォルトでは思いを伝えることが難しい方が、きんこんの会で指筆談を通して、様々な分野の関心や問題定義や生活の悩みやユーモアあふれるエピソードなどを活発に発言されました。みんなが話すのが当たり前の素晴らしい場に一緒にいられて本当に楽しくて有意義で幸せでした。

全体会の際に、主宰の柴田保之先生と当事者の女性に声をかけていただいて私も指筆談介助を少しやらせていただきました！ほかに何人かの方と対話形式でお話するチャンスもあり、皆さんに温かく受け入れていただき有難かったです。

東海地区でもいつかこんな素敵な会を開けたらいいな。

そして、昨年のコミュニケーション研究会の際にヨミトリ君を体験された方が、またやってみたいと言ってくださったり、その際のアーカイブ動画を観たという方が、ぜひヨミトリ君を体験してみたいと関心を示してくださったり、知らないところでヨミトリ君のことを考えてくれていた方がいることに大感激しました。なんとか機会を作ってヨミトリ君の魅力に触れていただけるように、そして指筆談でたくさんお話しができるように。

いろいろなつながりを大切にしながら、引き続き意思疎通支援の活動をがんばっていきたいと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

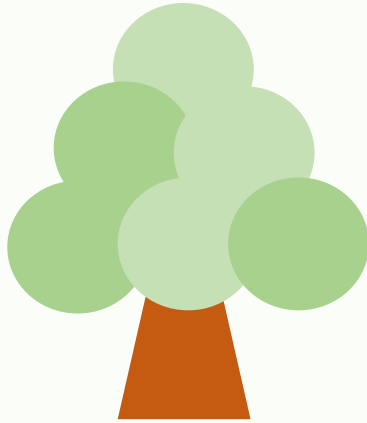
<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

[東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」](#)

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回 NHK 障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。



こかげのにちじょう⑪

～イライラなのか不安なのか～

鳴海 明敏

2月某日

女子中学生のまりさん。職員の K さんが入浴の声掛けをしようと探すと、2 階ホール中央の柱のところのキャスターの上に座り、深く頭を垂れていました。

K さんが「入浴順が回ってきたけど・・・どうかしたの？」と聞くと、まりさんは「心の中がぐちゃぐちゃで、整理できなくてモヤモヤして・・・イライラなのか不安なのか、わからなくなっている・・・」と話しました。

それを聞いた K さんは、

- ① 一人で難しい「心の整理」は無理して一人で整理しようと思いつめなくていいこと
- ② 「整理できないな～ぐちゃぐちゃだな～」は、一緒に整理してくれる職員が出勤するまで、そのままにしておいてもいいこと

を伝えたくて、「じつは私も、今、いろんなことが心の中でぐちゃぐちゃしてさあ、とっ散らかっているけどさあ、そういうときもあるし・・・」と、自分自身もそのままにしていることを伝えると、まりさんは驚いたような顔をして、K さんの目を見つめていたそうです。

そこで K さんは、まりさんの気持ちを、一緒に整理してくれて、まりさんがスッキリしやすい職員の名前を聞いてみました。するとまりさんが H さんの名前を出したので、「私も、H さんとお話するとスッキリするし、元気になるよ・・・」と伝えると、ようやくまりさんが笑顔を見せたので、「入浴は強制しないが、いつも伝えているように、髪や顔は洗面所でも洗えるが、身体だけはお風呂でしか洗えないので、できれば身体だけでもスッキリ綺麗にしてこれたらベストだな～」と伝えると、「入ってくる！」と、笑顔で小走りに浴室へ向かって行ったそうです。

次の日、二人の会話に出てきた H さんが、まりさんのことについて、こんな記録を書いていました。「なんでも『モヤモヤ・イライラ』という言葉で表現していて、感情の整理が出来ない状態がある。今後は、出来事の原因やその時の自分や相手の気持ちを、分析・理解するなどして、感情のラベリングに取り組んでいきたい。」

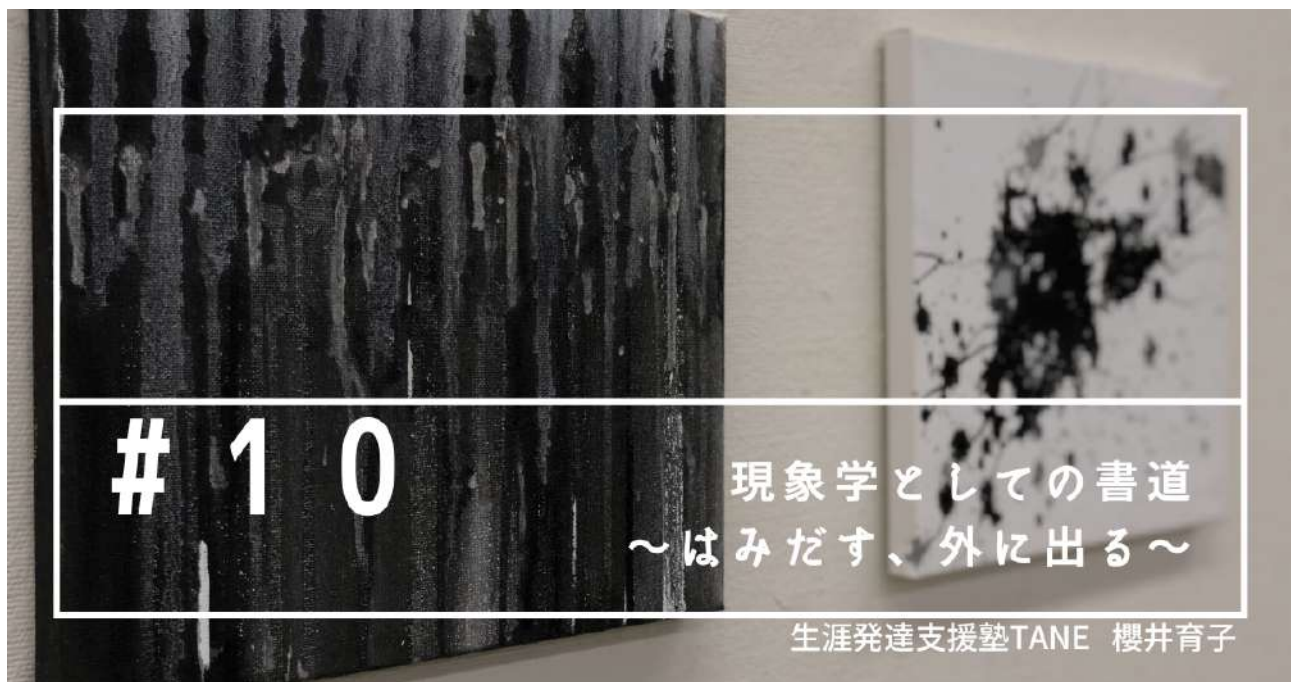
この記録を見て、ちょっとお節介しなくなったので、それに対して、次のようなコメントを書き添えました。

こども達の内側にでてくるものは、はっきりと「感情」としてラベリング出来るものもあれば、「曖昧で、はっきりしない、ラベリングすることが難しいモヤモヤ」もあるものだと思います。

あまり「感情のラベリング」を意識し過ぎると、このような「曖昧で、はっきりしない、モヤモヤ」を無視してしまうことになってしまう可能性があるので、その点については注意が必要だと思います。

「曖昧で、はっきりしない、モヤモヤ」は、そこにあることを認めて、静かにそっとして置くのがいいと思います。

(了)



はじめに

現在、書道という分野についての研究は文字や技術の分野であることが多く、対人援助に絡めた分野では芸術療法などの一部として取り上げられる程度である。「すみあそび™」はわたしがこれまで様々な場で取り組んできた書道を用いたワークショップだが、8年もやっているとそれなりにたくさんの事例が集まってきて、それなりにたくさんのことが「見えて」くるようになった。これまで「単なる遊び」「のびのびとやっているワーク」「自由に楽しそう」というものではあったが、ここでまとめて行くことで気がつくこともあり、ついに2025年より、「はみだすラボ」というオンラインサークルを立ち上げ、分野横断の大人の学びの場を豊かにしていく取り組みを中心活動にしていく覚悟ができた。今回は、立ち上げの経緯と今後の展開についてまとめておく。

時代はとっくに変化していた

宮城県はだいぶ前から不登校児童生徒数は最多であり、これは「震災の影響」などと言っていたが、本当はもっと前から多かったし、そもそも何か特別なことが影響してきたわけではない。「不登校の数」などというものの、統計上の問題でしかなく、わたしの友人の子などは、「学校は週2回くらいでいいかな」と言って、図書館の本とタブレット、好きな本を作るなどしながら学年以上のことを学んでいる。もちろんフリーランスの家庭なので両親が在宅しているため、本人たちにとっては何も「問題」ではない。が、結果その子は年間30日欠席などはとっくに超えてしまっているために、学校での取り扱いが「不登校児童」となっている。これはもちろん減多にならないタイプの「好事例」ではある。しかし、時代が変化し、職業観、生活様式、何もかもが変化しているにも関わらず、なぜか「毎日学校に通う」というスタイルについてはアップデートされない。にも関わらず、文科省は「予測不可能な時代に対応できる柔軟かつ多様性を尊重する人間を育てる」みたいなことを言うのだが、柔軟さ、多様性尊重、予測不可能なことを受け入れ、挑戦し解決する能力のある大人がどれだけいるんだろう。

不愉快という感情体験が枠を変えていく

はみだすことについて深く考えるようになったのは、書道という道筋からはだいぶはみだした「すみあそび」というワークショップを開催し、そこに通う大人たちが「自分の道」について考え始める、という現象が起こり始めてからである。お手本もなく、ひたすらに自分の好きなこと

を書き続けていいという「すみあそび」の時間は、自分自身の凝り固まっていた「枠」を外すトレーニングである。中には、「全然思い浮かばない、お手本がないとダメ」「あたまが堅いから」「子どもはいいわね」などの言葉を吐きながら書く方もいる。「楽しいとは思えない」という言葉も当然いただいた（そういう方々は大体なぜか怒っている）。しかし、その「ちょっと不愉快な体験」「自由は難しい」と、わざわざこんな体験をする、というそのものに価値があるのではないか、と感ずることも増えた。大事なのは、とにかく「自分自身がどう感ずるか」というところだけにフォーカスする、ということだ。そのちょっとした「怒り」すら、「あなただけの大事な感情ですね」と伝え続けてきた。すると、人は和らぐ。「つまらないことをつまらないと感じていてもいいのだ」ということ、これは真理であり、ここを大切にするかしないか、は「自分軸」で生きているか否か、ということでもある。

「最近、なんだか我慢するのが難しくなってきちゃって」という方もいた。自分自身の感情に気がつき、いかに我慢していたか気づく。「好きなように生きていいのかもしれない」。その人自身が枠を外していくと、それを見続けてきた周りの人たちも楽になる。こんな方々が教育現場にいたらいい、いやむしろ、自分を生きる「フリーランス教育者」が街に溢れたらいい。

自分軸が育つから、はみだせる。はみだすから、自分がOKになる。

「自分を大事にしましょう」という言葉を言うのは簡単だ。ところが「ではどう動けばいいのかが分からない」「自分の思った通りにしましょう」（それってわがままじゃないの？）「自分の好きなことをしましょう」（それって正解はなんなの？）と心の声が聞こえるときには、それは「心の声」ではなく「誰かの声」、つまり他者の評価を気にするあまり出てきている言葉である。「はみだしても安心できる」という安心感を持つ大人が増えれば、当然ながら「自分軸」で生きる大人が子どもたちをそのまま受け入れることができる。ところが、自分で自分に「OK」という体験そのものを、味わう機会が少ない。そこで有効なことが「言語化」で、「はみだすラボ」ではオンラインのすみあそびでは必ず自分自身の作品を言語化して具体的に褒めていく。言葉を出していくうちに、言葉の肌触りのようなものが変化したり、作品そのものへの視点が変わったりする。

「すみあそび™」で大事にしているポイントは、まさに不確実な時代への手がかりである。

①枠を外す／肯定感と価値観を知る ②失敗する／許せないことを知る ③まずやってみる／行動と計画性を知る ④違う方向から見てみる／柔軟性を知る ⑤夢中になる／集中力と影響力を知る ⑥感情を表す／エネルギーと情動を知る

これらの実践を感覚（無意識）として体験し続けることが、実際の自分自身の領域を拡げ、まさに枠からはみだすことへの安心感が生まれる。この実践と理論を両面から味わい、自分自身も実践者として教育分野あるいは対人援助の場面で生かすことのできる、アートプレイワーカー™についても講座準備中。まずは大人が領域を拡張し分野横断で学び続ける「はみだすラボ」へぜひ参加していただけたら幸いである。



はみだすラボ申し込みフォーム



SHU_KOU_IKKO

朱 紅 育 子 shukou icco（生涯発達支援塾TANE、書と生き方研究所代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合する「朱紅・書と生き方研究所」運営。既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。全国すみあそびProject実施中。

教室の窓から

令和 6年
(2025年)2 月
来須 真紀

対人援助的授業作り

学校では、日々授業が行われ、教員たちは子どもたちに学力をつけようと奮闘しています。一日4時間から6時間。多いところでは7時間授業というところも。教科は国、算(数)、英、理、社、音楽、図工(美術)、家庭科、技術、体育、学活、総合的な学習の時間、道德、書写など。教科担任制の学校は1教科をたくさんのクラスで授業し、クラス担任制の学校は1クラスに専科授業以外の教科を授業します。小学校はクラス担任制が多く、中学校からは教科担任制が多いですが、最近では小学校でも教員の専門性を生かしたり、チーム学校を進めていくにあたり一部教科担任制を取り入れている学校もあります。

授業作りの基本の「き」

授業をするにあたり、小学校の教員がまず大切にしているものの一つとして「教科書」があります。(ごくまれに、教科書以上の授業を教科書を使わずにやっちゃう教員もおられますが、そのお話はまた今度)私たちが、授業をするのに一番大切にしなければならないものは「学習指導要領」なのですが、実は、教科書は、学習指導要領を全モーラしている優れモノなのです。なので、私も教科書を進めていくことを基本に授業をしておりました。

授業作りの基本の「ほ」

次に考えるのが、「今日はどこからどこまで進めようかな」ということです。通常学級であれば1年間で当該学年の教科書はすべて終わらせないとはいけません。そのため4月には「年間指導計画」や「シラバス」が作成され保護者にも公開されます。それに付け加えて、「成績の締め切り」や「ほかのクラスとの進度をそろえる」とかで、ゆっくりも進められないし、ぐんぐんも進められない。程よく適度に時間をかけなければなりません。この点も教科書によってはよく考えられてるものもあって、「一時間はここからここまでやれば OK。流れも教科書通りに進めればいいですよー。」と目安があるものもあります。教科書って本当によく考えられてるなと思います。

授業づくり基本の「ん」

ここからが、対人援助職としての教員の腕の見せ所。まず、「うちのクラスに授業するとしたら、一時間でどこまで進められるか」を考えます。「ちょっと理解するのに時間がかかるかもしれない」と判断したら教科書は 1 時間で進めるようになっているところを 2 時間かけたり、反対に「ここは理解が進んでいる」と判断したら 2 時間で進めるようになっているところを 1 時間で進めたりします。クラス実態をアセスメントして進度を調整しているのです。

ここからが本番

ここまでは、授業の内容を考える前の下準備。前にも述べたと思うのですが、学習指導要領には、各教科の目標があります。教員はその目標を達成させ子どもたちに力をつけさせようと授業します。当然各 1 時間の授業にも目標があります。教員は一時間一時間、子どもたちが目標を達成できるように授業を組み立て、支援を考えます。

アセスメントはどうやって？

では、支援を考えるためのアセスメントはどうするか？これは、授業づくりにとってとても大切です。学習達成度のアセスメントと子どもの個々の特性のアセスメントとクラスの集団のアセスメントと人間関係のアセスメント。私は主に 4 つの視点からアセスメントし、「だから、このような授業づくりをし、だからこのような支援が必要」と考えるようにしました。授業づくりもアセスメントに始まりアセスメントに終わると思っています。ここは、対人援助職も学校も同じだと感じています。アセスメントをしてニーズを考え、支援を入れる。児童福祉司になり、ケースワークも授業づくりも似ているなと感じています。

では、次回、4 つのアセスメントをどうやって？という話をしたいと思います。

余談。最近のこと

学校を近接領域ですが外から見ようになって 2 年。学校の基本はやはり「授業」と「学力保障」だと思っています。この 2 つは、どんなに近接領域の私たちが頑張っても踏み入れることができない領域です。学校は勉強を教えることなんです。それ以外のことは、学校と各機関とで協働して、役割分担したらいいのだと思います。児童相談所だって、警察だって、子ども家庭センターだってたくさんの協力者はいるんです。もっと言えば、町内会、子ども会、地域にもたくさんの協力者いるんです。だけどその協力者に「授業」はできないのです。

学校の先生は「授業」で子どもたちとつながることができていいな—と思います。

一時間一時間に子どもたちと目標が共有できるだなんて。。。実はすごいことなんです!!学校の先生たちには、そのすばらしさや大切さを心にとめておいてほしいなと思います。

ちなみに、最近、小学生の長女の同じ部活の保護者にラインでこんなことを言われました。「娘さん、部活のコーチに挨拶ができてないですよ。(母親は)学校で勉強を教える前にもっと大切なことを教えなきゃならないのではないですか?」と。もちろん、長女には挨拶をするように言いましたし、コーチには長女の非礼を謝罪しましたが、(母親が)学校の先生なのになんてことは本当に余計なお世話だし、挨拶できていない現場に遭遇したのならその場で長女に直接言ってくれと思いました。また、学校で教員が勉強を教えて、何が悪い?私は教員で教員はそれが仕事だしそもそもなぜわが子の失態に母親の職業を引っ張り出してこれないといけないんだと心底腹が立ちました。(まあ今は児童相談所の児童福祉司なんですが)

何が言いたいかと言いますと、「学校も同じように言われている」ということなんです。地域であいさつしない子や公園や地域で失態する子の苦情は、学校に言われることがたくさんあります。「学校で地域であいさつするように指導しろ。勉強を教えるより大切なことがあるだろ?」「公園でのマナーをきちんとさせろ。勉強を教えるより大切なことがあるだろ?」等々。学校はとてもまじめです。当然一つ一つ指導をして取り組みをします。地域の声を受け取り指導したり取り組みをしたりすることはもちろん大切ですし必要なことです。しかし、学校に置いて「勉強(授業)を教えること」が一番大切なことだということを学校も地域も協力者も忘れてはならないことなのではないかと思うのです。

0. 「復興」を問う

「東北と復興」というタイトルをつけながら、実際にはあまり「復興」に焦点を当てることができなかったこれまでの2年間。福島第一原発事故に関わって多くの方達からお話を伺ってきたがどうしても「復興」そのものまで考える時間がなかった。

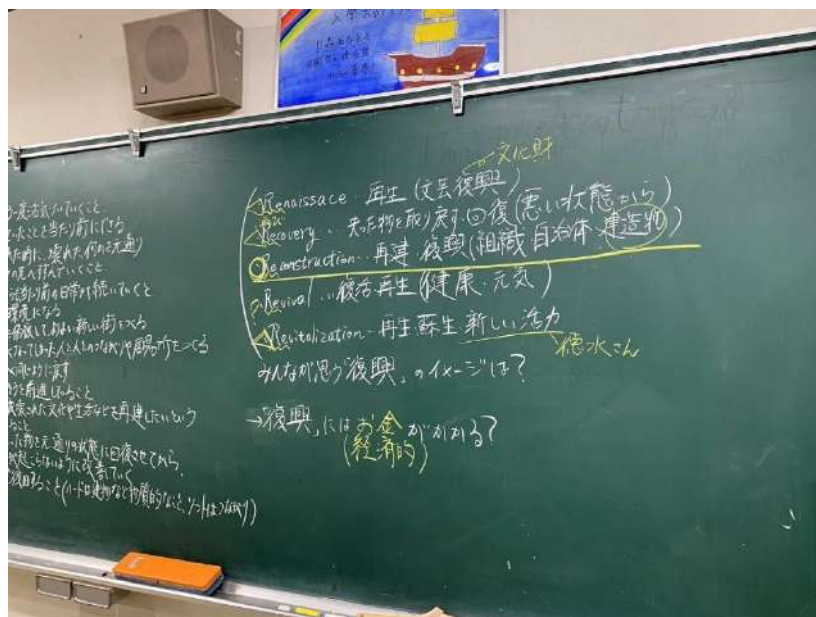
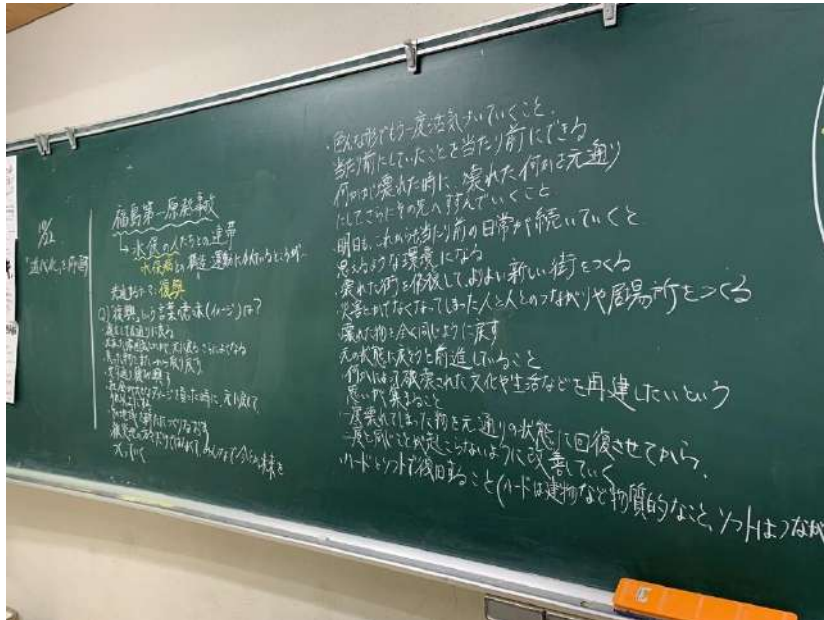
3年目となる今年は初めて前期の宮城県石巻市スタディツアーに続いて、福島県浜通りスタディツアーを実施した。そしてそのスタディツアーの事前学習で「水俣病」を扱い、「復興」ということをキーワードに学んだり、考えたりしてきた。以下、事前学習の「水俣病」と「福島県浜通りスタディツアー」、そして事後学習までの時間と内容一覧である。

日付	タイトル	内容
10月22日（火）	「復興」を考える	「復興」という言葉について英語から考える。
11月5日（火）	水俣病①	水俣はなぜ工場を誘致したか。 水俣と戦後「復興」とは。
11月12日（火）	水俣病② オンライン講演	水俣病についてのオンライン講演。
11月19日（火）	水俣病③	水俣病について加害と被害の構造を考える。
11月26日（火）	福島第一原発事故事前学習①	理科の教員から放射線・放射能についての授業。
12月3日（火）	福島第一原発事故事前学習②	日本の原子力発電の歴史。マスターナラティブとアイデンティティを問う。
12月7日（土） ～12月9日（月）	福島県浜通り スタディツアー	後に詳述。
12月10日（火）	事後学習①	スタディツアー感想交流。
12月17日（火）	事後学習②	スタディツアー感想交流（続き）。責任と主体性。

1. 事前学習の中で「復興」を問う

「復興」という言葉のイメージや意味について生徒達に問い、考えた。その後「復興」という意味で使われる英語の意味(renaissance、recovery、reconstruction、revival、revitalization)を考え石巻市スタディツアーで見てきた「復興」の言葉はどれが当てはまるのかを考えた。

以下はその時生徒達に出してもらった意見を書いていった授業での板書である。

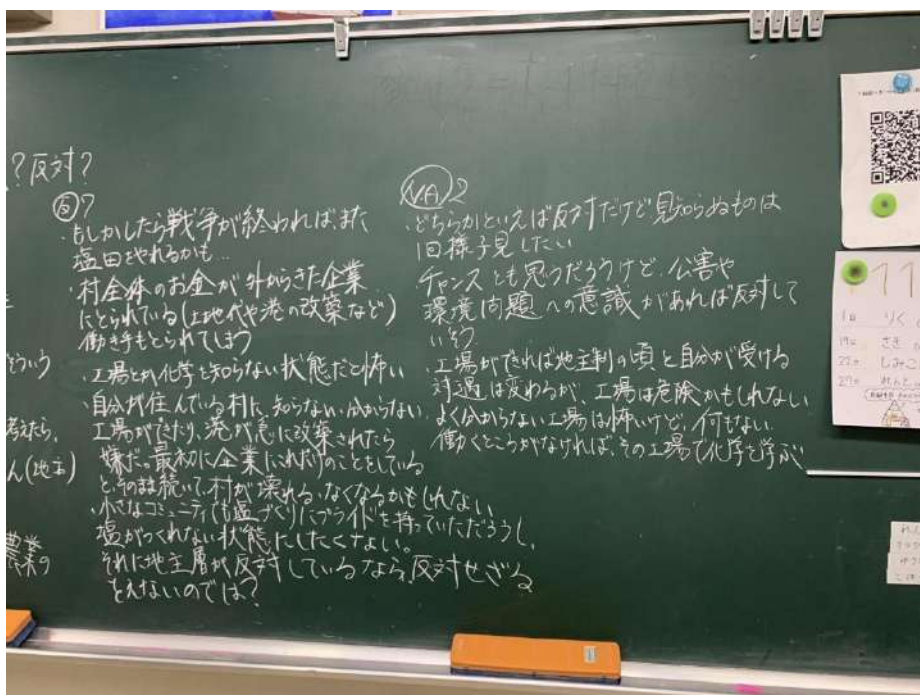


その後、1956年の経済白書を読み合わせした。「新しきものの摂取は常に抵抗を伴う。経済社会の遅れた部面は、一時的には近代化によってかえってその矛盾が激成されるごとくに感ずるかもしれない。しかし長期的には中小企業、労働、農業などの各部面が抱く諸矛盾は経済の発展によってのみ吸収される。近代化が国民経済の進むべき唯一の方向とするならば、その遂行に伴う負担は国民相互にその力に応じて分け合わねばならない。」とする部分を受けて、「負担を国民相互にその力に応じて分け合う」ことができているかどうかを子ども達に投げかけて終わった。

11月5日 水俣病に関する学習①

一方で後から振り返ってみると、水俣での工場誘致が江戸時代からの地主による階級構造を崩すものであるという期待をされていたものであること、地主側がそれを望まなかったことから反対に回ったこと、港の漁師達が階級構造の中で下に置かれていたことなど当時の水俣の住民達の状況と、戦後の福島第一原発誘致とその反対運動の間の違いをもう少し丁寧に考える必要があったと考えている。





そのほか水俣病の公式確認としての発症例やチッソが戦後どういった商品を作っていたのかなどの歴史を中心に説明して終了した。

11月12日水俣病相思社の坂本さんによるオンライン講演・オンライン水俣病歴史考証館ツアー(zoom)

相思社の坂本さんからオンラインで水俣病歴史考証館をツアーし、水俣病の発症やその後の患者さん達の思いとそれに対するチッソや行政の対応を中心に講演いただいた。実際に水俣病歴史考証館のモノ資料を見ながら話を伺ったので、子ども達にとってもよりイメージはしやすかったように思う。患者さん達やその周囲の人達の運動や思いなども聞いた上で、今年起こった環境省のマイクオフ事件についても説明された。

以下が生徒達の感想(一部抜粋)である。

・私は「水俣病」という名前は知っていたけど、授業で学ぶまで実際に何が起ってどんな被害が出ていたのかを詳しく知りませんでした。今回お話を聞いて水俣病について知りながらたくさんの思いや考えが頭に浮かびました。水俣病によって大切な日々が奪われた患者さん達に私達、そして社会全体でできることは何かということや、水俣病という名称についてや、福島第一原発事故(汚染水など)や原爆(被爆二世問題)などとの問題の共通点(原爆の影響の明確な範囲がないこと)についてなど本当に様々です。このオンラインスタディツアーで新たな問題意識、視点ができました。これから福島ツアーでも学びを深め、この問題について多角的に考え続けていきたいです。

・水俣病について色々なことを知ることが出来ました。近年話題になっていた処理水問題で、ニュースなどでは安全性を再三伝えていて、それを信じていましたが、こうした水俣病での実例を知ると、本当なのか疑ってみる必要もあるかもしれない、うのみにする危険性を実感しました。今の水俣市民にとって、チッソとはどういった扱いなのでしょうかなのか?

・今回のお話を聞いて、豊かさって何だろう、という疑問を持ちました。人の生活を豊かにするために、何人も人が亡くなるって、その後の生活を、果たして豊かになったと言えるのだろうか?と。それから、壊された幸せな日常についても考えました。私は患者さんのことを、今回の話等でしか知らないため、患者さんの人生が、まるで水俣病のことに7割ぐらしめられたようにも思えてしまって、このような問題は今後二度と起こらないように、私達の代も考えていきたいな、と思いました。

・汚染水や風評の話など、今も過去の福島にもつながる話でこうやってつながっていくんだと改めてしれた。水俣病の病状とか診断基準など知らないから知りたいなと思う、後で調べたい。1 番最初に猫に症状が出たから猫 800 匹も使う必要あったりかなあ…。もっとはやくに解決できなかったのだろうか…。いずれまた水銀があふれてしまったらまた問題になっていくから終わらない問題だなと思う。福島原発問題もそうだけど、化学物質がどうにも消せないの問題すぎるよなあーと思う。今後の発展にかけて今は一時的にふさぐしかできないのか…。

・原爆の被爆者認定の訴訟でも、同じように、時間が終わった今でも、訴訟が続いているというのが、水俣病の訴訟と似ていると感じた。話を聴きながら、前回の授業での工場誘致の話し合いと重ねながら、前回の授業でも言ったように誘致の時点で、住民が、このようなことまで想定できなかったのが、水俣であり、原発導入とも重なるところがあるのかと思った。その中で、原発は現在の自分も恩恵を受けているものなので、これからどのように運用していくのか、考えていく必要があると思った。

・地方であり、財力（権力）の無い人達が被害者だったからこそ水俣病は、中々対応がなされなかったのかなと思う。やはり公害問題はかなり多くのものが地方軽視や貧困軽視が関わっているし、事が起こった後、前からそういった軽視の考えが無ければ、もう少し水俣病は大きな被害にならずおさえられたのかもしれない。福島の場合は、人が住んでいないからこそ被災地を（イノベーションコーストなどで）さらに事が悪い方へシフトしてしまっているというようにも思える。

・水俣病のことはずっと表には出さないようにさせられていたことを初めて知った。そんな中でもチッソの社長と直接話したりデモをして戦い続ける水俣の人達はすごいと思った。チッソが大きな会社だったために、水銀が原因だという真実は押しつぶされて水俣病がなかったことにされるのはなんか悔しい。また、水俣病にかかった人はまわりから見放され、風評被害がでて魚が売れなくなるから水俣病に関しては何も言えなくなってしまいう状況も辛いだろうなと思う。そもそも水俣の失業した人のためにチッソがきて、水俣病の真実はチッソが多額のお金を払って隠す、水俣病の患者は補償金がほしいだけといった偏見や差別がうまれるなど、いろんなところに「お金」が関係しているなと思った。水俣病を通して福島でおこっていることがなんとなく想像できた気がする。

・言葉にならないくらいひどいというか、公害というより事件だと思う。チッソが猫の実験をもみけしたという事は、罪の意識がでるはずなのに、自分の利益を優先して目を背け続ける。しかもそれが現在、行政にも当てはまるのが惨い。救いが見えない。今年、環境省赴いたけど何にもしなかったのも、結局はスタンスは何も変わってなくて、風化するのを待っているのではと思ってしまう。このままひがいがいなくなっていった水俣病が負の歴史としてかん結してしまうのだけはさけなくてはいけないと思った。責任がだれにあるのかはとてもむずかしい問題だと思うけどチッソと行政は罪の意識を風化させないでくれー。

・埋め立てをして海がきれいになっても、水銀は残っているし患者さんもまだ沢山いるのに、その場しのぎのことしかしてくれない行政に不信感を持った。今全国に工場は沢山あるし、全く他人事出は無いと思った。「患者さんとかかわれる最後の世代」というのが印象的で、震災と同じようにまずは知って、伝えていくことが大切だと思った。

翌週生徒達の感想をもとに坂元さんともう一度 zoom で打ち合わせをもった。生徒達の感想の中にあつた疑問や補足説明が必要なところを確認して、その上で授業を行うこととした。

11月19日（火）水俣病③

その前の週のオンラインでの講演を受けて、まず感想の中にあった質問への坂本さんの回答を紹介する形で説明し、その後、加害と被害の構造が入れ替わってしまうことについての説明を行った。

すなわち被害＝水俣病の患者さん達、加害＝チッソ（企業）の構造である。ただしチッソだけではなく国策として戦後復興のためにチッソ工場排水を見逃してきた行政の加害責任も説明した。現在はチッソを県が税金を貸し付ける形で被害者救済を行っている。しかし患者たちがチッソや行政を訴えていることを「加害」とみなし、あたかもチッソや行政が「被害」としようとする風潮があることを説明した。すなわちニセ患者の存在を前提にしたり、患者認定を訴える人達（劇症化していない人達も含む）や救済を訴える人達にいつまでやっているんだという周囲からの冷ややかな目線や言動（政治家の言葉などを実際に紹介した）から、あたかも加害者と被害者が入れ替わっているような構造になってしまっているということを説明した。この辺りは坂本さんから時間がないため補足して欲しい、伝えて欲しいという内容でもあった。

チッソによって生産された化学製品が、日本（国）の高度経済成長を支えていた。

病気の原因が「チッソ」である⇔チッソで働く人が困る・水俣の魚が売れなくなる。

その上で、少数の「犠牲」によって多数が「助かる」構造にあるとき、「多数」の側にいる私達の責任はどう考えるべきか？高度経済成長によって今の日本があるとするならば、その高度経済成長を支えたチッソ、そしてそのチッソによって引き起こされた水俣病の責任を現代の私達はどのように引き受けるべきなのか、と生徒達に投げかけた。

そして後半は環境省のマイクオフ事件も取り上げて、相思社の永野三智さんのFacebook(2019年)の記事を取り上げた。

今日。嵐の中の離島巡りをし、それぞれの患者さんの話を聞きました。環境省の人が東京から異動の挨拶に来て、同行のために。

50代の患者さんは、こどもの頃、自身の父が水俣病に倒れた50年近く前、近所の人が川で洗濯をしていた母に石を投げ、「お前が認定されたせいで魚が売れなくなった」といわれた恨みを語り、それから「環境省の職員が2年や3年で異動することで何度も同じ訴えをせねばならない」といいました。環境省の人は「チッソじゃなくて島の人を憎んでいるんですね」とか「へえ、大変ですね」とか「ひどいですね」とか「ダメですか」とか言いました。言葉が違うという感覚。それは東京の人と不知火海の人という方言の違いではなく。一方通行な、テレビを見て、お茶の間に感想をいうような。50代の患者は、「いえ、私たち島の人間はみんな、チッソを憎んでいます」といいました。

別の島で同行した80歳近い患者さんは、45年、地域の患者たちのことを訴えています。自分のことは語らず、人のために尽くす人です。最近足が悪くなり、杖の支えがないと歩けません。雨の中を歩いて移動しようとしたとき、環境省の職員が両脇を支えました。歩き始めた彼は、「あたどん（あなた方）には本音は言わんとはい」と職員に言いました。職員は軽く「えー、本音でいきましょうよー、本音で」と流していました。私はその含蓄ある言葉に、心打たれました。目の前の、別空間で放たれたこの言葉をどう理解していいのか？ 私と同じ年の頃からどんな思いで環境省と交渉をしてきて、その挙句、あなたがたに本音を語れないと言っている彼の切なさだったり、そう言うことで同時に彼は、自分の心や尊厳を守っておられるのではないだろうかとも感じて、胸が熱くなりました。

記事の文章を読み合わせした後、子ども達と下線部が引いてある部分「言葉が違うという感覚」や環境省の職員さんの態度や言葉と患者さんの間の「溝」はどこから発生しているのかについて子ども達に問いかけた。

ある生徒は、環境省の職員が水俣病を経験していないから、経験しているかどうかの差だと答えた。当事者性のなさから出てくる言葉だという意見もあった。国、行政の側の窓口側の人間だという自覚がないのではないかという意見もあった。

その上で福島第一原発は東京電力のものであり、そこで発電されていた電気が関東で消費されていたこと。私達がスタディツアーで訪れる福島県浜通りで出会う人達に対する関東に住む私達の加害責任をどう考えるべきか、そしてその上でどのように声に耳を傾けるべきかを伝えた。場合によってはこの環境省の職員と同じようなことが起こりうるということを伝えた。

2. 福島第一原発事故に関わる事前学習

11月26日（火）

理科の物理専門の教員から放射線と放射能についての授業をしてもらった。放射線というものがそもそも何なのか、自然界にどれくらいあるのか、人間の身体に影響があるといわれている量（単位も含めて）がどれくらいなのかについて講義をもらい、生徒達から質疑応答の時間を設けた。その後残っている時間で原子力発電の歴史について、原子力爆弾の開発から核の平和利用にいたる歴史の説明をした。

12月3日（火）

原子力発電の歴史と日本、福島第一原発に関わる歴史について説明した。現在日本にある原子力発電所の位置や数なども資料を配布して説明した。後半には急遽ピンチヒッターで引率としてつくことになったもう1人の教員から自己紹介と自身の東日本大震災後に経験した原子力反対運動をしている人達についての見方、沖縄修学旅行の際の本土からやってきた人達に対する沖縄の人達からのまなざされ方など。自身のアイデンティティ、立ち位置とマスターナラティブ化されていく語りをどのように捉え、受け止めるべきか。関東から来た私達の言動がどのように加害者性を帯びてしまうのか、あるいは福島の人達からどのような事実を突きつけられるのかについて話をした。終わり際に「福島に行くことが不安になってきた」と言う生徒がいたが、こうした態度をもっている生徒はかえって安心だと感じた。

3. 福島県浜通りスタディツアー

今回の福島県浜通りスタディツアーは以下のような旅程で行った。

12月7日（土）

相馬高校放送局との交流

おれたちの伝承館見学

12月8日（日）

東日本大震災・原子力災害伝承館見学

法鏡寺伝言館・未来館見学

双葉屋旅館（宿泊施設）女将さん講演

12月9日（月）

大熊町立学び舎ゆめの森学園見学、交流

いわき市 古滝屋旅館にて大熊未来塾 木村さん講演、原子力災害考証館見学

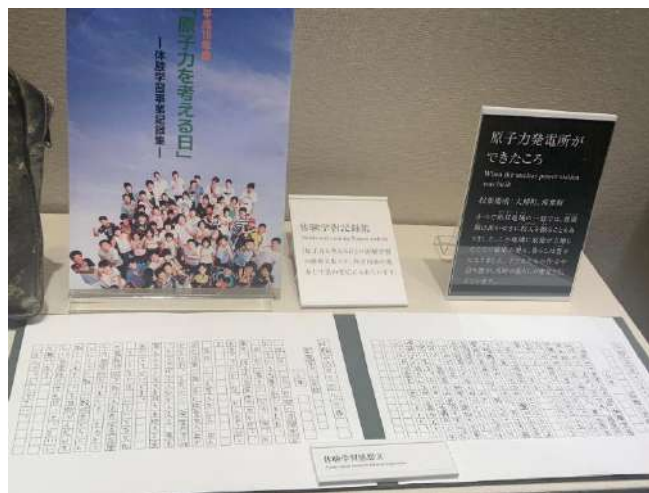
12月7日（土）

12月7日（土）の朝から集合し、貸し切りバスで埼玉県から福島県まで移動した。昼頃に相馬高校に到着し、その場で相馬高校放送局の作った映像作品を、放送局の生徒・顧問と一緒に見た。その後昼食でお弁当を食べて、おれたちの伝承館に移動して見学をした。展示品を時間をかけて見学したのちに、おれたちの伝承館の隣にある放射能測定センターの白髭さんからもお話を伺った。白髭さんはもともと福島第一原子力発電所に清掃（除染）の仕事で入っており、東日本大震災当時も第一原発内にいらっしゃった。第一原発事故後にはさらに本を読んで勉強し、測定センターで現在は日々放射能を測定していらっしゃる。実際に測定センターに入れて貰って、順番に生徒達は話をしてもらった。



12月8日（日）

東日本大震災・原子力災害伝承館に開館直後に訪れて午前中は館内をそれぞれ自由に見学した。今回原子力災害伝承館の方に、運営団体である福島イノベーションコースト構想推進機構の主体がどこなのかを尋ねた。最初は福島県というお話だったが、話を伺っていくうちに国だという。県庁の人が出向してきて県が後押しをしてくれていると言いつつ、国の文科省、復興庁、経済産業省、国交省もかかわっているという。聞いていて不思議な感覚になったが、結局福島イノベーションコースト構想推進機構を運営しているのは国と県の両方ということなのだろうか。それでも最後は推進機構を動かしているのは福島県だとおっしゃっていた。午後は浪江町の宝鏡寺の中にある伝言館・未来館を訪れて、こちらでも自由に見学してもらった後に亡くなった宝鏡寺の住職でこの伝言館・未来館を作った早川住職の奥様からお話をうかがった。この講演の中で生徒が「どうやったら復興と言えますか？」という質問をした際に「復興はできない。町ができるとしてもそれは元の町ではなくて新しい人たちや新しい建物による新しい町だ」という返事に高校生たちはかなり衝撃を受けていた。その後双葉屋旅館に戻ってから、女将である小林さんからお話を伺った。



12月9日（月）

2泊3日、お世話になった双葉屋旅館を出て大熊町の大熊町立学び舎ゆめの森学園に向かう。午前中は学び舎ゆめの森学園での講演、案内と交流の時間である。講演は校長・学園長の南郷さんがしてくださった。ご自身の高校時代の課題意識や問題意識と合わせて、東日本大震災後に福島県に来た経緯についても説明された。校内は理想とする教育のためにこういった建築上の工夫や設備の工夫があるかについて実際に見て回りながら案内され、後半はゆめの森学園の生徒達の学びの時間に実際に高校生達が入れて貰うという形がかかわらせていただいた。ほんと大熊で昼食をとったのち、最後の訪問先である、いわき市の古滝屋旅館、原子力災害考証館へ向かう。古滝屋旅館では、大熊未来塾の木村さん、そして原子力災害考証館の里見さんからお話を伺った後、原子力考証館を見学させていただいた。原子力「災害」ではなく原子力「事件」だという里見さんの言葉からは、これが東日本大震災という天災にともなうものではなく、原子力発電所を利用して、利益や豊かな生活を享受してきた人間が原因によるものだという思いを強く感じた。東京電力や原子力を推進してきた国だけではなく、東京電力の電気を使って豊かな生活を享受している私達への問いかけもそこには含まれていた。木村さんはご家族をなくされ、とりわけ娘さんの夕風さんについてはあのとき原子力発電所事故がなければ探しに行く、助けに行くことができたのかもしれないという思いを強くされていて、だからこそ同じあやまちをくり返さないように講演活動をされていた。予定よりも1時間ほど多く滞在して、その後埼玉へ帰った。3日目の振り返りも含めて、その後帰ってきてからの授業でスタディツアー全体の振り返りを行った。

4. 浜通りスタディツアー終了後の感想

振り返りとして帰ってきてから、冬休みに浜通りスタディツアーの感想を書くことを課した。以下はその一部抜粋である。

A さん：ツアーから帰り、振り返りをされていてこんなことを思った。

「思ったこと」を「考えたこと」にしなければいけない。」

このツアーが「考える」という点でとても難しかったのは、ただただ新たに知ったことが多かったというだけではなく、その知った事柄同士には繋がりがあり、その繋がりは福島第1原発事故以外にも社会で起きた、起きている問題とも繋がるからだ。

これは考え始めると果てしない問題で、答えを導き出すことは容易ではなく、大変だ。しかしツアーで知ったことを一度整理し、ツアーで思ったことをそのままにしておくのではなく更に深めて「自分の考え」に落とし込まなければ、自分の中でこのツアー自体も生まれた問題意識も曖昧なものになってしまうと思った。なのでツアーの内容、そして思ったことを付箋に書き出し、整理してみた。

私がこのツアーを通して考えたことは「被害性と加害性/善と悪」についてと、「自然との共生と平等性」について、そして「私たちにできること」についてだ。

まずは「被害性と加害性/善と悪」について。相馬高校の放送部の2人の生徒さんが見せてくれた映像からは国が提示している情報の不確実性が感じられた。そして、ツアーの中で幾度となく耳にした「イノベーションコースト構想」という言葉。国営の伝承館では最後の展示で大きく紹介されていた。新たな建物を作り、街を作り変えていく。一見素敵なことのように感じられるが、実際は町としての経済的なことのためにその場所に住む人々の思い出のものが壊されていた。私は考証館で里見さんがおっしゃられていた「外見だけ見られてしまう」「町民は望んでいない」という言葉が印象に残っている。

また、同じく考証館でお話を伺った木村さんのお話から「防潮堤の下にはまだ遺骨があるかもしれない。復興の下で捜したいと言えない遺族がいるのではないか」という言葉があった。国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。しかし、私は一概に国が悪いと言えない。なぜなら私は国が取り組む政策によって利益を得ているからだ。そうすると、私は間接的に「加害/悪」ということになる。

問題はこの事柄に「当事者性」が関わってくることだ。当事者性がないと考えることもできてしまう。私自身、今回のツアーを通して、なんだかとても重たいものを背負った気がする。それは今まで学んできたことを通じて、私が当事者性と少しずつ向き合い始めているからだと思った。学び舎ゆめのもりで南郷さんがおっしゃっていた「高校生の時に思った課題意識をそのまま持っていたら…」という言葉と、メンバーでの振り返りの際にでた「社会の流れの早さについていけるのか」という問題。私達が学んでいく内にも原子力再稼働への道は進んでいってしまう。だから、私は今、自分が向き合い始めた当事者性や、問題意識をこのまま持ち続けていきたい。

B さん：例えば、福島では山菜やきのこを採ることが季節の楽しみの一つとなっている。それを近所の人におすそわけすることで、地域の人々が自然とつながりを深めている。これらの活動は単なる食料調達ではなく、人々の暮らしや絆を作っていく大切な要素だった。そして、伝統的な踊りや太鼓、東北六魂祭や桜まつりの映像が特に印象に残った。「地域の絆によって守られてきた」「地域の人々で踊りを受け継いできた」という言葉を見て自分の生活と重ねてみると、私はこれまでの6年間、民族舞踊や和太鼓を続けてきて学校の公演だけでなく、外部での公演にも参加する機会があった。最初は単純に踊ることが好きで、普段触れることのない昔の生活や日常の動きを踊りを通して感じるのが楽しかっただけだ。だが、今回のスタディーツアーを通じて、伝統芸能が持つ意味や役割を知ったことで、自分がその踊りを「受け継ぐ一人」とあるという責任を改めて実感するようになった。

東北の祭りや伝統芸能は震災や原発事故を経験した地域にとって単なる文化保存だけではなく「復興の象徴」としての役割を果たしている。震災後、地域の人々は失われそうになった伝統を守りつつも新しい形でそれを未来につなげようと努力してきた。その背景には「この地で生き続ける」という強い意志を感じた。

復興の難しさは、ただ建物やインフラを再建すれば解決するものではないと思った。震災によって生活基盤を失った人々が地域に戻るには、住まいや仕事が確保されるだけでなく、地域コミュニティの復活が必要に感じた。特に福島では、放射能汚染による健康不安や風評被害が問題になって人々が福島に戻ることや地域で生き続けることのハードルが高くなってしまった現実を知ると、復興には物理的な再建だけでなく、人々の心をつなぎ直す取り組みが大切だと思った。

伝統芸能の復活も、そのひとつだと思っている。震災によって中断を余儀なくされた踊りや祭りが再開されることは、人々に希望を与えるだけでなく地域のつながりを取り戻すきっかけにもなると思った。実際、震災後に東北六魂祭が始まったことには、そうした意図が込められていると感じる。けど、伝統芸能やお祭りの需要があまり外から見ると理解されないこともあるとおもった。文化や芸能は、過去のも物ではなくてこれから形を変えながら残していくべきだと感じた。

Dさん：水俣病と福島原発の共通点として挙げられるのが政府の対応の不適切さです。講演や地域の方の話を聞く中で政府はいい事ばかり外に伝えて現実を発信していないと聞くことが度々ありました。

最初私は半信半疑でしたがその話が本当のことであつたと実感したきっかけが福島のALPS処理水の問題です。これまで、私がメディアで見てきた情報は政府や一部の議員が処理水の安全性を強調し、復興や除染をアピールするようなポジティブな情報なことがほとんどで、正直私は「処理水の放出はちゃんと無害になった上で行われているのだし復興や除染への大きな一歩」だと考えていました。

しかし、実際に現地で住民の話を聞くと、地域住民の完全な理解や賛同もなしに行われていたこと、基準値を下回っているとはいえ放射性物質が完全に取り除かれている訳では無いということを知り、なぜ正しいことを発信しないのか、なぜ隠すのか、政府や企業が安全性を強調しても、地域住民の声を無視して進められているのでは行政の自己満足でしかないし、それを本当に「復興」と言っているのかという疑問と複雑な感情を抱きました。

水俣病も福島原発事故も、どちらも企業と経済成長が根底にある事象です。どちらも発展によって犠牲となり、発展や風評被害のために誤魔化され、迫害された地域住民や被害者がいると知りました。そしてその「発展」の責任は一般国民にもあると知りました。水俣病の原因となった工場と福島原発はどちらも企業管理の施設であり、それこそ政府が関与するほど日本の経済成長や発展、日常生活に深く関わるものでした。またどちらも「企業も地域の経済を支え、地域はその企業に依存して成り立っている」という構図が、両者に共通していました。

そうした「企業のおかげで地域がある」という状況下で、工場や原子力へのリスクを訴えても無視されるどころか悪者扱いされるため我慢せざるを得ないような事態になり、事故や公害が発生した後にそうした人達が自責の念に駆られ強い後悔をしていたという現実を知り、なんとも言い難い感情を抱きました。

しかし、その企業がないとどちらにせよ地域が廃れてしまう。リスクがあつたとしても事業に依存せざるを得ない現実があるというのも事実。地域存続のためにリスクを受け入れざるを得ない現状があり、その結果が水俣病と原発事故なのだと知りました。おそらくそうした状況になっている地域は水俣と福島以外にも数多くあると思います。

今後同じような公害や事故を起こさないために何を変えていくべきなのか、今解を出すことはできませんが、今後自分の中で、社会として考えていくべきなのではないかと思っています。

Eさん：まず今回の東北と復興のスタディーツアーで、私が1番印象に残った点は、やはりフレコンバックについての詩だと思います。環境学の選択授業で存在は知っていて、今までは、土等の放射能廃棄物が沢山詰め込まれていて、福島第一原発付近に、これまた沢山、置かれているだけのものかと思っていて。その中の幾ばくかに詰め込まれているものが、ショベルカーの黒い爪で引き裂かれて、切り取られた、誰かの故郷で、思い出であるという考え方は、今まで一度も描けていなくて。言い方はあれかもしれませんが、今回のスタディーツアーで知れて、良かったなと思いました。知れてなかったら、もしかしたら一生知らずにいるところだったと思います。この時の感情と同じような感情を抱いたのが、国の伝承館…？の外にあった写真達のうちの一枚で、小さな姉妹の2人が、防護服を着て、子供部屋のようなところで、お人形等を白いビニール袋に入れている写真だったのですが、もうこの子達が、このお部屋で防護服をとって、震災前のように過ごすことは、もうできないのだろうな。もっと行くと、もうこの部屋に入るのも、この写真の時は最後で、この後お家は取り壊されてしまったかもしれないと思うと、原発事故がどれだけ、今までの日常と、故郷を壊すか、というのをありありと感じました。

また、相馬高校にお伺いした時に、生徒の方からのお話で、震災をぎりぎり知れている最後の代の私たちができることは何かと考え、活動しているということ。また、例えば原発問題が全て解決したとしても、伝承はずっと続けていかなくてはならないということがあって、私も生徒の方と同じ年代なので、私も考えている、と思え、また、私はもし原発問題が全て解決したならば、もうそこがゴール、叶えることがとても難しい夢、というように感じていたけれど、生徒さんは、ずっとずっと、同じ過ちを繰り返さないために、伝承し続けなくてはいけない、という言葉に、そうか、なるほどな、と、スッと腑に落ちた感覚を抱きました。また、今の生徒さんが作られている作品は、原発事故の「現在」を伝えているのが、今を生きる私たちにとってすごく親近感を持って見られていいなと思いましたし、現在を記録に残していくことによって、何年か経ったあと、全ての動画をまとめると、原発事故問題が時系列に記録されて、後世に残す貴重なデータになるんじゃないかな、と思いました。…（中略）…

それから、私は授業やスタディーツアー内で何回か使われていた、被害者と加害者という言葉に疑問を抱きました。授業内でも、チッソと水俣病の患者さんは、どちらとも言えるという話が上がっていましたが、説明をするのは、この言葉が1番伝わりやすいのかな、と思います。ですが私は、本質的に考えるならば、これは今の人間社会の構造上、生まれてしまった歪みであって、これまで生きてきた誰しをも、曲解すれば加害者と取ることができるわけで…。被害者、加害者、という言葉を使うだけで、なぜか思考停止してしまう気がしました。全部全部、グレーゾーンなのに、それをはっきりさせてしまうような言葉だからかも知れません。ただの私の発見ですが、伝えてみたいので乗っけてみておきました。

復興という単語について、自分なりに考えて、文を作ってみたりもしたのですが、まとまらなかったのもうちと私の人生の中で寝かせます。

Fさん：今回のスタディーツアー、事前学習は一貫して善悪や責任、そういった絶対的ではない概念について考えさせられた。石巻と決定的に違うのは、石巻は被害が可視化されていて具体的でありさらに被害自体は自然由来のものであり責任はどこにも帰属できないというのが共通の認識としてあったと思う。対して福島は被害が複合的であり風評被害や放射能など可視化されない被害が甚大であった。自然災害と原子力災害の違いはこの可視化されない被害から芽生える心理社会的不安から生まれるのだろう。可視化されない被害というものがどれほど人を不安にさせるか、心を乱すのかを痛感した。さらにこういった可視化されない被害というのは誰にとっても加害者になりうるということを理解させられた。根本的な原因の責任追及はもちろんすべきだろうが、そういった根本的なものに全ての責任を押し付けて可視化されない被害に加担した加害者の責任が放置されているのが現状ではないだろうかと感じるようになった。その加害側に立っている者は自分も例外ではないと自覚したからだ。この反省に至るまで時間を要してしまったが、まず私が原発に興

味を持ったきっかけは物理の本を読んで核分裂反応に魅せられたからである。そして高一の時に行った広島
のスタディーツアーで人智を遥かに超えた現象を人間は扱えるのかという問題に対峙した。テクノロジーと
人間の関係性。技術を開発することに限界はあるのか。そこに責任は発生するのか。そんな問いを抱えて福
島に望んだ。そしてどこに責任があるのかという問いに真摯に向き合っていて考えていたと思うが、結果として
分からないという結論に至ってしまった。それはどこに責任が帰属するのかが分からないという事ではなく
(原因がどこにあったかは一目瞭然であるので) 私が責任を問う事によって生じる自分自身の責任とどう向
き合っていくべきか分からなくなったという事だ。一人の高校生でしかないなんの専門性も知識もない私が
少し物事が分かったような気になって簡単に善悪を定め鉄槌を下そうとしていた事が恐ろしく思い始めたか
らだ。私は以前から無知の知という言葉大切にしている何かの判断をする時本当に自分の知識が正しいの
かどうか疑いかかる事を徹底したつもりである。しかし福島や水俣病は私が抱えられる情報を遥かに超えて
いて処理しきれず、感情的になることも多かった。情報過多はかえって情報不足を引き起こすと聞いたこと
があるがそれと近いものだったと思う。というかそもそも私が福島に赴くに当たってテクノロジーだとか
原子力について考えようとしていた姿勢自体を反省するべきであったと思っている。私があの日対面したの
は大きな不安感に苛まれながらも福島に残るという選択をした福島の人達だった。あの土地に残るという事
は様々な努力が必要だったと思う。そんな尊敬すべき人達を前に自分の思惑に囚われ続けているなんて事は
あまりにも思慮が足りない、私は無意識に福島ヘスティグマを背負わせていたのかもしれないと生の声を通
してやっと自覚できた。現地へ足を運ぶことの意義とはここにあるのだろう。理不尽に奪われたにも関わら
ず活気を取り戻そうとする逞しい姿勢を、私が、もっと大きく言えば県外の人達が勝手に背負わせたスティ
グマやパターナリズムで掻き消してはならないと強く思った。私は優先して責任を問わなければならない対
象を見誤っていたのだと、自分自身に責任を問うことがまさに私が私として生きる事における責任なんだ
と理解した。自身の内省を踏まえた時、社会はあまりにも自身の責任に対して無責任ではないだろうか。他
人や権力に責任を押し付ける事は容易に行えるが自身が行なった言動がどのような影響を及ぼすかどうか考
慮せずに恣意的に発言してしまう人が多いと感じる。こういった振る舞いが福島や水俣の方々を風評被害と
して苦しめていると私は思うし、日常生活においても用心しなければならない視点だ。自由の履き違えとい
う言葉が学校内で流布していると思うが言論の自由についても同じ事が言えるだろう、例えばその発言が正義
感による発言だったとしてもその発言が周りにどんな影響を及ぼすか一度考える責任がある。責任を担う事
で言論の自由を手にする事ができるとも解釈できる。簡単に情報を発信できるようになった世の中で発言に
付随する責任というものを一人一人が意識する必要があるというのが個人的な大きな学びであった。

おれたちの伝承館に行った後、アートと伝承の役割と責任のようなものを凄く考えさせられた。私自身以
前から現代アートが大好きで色々な作品と出会ってきた。アートというのは作家の主体性の表れであるし、
現代アートと括られる作品は純粹に制作された年代に由来しているともいえるが現代における社会問題や社
会情勢を反映し、社会への問題提起や批判を感じる作品の総称ともいえる。アートを展示するという事は作
者と他者の関係性を強制的に結びつける程の影響がある。アートはある種の語りであってそれを見せつけ
られた以上、私は単なる鑑賞者ではなく参加者に昇華する必要がある。そこには作者自身に責任が伴って
いて、その責任の一部を参加者である私は担うという選択肢を渡されたかのような気にもなる。おれたちの伝
承館にあったのは、数字や科学的根拠ではなく感情であり、作者の魂である。現代社会において感情という
のは軽視されがちだと感じるがアートというのはそういう感情や信念をビジュアル化し保存する事ができる
から私は好きなのだ。原子力災害伝承館とおれたちの伝承館の本質的な違いは自己満足的な側面を含んで
いるかどうかだと思う。そもそもアートというものの出発点は自己である。伝承という言葉には記録や知恵だ
けではなく感情などの目には見れないものも含まれているし、当事者と非当事者の転換が為されないと伝承
は成立しない。私が伝承活動を見届けるという事はただ自分の身を守る方法の学びを得る事だけでなく伝承
の後継者になりうる事の重みを感じる。この重みはある種の責任なのかもしれない。(中略)

たまたま youtube で水俣市長が原発事故の直後に緊急メッセージを公開した動画を見つけた。その中で市長は「しかし、事実に基づかない偏見差別、非難中傷は、人としてもっと怖く悲しい行為です」と発言している。このメッセージはネットの海にいる無数の私たちに向けたメッセージである事は明白だし、市長が風評でどれ程苦しんできたかが想像できる。水俣の教訓というのは様々な観点で語られるものだが、私たちは部外者でも観測者でもなくその教訓を生かさなければならぬ対象の一部であると強く思う。

Gさん：そんな早川住職を近くで見守ってきた早川さんに「早川住職と早川さんは今の復興をどう思っていますか」と質問をした。そうしたら早川さんは「震災が起きた以上、町は復興できない」と言った。自分は復興があって当たり前だと思っていたが、そもそも復興はできないと思っている人がいるのが驚きだった。そして早川さんは「故郷に戻らなかった復興に対して悲しく思った」と言った。じゃあ復興はどうあるべきなのか。

自分は全体を通して、「復興の主体とは」について考えてきた。早川さんは故郷に戻らない限り復興はないと言っていた。だったら復興をするなら故郷に住んでいた被災当事者（避難者を含む）が主体であるべき。じゃあ果たして今の復興の主体は被災当事者に在るのか。自分は、地域によって差はあるが無いに近いと思う。行政が主体になって「復興」という大規模事業、国策の一種になっている気がする。東日本大震災・原子力災害伝承館では最後のコーナーで創造的復興という言葉を用いながら工場の誘致や、ドローンやあらゆる機会を使った大規模農園の説明があった。未来を象徴とした最先端の技術を強調としていて、震災で開いた土地が、いわゆる「実験場」になっていると思った。福島イノベーション・コースト構想といった行政が主体になって進めている大きな復興政策もその一つだ。その様子は、まるで「原子力明るい未来のエネルギー」をキャッチコピーにした福島原発かのような。また同じようなことが惨事便乗型資本主義的に福島に入り込んでいると感じた。はたして福島イノベーション・コースト構想で、全国各地に避難した避難者たちは帰りたいと思うのか。避難者にとって故郷はどうだったのか、どう故郷が震災によって壊れたのか。それを行政は考えていくべきだし、被災者当事者・避難者当事者の多様な声をどう拾っていくかが復興のあるべき進め方だと思う。「故郷を大事にしてほしい」、早川さんが言った言葉には、今の復興に対する想いがあったと思う。

福島のような復興の形に対して、そのようなことを感じた。防潮堤や大規模公園、交流の難しい施設など。とても開発的で既定路線のような型にはまっていると思う。防潮堤やソーラーパネルによって地元故郷の田園風景のような景観が失われている。そしてこのような復興の賛否によって住民の中で分断、対立も起こっている。じゃあ交流の難しい施設（代金が高くて貸し切り状態のような体育館とか）は震災、復興で起こった分断・対立も解消するのか。実際にガンガン除染したりと、行政主導の「復興」をして被災者が不在のまま、町（ふるさと）の姿が大きく変わってしまっている。これじゃ避難者が返ってこないのも無理がない。結局、被災当事者、避難者の声が理解されず、拾ってもらえず、多様な復興になっていない。それは加害当事者のごまかし（創造的復興、理解した気になっている）と被災当事者のあきらめ（帰りたい故郷がない、分断、対立）にある。国の伝承館に多用されていた「創造的復興」という言葉自体が悪いとは思わない。また町を目指していく中で、壊れた建築物をそのまま建てる「原型復旧」ではなく、新しいアイデアや技術を取り入れて立て直す「創造的復興」にはとても意味があると思う。しかし自分が目にした福島や東北の復興のどこが創造的かよく分からない。新自由主義的社会にふさわしい形で以前の状態以上の復興していくのが創造的復興なのだろうが、以前の状態にさえ戻れていない人たちが実際にいる。仮設住宅での孤独死や、避難所での震災関連死、ソーラーパネルがたくさんあるふるさとの風景。自分はこれを見て復興しているとは思えなかった。

Hさん：浜通地区で現在実施されている3.11関連の動きを「復興」と仮定し考える。行政曰く、福島イノベーションコースト構想などが復興である。里見さんのお話を踏まえると過去の教訓を残す伝承活動も復興である。現地で見えてきた「復興」は、公、行政は未来のみを、民間は過去を見ているように感じた。前者は震災後、ゼロベースからの復興である一方、後者は今までに地域全体で積み立ててきたものの上にある復興だ。復興と言わない人もいるが、民間の人々考える復興は過去を踏まえた未来をみているように感じた。

まず初めに、公立の原子力災害伝承館は、事実ベースの展示であり、全体を通して「伝えたいこと」は防災と国の考える復興のように見えた。事故前、震災、復興の3つ展示の間に壁があるような印象もあった。はじめの螺旋状の時系列展示で最後が「原子力災害伝承館の完成」だったことから考えられたのは、“そこ”が震災後と新しい浜通りの区切りということ、震災と原発事故で崩壊した町をリセットしてRe.ゼロから始める浜通り開発の意思表示に思えた。

次に、ゆめのもりについて、今求められていそうな理想的な教育方法を一からできているという点で「いい学校」と考えることができる。ただ浜通り地区にあるという点において考えることがあった。地域の伝統や意思を引き継ぐ、震災前元々あった学校を復活させる、いや復興させるという選択肢もあった中ゆめのもりを開校した。ゼロベースからの浜通りを実験台にしているというか、過去に積み重ねられてきたものを重視しないということが広い意味では伝承していくという事の大切さを見ていないように思えてしまった。

続いて民間の施設について例をもとに考える。相馬高校放送部では、先代からの“伝統”を意識した活動であり、前述したように過去に積み立てられてきたものを今、未来に生かしている伝承活動のように思えた。具体的にいうと、劇『今伝えたいこと(仮)』で語られた当時被災した人の心情というものは、新しく作った場所では生まれないものであろう。勝手な解釈ではあるが、同じ学校だったからこそ同じ期間に学校にいなかった部員同士でも引き継がれているのではないかと、引き継がれていきやすいのではないかと感じた。また、宝鏡寺の伝言館では、同じ核被害という視点から原水爆にも触れ、そしてそれらを作った早川和尚の思いのようなものも伝えられていた。過去に核による大きな被害がありながらも再び繰り返してしまった人類に向けて、日本人にとって同じく身近であり、周知な事実である原爆を展示した工夫は、より人々に訴えかけやすいのかなと思えた。かなり踏み込んだ内容の展示について、感想ノートに書かれていた「知らなかったこと、知らされなかったことを考えることができた」という言葉が印象に残った。楢葉町大谷地区の多くの魂が眠り、早川元和尚の故郷でもあるからこそ、過去を言い伝えていく場所としてより深い意味をなしているのではないだろうか。相馬高校、伝言館以外の民間伝承施設についても、言葉に変換しきれない当時、今の思いをアートで訴える、おれ伝、震災で一度止まりながらも再建をした双葉屋、現地で300年以上の歴史を積んできた古滝屋の考証館いずれも過去を意識して今、未来に生かそうという意思を感じた。

民間の復興の形を総括すると、直接的な復興事業がある石巻に対し、浜通りは、ただ知らないだけかもしれないが、現地で直接的な復興事業は民間ではほぼ見られなかった。これは推測になるが、浜通りでは行政が避難指示区域を設定し、その更地を東京にある中央政府、行政が彼らなりの復興を行なっているため、民間の復興は直接行えないのではないだろうか、もっと言えば、原発が浜通りに建設された時からほぼ中央の植民地だったかもしれない。行政が今の復興から手を離したら良いというわけでもなく、浜通りの被災状況は比較的復興のゴールが見えやすい石巻と違い、復興のゴールが見えないからこそ、石巻のものわさんや鮎川捕鯨のような賑やかさを取り戻そうということが難しいのではないかと。その段階に至っていない、至らないのではないかと感じた。では、このままでは浜通りは植民地のままかということ、そうではなく民間の復興が公の対として存在する事で、現地が中央のものではなく現地住民の意思が残り脱植民化に繋がる。つまり現地に復興のための伝承と脱植民化のための施設として復興の拠点があるということに意味があるのだらうと感じた。

次に、今後責任を手にする社会構成員として原発に関わっていく中でまず伝承、証人の一員となる必要がある。その上で「原発は恐ろしい被害を出すから原発を無くそう」をゴールにするのではなく、「原発事故が

起きた→なぜ起こった→これこれこういう原因がある→この原因は他の問題も起こしうるぞ」というところまで想像をする伝えるというところまでが必要だと思った。

浜通り地区の学びを通して、事実資本で簡単に考えることができず、答えもない問題を考えようとした時、限りなくある話題についていざどの話題から考え始めれば良いのか、そもそもどこが論点で、何を大切に判断しながら考えていけば良いのかわからなくなることが多かった。自分の中で解決することは無いようにも思える課題であるが、ツアー後に教員が配った「世直しの倫理と論理」（小田実）にもあったように論理で動き出さず、自分の中に無意識にある倫理で動いていくというような考え方の方がいいように思う。

I さん：福島スタディーツアーへ行って私が一番心に残ったのは「言葉と人の難しさ」です。

一日目の相馬高校では一度見た映像だったのである程度わかってはいたけど改めて解説付きでお話を見聞きすることができ、その中でも「ALPS 処理水」の「メディアは生の声を報道するべき」という言葉に共感を持ちました。私自身も猫部で何度かテレビや新聞の取材を受けましたが、本当に伝えたいことが伝わっておらず、意図せずヘイトを受けたりしました。私たちの取材は期間が短かったのも要因かもしれないけどじっくり時間をかけて話を伝え、報道側の人とも話し合うことが大事なんじゃないかなと思った。こちら辺は風評被害の話とかとも繋がってくるなと思う。相馬高校の生徒さんに聞いたかったけど聞けなかったことがあって、これから震災を本当に知らない世代が来るけどその時放送局はどうしたい？って聞いたかったです。知らない人が伝えていくことはどうなんだろうかと考えてもっと対談みたいな形式でお話ができたらよかった。（というかそんな形式だと思ってたからそこは少しだけ残念だったかも。）

おれたちの伝承館は今回のスタディーツアーで一番悩んだ「花は咲く」の詩がずっと心に残っています。知らなかったことで誰かを傷つける可能性があるんだって、今回この詩ですごく実感して知らないことへの恐怖がずっと今も残ってます。宮城の学習では比較的柔らかに迎え入れられていたから…この詩のことを考えると苦しくなる。合唱団でなにも知らない頃に歌ってたから。あの時私が誰かを傷つけた可能性はほぼないに等しいけど、それでもあの時知れなかったことが私にとってはすごく苦しく、励ますものだと思ってた歌が誰かを傷つけるものである可能性が苦しい！もっと早くから知りたかったなあ、東日本大震災のこと。でもこのことを知れたからこれからは「知れてよかった、知らないままにならなくてよかった」に徐々に気持ちを切り替えられればいいなと思う。この詩で福島のことを知るってことの重みを感じて私たちが今まで学んできたことのとらえ方がまた180度変わって向き合うことの苦しみを久しぶりに感じました。

二日目では東日本大震災・原子力災害伝承館に行きました。入った最初の感想はとにかくきれいな施設だなーって感じでした。通路を回って歴史を振り返る展示から入るのが結構導入できてよかったと思う。とにかく震災を知らない人でも分かりはするよなって感じ。ここで一番印象的だったのは教員が話した「震災当時」と「震災後」の写真はあるけど「震災前」の写真はないよねって話、地域との繋がりを感じなくて、なんというか「国や県」の施設で隔絶されてる感じがしました。国の施設は震災後の、「国の言う復興」ばかりを見てる感じ。おれたちの伝承館は地域や人々の営みが前面に出されてたからより国の伝承館と民営の伝承館の差を感じた。宝鏡寺、伝言館は国の施設を見た後だったから余計に民営の圧というか熱意を感じた。熱意って表現は違うかもしれないけど、伝えたいという思いのようなものが強かった。簡単に言ってしまうと思想の圧がけっこうあったかな…？伝言館は「他人事ではないんだ、今なんだ」という言葉が特に心に残ったと思う。それこそ花は咲くの詩でもそうだけど「他人事」にしてはいけないと身に染みて感じたからこの言葉は大事にしたいなと思いました。双葉屋旅館でも聞いたけど放置された家でとれたネズミが28匹いたとかの動物被害の話は人間の手の届かなさがダイレクトに伝わってきて衝撃だった。窓の外で見たあの家々に今もなお被害が続いてる家があるのだろうと思うとどうにもできない無力さを感じる。生物濃縮の話とかも聞くと余計に手出しが難しい…。

三日目のゆめの森学園では自由の森学園の背を伸ばしたみたいな印象だった。卒業生がかかわってるから自由の森のいいところを伸ばした感じがした。もっと生徒たちと触れ合えればよかったけど…。でも考えてみると新しく土地を作って完全に新しいものを作るって活動だけを切り取ってしてみるとイノベーション構想とゆめの森ではなんの違いがあるんだろうと思った。未来の形がはっきりしてるか否かの違いなのか、違いを見比べることすら間違いなのだろうか。復興の形はそれぞれとは言ったものの難しい。考証館と古滝屋では夕風さん（大熊未来塾木村さんのお話）がなくなった理由が津波で亡くなったのか置いてけぼりにされたからなのか分からなかったって話がむごいなと思った。たしかに親などが亡くなってしまっ置き去りにされてどうしようもなくなって死んでしまった人たちはいるんだろうなって新たに気付かされた。

そして「税金で施設が作られていくのはどう思うか」という問いで「申し訳ない」とこたえられていたのが忘れられない。申し訳ないという言葉が被害者の方に言わせてしまうような現状はおかしいんじゃないかと思う。そういったジレンマを抱えたまま死ぬまで生きていくのは苦しいだろうと赤の他人でも思うから…。チッソの件もそうだけど被害者の方が苦しまなければいけない構造ってなんなんだろう、社会の苦しさをを感じる。もうひとつ印象に残ってるのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういったものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよなと改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。

三年生という一番最後の年で一番難しい話で、自分が何を言えればいいのかぜんぶ分からなくなって時間がたっても全然まとめることができない。時間が足りない。しかし知って、触れたからには伝えるために学び続けなければいけないと思った。卒業しても今回のスタディツアーで聞いた言葉は大事にしていきたい。ぐちゃぐちゃだけど今言葉として書けるものはこれくらいです。言葉って伝えるって難しい。これを私は今後どうやって言葉にしていけるのか考えなければいけませんね…。

Jさん：今回のスタディツアーは、私にとって、2年間この講座で考えてきた「復興とは何か」と言う事を根本から覆された様なツアーだった。

私は誰が悪いのか、と言うのが見えにくいものだと思っていたので、早川さんのように自分に責任があると思っている方がいることに驚いた。だが、3日目にゆめの森の南郷さんが「誰かが誰かに任せていて、全ての国民に原発事故の責任がある」と仰っているのを聞き、腑に落ちたような気がした。直接の関わりはなくとも、むしろ関わらなかった事によって、自分にも少なからず責任はあるんだ、と考えることは大切なことなのでは無いだろうか。多くの人が責任の所在を人任せにしている今の状況は、南郷さんの仰っていた問題点を誰かに任せていた時と同じ状況なのでは無いかと思った。同時に、原子力発電所を安全に稼働できる方法を考えて欲しい、と言う訴えが聞き入れられず、事故が起こってしまった。と言う事と、今公共の施設などが市民の意見を取り入れず議論されずに建設されている。と言う事も同じだと思った。どうして同じ事を繰り返してしまうのか、そこに暮らす人はその危うさに気付いているのに、行政は何故それらの意見を取り入れた復興の形を考えることが出来ないのかとても不思議に思った。

石巻のツアーの時よりも、民間の施設が多かったからなのかお話を聞いた方々の考えや気持ちに触れる事が多かったように思う。今まで私は、被災者の方々の気持ちや、復興に携わる方々の復興に対する考えなどを特に知りたい、理解したいと思ってこの講座で学んできた。だが、いざ今回のツアーで触れてみて、もしかしたら私のこの「知りたい」と言う気持ちさえも煩わしいと思う方がいるのでは無いかと思った。今まで語りた、伝えたいと言って下さる方の話を聞いていたけれど、それさえも嫌なんじゃないか、とか、20人を超える大人数でツアーをしているけれど、大人数で生活圏内に踏み入れられて「ここは観光地じゃないんだよ」とかって考える方もいるんじゃないか、自分が学べた気になっているだけで、自己満足になっているんじゃないか、とか色々考えてしまって、何か行動を起こすことが怖くなってしまった。埼玉に帰ってきて

からもずっと考えていて、ちょっと泣いた。他人の気持ちは理解しきれないな、とまた最初に感じた事をまた強く感じ、最初に戻ったような気持ちになってしまった。今まで何度も「復興ってこんな事をしたらいいんじゃないか？」といったことを考えていたけれど、結局は外野の意見でしかなくて、その考えを持つことだっただけで見方を変えれば間違いだと言えるのかもしれないと思った。ずっと考えていても全然まとまらなくてよく分からなくて、理解しきれないなって自分と切り離して考えてしまいそうになるけど、それを続けてしまおうと振り返りなどで何度か出てきた「無自覚の部分で傷つけてしまう」という所に繋がると思う。わからずとも考え続け、震災を知らない世代がこれからどんどん増えていく中で風化させず伝え続けて行く為になにかしなければいけないと改めて感じた。今回お話を聞いた方の年齢層が高く、私の周囲でも東北と復興を取っている人くらいしか震災に関心のある人もあまりおらず、私が少し話した所で親もその時だけで興味を持ってはくれない。このまま何もしなければ本当に風化して行ってしまうのではないかと、とずっと不安に感じている。せっかく色々な方が伝えて下さって、私たちは運良くそれを受け取る事ができたのだから、受け取って終わりではなく何かしなければいけないのではないかと。今回私が感じたように踏み込む事はとても怖い事だけど、踏み込まなければ得られる物もそれだけ少なくなってしまう。「最初に戻ったような気持ち」と書いたが、少し時間を置いて改めて考えてみる今はそれだけじゃないと思うことが出来る。分からない事と考える事は全く別物であって、こうして考える機会を貰ったからには、分かった気にならないようただの自己満足で終わらないよう、これからも知ろうとし続けて、考え続けていきたい。

Kさん：自分は3年間この講座を受講していて、3年間復興とは何なのかを考えていたが今回のツアーで今まで自分が考えていた復興というのが変わってしまったツアーになった。自分はこのモヤモヤしたまま卒業したくないです。今の東北と復興のメンバーでもう一度考えたい。もっとたくさん学びたい。それがもうできないのがとても寂しいです。3年間じゃ全然足りないです。けどこれまで学んできたことを誰かに伝えることならできます。興味がある人、ない人でも伝えていかないといつかこの問題は消えていってしまうのではないかと思っています。これから東日本大震災を知らない世代が増えていきます。今、自分たちは東日本大震災を知る最後の世代でもあります。どう伝えるか、どう考えるかを大切にしたいです。卒業してもこの問題を考え続けたいなと思いました。

5. スタディツアー感想から見えること

今年度は立命館大学院の村本邦子教授に大阪から来ていただいて、石巻市スタディツアーでの報告会で講演いただいたからか「証人」になるということをキーワードに語る生徒が数名いた。

そして石巻市スタディツアーと浜通りスタディツアーを実施して感じたことは、それぞれの「被災」と「復興」の現在地が違うことと、関東に住んでいる我々が訪れることによって生じるポジショナリティの違いである。もちろん石巻市スタディツアーは3年前から実施しているからこそ、お互いに積み上げられてきたものもあるだろう。今回福島県浜通りスタディツアーを実施して、この1回で終わるものではなくて毎年行っていくことで、同じように積み上げられていくものがあれば良いと思う。一方でやはり福島第一原発が東京電力の原発であったこと、この原発で作られた電気が関東に供給されていた、関東で豊かさを享受していたことは、大きな意味を持つように思う。現在もまだ廃炉作業は進んでいるし、東電を相手取った裁判も行われている最中である。東電による豊かさの一端でも享受している関東に住む私や私達はその事実と向きあいながら、考えていかなければならない。

スタディツアーがもたらす教育的効果、対人援助との関わりについてもこの冬少し考えたので書き残しておきたい。

まず改めて村本教授の「被災と復興の証人になること」という言葉の持つ意味についてである。以前までは前半部分「被災と復興の証人」というところまでしか注目をしていなかった、あるいは意味として重点を私は置いていなかったように感じる。「被災と復興の証人」をゴールにおいて、生徒達が「東北と復興」の学びを通じて「被災と復興の証人」であると言うことができるようにすることを目的としていた。しかし今回感じたのは、「被災と復興の証人になること」の「なること」の部分が重要であるということだ。「なること」とはプロセスを指し、言い換えれば「なり続けること」なのかもしれないと考えている。そして「被災と復興の証人になること」までをエンパワー、支援することが教員の役割である、と。

そのように考えるようになったのは次のような理由による。まず多くの現在の社会科の授業においては「中立」ということが重視される。ポジショナリティにかかわるものである。この「中立」をどのように解釈するのかは今後も課題であるが、今回のスタディツアーにおいて「中立」とはどちらにも与しないことであり、言ってしまうと、「こういう意見もあるけど、こういう意見もあるよね」とまとめることである。しかしそれは当然、その言葉自体が持つ加害性もあるし、それ以上に関東に住む〈わたし〉たちが言うことによってかなり強い加害性を帯びてしまう。それは福島第一原発を動かしていた東京電力によって多かれ少なかれ恩恵を受けているからである。事前学習の水俣病について扱う中で相思社の永野三智さんが facebook の記事の中で紹介されていた事例。「環境省の人は「チッソじゃなくて島の人を憎んでいるんですね」とか「へえ、大変ですね」とか「ひどいですね」とか「ダメですか」とか言いました。言葉が違うという感覚。それは東京の人と不知火海の人という方言の違いではなく。一方通行な、テレビを見て、お茶の間で感想をいうような。」「歩き始めた彼は、「あたどん（あなた方）には本音は言わんとばい」と職員に言いました。職員は軽く「えー、本音でいきましようよー、本音で」と流していました。私はその含蓄ある言葉に、心打たれました。目の前の、別空間で放たれたこの言葉をどう理解しているのか？ 私と同じ年の頃からどんな思いで環境省と交渉をしてきて、その挙句、あなたがたに本音を語れないと言っている彼の切なさだったり、そう言うことで同時に彼は、自分の心や尊厳を守っておられるのではないだろうかとも感じて、胸が熱くなりました。」このことと同じことが、つまり環境省を同じことをこの「東北と復興」の高校生達がしてしまうかもしれない。実際に双葉屋旅館での夕食をとりながらある生徒が「でも原発事故って自分達が考えてもどうしようもなくて？自分達が生まれる前の人達が決めてたことだったし」と発言し、それに対して女将さんが笑顔で「そうだよなあ」と言う一幕があった。翌日の女将さんの講演の中で、福島第一原発について直接的な話が出ず、その後の町おこしのことが中心で語られていたことには何かつながりがあったのではないだろうかと思わずにはいられない。

ジュディス・L・ハーマンは「人災の場合には、証言者は被害者と加害者との争いの中に巻き込まれる。この争いの中で中立的位置を維持することは論理的に不可能である。第三者はどちらかの側に立つようにさせられてしまう。」「加害者の側に立つことは楽であり、そうになってしまいがちである。加害者は、第三者に何も手出しをしないでくれというだけである。加害者は、悪事を見たくない、耳をふさぎたい、そして口をつぐんでいたいという万人の持つ意向に訴える。被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する。自分の犯した罪の説明責任 *accountability* を逃れようとして、加害者は忘れるのに役立つものならできる限りを何でもやる。秘密を守らせ口をつぐませることは加害者の第一防衛線である。もし、秘密が曝かれたならば、加害者は被害者の証言の信憑性をあげつらう。もし被害者の口を完全につぐませられなかったならば、加害者は誰も彼女の言に耳を傾けないようにする。この目的のために、彼は堂々の論陣を張る。もっとも厚顔無恥な否認から初めてもっともエレガントでソフィスティケートティッドな合理化までをずらりと揃える。」と言っている。福島第一原発について教えることは、もしかしたら「被害」を受けている人達に対して「加害」に与することを教えるかもしれない。「福島は元通り安全だ。安全ではないという言葉は風評被害であり許されない」「もしも安全ではないと言っている人がいたら丁寧に説明していくことが福島の復興に携わることだ」といった言説（去年実際に復興庁で聞いたのだが）は、実際に「被害」はあると今もなお訴えたり苦しんでいる人達、例えばBさんの

言う「例えば、福島では山菜やきのこを採ることが季節の楽しみの一つとなっている。それを近所の人におすそわけすることで、地域の人々が自然とつながりを深めている。これらの活動は単なる食料調達ではなく、人々の暮らしや絆を作っていく大切な要素」が失われた(失われた)と感じている人達にとっては傷つける言葉になるかもしれない。

そうした自己の「加害」に与しているかもしれないという点については、自分の言動や考えに対して、想像力を持つことが重要になるのではないだろうか。例えばAさんの言う「考証館でお話を伺った木村さんのお話から「防潮堤の下にはまだ遺骨があるかもしれない。復興の下で捜したいと言えない遺族がいるのではないか」という言葉があった。国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。」という社会全体の中で起こっている問題に対しても想像して視点を転じること、Eさんの「私が1番印象に残った点は、やはりフレコンバックについての詩だと思います。環境学の選択授業で存在は知っていて、今までは、土等の放射能廃棄物が沢山詰め込まれていて、福島第一原発付近に、これまた沢山、置かれているだけのものかと思っていて。その中の幾ばくかに詰め込まれているものが、ショベルカーの黒い爪で引き裂かれて、切り取られた、誰かの故郷で、思い出であるという考え方は、今まで一度も描けていなくて。言い方はあれかもしれませんが、今回のスタディーツアーで知れて、良かったなと思いました。知れてなかったら、もしかしたら一生知らずにいるところだったと思います。この時の感情と同じような感情を抱いたのが、国の伝承館…?の外にあった写真達のうちの一枚で、小さな姉妹の2人が、防護服を着て、子供部屋のようなところで、お人形等を白いビニール袋に入れている写真だったのですが、もうこの子達が、このお部屋で防護服をとって、震災前のように過ごすことは、もうできないのだろうな。もっと行くと、もうこの部屋に入るのも、この写真の時は最後で、この後お家は取り壊されてしまったかもしれないと思うと、原発事故がどれだけ、今までの日常と、故郷を壊すか、というのをありありと感じました。」というフレコンバックと姉妹達の写真から日常を想起していくこと、Iさんの「おれたちの伝承館は今回のスタディーツアーで一番悩んだ「花は咲く」の詩がずっと心に残っています。知らなかったことで誰かを傷つける可能性があるんだって、今回この詩ですごく実感して知らないことへの恐怖がずっと今も残ってます。宮城の学習では比較的柔らかに迎え入れられていたから…この詩のことを考えると苦しくなる。合唱団でなにも知らない頃に歌ってたから。あの時私が誰かを傷つけた可能性はほぼないに等しいけど、それでもあの時知れないでいたことが私にとってはすごく苦しく、励ますものだと思ってた歌が誰かを傷つけるものである可能性が苦しい！もっと早くから知りたかったなあ、東日本大震災のこと。でもこのことを知れたからこれからは「知れてよかった、知らないままにならなくてよかった」に徐々に気持ちを切り替えられればいいと思う。この詩で福島のことを知ってことの重みを感じて私たちが今まで学んできたことのとらえ方がまた180度変わって向き合うことの苦しみを久しぶりに感じました。」・「伝言館は「他人事ではないんだ、今なんだ」という言葉が特に心に残ったと思う。それこそ花は咲くの詩でもそうだけど「他人事」にしてはいけないと身に染みて感じたからこの言葉は大事にしたいなと思いました。双葉屋旅館でも聞いたけど放置された家でとれたネズミが28匹いたとかの動物被害の話は人間の手の届かなさがダイレクトに伝わってきて衝撃だった。窓の外で見たあの家々に今もなお被害が続いてる家があるのだろうと思うとどうにもできない無力さを感じる。」・「もうひとつ印象に残ってるのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういったものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよなと改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。」という言葉達。ここには自分の行為がもしかしたら「誰かを傷つけるものである可能性」とそれに気づいたことで自分の学んできたこと、考えてきたことが「180度変わって向き合うことの苦しみ」を感じている。様々なことを想像するということは必ずしも自己にとって都合の良いものばかりとは限らない。Jさんの「今まで語りたい、伝えたいと言って下さる方の話を聞いていたけれど、それさえも嫌なんじゃないか、とか、20人

を超える大人数でツアーをしているけれど、大人数で生活圏内に踏み入れられて「ここは観光地じゃないんだよ」とかって考える方もいるんじゃないか、自分が学べた気になっているだけで、自己満足になっているんじゃないか、とか色々考えてしまって、何か行動を起こすことが怖くなってしまった。埼玉に帰ってきてからもずっと考えていて、ちょっと泣いた。他人の気持ちは理解しきれないな、とまた最初に感じた事をまた強く感じ、最初に戻ったような気持ちになってしまった。今まで何度も「復興ってこんな事をしたらいいんじゃないか？」といったことを考えていたけれど、結局は外野の意見でしかなくて、その考えを持つことだって見方を変えれば間違いだと言えるのかもしれないと思った。ずっと考えていても全然まとまらなくてよく分からなくて、理解しきれないなって自分と切り離して考えてしまいそうになるけど、それを続けてしまうと振り返りなどで何度か出てきた「無自覚の部分で傷つけてしまう」という所に繋がると思う。わからずとも考え続け、震災を知らない世代がこれからどんどん増えていく中で風化させず伝え続けて行く為になにかしなければいけないと改めて感じた。」という色々なことを想像した上で「他人の気持ちは理解しきれない」と感じて、それでも「無自覚の部分で傷つけてしまう」かもしれないという想像と向き合い考え続ける、伝え続けていくことへの想いに表れている。これらの言葉は生徒達が実際にスタディツアーの中で目にした風景や耳にした言葉から想像することができたからこそ感じている苦しさや難しさであろう。こうした想像の結果生じる苦しみは、学びを進めていくからこそ生じているものだとも言える。

信田さよ子は上間陽子との対談の中で、「日本の臨床心理学の多くはフロイトに依拠してきました。フロイトの精神分析は中立性を基本にしています。Passive neutral というんですかね。どちらかではなく、両方を俯瞰的にとらえる立場に治療者がいるという前提が、中立を意味します。だから中立・客観はむしろ当たり前の前提なんです。私はそれは無理ではないか、その場合の中立は必ず「力のある側」「強い側」に与してしまうのではないかと考えています。(中略) もうひとつ気づいたのは、私が中立的になろうとして聞いたとき、目の前に座っているひとの口調が明らかに変わったことです。私のポジショナリティ・位置取りの変化は、相手にすぐわかったんですね。それまで自分の言うことを信じて聞いてもらっていた、味方だと思っていたのに、変わってしまった。唯一の味方だと信じたのに、裏切られたと思ったのでしょうか。」と語っている。加害と被害のどちらでもない、中立にいて話を聴こうとしたり中立の位置から応答することそのものが暴力性を、加害性を帯びてしまう。Aさんは「国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。しかし、私は一概に国が悪いと言えない。なぜなら私は国が取り組む政策によって利益を得ているからだ。そうすると、私は間接的に「加害/悪」ということになる。」と書いている。Dさんは「水俣病も福島原発事故も、どちらも企業と経済成長が根底にある事象です。どちらも発展によって犠牲となり、発展や風評被害のために誤魔化され、迫害された地域住民や被害者がいると知りました。そしてその「発展」の責任は一般国民にもあると知りました。」、Fさんは「可視化されない被害というものがどれほど人を不安にさせるか、心を乱すのかを痛感した。さらにこういった可視化されない被害というのは誰にとっても加害者になりうるということを理解させられた。根本的な原因の責任追及はもちろんするべきだろうが、そういった根本的なものに全ての責任を押し付けて可視化されない被害に加担した加害者の責任が放置されているのが現状ではないだろうかと感じるようになった。その加害側に立っている者は自分も例外ではないと自覚したからだ。」と自らの責任(加害性)に気づく。しかし、Eさんが言うように「ですが私は、本質的に考えるならば、これは今の人間社会の構造上、生まれてしまった歪みであって、これまで生きてきた誰しをも、曲解すれば加害者と取ることができるわけで…。被害者、加害者、という言葉を使うだけで、なぜか思考停止してしまう気がしました。全部全部、グレーゾーンなのに、それをはっきりさせてしまうような言葉だからかも知れません。」ということもあり得る。私は高校生達を加害者と責めるつもりはない。加害性をよく考えて欲しいとは言い続けてきたが、これは目の前の問題から距離を取り、被害者でも加害者でもないと中立的な立ち位置をとることで目の前で起きている出来事、発される言葉から逃げることで、そしてそれによって忘却や傍観者となって加害者に加担する側に

なって欲しくないからであった。もし東日本大震災や福島第一原発事故に関して加害者として責任を果たさなければならぬ大人やその恩恵を被ってきた者として、その大小はあれど戦後復興世代全体が問われなければならないだろう。私もその一人だ。では生徒達の立ち位置をどこに置いていたら良いのか、あるいは置いていたのか。

ある種後付け的になるが、精神科医でもあり社会学者でもある宮地尚子の環状島というトラウマの地政学を援用して考えたいと思う。もちろん高校生のスタディツアーであり、実際に患者を診たり治療したりする立場にあるわけではないが、東日本大震災という未曾有の状況に対して語られる言葉の中には「言葉で表現しえない」トラウマ的体験についてのものもあるため、援用して考えることとした。

冬休み明け、生徒達に宮地尚子の環状島の理論(サバイバルマップとして)を紹介し、自分達がどこにいるのかを考えた。私はこの講座では外側の尾根を上っているところだと考えたが、ある生徒がそれは違うのではないかと発言した。「私達は傍観者から外側の尾根に向かって泳いで行っている途中」だと表現した。なるほど、と感じた。外斜面をのぼっている人を宮地は「支援者」として表現している。この「支援者」という言葉に多くの生徒達は引っかかりを感じていた。自分達は「支援者」ではないのではないかと。確かに「支援者」の定義は難しい。スタディツアーを通して何かで誰かを「支援」しているということは、確かに私も実感としてはあまりない。むしろあくまでもスタディツアーはスタディツアー、すなわち生徒達の学びのためのツアーであって、生徒達が主体として為したことは学ぶこと、知ることであった。その意味ではこのスタディツアーを支えてくれているのがそれぞれのスタディツアーで訪れた先の住人であり、支援を受けているのは私達の方かもしれない。少なくとも授業者としての私は、生徒達の教育を現地の方達から支援されている。

しかしかといって、傍観者であるとも言いがたい。先に挙げた生徒が言った「尾根に向かって泳いでいる人」という表現はその意味でなかなか面白いと感じた。現地で語られる言葉や出会う人達はかなり「当事者性」も高い人達がいる。時に内斜面を覗かせるような場面、言葉もあったように思う。生徒達が言葉を失ったのは内斜面から内海を垣間見てしまったからではないかと私は考えていた。だからこそ立ち位置として外斜面にはいるような気がしていたのだが、確かに外斜面をのぼっていったというよりは、私達の方へ現地の方が歩み寄って下さった(それこそツアーを支援して下さっている)という意味が大きいかもしれない。

そしてこの「環状島」の理論を紹介した結果、生徒達から私はまたもや言葉につまる問いを投げかけられた。「私達は支援者であった/であるといえるか?」「支援の定義とは何か?」外斜面を登る行為、高校生達が話を聴くことに意味があると伝えた。しかし高校生達はその返事には納得はしなかった。自分達の学びを支えてくれたからこそ、楽しい思いもすることができているように感じているからだ。ツアーの中で何かを自分が為したということについて、むしろ何もできていない、スタディツアーを出発点に考え始めた自分達という語りをしているように感じた。そしてそれは支援というよりも知った責任をそれぞれがどのように果たそうとするのかを考える営みであるように感じた。それは私自身も同じように感じているからだというバイアスはあるだろう。岡真理の言うところの「〈出来事〉の記憶、〈出来事〉の痕跡、それは偏在している。しかし、「それ」はつねに、人の主体的な意識が捉え損ねるどこかにある。証言者たるジュネの背後から、淡々と〈出来事〉の痕跡を指し示す他者の声。〈出来事〉の痕跡と証言者を媒介するのは、この他者の声だ。他者の呼びかけに応えることでしか、私たちは、その痕跡に触れることができない。決して、〈出来事〉の全能な記述者たり得ない証言者。〈出来事〉に対する証言者の、その無能さ、徹底的な受動性。ジュネのそのルポルタージュに書き込まれているのは、「私」に先だつてつねに他者の声があるということ、この他者の声こそが、〈出来事〉の外部にいる者を——第三者を——証言者として召喚するのだということ、そして、〈出来事〉の記憶を分有するという営為とは、この他者の呼びかけの声にその無能さと受動性において応答するものにほかならないということである。」(『記憶/物語(思考のフロンティア)』2000年、岩波書店)であるかのように、すなわち当事者の方達の話の聴いて「〈出来事〉の記憶を分有するという営為」は「無能さと受動性において応答するものにほかならない」という応答に思える。とすればむしろスタディツアーをきっかけに応答していくのであろう。ハーマンの

言葉を借りれば「被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する。」のであれば、その応答の一つの形として支援が、あるいは支援者としての在り方がこれから始まっていくのかもしれない。J・C・トロントが言うところの「関心を向けること Caring about」、「配慮すること Caring for」（岡野八代訳『ケアするのは誰か？新しい民主主義の形へ』2001年、白澤社）はある程度生徒達はできているのかもしれない。その上で「ケアを提供すること Caregiving」「ケアを受け取ること Care-receiving」が次の課題として残されているように、生徒達は感じているのではないだろうか。

だからこそ「支援とは何か？支援の定義とは何か？」「私達は支援者であった/であるといえるか？」という問いが生徒達から私に対して投げかけられたのではないか？そしてこの問いはとても答えることが難しい。そうであるともいえるし、そうではないともいえる。そもそも「支援」を定義づけることができるのだろうか？これは「復興」について考えることと同様に難しい。そして仮に「支援」を定義づけることができたとして、その上で「支援者」と立ち位置を示すことができるためにはどうしたら良いのだろうか？

今年度、生徒達に改めて答えられない問いを私は投げかけられた。「東北と復興」のスタディツアーを通じて、生徒達は支援や支援者という言葉について教員に投げかけた。これは私自身が応答責任を果たしていくべき問いの様に感じている。スタディツアーを通じて出会った景色、言葉等に対しての応答として生徒達からこうした問いが生まれた以上、教員である私はこの生徒達の問いに対して応答責任を果たしていく必要がある。そしてこれはこのマガジンでのタイトル「対人援助学の視点から」というところとも結びついているように感じている。

ある看護科教員のアタマの中

7

～戴帽式とナイチンゲール誓詞～

山岸 若菜

はじめに

私が看護学生だった頃、戴帽式というセレモニーがありました。

白いナイチンゲール像が持つろうそくから、学生が一人ずつ自分のろうそくに灯をもらい、かつて看護師の象徴だったナースキャップを着けてもらって全員で『ナイチンゲール誓詞』を唱和しました。

真っ暗な中だんだん増えるろうそくの灯が厳かな雰囲気醸し出し、またこのセレモニーを終えるといよいよ実習が始まるということで、身が引き締まる思いがしたものです。

なぜそんなことを思い出したかというと、最近実習に行っていた病院で懐かしのナイチンゲール像に再会したからです。

今回はその戴帽式とナイチンゲール誓詞について書きたいと思います。

戴帽式の思い出

私が学生の頃の看護師は、白いワンピースにナースキャップ、白いストッキングにナースシューズといういでたちでした。

ナースキャップは広げるとT字形で、糊とアイロンでパリッパリにしものを上手いことあの形に折っていました。

ピンで髪に付けるのですが、ちょっとカーテンに引っかかったりすると、痛いたらありやしませんでした。

でもあれこそ看護師の象徴みたいなのところがあって、ナースキャップに付ける線で師長、副師長など階級がわかるようになっていました。

学生ながらに『ワンピースは動きにくくないのかな?』

『ナースキャップはどう考えても邪魔やろ。』

『白いストッキングなんてどこで買うん?』

などなど疑問がいっぱいで、私は看護師のユニフォームがあまり好きではありませんでした。

そんなちょっと引き気味の学生でも感傷的な気持ちになるのが戴帽式でした。

暗い中、クラス全員が灯のついたろうそくを持って、その日までに暗記したナイチンゲール誓詞を唱和するのです。

われはここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん。

わが生涯を清く過ごし、わが任務を忠実に尽くさんことを。

われはすべて毒あるもの、害あるものを絶ち、悪しき薬を用いることなく、また知りつつこれをすすめざるべし。

われはわが力の限りわが任務の標準を高くせんことを努むべし。

わが任務にあたりて、取り扱える人々の私事のすべて、わが知り得たる一家の内事のすべて、われは人に洩らさざるべし。

われは心より医師を助け、わが手に託されたる人々の幸のために身を捧げん。

何を言ってるのか当時はよくわかりませんでしたが、「なんかそれっぽいわ～」と感動したのを覚えています。

戴帽式とナイチンゲール誓詞の変化

今読むと当時のナイチンゲール誓詞は宗教的で自己犠牲を強要してるのか？！と思えるような文章ですが、内容は職業意識を高く持って、守秘義務守っていこ！ということなので、現代でも大事にしなければいけないものです。

現代ではナースキャップは不衛生で実用的でないと廃止したところがほとんどで、大学での教育も増えて戴帽式自体がほとんど行われなくなっています。

ナイチンゲール誓詞も現代版では

神とここに集う人々の前に厳かに誓う。

看護専門職の倫理規範を遵奉し。

忠誠心を持って看護チームの他のメンバーと共に協力し、監督者として指定された医師または看護者の指示に忠実に、そして己の能力に従って最善を尽くし、

一切の悪行や悪意ある行為をせず、意図しながら害のあるいかなる薬を与えることや不正行為には加担しないと。

職業上の知りえた秘密についてはこれを秘匿する。

そして全力を尽くし看護実践の標準と品位を高めることを、自分に誓う。

我が人生が看護専門職の仕事とその高邁な理想に捧げられんことを。

と、変更されているようです。

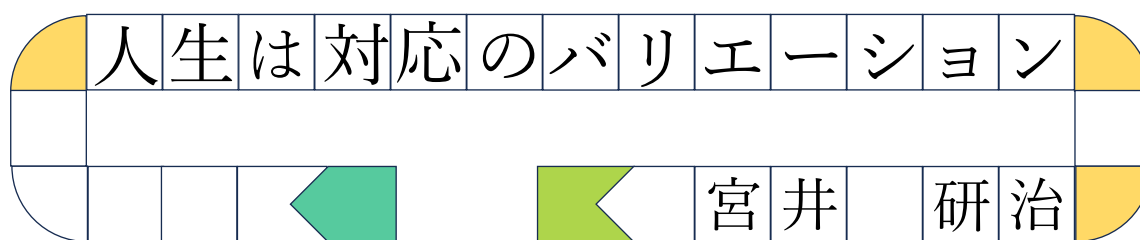
セレモニーで使うには前の方が良いのですが・・・。

看護師のいでたちもこの30年ほどでずいぶん変わりました。

ナースキャップは無くなり、ワンピース型のナース服は動きやすいスクラブに変わっています。

白いストッキングも見かけません。

ユニフォームやセレモニーは変化しても、病気で困った人たちに対して真摯に仕事をするという原則はこれからも変わらないでいてほしいと思います。



— 第8話 私説「岡田隆介」論 番外編—

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

さあ、いよいよ私説「岡田隆介」論の最終稿、番外編です。岡田さんについて書かせていただくこと、重ねて4回目となります。1回目は、その臨床の面白さ、ユーモア、意外性について触れたつもりです。源泉は「お笑い」にあるのではと真面目に私は考えていることも書きました。そして、変化の処方箋としてのメタファーの秀逸さと、クライアントそれぞれに対して仕立屋のごとく採寸し、料理人のごとく調理したものを提供する臨床技法を2回目に書きました。ボナペティです。クライアントセンタードいやクライアントファースト、どちらも当たってはいますが、岡田さんの信条は「おもてなし」にあるのではないかと確信した次第です。自分で書きながら、こんな独断的なことを記述してよいのかと思ったりもしますが、よいのです。3回目は、前回までの2回を通して熱く語りすぎた自分をやや反省しながら、岡田さんの臨床の理論的背景を裏どりするように、真面目に分析したつもりです。ここでこのシリーズに終止符をうってもよ

いのですが、なにか一縷の物足りなさを感じました。岡田さんのメタファーを借りれば、残尿感を感じたということでの4回目です。では、もう一度トイレに。いや、そうじゃない。メタファーでした。今回は、岡田さんのヒトトナリを掘り下げる切り口として、「パワボ職人」「趣味人」「熱い漢」を取り上げようと思います。

1. パワボ職人

スマホでググると、「パワボ職人」という言葉がいくつかヒットします。実はこの言葉を初めて聞いたのは、岡田さんからだったと記憶しています。あまり自分の志向性を語りたがらない人だと思っています。なんか多くを語るのが、気恥ずかしいと思われるのではないかと、話をしたり、LINE でやりとりしたりすると感じます。そんなんでも考えていたら、ちょうど京都弁で「きすつない」という言葉が思い浮かびました。京都人ではありませんが。きすつない=気づまりだ、恐縮だ、こころ苦しい、とい

うニュアンスです。岡田さんは、決して寡黙ではなく、おしゃべり好きなんですけど、あまり自分のことを語らない気がします。自分がこう思ったとか、こう考えたとか、オチのある話なんて大好きです。でも、オレって、これが好きとか、だからこういう人とか、昨日こういうことがあってとか、自分の周囲にあることはあまり話題にしない。いわゆる Facebook 的な語りはしない。実際、私に Facebook を勧めておきながら、ほとんど自分のストーリーを載せてなかったことから、断定できます。そのお方が「パワポ職人」になりたいと自らおっしゃるのですから、そうとうな入れ込み具合であり、私も覚えていたわけです。まあ、岡田さんや私の周辺には、Facebook 番長とも形容される団士郎さんがおられるので、どうしても発信するより、見る側になってしまいますよね。

岡田さんのパワーポイントに関する感想です。まず、活用させていただいてるので、感謝です。常用している「こんなときどう言う？(家庭教育編)」については、左端のインデックスとページを対応させているアイデアには、使い勝手の良さにまずびっくりしました。ちょっとなに言ってるかわかんないかもしれませんが、左端のインデックスを白抜きにしてページと対応させているので、いま、どんな場面のスキルについて見せているのか一目でわかるわけです。それだけではなく、常にいま表示されている内容以外のインデックスも同時に眺められるので、次にどこのページに跳ぼうかということも考えながら見られるわけです。たぶん岡田さんは、専門家あるいは保護者がこのパワポを見ながら、一人で気楽に学習でき

ることも想定して、こしらえたのかなと感じました。eラーニングですね、知らんけど。

あと、岡田さんのパワポ作品に感じることは、色使いの明確さです。綺麗です。エッジが効いているといいでしょうか、一度見ると忘れられない色味だと思います。たぶん、何千回とはいいいませんが、何通りもの色を組み合わせ、にやにやする岡田さんの顔が私には見えます。

それから、家庭教育編以降のものについて、言及すると、登場人物の選定にも試行錯誤が見られます。市販のものから引っ張ってくるのだとおもいますが、ある時は、団さん作のイラストから人物を選ばれた時期もあったように思います。現在は、黒いシルエットの人物に馴染みがあるようにヘビーユーザーの私の感じるどころです。この辺りベタな主観なので、岡田さんに叱られる前に謝っときます。

また、岡田さんのパワポの一枚あたりに込められる情報量が非常に多い。はっきり言って多すぎる。これは、最近の傾向です。じっくり見て、考えないとわからない。だから、説明してよとお願いしたくなる。でも、ご本人は作品を作っちゃたらそこで終い、あとはそれぞれで考えてよという方向性です。この熱しやすさと醒めやすさも岡田さんならではのですね。岡田さんの講演もしくは漫談を望む多くの聴衆が存在する理由は、この辺にあるのかと思います。

あと、オタクだな、病だなと感じたエピソードをひとつ。ある研修会の帰り、お茶しました。因みに岡田さんは、お酒は飲みません。うけつけないと聞いてます。盟友の団さんもお酒に関しては同様で、妙な符合を感じます。岡田さん本人に尋ねると、斜め 45

度を見つめながら「酒はやめたんよ。昔浴びるほど飲んでてさあ。辛い過去があるから。聞きたい？」とかショートコントに入ろうとするので、めんどくさいので尋ねません。肝心のエピソードです。会話のなかで「最近のパワポはどう？」と私。「まあ、ぼちぼちかなあ。それより、最近、こんなフォント見つけたんよ。実にユニーク(と言いつつ、スマホで画像を見せてくる)。なっ、このアール(曲がり具合)たまらんでしょう。これ、こんどパワポの見出しに使おうと思うんよ。全体の印象が違ってくるでしょう、いやーフォントっとホントに奥深いわ、なんちゃって」無理に笑って、共感したようにみせましたが、ひきました。これが、たぶんパワポ職人の情熱なんだなとは思いました。

2.趣味人

お酒は飲みませんが、その分多趣味な岡田さん。情報の断片から、想像を逞しくして、綴ります。

カラオケ

カラオケ、大好きです。音楽自体が大好きなんでしょう。それこそ最新のヒットチャートにあがっている曲から、スタンダードで歌われる曲まで、「オレ、それ知らんわ」とカラオケ屋のソファで口にするのを聞いたことは、滅多にありません。ただ、何人かで連れ立って出かけたのに、自分は歌わずにその会は終わりのこともありました。勝手にリクエストして人に歌わせることはよくあります。ハモりがお好きなようで、人の歌に勝手にハモっている姿は見かけます。カラオケ行こうと言い出した本人が歌わないわけですから、盛り下がりそうですが、岡

田さんの周りの広島の方々は、歌好きでなおかつ歌上手な人ばかりなのです。ゆえに人の歌なんて聴いてない人が多いので、まったくお構いなしに盛り上がります。強いて言えば、歌に囲まれたような雰囲気、岡田さんはお好きなのだろーと思っていました。あっ、歌わせたら、上手いですよ。ハモり好きで、ファルセットに自信ありと言っておきましょう。また、カラオケ誘って下さい！

カラオケからの音楽全般

この部分は、まったく私の推測、想像の域を出ませんが、趣味でバンドをやられてたり、楽器収集もされてたりと聞きます。飽きっぽい方なので現在進行形かどうかはわかりません。私とも共通してますが、まずは形から入る方なので、楽器も集めたのではと推測します。ギターでしょう、それもエレキギターでしょうか。フェンダーとかではなく、ギブソンのセミアコ辺りで、JAZZのスタンダードとか演ってほしいですが、カラオケと同じく、ギターは弾かずに眺めて楽しむのかな、知らんけど。

グルメ

グルメである。が、決してグルマンではない。美味しいもん、ちょこっと派である。料理はもちろんだが、甘いもん、特に洋風、ケーキ、チョコレートには目がない、これは事実です。だいたい、岡田さんとは同じく下戸の団さんとともに、会えば居酒屋でなく、喫茶店でケーキセットとともに長話というのがパターンでした。これもずいぶんと昔話になりますが、まだ、今のようにスマホでネット検索なんかない時代のことです。タウン誌や口コミが主流の時代です。当時、私は

こども相談センターと改名以前の大阪市の児童相談所で勤務しておりました。大阪で児童相談所の家族療法の勉強会があり、その研修会の帰りにどこかでお茶しようという話になりました。今ならググれるでしょうが、当時は無理。地元の私がどこか皆さんをお連れしないといけません、叶わず。困ってたら岡田さんが、「たしかこの辺りに、チョコレートの美味しい店があるはず」と言うのです。上本町あたりの雑居ビルばかりで、半信半疑で後を着いていくと、たしかに、その店はありました。今でこそ、チョコレート専門店は珍しくないですが、当時はオシャレな響きでした。店に入り、ちょっとお高めのチョコを食したわけですが、そこにいた一堂、岡田さんを畏敬の眼差しで眺めていた気がします。ただ、岡田さんがセットで頼んだエスプレッソコーヒーの量が思いのほか少なかったようで、早くに飲み干してしまい、手持ち無沙汰にしてたのは笑えました。「なかに亭」、改めてググってみましたが、閉店となっていました。残念。懐かしい時代の話です。

最近の岡田さんマイブーム

楽器やグルメ以外でも、たぶん幼少期からの嗜みとしての書道、車好き、そして洋服。垣間見るだけの断片情報ですが、なんとなく好きというのではなく、こだわりを感じるセレクションを紹介してきました。

この前突然LINEで見せられたのですが、水彩画です。全然話にも聞いていなかったもので、びっくりしました。承諾してもらい掲載します。どうですか？1 枚目（※無題1）の釣り人の佇まいや、2 枚目（※無題2）の背景にある林のタッチ。何か水墨画を

思わせませんか？心象風景としての寂寥感も私には感じられます。たぶん、水彩画を始めて、そんなに歳月を重ねたわけではない人の絵には見えません。お世辞ではなく、かなりびっくりさせられました。

3. 人となり

さあ、最後のまとめとなってきました。一言ではまとめ切れない多面性を持たれている、それが岡田さんの魅力なのでしょう。だから、語っても語り尽くせない人だと思います。岡田さんの印象を聞かれたら、私はまずは「クール」だと答えるでしょう。必要以上に踏み込まない、自分は自分、その分他者の在り方も認める。この辺りは、団さんにも共通してる気がします。

ではなぜ、これほど、後輩や若い人への吸引力をもっているのか？その要因としては、弱っている人にさりげなく手を差し伸べる姿と言いましょうか。その差し伸べ方が押しつけがましくない。たぶん、ご自身もその差し伸べ方に非常に心を砕いているように感じます。その差し伸べ方はエレガントです。私事で言えば、前述するように大阪市児童相談所に長らく勤めていて、当たり前ですが異動がありました。今思えば、異動なんて仕方がない事なのですが、当時は現実を受け止められず、友人や知り合いに、メールで愚痴めいたことを送りました。岡田さんもその一人でした。まあ、普通のメールには返信なんかない人ですが、その時は、さらりとリターンがあり、詳細は忘れましたが、「こういうタイミングだから、普段いけない研修に参加してみるのもいいかもしれないよ」とありました。さらに、具体的なワークショップ名もあげ、一緒に行かないかと

まで言ってくれました。こちらのことを考えてくれてたんだと、その時は、うれしかった。その記憶は鮮明です。これも岡田さんでしょう。

またもう一つ。これから書くことは、岡田さんのエピソードとして私の記憶の中で改ざんされた事象かもしれませんが、すいません、紛れもない岡田さん像のひとつであります。若いころ研修医として苦労された話は、ご著書なかに出てきます。それに付随して研修医時代の話を聞きました。どうしても言う事を聞いてくれない患者と口論となり、一触即発のところまで及んだエピソード。どうしても言うことを聞かせたかったこと、これは、患者さんの命に関わるようなことだったと思われます。取っ組み合いの喧嘩寸前なんて、今の岡田さんの方法論からは全く出てこないことです。このエピソードについて尋ねたら「無理無理、老体を取っ組み合いの喧嘩とか。死ぬわ」とコメントするかな。ただ、熱い漢の一面は隠し持っておられる。その確信が長年の付き合いから、私にはあります。

これで、私説「岡田隆介」論のシリーズを一旦閉じたいと思います。最後に、岡田さんへのお願いは、ライブでの研修を続けてほしいということです。これは岡田さんの話を聴きたいという聴衆を代表しての言葉です。今後ともよろしく！！



無題 1



無題 2



心理臨床における多重関係を考える

地方のありふれた心理士の日常から

本林 友梨

1. 多重関係にまつわる日常でのつらさ

いつもと変わらずバタバタした朝、しなければならないことをしながら、夫同士が知り合いであるママさんとの、昨日の保育園での会話内容を伝える。「ふーん」と夫が返事する。そして夫が、「これを機会に仲良くなるときなよ」と私に言う。私は「えー」と後ろ向きな返事をする。すると、「そんなんやからあかんね!」と、私が人と交わることを好まないことに対して説教が始まる。

私は人と話すことが好きだ。初対面の人と関わることも得意なほうだと思うし、なにより楽しい。だが、心理士（以下、CP）になる道を選択してから、少し変わったように思う。「多重関係は禁止」という心理臨床教育を受ける中で人との距離感の重要性について考えさせられ、いつしかプライベートにおいても人と関わることに慎重になった。実際、臨床活動を始めると、人と関われば関わるほど人とのつながりが増えていき、それが多重関係という形で臨床活動に影響することを経験した（臨床地域が小さ

いコミュニティであることの影響も大きい）。こういう経緯から、CP を生業とする「私」の現在の人との関わり方のスタイルが生成された。

しかし、夫に言いたい。私も人と関わりたい! 楽しく、明るく、オープンに行きたい! スーパーとかでも素の自分で買い物したい! 決して人と交わることを“好まない”のではないのだよ! でもこんな田舎でそれをする仕事に影響が出るんだ…

夫に伝えてみた。すると「何もできやんやん」と。そうなんです、だから苦しいんです。ただでさえバタバタしイライラしているところに、さらにイライラした気持ちと落ち込みの気持ちが私を襲った。

2. 私の臨床地域について

私の臨床地域（私の出身地でもある）を一言で表すと、“田舎”という言葉がしっくりくる。病院が立地するまちは人口 2 万人程度で、周辺の小さなまちからも人がやってくる。まちの中で生活に必要な一通りのこ

とは済ませられる。まちの中心から離れれば田んぼや畑が広がり、山がすぐ近くにある。人との距離は、良くも悪くも、近い（「あの人、〇〇やで」というような他人の情報が、求めなくても入ってくる）。

ありふれた田舎ではあるものの、特徴をあげるとすると、敬語を遣わなくても失礼にはならない文化があるということがある。というか、敬語を遣うと「冷たい感じがする」「気がきつい感じがする」など相手に違和感（不快感）を抱かせてしまう場合がある。私は10年弱、この文化から出て生活しており、また人との距離感について特に慎重にならなければならない職業についていると考えるので、仕事では敬語を遣う。しかし、相手が敬語を遣わない場合は、自身の顔の表情、声色、話し言葉のイントネーションなどに細心の注意を払い、相手に違和感を抱かせないように注意する。これは同じ都道府県内で働いていた時には気にしなかったことである。

また、私が勤務する病院を受診する患者には“貧困”層が多いという特徴がある。これは経済的にはもちろん、いろんな面において満たされなさがあるという意味である。治療（カウンセリング、以下 Co）が必要であっても、様々な要因から病院に辿りつくことが難しい場合がある（予約の日時を守ることが難しいことも多い）。よって継続的な治療が難しいケースも多々発生する。治療の前段階において様々な困難を持つ患者が多いことを一つの背景とし、勤務する病院では Co は自由診療化していない（料金はとっていない）。なので、患者は希望していないが医師が必要だと判断し、Co が開始されるケースも一定数ある。このような場

合では、患者（クライアントと表記したほうが心理の文脈に沿うが、ここは病院臨床の文脈の記述であるので、患者表記とする）の Co に対するモチベーションは高くない（むしろマイナスだと感じることもある）ことも多く、いかにして次回も Co に来てもらえるか、というところが最重要課題となる。CP として腕の見せ所である！しかし、悲しいかな、大学院で学んできた“純粹”な面接法では患者は2度と来てくれない（場合が多い）。もちろん、学んできた流れで面接をするのではあるが、それだけでは次に繋がらない。まず、相手の印象と少しの会話で、どのような調子で目の前の患者と今の時間を過ごして行けるのか考え自身の姿勢を調整し、Co にどの程度のモチベーションがあるかを見定めて、抱いている問題にその場（1回目）でどこまで踏み込んでいいかを感じながら、Co の目的について話し合い、展開する。場合によっては、抱いている問題についてあまり触れずに、とりあえず自分の顔を覚えてもらい、「なんか分かんけど話を聞いてくれる人」と理解してもらうことに徹することが、次回に繋がると判断する場合もある。CP として、本人の内に抱えることに最初から向き合えるのではなく、そこから全く遠い部分に関わることができてはじめて、2回目も会うことができるのである。こういう Co の事情も、同じ都道府県内で働いていた時には経験しなかったものである。このようなことから、CP の仕事はその地域の文化に大きな影響を受けると実感させられる。

心理臨床の営みが文化に影響を受けるとすると、心理臨床における多重関係の位置づけや捉え方も文化の影響を受けるといえ

る。海外と日本で差があるだろうし、日本国内においても差があるかもしれない。

3. 日本特有の多重関係における視点

精神分析は心理臨床において重要な役割を果たしてきたが、日本の精神分析は個人と個人の関係性が西洋のものとは異なるという前提があった(サトウ,2022)。例えば、精神分析学者の土居健郎は『「甘え」の構造』で、日本の人間関係には「甘え」の原理があるとした。「甘え」とは、親しい2者関係が前提とされるもので、相手は自分に対し好意を持っていることが分かっているが、それにふさわしく振舞うこと(相手に依存しつつもその依存を許容される関係性)であるとされる。日本には相手に対して「察する」文化があることや、日本が「義理・人情」の世界と表現されてきたことも、わが国が「甘え」の原理で成り立っているからだとする。このように対人関係において、個人の自立が前提とする西洋とは異なり、日本は情緒的な一体感を基盤とし、個人よりも関係性を重視してきた。明確なルールよりも感情や場の空気に依存する場合が多くあった。このような文化の中で生きる私たちは、「関係を切る」ということそのものに対し、不得手である可能性はないか。例えば、多重関係が生じた際、CPがクライアント(以下、CI)と自身を守るために、CIに諸々の事情を説明し、担当を他のCPに変更する提案をとする。その際、心理臨床においてよりbetterな方法をとっているにも関わらず、なぜか、CIが悪いように捉えないかとか不安になって、少しドキドキすることはないだろうか(私はしてしまう)。また、CIもCP

が自身の安全のことを考えての提案だとは理解していても、なんだか見捨てられた、悲しい、さみしいと感ずることはないだろうか(病態によってそのように思う場合は除く)。このように、頭では“関係を切る”ことが正しく、必要であることを理解しているにも関わらず、「でも・・・」というような気持ちがこみあげ、「関係を切る」ということに、CP、CIそれぞれのところがしっくりこないことがある場合もあるのではと想像する。

また、日本の精神分析は母子関係に焦点を当てた(サトウ,2022)という特徴もある。河合隼雄は『母性社会 日本の病理』で、日本は母性原理であり、良き悪しにつけ包み込む「包含」の社会であるとした。そのような文化を生きる人は、治療者に対し、治療者に求めることができる範囲以上の役割を知らず知らずのうちに求めてしまっているということがあるかもしれない。また、治療者も被治療者から向けられる期待は自身の役割外であることを認識しつつも、その期待に応えたい、という気持ちを持ちやすいかもしれない。

以上、治療者(CP)と被治療者(CI)の特にパーソナルな視点において、文化が多重関係の理解に及ぼす影響を述べてきた。このような私の考えが実際にあるとするなら、文化的社会的特質をふまえた心理臨床における多重関係理解の視点を探ることや、実際の対応についての探求が必要といえる。西洋の基準を適応した、養成課程で学ぶ内容を基礎として「多重関係はダメ」と認識するだけでは、治療者(CP)および被治療者(CI)の安心安全の確保には十分とはいえないのではないかな。

4. 多重関係の理解にいかにかまかるか

心理臨床における多重関係を理解していくためには、どうも文化というキーワードが重要そうだ。日本という国全体の文化はもちろん、それぞれの CP が臨床を行う地域そのものの文化もかなり重要ではないか。そう考えると、地域の要請に合わせて形作られていく職場という文化でさえも無視はできない要素であるかもしれない。このようにマクロな視点の文化のみでなくマイクロな視点の文化を踏まえ多重関係について探求することは、より個別的な理解を導き出す可能性があり、汎用性の面では優れないかもしれない。しかし、日本という文化土壌において、欧米から吸収した理論と技法がどのように咀嚼されてきたか考えること自体が文化と癒しの重要課題である（森岡, 2020）とされるように、自身が立つ文化的要素を丁寧に捉えつつ心理臨床における多重関係について向き合うことは、私たち心理臨床家が心理臨床家として居続けることにおける重要課題であると思うのだ。

土居健郎(1971). 「甘え」の構造 弘文堂
河合隼雄(1997). 母性社会日本の病理 講談社

森岡正芳(2020). 心と文化—治療の源泉を探る 森岡正芳(編), 治療は文化である—治療と臨床の民族誌 (pp.2-7.) 金剛出版

サトウタツタ(2022). 臨床心理学小史 ちくま書房

注 1) 「日本の精神分析は母子関係に焦点を当ててきた」について。

土居は、「甘え」の言語的起源を「乳を恋う」ことに示される憧憬であったとする。それゆえ、日本（人）において母—子関係は見過ごすことのできない重要な視点であると考えられた。

注 2) 日本は「甘えの原理である」、「母性社会である」といわれたが、言うまでもなく現在のわが国にはこれらをすっきりと適応することはできない。本文では「甘え」や「母性社会」を提示することで日本と西洋の差異を示したが、実際に本論を考えていく際は新たな文化的視点が必要だと考える。



自然に触れるということ

滋賀県の田舎で育った私にとって自然に触れる、自然の中で遊ぶことはなにも特別なことではありませんでした。春には桜のはなびらを笛にして、ご機嫌に登下校し、夏は朝から夕方まで川遊び。地元は名水の地として有名なので、川に網を入れるだけでマスと出会うことができました。秋にはポケットいっぱいにごんぐりや木の枝を拾っては秘密基地に隠し、冬は大人が屋根から雪を降ろし、落とした雪の山を使ってかまくら作り。祖父に連れられ初めて二階の屋根に上った時は、膝まで積もった雪に足を取られ、身ごと落ちそうな感じがして、内臓がヒュッとなったことを覚えています。四季折々の自然と触れることで五感をフル活用できる幼少期を過ごしました。思春期以降も自然に抱かれることで心安らぐことが多く、嫌なことがあった時にはその気持ちを洗いながすように溪流に足を入れたり、なんだか心が晴れない日や噛みしめたいようないいことがあった日はあえて遠回りして、林道や農道から帰ったり…恵まれた自然環境に精神面を育てられたと大いに感じています

そのおかげもあってか、保育現場で働いていた時はありがたいことに「外遊びといえど…」で子どもたちから常に名前があがる存在でした。春の草花を見るだ

けで体が勝手に花冠を編んでいること、どの枝に乗ると折れないか、体感で分りながら木に登ることは日常。自然物を取り入れた遊びを考える時の頭の冴え方は自分でも「天性ものだなあ…」と感じることがありました。原体験として自然の中で遊んだ経験がいつまでも生きていることをビビッと感じる日々でした。



↑ 3歳児3月 お雛様の制作

山で見つけた素材でその場で作ったら最高やん！

「森のようちえん」との出会い

公立園に勤務していたので、毎春人事異動がありました。私の人事異動は1年目、山間地域の小規模園に異動が決まりました。当時の園長先生に・移動先の園は「山の日」があること・森のようちえん、自然保育を保育方針としていることを伝えられ。「きっと先生の良さを発揮できる。」と太鼓判を押されたことを覚

えています。初めての異動にハラハラしつつも、なんだか自分の強みを発揮できるのかもしれないという淡い期待も出てきました。しかし、「森のようちえん」って、「自然保育」って、そんな小手先のものではなかったと知るのです。

そもそも…

「森のようちえん」って

これに関しては語りだすと本当に長くなり、これだけで連載1回分の量になってしまいそうなので今回は概要を大まかに。森の幼稚園（Wald Kindegarten）とは、発祥は1954年デンマークとされ、その後ドイツや北欧に広まったと言われています。身近な自然環境の中、必要最低限の援助で保育を行い、子どもの主体性やありのままの受容を重視する方針の乳幼児教育の【概念】を指します。園名や園の種類のことを指すわけではないので、文部科学省に規定に沿った幼稚園だけでなく、保育園、学童保育、自然学校などその理念を用いる機関を「森のようちえん」と平仮名表記で呼びます。日本では2008年に「森のようちえん全国ネットワーク連盟」が設立されました。

勤務園で自然保育の講師としてお世話になっていたのは、滋賀県内の森のようちえん「せた♪森のようちえん」代表の「さいちゃん」こと西澤彩木さん。（森のようちえんでは大人を先生とは呼ばない団体が多く、大人と子どもの心理的距離の近さも魅力のひとつです。）森のようちえんにおける大人のかかわりの要点についてさいちゃんは「子どもたちが主体的に活動できるように、自ら感じて考えて体験できる場を整え、任せながら見守ること」と著者で述べます。（2019）また、様々な森のようちえん界限（〇〇界限って若者言葉…？）のバイブルといえる本がレイチェル・カーソンの「センスオブワンダー」（1996）『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではな

い。」とあるように森の中では大人が子どもに何かを「教える」ことはなく、子どもの興味、関心に合わせて必要なことだけを伝える程度。さいちゃんは子どもを見守る大人のスタンスについて「お口はチャック、手は後ろ、耳はダンボ」と伝えてくれました。

森ようって哲学…

そんなこんなで、森のようちえんの保育及び自然保育で大切なのは自然を活用して「どう遊ぶか」だけでなく、自然の中でどのように子どもと関わるか、見立てるか、見守るか…保育者として大人としてどんなことを感じるかという哲学的な姿勢であることに気が付いた時にはもう「森のようちえん沼」にズブズブズブ…さまざまな森ように行き、子どもと、森と、大人と出会い、プレイパークのスタッフにもなり、仲間にも恵まれ…2023年からは滋賀県湖北にて自主保育型森のようちえんの立ち上げスタッフとなり、今も細々と活動しています。



↑滋賀県 長浜市（浅井）のプレイパーク

雪の重みで倒れた竹のトンネル、姉妹で雪道大冒険。

「危ないよ！」と大人は止めません。

森で出会えば…

初めて森のようちえんに見学に行ったときに衝撃だったのが子どもと大人の関係性。子どもたちはスタッフを先生と呼びません。せた森で小学生数名に取り囲まれ「なんてよんだらいいの？」と問わ

れたとき、何も思い浮かばなかった私。
「苗字は田中なんよね～」と何気なく言う
と「たなかって…タピオカやなあ！」
とケラケラ言われて哑然…（笑）以降、
森で活動する際には「たびちゃん」と呼
ばれています。（「タピオカ～!!」と突っ
かかってくる小学生が毎年数名いますが
…かわいいものです。）

個人的保育理念に「私は『先生』とい
う職種なだけであって、子どもとは常に
対等でいたい。クラスの仲間の一員であ
りたい、お友達のひとりでありたい。」
という思いが強くありました。幼児期後
期の子どもたちと接していると、自然を
取り入れた保育でなくても、共通の目標
を達成したり、食、住など生活場面を共
にしたりする中で仲間として認められる
感覚を得ることがあります。しかし、乳
児期の子どもたちと接するなかではどう
しても養育者のポジションから抜け出せ
ない感覚がありました。

また、小さな田舎町で保育をしていた
ので保護者の方との関係性にも軸を持ち
たいと思い働いて居ました。持ち上がり
やきょうだい、いとこを担任するのが珍
しくないので、フラंकになりすぎず、
でも固すぎるのも…という葛藤がありま
した。

森のようちえんでは、保護者も保育ス
タッフとして入る団体が多くあります。
「〇ちゃんのお父さん、お母さん」では
なく保護者も貴重な1人のスタッフ。一
緒に子どもを見守る一員として過ごして
いると自然と名前やニックネームで呼び
あえる仲になれる感覚に魅力を感じまし
た。これは、「預ける側」「預かる側」ば
関係があたりまえになっている既存の園
生活では得られにくい感覚で、「なるほ
ど…こんな関係性もありなのか…」と新
鮮な学びでした。

森で出会えば、肩書、キャリア関係な
くフラंकにフラットに関わることがで
きる。その際「子どものために…」とい

う大切にしたいポリシーを十分共通理解
できているので大人同士が自然な形でリ
スpektしあえる。誰が教える側でも誰
が教えられる側でもない。同じ目線で対
等に語り合う中で自然と支えあい、気づ
きあうことができる。「森で出会えば
…」こんな関係性で人とかわることが
できるのです。

みんなでまあるくこどもを育てるよう
な、広く温かいコミュニティの中で自分
を見つめることができるような…森で出
会うから見えてくる対人関係について連
載していけたらと思います。よろしくお
願いします。



【参考文献】

金子龍太郎・西澤彩木(2019)『森のようちえ
んの遊びと学び 保育・幼児教育の原点ナ
チュラルキンダーガーデン』かもがわ出版

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●創刊 15 年で六十号。遅延号も合併号もなく、コンスタントに年四冊出し続けられたのは工夫と幸運の賜物だった。原稿集めに奔走しなくても良いように連載誌に、印刷代、郵送費をカットできるように web マガジンに。そうすることで会員でなくても誰にでも読んで貰えるモノになり、バックナンバーも常時配備できている。読み手の利益を考えた、小さな学会の大きなニュースレターになった。

連載原稿が書きたまることが、自分の人生をちょっと変えてくれたりする経験をしている執筆者も多い。

●三月初旬、能登/輪島でワークショップをしてきた。地震よりもその後の洪水に心が折れかけたと言われるのを聞きながら、東北に通う日々の記憶が重なった。一年余過ぎた輪島の風景は 2012 年秋、大船渡市で目にしていたのと同じようなモノだった。そこが今、山林火災にみまわれている。近年、自然災害が止むことがない。なにか人間が試されているような気がする。

一方世界はディール(なんだこりゃ)を口にする男共の、人的災害といってよいような事態が加速している。残念だが創刊から 15 年の間に、世の中が劣化している気がするのには老人の愚痴だと一蹴はできないだろう。

まあそんな中でも、出来ることを粛々と行っていく他はない。振り返れば歴史はいつもそういう風に刻まれてきたし、希望を捨てなかった人々の子孫が私達だ。

編集員(チバ アキオ)

第 2 回 対人援助学マガジン合宿が 2025 年 2 月 15~16 日に行われました。場所は京都の湯の花温泉。京都の宿泊施設は高額で泊まれないという状況のなかで、ネットで「合宿での利用もどうぞ！」と記載されていた宿を坂口伊都さん(連載『療育手帳の向こ

う側』)が教えてくれて、予約しました。京都市街地から 1 時間もあればいくことができる亀岡市の「里山の休日 京都・烟河(けぶりかわ)」に泊りました。普段よく前を通っていましたが泊まったことはありませんでした。きくと、団士郎編集長(連載『晩年 D・A・N 通信』)も来たことがあるし、坂口さんも来たことがあるそう。14 時に京都光華女子大学前集合で坂口さんと大谷多加志さん(連載『発達検査と対人援助学』)の車に乗って現地に向かいました。国道 9 号線を西進して、京都縦貫自動車道へ。亀岡インターで降りて、あとは地道で現地へ。団編集長は杉江太朗さん(連載『余地—相談業務を楽しむ方法—』)の車で亀岡入り。高速道路であつという間だったそう。部屋は 2 つで男部屋と女部屋。男部屋の方が広く、そこで早速おしゃべり開始。近況も、対人援助の話もたくさん。17 時半からは夕食。創作的なきれいな料理のコース。ゆったりと食べながら、またまたおしゃべり。デザートまでいただき、またまた部屋に戻っておしゃべり。そして温泉も堪能。夜も遅くならない程度まで話して話し込んで、お休み。私は結構眠ることができました。そして朝ごはんはバイキング。オーストラリアで見た自動パンケーキ焼き機があつて試して食す。日本では初めて見た！チェックアウトまで話して解散。印象に残っているのは、それぞれの学生時代のはなし。クラスの中での位置取りや、就職にたどり着くまで、どう乗り切ったのかの話。勝ち上がり方式の人生を辞めてから、味のある人生が始まるなあ。また、編集部企画として様々企画すると思います。お楽しみに。

編集員(オオタニ タカシ)

対人援助学マガジンもついに 15 年、60 号を数えました。執筆者が総勢 50 名を超えると、毎号数名は連載をお休みされる方もあります。そのこと自体は全く構わないのですが、地味に苦戦するのが目次作成や原稿チェックです。普段は、前号の目次をもとに最新号の目次を作るのですが、目次には休載した連載タイトルが無いので、原稿チェックの際に見落としが生じたり、反対に連載復活の時には目次のどこに戻したらいいのかを確認するため、過去の目次をさかのぼって確認することになるなど、やや作業が煩雑

になっていました。チェック項目が増えると、それに比例して見落としやミスも増えます。また、各連載のタイトル横に掲載回数が()で記入してあるのですが、休載が挟まると段々回数を把握しきれなくなり、確認しきれず空欄のままにしてしまうタイトルも増えてきました。これはそろそろ限界か…と思い立ち、今号から休載分も含めた連載の一覧を作成し、各連載のページ数を入力すると自動的に目次が作成されるようにExcelシートを作ってみました。目次の作成、修正が格段に楽になりましたので、これでミスも減れば大成功です。小さな改善を積み重ねながら、マガジンは続いていきます。

対人援助学マガジン

通巻60号

第15巻 第4号

2025年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第61号は2025年06月15日

発刊の予定です。

原稿締切2025年05月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

街が静かだ。口論や取っ組み合いのケンカなど、町中で見かけることがほとんどなくなった。私の子どもの頃は、今と比べてだが、いい大人が街頭で喧嘩口論していた。周りに野次馬もたくさん居た。迷惑だと眉をひそめる人などなく、余興や火事を見るかのように取り囲んでいた。

それが今では、大人は行儀良くなり、一部の高齢者だけが、交通機関の車内や、駅、コンビニなどで担当者に居丈高に暴言を吐いている。

この主人公もホームヘルパーで入ってくれている人に、ワガママをぶつけている。働いている人は業務だからと我慢して、そのうち堪忍袋の緒が切れる。反撃するのではなく職を辞する。全然まともな対策じゃない。

こんな事態に対応した提案の話を「ビックリ水」のタイトルで木陰の物語に描いた。

先日、高齢者サービス現場の人の多い場で、このマンガを見て貰ったがバカウケだった。こんなに笑いが来るとは！と思った。

2025/3/15